
薔薇のマリア
16. さよならはいわない
十文字青 Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫


A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
薔薇のマリア
16.さよならはいわない
彼の手はひんやりした彼女の足にふれて、引っこめることも
つかまえることもできず、ただそのままでいるしかなかった。
彼女と目があった。彼女はむしろ、ぽかんとしているようだった。
「——あー……」


「このまんま、
なぁーんも起こらんかったらええんやけどな」
と間抜け魚が小声で呟いた。
「……そういうこと言わないでくれる？
きみが言葉にすると、なぁーんか
現実になっちゃいそうな気がして
やなんだよね……」
マリアローズは横目で馬鹿魚を睨みつけた。


「わたくしの愛らしい妹たち(ソロレル)
こんなちっぽけな玩具(おもちゃ)でこのわたくしが
喜ぶと思っているのだとしたら、とても残念だわ」

薔薇のマリア

16．さよならはいわない

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE 16

Never say never

Ao Jyumonji

First published 2011 in Japan

By

Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

illustration : BUNBUN

design work : design CREST

A BRAVE HEART OF RED ROSE

16

CONTENTS

the deep past “explorers”—— 7

the last few days “pieces of broken wish”—— 20

the arrival of Calamitage “さよならはいわない”—— 461

あとがき—— 491

CONTENTS

the deep past "explorers"

the last few days "pieces of broken wish"

the arrival of Calamitage　〝さよならはいわない〟

あとがき

A BRAVE HEART OF RED ROSE

16

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン

クラン《昼飯時（ランチタイム）》の頭領（マスター）。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者（クラッカー）。



Katari
カタリ

トラブル＆ムードメーカー。



Pimpernel
ピンパーネル

元暗殺者（アッサシン）。



Tomatokun
トマトクン

クラン《ZOO》の園長（マスター）。



Lucy
ルーシー

成長期のニューカマー。



Yurika Snow-white
ユリカ白雪

最強伝説。



Safinia
サフィニア

魔術士。不幸。



Johann Sunrise
ヨハン・サンライズ

《秩序の番人（モラル・キーパーズ）》の総長。



Q'bell-Adrus
きゅー

キューベルアドラス。



Honeymerry
ハニーメリー

脱走機術師。



Fall
玹瑠（フォール）

《秩序の番人（モラル・キーパーズ）》の副長。



SIX
シックス

幽閉者。



Fei Yang
飛燕（フェイヤン）

クラン《S＊K（シリアル・キラーズ）》の頭目。

and the others

Agna Kurtiba
アーニャ・クルチバ

Octavian Gustave vie de Rafflesia
オクタヴィアン・ギュスターヴ・ヴィド・ラフレシア

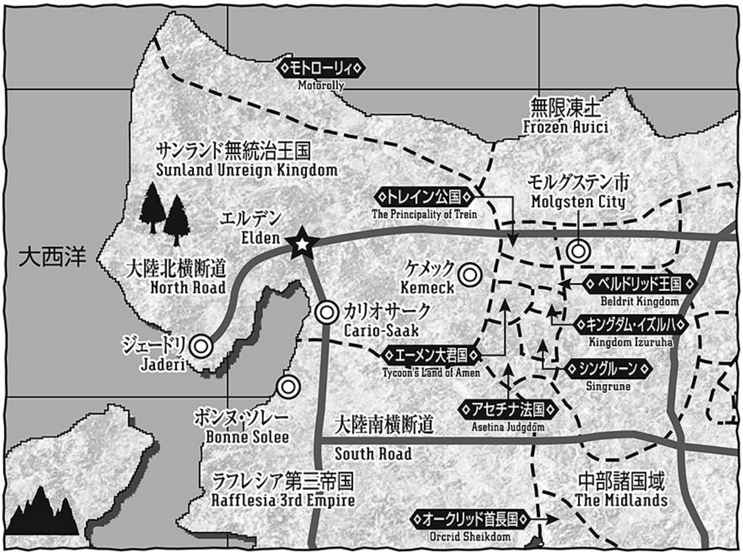
Burning Ballad
バーニング・バラッド

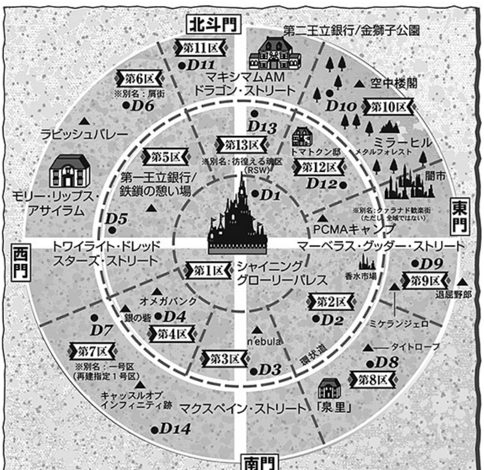
Amari
阿麼李

Matilda
マチルダ

and etc.

The World of “A BRAVE HEART OF RED ROSE”





Elden : the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics, designCREST

the deep past "explorers"

私は一いつ匹ぴきの虫である。私は一匹の獣けものである。私は虫である。一匹の獣である。私は獣である。私は虫である。一匹の虫である。私は一匹の獣である。私は虫。虫である。私は一匹の虫である。獣。私は獣である。一匹の獣である。私は虫である。獣である。私は一匹の。私は虫である。一匹の獣である。私は一匹の虫である。私は獣である。虫である。私は一匹の獣である。私は虫である。獣である。私は一匹の虫である。私は獣である。私は虫である。一匹の獣である。私は虫である。獣である。私は一匹の虫である。私は一匹の獣である。虫である。私は獣である。一匹の虫である。私は獣である。私は一匹の虫である。私は獣である。私は虫である。私は獣である。獣である。私は虫である。一匹の獣である。私は虫である。私は獣である。私は虫である。私は獣。私は虫。獣。虫である。私。私は。獣。私は獣。虫である。獣である。虫。私。私は。虫。虫。獣である。獣。虫。獣。虫。獣。虫。獣。虫。獣。虫。獣。虫。獣。虫。獣。虫。獣。虫。獣。虫。獣。虫。獣。獣虫虫獣獣獣虫虫虫虫虫獣虫獣虫獣獣虫虫虫虫虫獣虫虫虫虫虫虫虫虫獣獣虫獣虫虫虫獣獣虫獣虫虫虫虫虫獣虫獣獣獣獣虫虫虫虫虫虫虫獣虫虫獣虫虫虫獣虫虫虫虫獣虫虫虫虫獣虫虫虫虫虫虫虫虫。私は/私たちは探たん索さく者である。

私には耳がある。私には目がある。私には鼻がある。私には手足がある。

私は這はい回る。私は這う。動く。私は求める。移動する。私は探さぐる。

私は命じられる。命じられている。私は繋つながっている。接続。親密に。深く深く。それと私とは実に分かちがたい。私は視みられている。聞かれている。触ふれられている。接せつ触しよくしている。絶えず。重なりあうほどに。私とそれとは不可分である。

私はその場所を知らない（知るか否いなか考えることもこの畜ちく生しようはしないのだが）。ただ暗い。暗さと明るさを区別する私は暗いと感じる。

いかにしてこの場所に至ったのか私は知らない（過去に遡さかのぼり整理された知覚情報、記き憶おくと呼ばれたりするものにアクセスすることもこの畜生はしないのだが）。ただ私は穴に這は入いった。穴。決して狭せまくはない穴（この畜生にとってはだ

が）。私は穴から這入って多大なる紆う余よ曲折を経てこの場所にたどりついたはずである（そのことをこの畜生は意識しないのだが）。

（ああ、愛いとしい畜生よ。──）

（私は多くの、途と轍てつもなく多くの、数限りないほどの、おまえと同じような、似たような、あるいはだいぶ違ちがう、そうとう異なっている、ほとんど無数といってもよいほどの、愛しい畜生どもを、私は、その場所に送りこんだのだった。──）

（誰だれが知ろう。──）

（無論、我々はそれを知っているのだが。）

（我々。──）

（そう、我々は、──）

（──ああ、ともかく畜生よ。おまえをふくめた、もはや決して多いとは言えなくなった、私の愛しい畜生どもが、その場所に。──）

（その場所は、おまえは知らない、ついに知ることはないだろうが、際限のない、さながら永遠を形にしたかのごとき、歩ほ廊ろう。──）

（〝無限歩廊ノーターミナス〟。──）

（知っているか。知るまい。知るはずもないのだ。それは〝世界のワールド終わりエンド〟。──）

（終しゆう端たん、終しゆう焉えん、終末と名づけられた、巨きよ大だい、莫ばく大だい、厖ぼう大だいな、ある建造物、──）

（そう、とある建造物の中に、「黒い太陽ブラックホールが七度寝ね入いるまで」歩きつづけなければ、その果てまで到とう達たつすることは叶かなわないという、──）

（ひどく入り組んだ、ときに狭苦しい、稀まれに広々としている、広間、部屋、小部屋もあれば、広大な大通りもある、曲がりくねった小道は螺ら旋せんを描えがき、管のごとき通路は打ち砕くだかれたように散乱し、収束して袋ふくろ小路こうじへと迷いこむ、──）

（それが、〝無限歩廊ノーターミナス〟。──）

（とはいえ、おまえたちが、私の愛しい畜生どもが、その場所に這入りこむまで、実態はまるでわからなかった、知るすべもなかったのだが、──）

（おまえたちのおかげで、私は、我々は、それを、その場所を、完全にとは言えないまでも、把は握あくしつつあるのだが、──）

（〝終わりオーバーの果てエンド〟。──）

（終端、終焉、終末の最果てと名づけられし、その地点に、──）

（おまえは、おまえをふくめたいくらかの畜生どもは、ああ、私の愛しい畜生どもは、今ようやく、とうとう、行きつこうとしているのだね。──）

　ここは暗い。とても暗い。私は壁へき面めんのわずかな凹おう凸とつに指を引っかけてしがみつき、這っている。私は舌をのばし、壁面を舐なめてみる。何度か、舐めてみる。その行こう為いによって、私は何らかの手がかりを得ようとしているはずである。しかし、何も得られない。

　私はさらに這うことにする。

　やがて私は振しん動どうを感じはじめる。最初それは微び弱じゃくである。次し第だい、次第に強まってゆく。

　壁かべ、──だけではない。

　私がしがみついている壁面のみならず、空気。大気すらも、揺ゆらいでる。

（これは、──）

（胎たい動どう。まるで、──）

　私は頭をもたげて虚こ空くうを見る。虚空、ではない。そこにわだかまっているものは、闇やみなどではない。

　ひどく薄うす昏ぐらい、今にも消え落ちてしまいそうな火ほ群むらのようであるが、闇に比べれば遥はるかに鮮あざやかで、芳ほう

香こうさえ放っているかのように思われる。

　私は誘さそわれる。惹ひかれてやまない。

（その、地点、──）

　私は這う。進む。

（用心するのだ、畜生よ、畜生どもよ。慎しん重ちように慎重を期して、──）

　私は這い進んでゆく。

（有限でありながら、ほとんど限りない道筋だった。まさしく〝無限歩廊ノーターミナス〟。──）

　なんという、

　それはなんという炎ほのおだろう。

　私は、その炎に、触れ

（──ああ。）

（おまえは弱すぎた。おまえでは、その地点に到達すること能あたわなかった。消しよう滅めつ──）

（消滅した。焼かれたのか？　あれは炎？　あるいは、瘴しよう気きのごときものだろうか？　あれに耐たえうる畜生は、──）

　ここに。

　厄の眼エグザスト、──破滅眼ジグズレヴ、──人妖モオルド、──黒眼、妖よう眼がん、魔ま眼がん、邪じや眼がん、眼めの君きみよ。

　ここに、私が。

　私は獣けものであり虫である。眼の君に生みだされた、私は一いつ匹ぴきの畜生である。私は通路にいる。管のような通路である。私はその通路の天てん井じように身を寄せ、息をひそめている。私の軀からだは大きくはない。小さい。私は薄うす昏ぐらい火ほ群むらを見ている。それは青い。青よりも、蒼あおい。

（往ゆけ、私の愛いとしい畜ちく生しようよ。──）

　私は往く。誘われるのではなく、私は往く。つめたい通路の天井を、私は這はう。這って、往く。ひたひたと往く。しずしずと往く。私は往く。炎に迫せまる。蒼あおい炎に。私は恐おそれず、その炎に向かって手をのばす。指を。私は灼しやく熱ねつを感ずる。もしくは、冷気を。私は、だが、手を引き込めることはしない。往け、往け、と私は私に命じる。私は高熱のようなつめたさの中へと身を進める。私は喘あえぐ。炎ともつかぬこの蒼い炎は濃のう密みつである。それは私の体内をまたたく間に満たして内側から引き破ろうとする。私はそれでも往く。私は往

（──ああ。）

（おまえも駄だ目めだった。畜生よ、おまえでも。おまえは一いつ瞬しゆんで焼き尽つくされた。──）

　私がおります、眼の君よ。この私が。私はすでに蒼い炎の中にいるのです。この身は焼かれるがごとく凍いてつこうとしています。ですが、私はまだ往けます。

（ならば、往け。──）

　私は往く。蒼い炎をかきわけて、その中を泳ぎ、溺おぼれながら、私は往く。恐れは、恐れはしまい。私は往く。私の目は蒼い炎で閉ざされているが、私は往く。私の指はかじかみ、もしくは蕩とろけそうで、呼吸は今にも途と絶だえそうだが、私は往く。私の身はほんの僅わずかずつしか進もうとしないが、私は往く。私は

（──ああ。）

（畜生よ。往け、我が畜生どもよ。──）

　私は／私は／私／私は／私／私／私は／私は／私は／私／私は／私たちは往く。蒼い炎の中を、私たちは往く。進もう。進もう。進もう。越こえよう。越えよう。越えよう。我滅ほろぶとも、私たちは往こう。そうして私たちはここまで来たのだから。

　私たちは行進する。ひそやかに、ひめやかに、それでいて勇ましく、行進する。失いながら、なくしながら、滅びながら、私たちは行進する。蒼い炎を。炎の中を。炎を。炎を。炎を。

　突つき抜ぬけて、往く。突とつ破ぱ、──

（これが、──）

（〝世界のワールド終わりエンド〟の〝無限歩廊ノーターミナス〟を抜けた、その先、──）

（ああ、──）

（ここが、〝終わりオーバーの果てエンド〟。）

　終わりはついに、果てにけり。

　私には／私たちには、とてもとても把握しきれない。広いのか、狭せまいのか、天はいずれで、地はいずれか、定さだかならず、定まり在るものか否いなかも判然とせず、ただただここは、紛まがうことなき最果ての際さい涯がいとしか思われない。上も下もなく、ただここは、──底。

　底の、底の、底である。

　ゆえに私は／私たちは、たどり着いたのでは決してなく、落ちたのだろう。落ちて、堕おちて、堕ちて、その果てに行きつくこともなく、ここにいる。最終の地でありながら、終わりではない。真の終わりとは無であるから。真実の終わりは終わることがない。ただの、──無。

　その無に、形があるとはどういうことだ。

　形があれば、それはもはや無ではない。無ではありえない。にもかかわらず、それはやはり無である。少なくとも、それは終わりの終わり、無に至ろうとしている、その寸前にある何ものかだ。

　大いなる、無、──虚きよ無むの王よ。

　帝てい王おうよ。

　御おん身みは黒々としたその巨きよ軀くを無の御ぎよ座ざに埋うめて、無念無想の妄もう執しゆうにでも憑つかれているのだろうか。

（──無、では、──無い。無、などでは、──）

明らかに人に似ている。その大きさは別として。人に似せられたものか、人に似せたものか、それはわからない。が、帝王は人に似ている。その躯からだは蒼い炎の源でありながら、炎を発しているのではない。帝王を取り巻く偽いつわりの、欺ぎ瞞まんの、欺あざむきの無の気配が、やがては薄うす昏ぐらい火ほ群むらとなってこの〝終わりオーバーの果てエンド〟から放たれているのだ。

無ではない。

帝王は、━反逆者。

身にまとう裏切りと反はん抗こうは蛇へびのようにとぐろを巻いて、つめたく固まろうとしている。それが少しでも熱を帯びれば、擬ぎ態たいされた無など一片も残らず吹ふき飛んでしまうだろう。無、などでは、━それほど大層なものではないと知れ。心せよ。

（これが、帝王、━地じ獄ごくの、━）

私が／私たちが目を凝こらせば、眼の君はそれを視みるだろう。

虚きよ飾しよくは急速に剝はぎとられてゆく。

ありていに言えば、帝王は御ぎよ座ざに深く腰こしを埋める巨人だ。黒き甲かつ冑ちゆうで一分の隙すきもなく全身を鎧よろった巨人。甲冑の形状はなるほど、奇き怪かいではある。ひどくねじくれていて、大おお仰ぎようでありながら余分は少なく、あやしく、おぞましく、威い圧あつ的で、老いているようにも、若々しくも見える。直線はほとんど確かく認にんできない。どこもかしこも曲がり、うねり、波打っている。幾いく重えにも重なる閉じられた瞼まぶたと凝ぎよう視しする瞳ひとみとが、全身に張りめぐらされているかのようだ。鋸のこぎりの歯、そして、鉤かぎ爪つめのようなものが、あちこちに生えている。左右非対たい称しようで、右みぎ肩かたは盛りあがり、左肩は削そぎ落とされたようにすっきりしていて、右みぎ腕うでのほうが左腕よりも倍ほども太く、長い。脚あしは逆だ。右脚よりも左脚のほうが、あからさまに凶きよう猛もうな輪りん郭かくを描えがいている。頭部は沈ちん殿でん物ぶつのような闇やみに包まれていて、その形状をうかがい知ることもできない。あるいは、あれこそが帝王の頭部の形状なのか。覆おおい隠かくされているだけなのか。

いずれにしても、視えてしまいさえすれば、それは単なる存在

だ。

　そのわりには仰ぎよう々ぎようしい、大おお袈げ裟さすぎる。

　このようなものが平然として在る世界のゆがみは、許しがたい、受け容いれがたい、認めることなどできはしない。

（往け、畜生どもよ、探せ、──）

　帝王は身じろぎもしない。ただそこにいる、──あるだけだ。

　気づいていないのか。察知されていないのだろうか。

　判断するための材料はない。現時点においては。

　なれば、探せ。探すのだ。私は／私たちは探そう。探たん索さくこそが私の／私たちの使命である。さあ、往こう。

　幅はばも、奥行きも、高さも、深さも計り知れない、この〝終わりオーバーの果てエンド〟、──帝王の御ご所しよは、残された可能性のうちの一つで、もっとも有力視されている地点だということを、いったい誰だれが知ろう。

（無論、我々はそれを知っている。）

（我々は、──）

　私は／私たちは知らぬ。知らぬまま、御所を這はいずり回る。帝王は御所の中央にいる。さながら御所の一部であるかのように、微び動どうだにせず。この御所自体が帝王であり、帝王の巨軀として知覚されるものはただ、その部品でしかないかのように。私は／私たちは御所を探さぐりながら、進む。進むごとに、自然と帝王の巨軀へと迫せまることになる。帝王の巨軀はただそこにあるだけで、私を／私たちをのみこもうとしているのか。暗い、暗い、深遠の淵ふちに。私は／私たちは、もう息をすることも満足にはできない。私の／私たちの手足は生命宿るものではなく、たとえば棒きれとか、薄布の切れ端はしとか、何かの破片とかといった、単純な物体でしかないかのようだ。ここまで生き残った私は／私たちは、きわめて頑がん健けん、さらには幸運な個体の群れであるはずだが、肉体的な屈くつ強きようさも、意志の堅けん固ごさも、強運も、さして役には立ちそうにない。私は／私たちは、立てつづけに息絶える。ただでさえ大幅に減少していた。いっそう数を減らし、もはや

全ぜん滅めつの憂うき目めに遭あおうとしている。それでも、私は／私たちは往く。

（往け、そうだ、──）

（往くのだよ、──）

な

に

も

の

だ

と、──御所の全体が揺ゆらいで、震ふるえた。

私は／私たちは、静止した。止まらずにはいられなかった。

ただ身動きがとれなくなっただけではない。

すべての生命活動が停止した。

私は／私たちは、──

（ああ、──）

帝てい王おうが立ちあがろうとしている。

　次の瞬しゅん間かんにはもう、立ちあがっていた。

（ああ、──）

（見つけた。──）

（ああ、ついに、──）

　帝王が腰を上げた、──その御ぎよ座ざだ。

　畜ちく生しようの一いつ匹ぴきがそれを一瞬、ほんの一瞬、視認した。その畜生は、その一瞬のために存在したのだ。そして、他ほかすべての畜生どもが、その一瞬を手に入れる、ただそれだけのために犠ぎ牲せいとなった。尊い犠牲だった。無む駄だではなかった。

「……皆みな、死んだか。我が愛いとしい畜生どもよ。」

　眼の君が蒼そう白はくの瞼を開けると、白目とは呼びえない黒い泉の中に浮うかぶ真しん紅くの島と、金こん色じきに縁ふちどられた小さくも深い穴が現れた。

「だが、私は視た。とうとう、見つけたよ。そうか。帝王の御座に。帝王に守られているのだね。あるいは、帝王が守っているのか。ともかく、──」

　眼の君は白い頰ほおをゆがめて笑った。

　探索者として放った畜生どもの五感を通して、眼の君が視た、それは、──

　扉とびらだった。

　艶つやのない黒々とした形も定かならぬ地じ獄ごく帝王の御座の、──帝王がちょうど腰こしかけていたその場所で、堅かたく口を閉ざしている、──扉だった。

　扉には印があった。

「私には見えた。あの印が。やはりあったのだね。扉はもう一つ。間ま違ちがいない。──」

　眼の君は陶とう然ぜんと瞑めい目もくした。

「あの扉の先に、我々の希望があるのだ。」

the last few days “pieces of broken wish”

Omenage 900

　　　　　九巡月一番日十七時四十三分　サンランド無統治王国カリオサーク

　まったく見えないというわけではないが、ほとんど見えない。

　彼の目は光を感じる。その光を遮さえぎるものがあれば、影かげとして認にん識しきできる。

　ただ、物体の輪りん郭かくを視覚でとらえることは叶かなわないし、色しき彩さいも感知しえない。

　彼の目は、ほとんど見えない。そう言ってもいいだろう。

　それでも彼は、見ることが可能だ。

　タクティル・ヴィジョン。触しよく視し。〝超者の業オーバラーツ〟の一種だ。天てん佑ゆうなのか、はたまた単なる偶ぐう然ぜんか。いずれにせよ、彼は正常な視覚を与あたえられなかった代わりに、その能力を授さずけられた。

　おかげで日常の生活に不便はない。魔ま術じゅつの修練にもさしたる支障はなかった。触視によって認識される世界しか彼は知らない。だから、そうでない者と比ひ較かくすることはできないのだが、乗り越こえるべき障害が目の前に立ちはだかっているとは、彼には思えなかった。庭に設けた温室で、鉢はち植うえや土に植えた草木や花々を愛めでるのにも、不都合を感じたことはついぞない。

　彼は今、一冊の書を著あらわしている。それは触視を通した世界のありさまを詳しよう密みつに描びよう写しやしたものだ。完成の暁あかつきには、目の見える者に読んでもらい、感想を聞きたいと考えている。

　もっとも書は全十二章の予定で、現在、三章の半ばを執しつ筆ぴつしているところだ。書きあげてからも、念入りに推すい敲こうするための時間が必要だろう。ひとまず脱だつ稿こうするまで、あと三年余、書としての体てい裁さいが整うまでには、さらに一年半。それが彼の目算で、目標でもある。

彼は彼自身の魔道を歩む魔術師マギであり、触視をふくめたオーバラーツの研究者の端はしくれであり、植物の愛好家であり、一人の生活者でもある。

心の臓が脈打つたびに費ついやされる時を、過ぎ去ってゆく日を、移ろう季節を、だが、彼はあえて引き留めたいとは思わない。ときに風のように駆かけ抜ぬけ、ときに山のごとく動かざるようにも感じられる時間の流れを、現在の彼は触視で直接的に感じることができる。彼は時間に触ふれることができるのだ。

それはとてもやわらかで、あたたかで、細い、極ごく細ぼその繊せん維いが縒よりあわされてできている。

時間は繭まゆだ。

全世界の全物体は、果てしない時の繭にくるまれて、いずこかへ運ばれてゆく。

逃のがれることなど考えもしなかった。

彼はたしかに、ここにいる。いずれ何らかの原因で命を失い消え去るが、そのときは彼の認識自体消しよう滅めつするから、彼がいないと彼が感じることはない。時の繭が運ぶ先に何があろうと、何もなかろうと、彼は在るかぎりただここに在り、やがてなくなるだけだ。

彼は硬こう筆ひつを操あやつっていた手を止め、あたりに視線を巡めぐらせた。彼はたいてい見えぬ目を閉じたままでいるが、触視をある方向へと延ばす際には顔をそちらに向ける。実質的な効果があるわけではない。合図のようなものだ。

途と端たんに土と植物の匂においが、息い吹ぶきが押しよせてきて、彼を満たした。彼は書しよ斎さいで筆を執とることもあるし、温室の中にあつらえた机を使うこともある。このところは温室で植物に囲まれながら筆を走らせることが多い。今日もそうだった。

左手を懐ふところに差し入れて懐かい中ちゆう時計をとりだし、蓋ふたを外して触視で時刻を読みとった。十七時四十三分。自らこしらえた昼食をとり、後始末を終えたのが十三時ごろだったか。そろそろ夕食の用意を考えねばならない時間帯だが、空腹を感じたために手を止めたのではなかった。彼はかすかに首をひねった。

「何だろうか」

　空気が細かく泡あわ立だち、そのごくごく小さな泡が弾はじけるたびに、彼の肌はだをちりちりと刺さすのだ。経験したことのない感覚だった。空腹どころではない。鳩尾みぞおちに親指をきつく押しあてているかのような重みを感じる。肉体は食物を欲ほつしているはずだが、食欲が完全に抑よく制せいされていた。彼は木製の椅い子すに腰かけている。座っているこの状態に違い和わ感かんを覚えてならない。

　一言で言えば、ひどく落ちつかないのだ。

　彼は硬筆を机に置いて立ちあがった。温室の出入口に向かって歩きはじめると、それから間もなくだった。音がした。出入口の扉が開く音だった。

「ヴィンセント……！」

　声を聞く前に、彼にはそれが誰だれだかわかっていた。

　とりわけ書の執筆にとりかかってから、彼は自身の触視にいっそう自覚的になり、活用法への理解も深まりつつある。今は直じかに接せつ触しよくせずとも、二メーテルほどの距きよ離りであれば、指でなぞるように感じることが可能だ。よって、その者の容姿も彼なりに承知している。

　かつては男装していたようだが、今はスラックスこそ穿はいているものの、男性に見み間ま違ちがえられることはないだろう。折に触れて彼の家を訪おとずれる。ここ三年ほどは、一いち巡じゆん月げつに一度か二度といったところだ。

「エドガー」

　同じ師を持ちながら、一度は決けつ闘とう沙ざ汰たにまで及およんだ相手ではあるが、二人の道が完全に分かたれることはなく、こうしてたびたび交差している。奇き縁えんとしか言いようがない。

　彼はまた、ときおり周辺の視野を失うほど猪ちよ突とつして、ひたすらまっすぐ突つき進もうとする彼女のひたむきな生き方に、好感を持ってもいた。

　彼女はいつも切せつ迫ぱくしていて、性急で、研とぎ澄すました

刃はのように鋭するどくもあやうい。

　飛ひ躍やくし、閉へい塞そくを突き破るには、彼女の持つ熱量のようなものが必要なのではないか。羨せん望ぼうを感じることさえある。

　それにしても、尋じん常じようではない。

「どうしたのだ、エドガー。ずいぶん呼吸が乱れている。発はつ汗かんしてもいるようだ」

「発汗――」エドガーは足を止め、手の甲こうで額のあたりをぬぐった。「な、何を言う。くだらないことを。私が汗あせをかいているだって？　いや、たしかにかいていなくはないが――」

「きみはもしや、駆けてきたのだろうか」

「ああ、そうだ！」エドガーはふたたび早足で歩きだし、彼に迫せまってきた。「そうだとも！　私は走ってきたんだ！　浮うき世よ離ばなれした君のことだから、どうせ何も知りはしないだろう、まだ誰も伝えていないだろうと思って、それで――」

「伝える？」

「そうさ」エドガーは彼の胸むなぐらをつかむような勢いで距離を詰つめてきた。汗ばみ切羽詰まった彼女の顔が、ありありと感じられた。「君は俗ぞく世せには興味がないのかもしれないが、その足で踏ふみしめている大地は幽ゆう界かいに属しているわけじゃない。人里離れた山奥に一人隠かくれ住むことでもしないかぎり、世間と無縁ではいられないんだ」

「それもよいかもしれない。生活に必要な物資の調達に困難が生じそうではあるが」

「馬ば鹿か！」

　突然、罵ののしられ、そのうえ本当に胸ぐらをつかまれた。

　エドガーの手は、――いや、手だけではない、その全身が小刻みに震ふるえていた。

「君は結局、親の遺産でのうのうと暮らしている男だ！　金がなけ

れば生きられないくせに、その金はもとから君の手に握にぎらされている！　それも、たんまりとな！　そんな甘っちょろいやつに、隠いん者じゃ暮らしなんかできるものか！」

　彼はゆっくりとうなずいた。「そうだな、エドガー。きみの言うとおりだろう。ぼくは一人で生きている気になっているだけで、その実。そうではない。ぼくは世間知らずなのだ」

「……すまない」エドガーは彼の胸ぐらから手を放し、一歩あとずさりした。「言葉が過ぎた。君があまりに呑のん気きなものだから」

「なぜ謝るのだろう。きみの指し摘てきは的を射ている」

「事実が侮ぶ辱じよくにならないとはかぎらない。この言葉に解説は必要か？」

「きみの言わんとしていることは理解できているのではないかと、ぼくは思っている。十分ではないかもしれないが」

「……苛いら々いらするよ。君と話をしていると。ああ、謝罪はしないでくれ。今はそれどころじゃない。言っただろう。私は急ぎ君に伝えねばならないことがあってきた」

「覚えている。きみはだいぶ慌あわてていたようだ。何かあったのだろうか」

「あったどころの騒さわぎじゃない」

　その報は八巡月二十八番日──事件が起こった当日のうちに、カリオサーク賢けん人じん会にもたらされた。

　いち早く一報に接したのは、ドワイト・ニューマンだった。

　ニューマンはカリオサーク商業組合組合長で、彼が経営しているニューマンズ貿易商社とラフレシア第三帝てい国こくとの間には、浅からぬ商業上の繋つながりがある。それゆえに、彼は帝国の内情や動静に敏びん感かんだったし、薄うすい可能性の一つとして、この事態を頭の隅すみで想定していた。八巡月二十三番日、首都アマツ陥かん落らくにより終息に向かうことがほぼ確実視される情勢と

なった帝国のオークリッド首長国侵しん攻こうが始まった時点で、彼はひそかに安あん堵どしたものだった。

　これで少なくとも、当分の間はないだろう。

　帝国に比べれば弱小とはいえ、決して小国とは言えないオークリッドを完全に制圧、掌しよう握あくして我が物とするには、一年やそこらでは足りない。戦争がひとまず終わってからが、むしろ本番だ。少なくとも数年がかりの大事業となるだろう。帝国は常に野心的だが、慎しん重ちようでもあって、事を急せく習性はない。オークリッドが片付くまでは何も起こらない、起こるわけがないと思いながらも、ニューマンは警けい戒かいを怠おこたらなかった。新皇帝即そく位いの経けい緯いや、アデナ大だい元げん帥すいの誕生をふくめた一連の動きに不ふ穏おんを感じていたし、オークリッド侵略に未知の新兵器が投入されているという噂うわさも彼を不安にさせた。そうはいっても、心底から信じてはいなかった。まさか、このようなことが現実になるとは。

　皇帝オクタヴィアン・ギュスターヴ・ヴィド・ラフレシア率いるラフレシア第三帝国軍、サンランド無統治王国国境をやすやすと突とつ破ぱし、北上しつつあり――。

　サンランドの国境は鉄てつ壁ぺきだ。三キルメーテルおきに境界要塞ボーダーフオート、五十メーテルごとに置かれている監視塔ウオツチタワー、それらを塹壕トレンチと隧道トンネルが結んでいて、配置されている魔ま導どう兵は数万とも十万ともそれ以上とも言われている。大規模な武装隊商は何事もなく通り抜ぬけられるのに、なぜ隊商に偽ぎ装そうした軍隊の前には必ず魔導兵たちが立ちふさがるのか。その仕組みは明らかになっていないが、事実、サンランドの国境を侵おかそうとした他国の試みは、ことごとく失敗してきた。それが、今回は小こ競ぜり合いさえ演じられなかったという。目算ですらない、推測に近いが、帝国軍の規模は、オークリッド侵攻に投入された十六万余を超こえるらしい。その大部隊、恐おそるべき大軍が、国境を素す通どおりしたのだ。

　そんなことがありえるのか。

　ありえない、とニューマンは思った。さりとて、利害をともにし、彼を欺あざむく理由など微み塵じんもありそうにない、信しん頼らいできる筋からもたらされた情報だ。疑う根こん拠きよを探すよりも早さつ急きゆうに対処するべきだと、商人の勘かんが彼に命

じていた。

　間を置かず、ニューマンはカリオサーク賢人会に帝国軍の来らい襲しゆうを報しらせた。その一時間後には、口さがない市民たちが何だかんだと騒ぎはじめたが、初期の段階でこれを紛まがうことなき真実と受け止める者は多くなかった。それどころか、ほとんどいなかった。

　カリオサーク賢人会は、カリオサーク全体に関かかわる案件を合議して決し、様々な圧力や実力行使によってその履り行こうを強力にうながす機能を持つ。賢人会の決断は迅じん速そくだった。
ニューマンにつづいて、帝国軍の動向に関する情報を賢人会に持ちこむ者は後を絶たなかったし、南国境を破った彼かの軍が北上して目指すは首都エルデンだろう。カリオサークはその進路上にある。カリオサークからもっとも近い国境線までは、百八十キルメーテルしかない。大規模な軍隊であれば、その行軍速度はおのずと限定され、どれだけ急いでも一日に二十キルメーテル進む程度が関の山だろう。それにしても、猶ゆう予よはない。

　賢人会は一刻も早く行動を起こさねばならなかったのだ。だから、速やかに動いた。賢人会を構成する賢人たちは、日ひ頃ごろから互たがいに牽けん制せいしあい、陰いんに陽に対立してもいたが、彼らの権益の大半がカリオサークに根ざしていることだけは間ま違ちがいない。誰だれよりも彼ら自身のために、カリオサークは守られねばならないのだ。

　こうして八巡月二十九番日のうちに特使を派は遣けんすることが決定され、正使にはカリオサーク賢人会の会長である魔導師マジスタ〝篦鹿ヘラジカ〟、副使には同じく賢人会の会員、由ゆい緒しよあるアール・ベルアノンの伝説的なデザイナーで、世に言う〝五帝〟の一人にして最長老、ウーサー・ペンウッド、そして、交こう渉しようの取り持ち等々諸事一いつ切さいを担当する世話役には、帝国に幅はば広ひろい人脈を持つドワイト・ニューマンが選ばれた。

　ニューマンは最新式の高速輸送馬車で南下しながら、八方手を尽つくして情報収集にあたり、また、帝国側関係者との接せつ触しよくを図はかって、カリオサークの要望を伝えるべく骨を折った。
まったくこれは、彼が生しよう涯がいに手がけた中でも最大にして最悪の仕事だった。

　カリオサーク随ずいーいちの富ふ豪ごうと見なされているニューマンは、経営者、管理者としてより実務家としての自身に強い自負を抱いだいていたが、すでに行軍中の軍隊を相手にしたことは一度もない。このたびの軍が皇帝その人に率いられていることは間違いなかった。皇帝の意志による侵略なのだ。帝都の官かん僚りようなら何人でも知っているが、彼らと話をしても意味がない。そもそも帝都は遠すぎる。願わくは皇帝だ。難しければ、皇帝の近くにいる者だ。皇帝は軍中にある。だとしたら、軍人。とはいえ、軍人の知ち己きはかぎられている。

　それでも彼はついに光明を見いだした。帝てい国こく軍は巨きよ大だいな参さん謀ぼう機関を擁ようしていて、中には事務を担当している半文官のような幕僚もいる。そのうちの一人で、過去、何度か便べん宜ぎを図って恩を売っておいたロナタン・ポワジエという者が軍に随ずい伴はんしていることを、彼はようやく突つき止めた。この者を手がかりとして、どうにか交渉開始の糸口をつかむことはできないか。

　ここからが彼の腕うでの見せ所となるはずだった。苦心惨さん憺たんしながらも熱中しかけた仕事が、しかし、淡あわ雪ゆきのように溶とけて消えてしまった。安堵しながら、むなしくもあった。

　皇帝はポワジエを通して、カリオサーク特使に告げたのだ。余は暫ざん時じ軍を止め、汝なんじらとの面会に応ずるであろう、と。

　八巡じゆん月げつ三十番日の黄昏たそがれ時だった。

　カリオサーク特使は、全長四十七メーテルの弩級戦車ドレッドタンク〝アーノルディ〟――何らかの動力によって自走する壮そう大だいな動く砦とりでの、さながら巨きよ船せんのそれのような甲かん板ぱん上で、ラフレシア第三帝国皇帝に拝はい謁えつする栄えい誉よをえた。

　複雑な形に髪かみを結ゆい、絢けん爛らん豪ごう華かたる帝服ガウンに身を包んだ皇帝は、甲板上の御ぎよ座ざに腰こしかけ、羽毛のごとき淡い微び笑しようを口くち許もとに浮うかべて、半眼でどこか遠くを眺ながめていた。帝王の威い厳げん、威圧よりも、得体の知れない魔ま性しように搦からめとられて、ニューマンは息苦しさから逃のがれられなかった。

　皇帝も、その傍かたわらに立ついかにも奇き人じん然とした片眼

鏡モノクルのアデナ大元帥も、それに特使側の正使も、副使も、明らかに人としては異様で、ニューマンはただ有能なだけの俗ぞく人じんだ。俗を極きわめた俗人中の俗人が、非ひ凡ぼんと呼ぶのも馬ば鹿か馬ば鹿かしい超ちよう人じんどもの中に迷いこめば、眩暈めまい、動どう悸き、息切れくらいして当然だろう。しかも、特使の側は丸腰の三人のみだが、皇帝は物々しく赤い甲かつ冑ちゆうを着こんで剣けんを佩はいた武人たちに守られていた。さらに、アーノルディは帝国軍に囲まれていて、甲板上からそのほぼ全軍を見み渡わたすことができた。すなわちそれは、大おお袈げ裟さに言えば、帝国軍全将兵が甲板を注視しているということでもあった。カリオサーク特使はさらし者にされていたのだ。

まるで見世物だ。

ニューマンは戦せん慄りつした。すべては無む駄だだったのではないか。交渉の余地など最初からなかったのではないだろうか。現に、我々はいきなりこの場に引きだされた。

むろん、当方の意は皇帝に伝えられているはずだ。カリオサーク賢けん人じん会は自らすすんで帝国に降くだる道を選せん択たくした。無む抵てい抗こうで帝国の一部となる。それと引き替かえに市民の財産、権利の保障を伏ふして切に願う。その点がまさに交渉の焦しよう点てんにして要点だが、返答は皇帝陛下が直々になされるとだけ。いまだ話しあいの端たん緒しよにすらついていない。通常なら、たとえ皇帝の裁可が必要な場合であっても、あらかじめ代理なり責任者なりと折せつ衝しようし、ある合意に達した段階で皇帝の出番と相成るはずだ。しかれども、すでに軍は動いている。
ニューマンをふくめたカリオサーク側は大いに焦あせっていた。必死だった。皇帝の申し入れに飛びつかざるをえなかった。やむをえなかった。他ほかに手段はなかった。違う。

そうではない。

有効な手段など、初めからどこにもなかったのではないか。

数十万の人兵馬がひしめいているというのに、深しん閑かんと暮れなずむ地平はすべてが作り物のようだった。

一人、ドワイト・ニューマンだけが卑ひ小しような俗物、ちっぽけな人間として身み震ぶるいしていた。

ニューマンは自分の右斜ななめ前に立っている異形の魔導師マジスタにちらりと目をやった。唾つばをのみこもうとしたが、口の中が乾かわききっていた。喉のどがひくひくと涙なみだも流さずに泣いただけだった。

魔導師マジスタも、そのやや右後方にそびえるように立っている老人も、なぜ平然としていられるのか。何も感じないのか。何も予感していないのか。それとも、そう装よそおっているだけなのか。虚きよ勢せいか。あるいは、ニューマンには推おし量りがたいほど、精神が強固なのか。

「オクタヴィアン・ギュスターヴ・ヴィド・ラフレシア皇帝陛下──」

魔導師マジスタが一歩進みでて、恭うやうやしく、それでいて厳おごそかにひざまずき、頭こうべを垂れた。その名の由来である篦鹿の角を模した形に整えられている黒髪は、金属めいた光こう沢たくがありながらも紛まぎれもなく自前の毛もう髪はつだ。ニューマンは見慣れているし、カリオサークでは知らぬ者とていない名士なので、今さら誰も不自然を感じはしないが、帝国の人間たちにとってはどうなのか。

場違いな、愚おろかしい思考だった。ニューマンは半ば虚きよ脱だつしていたのかもしれない。篦鹿につづいて、千年の年を経ても曲がることのない巨木のような老人が膝ひざをついたのを見て、彼も慌あわてて拝はい跪きした。甲板の磨みがき抜ぬかれた床ゆかを凝ぎよう視ししながら、考えなおした。

篦鹿は高名な魔導師マジスタで、一人の魔術士としての力量も並なみ大たい抵ていではないらしいが、むしろ指導者としての業績が際きわ立だっていた。金持ちの夢見がちな子女を引きとって、素質があろうとなかろうと、曲がりなりにも魔術士らしい体てい裁さいを取り繕つくろってやる彼の手しゆ腕わんは、古今例がないほどだという。彼は理想家にも理論家にもなれる。調整能力に長たけているというより、調整の化物だ。一流以上の演技者で、演出家でもある。篦鹿はただ、この場にふさわしい役を演じているだけだろう。そうすることで、いかなる難局をも乗り越こえ、おそらく魔術士としての才能以上の地位を築いてきた異能の男なのだ。

ウーサー・ペンウッドに至っては、泰たい然ぜん自じ若じやくとした振ふる舞まいと、これまでの経歴、輝かがやかしい実績から

「古き峻しゆん厳げんなる大たい岳がく」などと称しようされ、畏い敬けいの対象となっていて、本人も重じゅう鎮ちん中の重鎮ぶっているが、実は耄もう碌ろくしかけているという噂うわさが絶えない。もともと度を超こえた倨きよ傲ごうの人であり、人を人とも思わぬがゆえに、余人に対しては超ちよう越えつ的、平等に冷厳であるという変人だ。何を考えているのやら、常人にはうかがい知ることもできないが、このごろはそもそも、ろくに物を考えていないのではないか。よく瞑めい目もくして座っているのは、新たな意い匠しようを生みだすために瞑想しているのではなく、単に居い眠ねむりしているだけに違いない。実際、低く鼾いびきをかいていることもある。今もこの老人は、何が何やらわかっているようなわかっていないような、あやふやな境地にひとまず腰を落ちつけて、いつもどおり大岳のふりをしているだけなのだろう。

　ただ一人、ドワイト・ニューマンだけがまともなのだ。

「陛下、まずはお目通りのお許しをいただき、申しようのなき感謝の念をあえて述べさせていただきたく存じます」篦鹿はさらに五センチほど鹿しか頭を下げた。「ありがたき無上の幸せにございます」



　ペンウッドが伏せたままかすかに、ふん、と鼻を鳴らした。へりくだるにもほどがある篦鹿の口上が気にくわないのだろう。しかしながら、下手の下手に出ておいて、口八丁手八丁でいつの間にやら盛りかえし、上手に出ている。それが篦鹿の常じょう套とう手段だ。

篦鹿はいやに響ひびきのよすぎる声でつづけた。「このたびは――」

否いな、つづけようとしたのだ。

「よい」と、皇こう帝ていのものらしき存外やわらかな調子の声が、篦鹿の弁舌をさえぎった。

ニューマンは顔を上げようとした。当然、皇帝の御ご前ぜんで許可もなくそんなことをすれば、無礼者とたしなめられるどころか、その瞬しゅん間かん、会談がぶち壊こわしになってしまいかねない。あやうく自重しながら、なぜ、と自問せずにはいられなかった。世間知らずの小こ僧ぞうではない、酸すいも甘いも嚙かみ分けた自分が、なにゆえそのような所業に及およぼうとしたのか。

「余には不要である」と皇帝が言った瞬間、ニューマンはふたたび面おもてを上げる強力な誘ゆう惑わくに駆られた。ペンウッドが小さく唸うなって、篦鹿も「は……」というような頼たよりない声をもらしたように思う。

「余には不要だ。降こう伏ふくは容いれぬ。余が望むは支配ではない。征せい服ふくでもない。この地を余の物とする。ただそれだけのことだ。無む秩ちつ序じよな欲得の混こん沌とんに浸ひたりし汝なんじらのごとき汚けがらわしい愚ぐ物ぶつどもを、余は欲ほつせぬ。余の帝国に汝らは害悪である。害悪は除かれねばならぬ。根絶されねばならぬ。余は害悪に向けてそれを宣言するの労さえ厭いとう。余はただ、余の将兵に余の意を伝えんがためにこれを行うのだ。――アロンズ・ニードルスピア」

皇帝が何者かを呼んだ。聞き覚えのある名だとニューマンは思ったが、頭の中を引っかき回してそれが誰だれか突つき止めるよりも、他ほかにするべきことがありそうだった。彼はもう自制しなかった。顔を上げると、皇帝と大だい元げん帥すいの両りよう脇わきに並んでいた武人たちのうちの一人が、音もなく列から離はなれてこちらに近づいてこようとしていた。その武人は他の者たちと同じく緋ひ色いろの鎧よろいを身につけていたが、兜かぶとを被かぶっていなかった。一目で将帥の器うつわと知れる、ある種の神こう々ごうしさすら漂ただよう顔がん貌ぼうの持ち主だった。その手はすでに佩はい剣けんの柄つかにかかっていた。何を行おうとしているのかは自明だった。それにもかかわらず、武人の顔は微み塵じんも緊きん張ちようしていなかった。冷れい酷こくとも違ちがっ

た。あえて言えば、慈じ悲ひの表情だった。

「陛下、何を──」と篦鹿が立ちあがりながら言いかけ、血ち煙けむりを上げて倒たおれた。抜く手も見えない抜き打ちだった。ペンウッドは跪ひざまずいた姿勢のまま、頭部を両断された。次の瞬間、ニューマンは血刀を振りかぶる武人を見上げていた。見ろ。

　見るがいい。

　こんなことだと思った。こうなることを、おれは予感していたのだ。しかし、止めようがなかった。どうしようもなかった。

　ニューマンはカリオサークにいる妻と五人の子供と老母を思った。愛あい妾しようの顔が脳のう裏りをよぎり、これっきりだと力が抜けた。

　おれは死ぬのか。ここで死ぬのか。これで死ぬのか。それだけではない。

　彼はもはや理解していた。

　家族も死ぬ。愛妾も死ぬ。友も死ぬ。知人が死ぬ。

　皇帝はおそらく、カリオサークを略りやく奪だつし尽つくし、住民ことごとく惨ざん殺さつするつもりだ。

　いったい何のために。そんなことをして、何の得があるのか。

　ニューマンは譫言うわごとのように言った。「た、助け……」

「この穢けがれに満ちた世界を再生するためです」

　武人はニューマンをいたわるように微笑ほほえんだ。

　とても武人の顔つきとは思われない。武人の言葉とは思われない。武人の声とは思われない。まるで聖職者だ。──ああ。アロンズ・ニードルスピア。

　ジェードリをひっくり返すような大騒そう動どうを起こした集団がある。血塗れブラッド聖堂テンプ騎士団ルナイツ。壊かい滅めつしたはずだ。その首しゆ魁かいの名がたしか、アロンズ・ニードルスピア。またの名を、サー・ジューダス。──まさか、この武人

が？　どうして帝国の軍人に？　世界を再生する？　それが軍人の台詞せりふか？

「苦しみはありません」

　アロンズ・ニードルスピアは愛いとし子におやすみを告げるように言いながら、剣を振りおろした。そう認にん識しきしたときにはもう、ドワイト・ニューマンは死んでいた。

「それは、つまり──」

　彼はできるだけ迅じん速そくにエドガーの話を咀そ嚼しやくするべく努力した。

　最後に彼が屋や敷しきの外に出たのは四日前だ。出入りの商人などもいるのだが、あいにくその間は彼らの訪れもなかった。とくに引きこもっていたつもりはない。ただ、彼にはなすべきことが山とある。そのなすべきことに没ぼつ頭とうしているうちに、ずいぶんとまあ大変な事態になっていたものだ。

「ラフレシア第三帝国の軍が攻せめてくるかもしれない、ということだろうか」

「かもしれない、じゃない」エドガーは呆あきれ果てたようにため息をついた。「帝国軍はカリオサークを攻める。これはほぼ確定的な事実だ」

「しかし、カリオサークに軍はない。魔ま導どう兵も王立銀行に配備されているだけだ。攻めるといっても、帝国軍は誰と戦うのだろう」

「魔術師マギヴィンセント。つかぬことを訊きくが、君は戦争に興味を持ったことがあるか」

「いまだかつてない」

「だろうな。ということは、君のことだから、ごくごく一いつ般ぱん的、表層的な知識としての戦争、軍隊しか知らないわけだ」

「触しよく視しによって本を読むことができるようになってから

は、戦記物なども数冊、通読したものだが」

「いいか、ヴィンセント。軍隊の仕事は軍隊と戦うことじゃない。娯ご楽らく物の騎き士し物語と一いつ緒しよにするなよ。戦場で鍛きたえあげた剣と剣を交え、正々堂々と勝敗を決するなんて、一昔前ならともかく、現代では完全に死滅した光景だ」

「そういうものなのだろうか」

「そういうものさ。名めい誉よや誇ほこりのために命がけで戦う馬ば鹿かな兵士はいないし、必要とされない。兵器と集団戦術が発達して、お為ためごかしのお飾かざりは引ひっ剝ぱがされ、醜しゆう悪あくな本質だけがあらわになって残された。軍隊とは、権力者が目的を達するための力にすぎない。武力だ。早い話、組織化された暴力だ」

「きみは何が言いたいのだろう」

「話によると、帝国軍の目的は必ずしもカリオサークの占せん領りようではないようだ。連中がただ奪うばうためにカリオサークを襲おそうとしたら、戦いは起こらない」

「なるほど」彼はうなずいた。「彼らは戦うことなく、手当たり次し第だいに市民を殺して所持品を剝ぎとり、人々の家屋敷に押しこんで家財を強ごう奪だつする。きみはそう予測しているのだろうか」

「略奪、強ごう姦かん、虐ぎやく殺さつは古来、兵隊の余技で、ときには本分になることすらある。カリオサークは強奪され、破は壊かいされて、最後には焼かれるかもしれない」

「それはよくない」

「あたりまえだ、よくないに決まっている！　だから、私は──」

「そうだ。エドガー、君は早く逃にげるべきだろう」彼はエドガーの肩かたをつかんで、あちらを向かせた。「さあ、急いだほうがいい」

「なっ──」エドガーは彼の手を振り払はらった。「な、何を、君は何を言っている！　どういう言い種ぐさだ、それは！」

「ぼくはこのカリオサークから一刻も早く離はなれることを、きみに勧すすめているつもりなのだが。そうは聞こえなかっただろうか」

「聞こえたさ！　聞こえたから、訊いているんだ！」

　エドガーはなぜこれほどまでに声を荒あららげているのだろう。彼女が彼の前で苛いら立だつのはいつものことだし、憤いきどおりを見せることもめずらしくはないが、たいてい逆上する前にぷいと横を向いてしばらく黙だまり、口の中で何かもごもご言って立ち去ってしまう。彼としては、今もそうしてほしい。むしろ今こそ、そうしてもらいたいのだ。

「エドガー。きみは現在、ぼくらの師マガロのもとで後進の指導にあたっている」

「それがどうした！　師はもう、落ち延びさせる算段をつけた！　今ごろは他の弟で子したちに連れられて、カリオサークを出ているころだ！」

「きみが手配したのだろうか。ならば、ぼくからも感謝しなければならない。ありがとう。それにしても、このような危急の際、ぼくはまったくの役立たずだ。つくづく不ふ肖しようの弟子だと思わざるをえない」

「そんなことはどうでもいい！」

「どうでもよくはない」

「ああ、お前と問答をしていると、本当に疲つかれる……！」

「すまない」

「それが余計だと言うんだ！」

「重ね重ね、謝罪することしかできない」

「謝るな！　謝ってなんかもらいたくないんだ、私は！　謝るべきは──」エドガーの声が揺ゆれて、震ふるえた。「あ、謝るべきは、私のほうなんだから！　私は、あんなことをしておきながら、いまだに一言も謝罪していない！　のこのことお前の前に顔を出して、罵ば倒とうされてもおかしくない、それどころか、何を言われても

文句は言えない、追いかえされて当然なのに、お前は──お前ときたら、久しぶりに会った友人みたいに迎むかえるものだから……！」

「ぼくは自らの心に従っただけだ。要素精せい霊れい以外を友と考えたことはないのだが、きみは同門だし、様々な縁えんもある。なるほど、友と言えないこともないだろう」

「友、か」エドガーは吐はき捨てるように短く笑った。「……光栄だよ、ヴィンセント。嬉うれしくて涙なみだが出る。だけどな、本音を言わせてもらえば──なぜ、あのときなぜ、お前は私を助けたんだ……？　身の程ほど知らずにも藍あい色いろ炎えん上じようを使い、逆流リバースして、放っておけば焼け死んだ私を、お前は縛ばく氷ひよう獄ごくで救った。なぜ、私を死なせてくれなかった？　あのまま無様に死んでいれば、私は──私は……」

「きみを救わなければ、ぼくは必ず後こう悔かいしていただろう。同じ答えを繰くりかえすことを、どうか許して欲しい。ぼくはただ、自らの心に従っただけだ」

「……お前には、わかるまい。自らの心に従う。それだけのことが、難なん儀ぎで、難儀で、どうしたってできやしない。そういう人間だっているんだ。くそ……魔術士なのに、こんな些さ末まつな、卑ひ俗ぞくな問題に煩わずらわされている我が身が情けなくて仕方ない。だから私は駄だ目めなんだ」

「それとこれとは別なのではないか。それに、きみは魔ま術じゆつ士として長足の進歩を遂とげていると、師マガロも言っていた。指導者としても、きわめて優ゆう秀しゆうだと。とりわけ、素質に恵めぐまれているのに、性質に難があるため成長が阻そ害がいされている者を育成するのに、目覚ましい手しゆ腕わんを振ふるうきみのことを、師は誇らしげに、いとおしげに語っていた」

「師マガロが……？」

「きみはたしかに、率直ではないのかもしれない。しかし、それがために、人がひた隠かくしにしている思いや悩なやみといったものを感じとり、これを汲くむことができるのではないだろうか。単純で融ゆう通ずうがきかない、ぼくのような者にしてみれば、きみのそのような部分はえがたい長所だと思う」

「っ……」エドガーは声のような、吐と息いきのようなものをもら

して彼の衣服の胸あたりをつかみ、すぐに放した。うつむいて、歯を食いしばり、懸けん命めいに何かをこらえているようだ。どこか痛むのだろうか。怪け我がをしているとは思えない。病気だろうか。

　名を呼ぼうとしたら、エドガーが顔を上げて叫さけんだ。「一緒に逃げるぞ、ヴィンセント！　私はそのためにきたんだ！」

　彼はわずかに首を傾かしげた。「エドガー。ぼくはここを去るつもりはない」

「どうしてだ!?」

「この家には、ぼくの大切なものがたくさんある。父の蔵書、この温室の植物たち、使い慣れた家具、器具、建物や、土地自体にも、ぼくは深い愛着を感じている。持ってゆけるのならそうするだろうが、そうもいかない。捨てられないのならば、ここにとどまるしかないのではないだろうか」

「自らの心に従って、か」

「そのとおりだ」

「まだ……まだ、忘れていないんだな。あの娘と過ごしたこの家を、お前は──」

「マリアンヌは女性ではない。そう言って、あの人は去った」

「やっぱりそうなんだ」

「違ちがう」

　彼は首を振った。違う、と思う。エドガーが言いだすまで、心に浮うかびもしなかった。マリアンヌ。あの人をその名で呼ぶことも、本来してはいけないのだ。それを望まないと、あの人が言ったのだから。「僕がもう捨てた名なんだ。いやなんだ。嫌きらいなんだ。その名前で僕を呼ぶな」と。

　それゆえに、彼はただ、面おも影かげや声の残ざん滓しだけを、胸に抱いだくことはせず──きっとあの人はそれを望まないだろうから、ただ胸の底に押しこめるようにして、保管していた。あの人。そう口にしたことさえなかった。

　今、どこにいるのだろう。何をしているのだろう。無事であればいい。幸せであればいい。自らの心に従って、生きていてくれればいい。不意にそんなことを願ってしまったときは、思いが自然に沈しずんでゆくまで、じっと待った。

　屋や敷しきのそこかしこに痕こん跡せきを、記き憶おくの欠片かけらを見つけたときは、そっとつまんで、やはり胸の底に埋うめてしまった。

「違う、エドガー、ぼくは……」

「だって──」エドガーは血ち反へ吐どを吐くように声を張りあげた。「だって、好きだったんじゃないのか⁉　恋こいしていたんだろう、そうだろう⁉」

　彼は唇くちびるを引き結んで、顔を覆おおいかけた手をどうにか止めた。どうか。

　ああ、どうか、それを恋と呼ぶのは。

　それだけはどうか、よしてほしい。

　なぜなら、あの人はそれを望まないだろう。あの人はおそらく、ぼくを忘れているだろう。忘れていてほしい。ぼくはあの人の人生に一点の染しみすら残したくはないのだ。消し去って、なかったことにしたいのだ。あの人は涙をこぼして去るしかなかったのだから。

　置き土産みやげの乱暴な言葉は、ぼくを微み塵じんも傷つけなかった。ただあの人の心だけが無残に引き裂さかれて悲鳴をあげていた。

　ぼくはあるいは、もしかしたら恋をしていたのかもしれないが、それはあまりに独りよがりで、正しい恋ではなかった。本物の恋ならば、雨の日に膝ひざを抱かかえてひとりきりでいたきみの悲しみくらい、理解できたはずだった。

　そんなことさえできない寂さびしい恋ならば、ぼくはいらない。

「早く逃にげるといい、エドガー」

「いやだ」

「急いで行くべきだとぼくは思う。師マガロはきみを必要としている」

「お前はどうする」

「言わなかっただろうか。ぼくはここにとどまる。もし帝てい国こくの兵士たちが押しかけてきたら、ぼくはこの家を守るだろう。人を傷つけるための魔術だとは思わないが、害意を持つ者に容よう赦しやする要は認めない」

「相手は兵士じゃない、軍隊なんだぞ。守りきれると思うのか」

「ぼくは守るつもりだ。結果どうなったとしも、ぼくが自分自身の行動に責任をとるだけのことだから、とくに問題はないのではないだろうか」

「この、分からず屋……！」頬ほおを打つような、エドガーの激しい声だった。「──ヴィンセントッ！　私はお前を死なせたくない！　むざむざと死なせはしない！　お前に死んでほしくないんだ……！」

　次の瞬しゆん間かん、エドガーの身体からだがぶつかってきて、その両りよう腕うでが彼の胴どうに巻きつき、とてつもない力で苦痛さえ覚えるほどだったが、彼は驚おどろいても戸と惑まどってもいなかった。奇き妙みように落ちついていた。彼はあたたかな気持ちに浸ひたっていた。

　一つには、このようにきつく抱だきしめられた経験が、記憶しているかぎりでは彼には一度もなく、意識してはいなかったものの、心の底ではそれを望んでいたのかもしれない。願望が達成されて、彼は満たされているのかもしれない。

　そして、勘かん違いかもしれないが、エドガーがこれまで彼に対してとってきた態度、行動のすべてが腑ふに落ちたのだ。

　朴ぼく念ねん仁じんの彼だから、思い違いという可能性もなお高いが、死ぬな、死んでほしくないと言われて、自分が死ぬ覚かく悟ごだったことを、生に執しゆう着ちやくしていなかったことをあらためて認めざるをえなくなった。それでも強しいて彼がその選せん択たくをしたら、エドガーがどうするか、さすがにそれくらいのことは想像がついた。

　おそらく、エドガーもここに残ると言い張るだろう。彼が死ねば、エドガーも死ぬだろう。彼の決断はエドガーの命運をも決しかねない、その事実を無視してはならない。

　それでもあえて、意地を通すのか。──意地を、通す。そうなのか。

　否定はできない。エドガーもたいがい強ごう情じようだが、彼もあながち負けてはいまい。

「だめだ、だめだ、ヴィンセント！」エドガーは彼の胸に顔を、彼の顎あごに頭を押しつけて、声を裏返らせた。「──許さない、許さないぞ、一人で残るなんて！　そんなことはさせない、引きずってでも連れていく！」

「しかし、これではぼくがきみを引きずって行かねばならないのではないだろうか」

「え……？」

「逃げよう、エドガー」彼はエドガーを押し離はなした。エドガーの腕はゆるんでいたから、さしたる力は必要なかった。そして彼はエドガーの手を握にぎった。「善は急げという。逃げるのなら早くするべきだと、ぼくは思う。さあ、行こう」

「いや……だが、ヴィンセント、たとえば荷造りだとか、逃げる前にしないといけないことの一つや二つ──」

「持ち去ることができるのなら、すべて持ってゆきたい。それが叶かなわないのなら、ぼくにはこれとこれといった具合に選ぶことはできそうにない」

「お前ってやつは……」エドガーは呆あきれたように、それでいてあたたかく笑った。「どうしていつもそう、極きよく端たんなんだ。もう少しいいかげんにできないのか」

「生あるかぎり、ぼくはぼくでいるしかないのだろうと思う。おそらく、きみも同じなのではないだろうか」

「……そうだな」エドガーは彼の手を引いた。「よし。わかった、行こう。たとえ手ぶらでも、先行した師マガロの一団と合流することさえできれば、どうにかなる」

　二人は手をとりあって温室を出た。離れがたい気持ちが一向に起こらないのが、かえって不思議なほどだった。

　もしかすると、彼の心はすでに、ここから飛び立とうとしているのかもしれない。そんなつもりはなかったが、本当は歩きださねばならないのに、自や棄けになってとどまっていた。案外、それが真相なのかもしれない。

　仮にそうだとしたら、ただ一歩踏ふみだすのに、ずいぶんと時間ががかかったものだ。しかも、歩くどころか、駆かけねばならないらしい。

　屋敷をあとにすると、ありとあらゆる形で異変が感じられた。

　人々が急ぎ足で、ときにぶつかりあいながら、こけつまろびつ行き交かっている。馬ば蹄ていの音が、馬の嘶いななきが聞こえる。騎き乗じようして街路を疾しつ駆くする者がある。荷物を満まん載さいしているのか、車輪を軋きしませて馬車が走っている。荷重と速度の超ちよう過か、または通行人を避さけようとして横転する馬車がある。そこかしこで人や物の気配が凝ぎよう集しゆうしている。渋じゆう滞たいしているのだ。

「ひどい有様じゃないか……！　さっきまでは、ここまでひどくなかったのに──」

「こっちだ」彼は人や物の気配が薄うすい方向へとエドガーを導いた。

　エドガーは最初、少し身を硬かたくしていたし、足並みもやや乱れ気味だったが、やがて二人が一人のように走ることができるようになった。

「便利なものだな。べつに、うらやんでいるわけじゃないが……」

「使いようなのではないかと思う。有効に活用するためには、他と同じで意識的に錬れん磨ましなければならないようだ」

「……悪かった」

「なぜ謝るのだろう」

「意識的に錬磨しないといけないほどのものなら、骨を折ったぶん

役立って当然だ。その労苦を知りもしないで──」

「ぼくはこれを労苦だと感じたことはない。思うに、きみは少々気を遣つかいすぎなのではないだろうか。ぼくときみは同門で、知ち己きでいる期間も短くはない」

「同門、か……」エドガーの手に力がこもった。

　彼は反射的に握りかえして、その途と端たん、羞しゆう恥ちとも罪悪感ともつかないものに襲おそわれた。

　そもそも、なぜ手を繋つないでいなければならないのか。はぐれてしまわないためか。お互たがい子供ではないのだ。それに、多少距きょ離りがあっても、彼にはエドガーがわかる。だが今、この手を離したら、エドガーは胸を痛めるだろう。推測にすぎないのに、彼はそう確信していた。そしてそのとき、彼の心の臓も締しめつけられたように疼うずくだろう。

　もはや息苦しいほどなのだ。

　人や物の騒そう々ぞうしく入り乱れる気配とはまた別だ。空気が張りつめている。それでいながら、絶え間なく細かく揺ゆれ動いて、さりとて風のように流れるわけでもなく、去ろうとせずによどんでいる。重い。

　ひどく重い。

「どうした、ヴィンセント？　何か様子が」

「きみは感じないか、エドガー」

「感じる？　何のことだ……？」

「ああ──」彼は思わず足を止めた。

　空気だけではない。かすかにではあるが、震しん動どうしている。地面だ。

　まるで大地が低い唸うなり声を発しているかのようだ。

　大地がその全身に力をこめて、激しい苦痛をこらえているかのようだ。

「身み悶もだえしようとしている……」

「ヴィンセント？　何を──くっ……」エドガーは小さく呻うめいた。

　馬車が通行するには狭せまいこの通りは、さして混みあっていないが、それでも往来が絶えることはない。誰だれかが足早にそばを行きすぎるときに、エドガーの肩かたにぶつかったのだ。彼はよろめいたエドガーを支えた。

　ぐらり、と揺れた。

「今……」エドガーは彼にすがりついた。

　遠くで悲鳴がした。それと同時に突つきあげるような縦揺れがきた。三度、四度、立てつづけに怖おそろしい上下動があって、それから水平方向というよりは斜ななめに揺れた。地面の舗ほ装そうが軋んでひび割れた。ひびはどんどん延びて広がり、彼とエドガーの足あし許もとにも及およんだ。

「な、何だ、これは、何が起こって──」

「走ろう、エドガー。急がなければ！」彼はエドガーを引きよせて駆けだした。

　彼にはわかっていた。これは自然現象などではない。何者かが引き起こしたものだ。確信は持てないが、おそらく魔ま術じゅつだろう。

　彼の父、魔導士ウイザードデウスは蔵書家だった。自らの研究対象に関かかわる書物以外にも、魔術関連の書を多く所蔵していた。彼はそのすべてを熟読したとは言わないが、大半に目を通していた。かつて力としての魔術を求めていた彼は、いにしえの強大というよりも巨きょ大だいな魔術に魅み入いられたことがあった。

　古代呪じゆ式しき、と呼ばれている。

　それは超大規模破は壊かい、あるいは天地の理ことわりを遥はるかに超ちよう越えつした現象を実現させるために、魔導王が編みだしたとされる魔術だ。伝説のたぐいや絵空事では決してない。キング・グッダーが首都エルデンの下に蠢うごめく異界生物フリークスたちを抑おさえこんでいる古代九く頭ず竜りゆうの呪のろいは、そ

の規模からいっても、途方もない効力からいっても、間ま違ちがいなく古代呪式だろう。魔導王の血を受け継つぐとされる当代キング・グッダーには行使可能な、現実の魔術であるということだ。

　魔術士の中には、古代呪式の研究家を自任する者もいる。だが、実際に施せ式しきするとなれば、魔導王に比ひ肩けんする実力の持ち主でなければならない。

　魔導王に劣おとらぬ者、並ぶ者、超こえる者と見なされている魔術士が、現代にも幾いく人かいる。

「──たとえば……〝閃光のスパークル魔女ウイツチ〟マチルダ」

「マチルダがどうしたんだ……!?」

「いや」

「そういえば、そのマチルダが帝てい国こくに荷か担たんしているという噂うわさが」

「な──」

「あっ、危ない、ヴィンセント……！」

　突き飛ばされてから気づいた。彼は思考に取り憑つかれて、足許にしか注意を払はらうことができていなかった。

　向かって右側の建物だ。老ろう朽きゅう化かが進んでいたのだろう。一気に崩ほう壊かいして、瓦が礫れきが押しよせてきた。エドガーは彼を突き放して瓦礫の波から逃のがそうとし、自分はその場に残ったのだ。

　彼はつんのめったが、転てん倒とうする前に体勢を立てなおした。「──エドガー……！」

　声を出した拍ひよう子しに、口の中に大量の粉ふん塵じんが入りこんで咳せきこんだ。それがどうしたというのか。彼は何度もエドガーの名を呼びながら、瓦礫に埋うめつくされて揺れつづける道を右往左往した。「──どこだ、エドガー！　返事をしてほしい！　エドガーッ……！」

　多少離はなれてもわかると思っていた。それがどうだ。塵ちり、

埃ほこり、破は片へん、倒たおれている人々、のたうつ人々、這はいまわる人々、地面の揺よう動どう、精神の動揺によって、触しよく視しが乱れに乱れている。彼の世界は今や混乱の極きよくにあった。「――どうか答えてくれ、エドガー……！」

「……ヴィンセント」

　声は光だった。彼は光にすがり求めて見つけた。

　エドガーは瓦礫に埋もれているようだった。彼は無我夢中で瓦礫をとりのぞいた。「待っていてほしい、エドガー。今、動けるようにする」

「ヴィンセント……いい……無む駄だだ、ヴィンセント……」

「無駄ではないとぼくは思う」

「だめだ……感覚が……ないんだ、足の……私は、動けない。私のことはいいから……行ってくれ、ヴィンセント。師マガロは、メルンバックの集落に……」

「きみを置いて行けるわけがない。ぼくにはできることとできないことがある。ぼくはそれを知っている」

「……あくまでも、自らの心に従うっていうのか……」

「そうだ、エドガー。きみもきみの心に従ってほしい。きみにも魔術士としての志があるだろう。道半ばにして果てたくはないはずだ。あきらめてはいけない」

「魔術士として……はは……ヴィンセント、お前は……馬ば鹿かだ。本当に……」

「馬鹿でもいい。ぼくはきみを連れてゆく。ほら、これをどければ――」彼は渾こん身しんの力を振ふりしぼって、エドガーの下か肢しを押し潰つぶしている大きな石材を持ちあげようとした。不慣れな力仕事で、どうもこつがわからないのだが、エドガーの呻き声を聞きながら何度か試ためすと石材を動かすことができた。

　彼はエドガーを助け起こそうとして、息をのんだ。

　触しよく視しによって、はっきりとエドガーの状態がわかったか

らだ。

「……すまない、ヴィンセント。助けてもらっておいて……でも、本当に無理だ。動けないどころか、私はもう……」

「大だい丈じよう夫ぶだ」彼はエドガーを抱だきあげようとした。エドガーが弱々しい手で彼の腕うでを振り払おうとしたが、かまわなかった。彼はエドガーを横抱きにして立ちあがった。「大丈夫だ、エドガー。ぼくがきみを連れてゆく」

「……邪じや魔まになる。お願いだから、置いていってくれ」

「それはできないと言ったはずだし、ぐずぐずしている暇ひまはない」

　人一人抱かかえて走るとなると、さすがに楽ではなかった。しかも、足場がきわめて悪く、不安定だ。もはや舗装が割れるだけではすまない。地割れし、裂さけて、隆りゆう起きし、陥かん没ぼつして、その状態が刻々と変化しつづける。いくらかましな道を行けば人波にのまれる羽目になるし、建物も無事ではない。崩落してぺしゃんこになる建物があり、瓦解して残ざん骸がいを撒まき散らす建物もあり、傾かたむいている建物もある。

「助けてくれ！」「誰だれか、助けて！」「だめだ、こっちは──」「くるな！　この先は行き止まりだぞ！」「手を、手を貸してくれ！　あの下に娘むすめが──」「やめろ」「押すな！」「何なんだ、これは！」「助けて！」「痛い！」「やめてくれ、踏ふまないでくれ、そこに妻が──」「どけ！」「お母さん⁉　どこ⁉」「助けてよ！」「うるさい、そんなの──」

「……ヴィンセント」

「何だろうか」

「私は、──いや……何でもない」エドガーは彼にしがみついた。そうするだけの力が残っているということだ。

「きみを一人にはしない」彼はエドガーを抱く腕に力をこめて、前へ前へと進みながら行くべき道を探した。そうだ。

　一人は心細い。人は所しよ詮せん、一人で生きて一人で死ぬものなのかもしれない、それは動かしがたい真実なのだろうが、自分は

この世で一人きりだという実感は、いつだって胸を狭せばめる。

　慣れ親しんだ孤こ独どくがもたらす静せい穏おんは防ぼう壁へきだ。高い壁かべを築いて、厳重に巡めぐらせ、その中に籠こもって瞑めい想そうに耽ふけっていれば、心を乱されることはない。いや、それでもときには寝ねつけない夜が訪れて、打つ手のなさにまんじりともせず朝を待った。

　マリアンヌ。他ほかの名を知らないから、この名で呼ぶことをどうか許してもらいたい。きみの無事を祈いのりながら、愚おろかにもきみとふたたび見まみえることを夢見ては打ち消して、消し去りきれず、暁あかつきのまどろみにきみの声をかすかに聞いた。

　きみと過ごした日々、ぼくは孤独ではなかった。ぼくはきみを失うことを恐おそれた。ずっとぼくは寂さびしかったのだ。

　恋こいではない、恋などでは。

「ヴィンセント」

「ああ」

「ありがとう」

　彼は返事をせずに駆かけた。腕の中にいる友が急に重くなっても、彼はうろたえなかった。行く手の建物が崩くずれて前がふさがれ、左右の建物が音を立てて迫せまってきても、彼は絶望しなかった。決然と回れ右をして引きかえしながら、彼はただ祈った。

　どうかいつまでも息災で、日ひ中なかにはあたたかな陽射しがきみをやわらかく包み、夜には幸せの星がきみの頭上できらきらと輝かがやかんことを。

　　　　　　同時刻　首都エルデン第六区モリー・リップス・アサイラム

　──息を、吸いこんだ。

　吐はきだしながら、右手を持ちあげて額に掌てのひらをふれさせた。

「ん……」

　重いなぁ。なんか、重い。何が重いって、何もかもが。沈しずみこんでいっちゃいそうなくらい。重い身体からだが、硬かたい。どこもかしこも。そうだ。柔じゆう軟なんしないと。しっかりやわらかくしておかないと、すぐ怪け我がしちゃうんだから。ユリカに治してもらえばいいとか、そういう問題じゃないんだよね。

　頭、痛い。ずきずきっていうより、ずぐずぐって感じで。何だろ。暗い。──あ。目をつぶってるから？　そっか。じゃあ、あたりまえだよね。なんで目をつぶってるんだろ。もしかして、眠ねむってた……？

「マリアローズ……！」

「……はい？」

　この声って、──リーチェ？　なんでリーチェが……？

　目を開けるとえらくまぶしくて、でも、どうやら太陽の光ではなさそうで、──半永久灯だとしたら、ずいぶん明るい。てゆうか、明るすぎない？　そんなことを思いながら目を細めて、女性用ナース・医術士帽キヤツプを被かぶっているベアトリーチェの顔をぼんやりと見つめていた。

「あれ……？　僕……」

「左額部骨折」ベアトリーチェはマリアローズの鼻先に指を突つきつけた。「左眼球破は裂れつ左頬ほお裂傷左頬きよう骨こつ骨折右みぎ肩かた骨折右腕複雑骨折気道熱傷、身体中に打だ撲ぼくと火傷やけど。それから内臓打撲」

「……何それ」

「主な怪我の内容だ！」

「は？　誰が怪我したの？」

「お前に決まってるだろうが！」

「僕……？」マリアローズは首を左右に曲げてみた。頭痛は治まらないし、ひどくだるいけれど、まあなんとか大だい丈じよう夫ぶらしい。そうじゃなくて、大丈夫にしてもらったんだ。「──ああ、そっか。そうだったね……うん。覚えてる。意識がなくなったところまでは。たぶん」

「当然だ！　意識がなくなるまでは意識があったんだから！　──って、何あたりまえのことを言ってるんだ、わたしは!?」

「……そんなに怒おこんないでよ。声、響ひびくから」

「わ、悪かった」

「謝られても。……面めん倒どうかけたのは、僕なんだし」

「面倒だなんて思うわけがないだろう!?」

「……ごめん。声」

「あ──」ベアトリーチェはベッドのそばの椅い子すに腰こしを下ろした。「……先に目を覚ましたサフィニアさんから、少し話を聞いた。また無茶をしたんだろう」

「サフィニア……」マリアローズは目を閉じて、ため息をついた。「──よかった。無事だったんだ」



「無事とは言えないな。今日は九巡じゅん月げつの一番日だ。サフィニアさんは昨日、気がついた」

「九巡……」マリアローズは薄うす目めを開けて、アサイラムの病室らしい部屋の天てん井じようを眺ながめながら考えた。

　記き憶おくにある日付は八巡月二十七番日だ。ということは、二十八、二十九、三十、月が変わって一番日だから、丸三日以上、もしかすると四日ほども眠っていたのか。

「……わー……」

「わー、じゃないぞ。はっきり言って、お前は死ななかったのが奇き跡せきだ。衰すい弱じやくが激しすぎて、傷の治ち療りようが終わっても、なかなか意識が戻もどらなくて……。サフィニアさんは、負傷よりも魔ま力りよくを使い果たしたことのほうが響いたみたいだけどな」

「リーチェ」

「何だ」

「あのさ……」

　やだな。

　訊きくのが、怖こわい。

　すごく、怖い。

　正直、自分のことなんてどうでもいい。本当にどうなったっていいんだ。心の底から、すんなりとそう思えてしまうくらい、大事なものが僕にはあるから。

「──他の、みんなは？」

「ん」ベアトリーチェはマリアローズのおでこをそっと撫なでた。「──全員無事、とは言いづらいけどな。業ごう突つく張りの僧そう侶りよだの神官だのの世話になった者はいない」

「……そっ──か」目をつぶって鼻をすすると、ベアトリーチェの手がマリアローズの顎あごやほっぺたをぺたぺたさわった。力が抜ぬけて、泣いてしまいそうになったけれど、唇くちびるを噛かみしめてなんとか我が慢まんした。「……それなら、うん……」

「詳くわしい話をしてもいいけど、わたしの口からじゃないほうがいいか。みんな、アサコイラムこにいるから」

「そう……なんだ。ああ、家も壊こわされちゃったし──」

「わたしは現場を見ていないが、そうみたいだな。大変だ」

「……そのことは、考えないようにしようかな。とりあえず、今は」

「そうしろ。でも、絶対なんとかなると思うし、必ずどうにかしてやる。母様も、わたしもいるんだ」

「モリーとリーチェだと、頼たのもしすぎ」

「頼たよってくれていい。というか、無理にでも頼ってもらうぞ。こんなふうにでも言わないと、お前はなかなか他人に甘えようとしないだろうしな」

「そんなことないよ。……もう、いっぱい甘えてるよ」

「まだまだだ。すっかり身をゆだねてくれたっていいんだから」

「身をゆだねる……？」

「ああいや、べ、べつにへっ、変な意味じゃないからな！　遠えん慮りよとか気き兼がねとか気き遣づかいとか一いつ切さいしないで、今はおとなしく寝ねてろってことだ！　お前のことだから、どうせじっとしてなんかいられないんだろうけど、まあとにかくそのあれだ！」ベアトリーチェは顔を真っ赤にして椅子から立ちあがった。「お前の仲間を呼んでこないとな！　だいたい一人か二人はお前に付き添そってたんだが、たまたまわたしの手が空いたものだからさっき代わって──お前は状態が安定してたから、みんなそんなに心配してなかったと思うぞ！　すぐ呼んでくるから！」

「うん。お願い」

「何にやにやしてるんだ!?　おかしなやつだな！」

「や、リーチェ、かわいいなぁーと思って」

「まっ、また意識不明になりたいかっ!?」

「それはちょっと勘かん弁べんして……」

「本当にやるわけないだろうが!?」

「わかってるってば」

「ならいいんだ！」ベアトリーチェは早足で病室から出てゆこうとして、ドアのノブに手をかけた。たぶん、振ふり向こうか振り向くまいか迷ったのだろう。一いつ瞬しゆんそんなそぶりを見せて、でも結局、ベアトリーチェは振り返ってマリアローズの目をしっかりと見すえた。「──治療は、母様がやったんだ。お前だけは、自分が手当てすると言って聞かなくて」

「……そっか」

「だけど、母様はあのとおり忙いそがしいから、お前だけにかかりっきりになってるわけにはいかなくて、わたしがいろいろ……ただ寝かせておけばいいってものじゃないし、つまり──ああ、わたしはだめだな」ベアトリーチェは前まえ髪がみをつかんで、顔をゆがめた。「言う必要があるのかどうかも、正直、よくわからない。でも、黙だまっているのも、なんだか違ちがう気がして……」

「うん」

「だからどうってこともないんだが──」

「ごめんね」

「謝るな、ばか！」

「……ごめん」

「わたしは──」ベアトリーチェは、ふう、と息をついて笑えみを浮うかべた。「マリアローズ、わたしはお前が好きだ。前にも言ったと思うけど、なんというか、そうだな……人間として、一人の人間として、お前のことが大好きで、いとおしくてたまらない。お前と出会えて、好きになることができて、友人になれて、本当によかった。わたしは石頭だし、この気持ちは死んでも変わらない」

「なんか……」マリアローズは顔を半分枕まくらに押しつけた。熱い。顔が熱くて、熱くて、しょうがない。「は、恥はずかしいんだけど……」

「わたしはそうでもない。とにかく、そういうことだ。お前はわた

しにもっと甘えろ。わたしはどんなことでも受け止められる。何せ、あの母様の娘なんだからな」

「……説得力ありすぎ」

「だろう？」ベアトリーチェは軽口でもたたくようにそう言って、今度こそ出てゆくのかと思ったら、またドアのノブにかけた手を止めた。「──そういえば、昼飯時ランチタイムの頭領マスターが何度か見み舞まいにきたぞ。秩ちつ序じよの番人との関係がよくないから、こっそり……だけどな」

「あ……」マリアローズは下唇を二度、三度、軽く嚙んだ。「──そう」

「あれも、変な男だな」

「……かなりね」

「じゃあ、呼んでくる」

　ベアトリーチェが行ってしまうと、全身のだるさと頭痛が一気にぶり返してきた。

　本当に、僕は甘えてるんだよ。きみがそばにいてくれるだけで、すごく楽なんだから。楽にしてもらってるんだから。しかも、きみだけじゃなくて、そういう存在が他ほかにも、たくさんいるなんて、贅ぜい沢たくすぎて、眩暈めまいがするほど満ち足りていて、かえって恐おそろしくなる。

　こんな時間、いつまでもつづくはずがない。今に終わる。もうすぐ終わってしまう。怖こわくてたまらないけれど、だからといって捨て去ることも、壊してしまうこともできない。

　あいつ、心配してるだろうな。

　知ったことじゃないけど。

　考えたくないんだよ。できるだけ、考えたくない。

　だって、違うんだ。リーチェとか、モリーとか、ＺＯＯのみんなとは違う。

　あいつは僕のことを大事に思ってくれている。それはわかるし、僕だって心底からどうでもいいって思ってるわけじゃないけど、──痛いんだよ。

　怖いんじゃなくて、あいつを大切に思うことは、痛い。痛みそのものなんだよ。

　どうしてこうなってしまったのか、わからないわけじゃない。原因はいくつもあって、一つ一つ数えあげることもできなくはないけれど、そんなことをしたって無意味だ。理由に向きあったとしても、何かが変わるわけじゃない。変えることなんかできやしない。

　僕はずっとこうだったし、それはこの先も同じなんだから。

　マリアローズは胸を押さえた。「……ほら。きみのことを考えただけで、こんなに痛い」

九巡月一番日十七時五十四分

「とりあえず、一安心やな」カタリはマリアローズが寝ているベッドの端はしのほうに腰こしかけて、掛かけ布ぶ団とんをぽんぽん叩たたいた。「まあ、怪け我がはモリーはんが完かん璧ぺきに治してくれたったわけやし、平気やとは思とったけど、なんにしてもほっとしたわ」

「……ほんっとうにっ……！」ルーシーはベッドに両手をついてしゃがみ、さっきからずっと下を向いている。「──よかったですよぉ！　いや、そんな単純には喜べないんですけど！　だけど、よかったです！　あのときはもう、どうなることかと！　だから、不幸中の幸いっていうか……！」

「おいおーい……」カタリはルーシーの後ろ頭を乱暴に撫なでた。「泣いとんのかい、お前ジブン」

「な、泣いて──泣いてなんかないですよ!?　なんで泣くんですか、泣くわけないじゃないですか！　うれし泣きとかしてる場合じゃないんですから！　そうでしょう!?」

「しょうね……」椅い子すにちょこんと座っているユリカが、松まつ葉ば杖づえを支えにして隣となりに立っているピンパーネルを見やった。「大だい丈じよう夫ぶ？　ちゅかれない？」

「はイ」ピンパーネルは穏おだやかに微笑ほほえんでいるけれど、大丈夫なわけがないじゃないか。

「左足……」マリアローズはベッドから身を乗りだして、ピンパーネルの左足に視線を向けた。ズボンの裾すそを膕すねまで折り、包帯が巻かれている左足は、足首から先が失われている。「──少し時間かかりそうだね。でも、時間さえかければ、もとどおりになるみたいだから」

「はイ。詳くわしい説明・教えてもらいまシタ。ワタシはとくに問題ないデス」

「や、問題ないことはないと思うんだけどね……」

　あの日、ピンパーネルは両足首に深ふか傷でを負っていて、どこかで左足首から先がもげてしまったらしい。それが悪いことに、崩ほう壊かいしたトマトクン邸ていの敷しき地ち内だったようで、こんな表現もどうかと思うが、回収できなかった。

　とれたものをくっつけるだけなら、腕うでのいい医術士にとってはそう難しくない。そのうえ機能を完全に回復させるのも、簡単ではないにしても不可能じゃない。ただ、なくなったものを復元するとなったら並なみ大たい抵ていではなくて、指一本でも途と方ほうもない大仕事だから、たいていの医術士は匙さじを投げる。

　モリー・リップスは違ちがった。医術士が全精力を長時間、本当に気が遠くなるような間、ひたすら傾かたむけつづけなければならない復元の施せ式しきを効率化、短縮化する方法を模も索さくし、限界にぶちあたるとエルデェＥイニオンＭ機術士匠合Ｕと組んで、最近、復元施式の機械を完成させた。

　この機械のおかげで、モリー・リップス・アサイラムは現在、身体復元施式が確実に可能な、ほとんど唯ゆい一いつの医術施し設せつになっている。とはいえ、施式にはやはり時間がかかるし、何もかも機械任せにはできないから、医術士の手技も必要不可欠だ。

「どれくらい、かかるって……？」

「復元に・六巡じゆん月げつかかると言われまシタ」

　ピンパーネルは平然としているけれど、六巡月って一年の半分つまり半年だよ？　短くないっていうか、めちゃくちゃ長いよ？　しかも、復元が終わるまで、中途半はん端ぱな状態の左足が足首の先にくっついていて、それが少しずつ少しずつ育っていって──みたいな形になるはずだから、ろくに身体からだを動かせない。ついでに、復元が完かん了りようしたら、機能回復のための訓練などもしないといけないはずだ。

「ぜんぶデ一年くらい・みたいデス」

「……一年も」

「マァーリアロォォォーズゥー」カタリはマリアローズの肩かたをガシガシ叩いた。「ピンプ本人は冷静に受け止めて、もうパビィーッと頭切り替かえとんのに、ジブンがそないに辛しん気き臭くさい顔ォしとったらあかんがな。せやろ、なあ？」

「う、うっさいなぁ！」マリアローズはカタリの手を振ふり払はらった。「言われなくたって、ピンパーネルが前向きなら僕は足引っぱったりしないよ。僕にできることは何だってするし──」

「ま、せいぜい気張って、あれこれ手助けしたったらええねん。えほほほほ」

「いや、そこはカタリさんもがんばりましょうよ……？」

「ルーシーッ！　なんでこのわしがジブンに突つっこまれなあかんのや！　新米の分際でぇぇ」

「……ちょっとさ、静かにしてくれない？　若じやつ干かん頭が痛いんだよね。てゆうか、他ほかはぜんぜんいいんだけど、魚声だけは響ひびいて響いて仕方ないんだよ」

「魚声て、魚がピーヒャラピーヒャラ声なんか出すかいボケッ！」

「カタリ。マリアは頭が痛いって言っているのよ？　ましゃか、忘わしゆれたの？　マリアは目が覚しやめたばっかりで、体調が万ばん全じえんじゃないの。しゅこし黙だまっていなしゃい」

「……ほい」

　悄しよう然ぜんとうなだれた半魚人を見て、ピンパーネルがくすりと笑った。リルコに対してはらしくないほど敵意を剝むき出しにしていたし、いろいろ経緯いきさつがあるに違いないけれど、引きずっているようには見えない。それならそれでいい──とは思えないよ、やっぱり。

　マリアローズは起こしていた上半身を倒たおして枕まくらに押しつけ、病室の天てん井じようを仰あおいだ。「──サフィニアは一度、目を覚ましたけど、まだ安静にしといたほうがいいって感じで……ハニーはまだ意識が戻もどってなくて、きゅーは知らない人だらけだから部屋に閉じこもっちゃってて、あと、──トマトは寝ねてるんだよね」

「トマトクンは……」ユリカは声を沈しずませた。「家に帰ってきてみたら、あんなことになっていて──わたしたちを見ちゅけだしてから、まじゅ、あからしゃまに危険しょうだったハニーしゃんとサしやフィニア、しょれからマリアを、一人で一気にここまで運んだらしいの。あとは、番人の人たちも手て伝ちゆだってくれたみたいだけど」

「一人で三人とか、どう考えても無理っぽいんだけど……」

「ぼく、番人の人に聞きました」ルーシーはベッドの端はしをつかんで、さりげなく屈くつ伸しん運動をしている。もうちょっと落ちつきがあってもいいと思うけれど、身体を動かさずにいられないほど元気なのは、決して悪いことじゃない。「──マリアさんとサフィニアお姉様をそれぞれ肩に担かついで、ハニーさんは背中にくくりつけて……全身血まみれだったって。わからないんですけど、きっとＥＭＵで何かあったんだと思うんですよね。ぼくたち、まだ何も聞いてないんですけど……」

「ちょっと、ね、──昔からよく寝る人ではあるんだけど、ふちゅうの眠ねむり方じゃないのよ。正直、心配だわ」

　半魚人が生意気にも難しい魚顔をして「むむーん」と唸うなりながら腕組みをした。

「最近は、前よりましになってたのに……」マリアローズは膝ひざを立てて両腕で抱かかえた。「一時期はほんと、寝てばっかりみたいなときもあったでしょ。気になってて、大だい丈じよう夫ぶかって訊いたりもしたんだけど、ただ疲つかれがたまってるだけだとか

言うからさ。そりゃあ……」

　──俺はだいぶ長く生きてきた。

「そりゃあ、ね。かなり無茶したりもするし、疲れもたまるだろうけど……」

　生きている実感がなかったと、トマトクンは言っていた。でも、今は違うって。だいぶ長く。どれくらい長く？　きっと、気が遠くなりそうなほど長く。想像はつかない。わかるわけがない。わかるなんて軽々しく言えない。

　わからなくたって、それが何だっていうんだ。関係ない。だけれど、その途と方ほうもない長い時間は、ただ過ぎ去るだけで他には何の影えい響きようも及およぼしていないのか。

　疲ひ労ろう。

　そんな簡単な言葉で表現してしまえるものだとは思えないけれど、一秒一秒が目には見えないほど小さな塵ちりだとして、それを僕らは毎日吸いこむとして、長生きしても七十年かせいぜい八十年、老いぼれて明日を待てない今いま際わの身体に蓄ちく積せきしている塵の量は、重さは、どれくらいだろう。百年、二百年、それ以上なら……？

　マリアローズは病室にいる仲間たちの顔を見まわして、すぐにうつむいた。

　みんなどれだけ、どこまで知っているのかな。いい機会だし、訊いたほうがいいのかもしれない。もうそろそろ、はっきりさせておいたほうがいいのかもしれない。

　べつに知らなくたっていい。無理に知る必要なんかない。そうやってごまかしてきたわけじゃなくて、本当にどうでもよかった。隙すき間まや穴や溝みぞをすっかり埋うめてしまわないと、そばにはいられない、手を繋つなぐことなんかできない、信じあえない、怖こわい──そんなふうにはこれっぽっちも思わないからだ。

　過去を消し去ることはできないし、向きあわないといけないこともあるけれど、僕らは過去の奴ど隷れいじゃない。

　どんなに過去が僕らをがんじがらめにしても、僕らがいる場所は

結局、今だ。

　現在だ。

　この瞬しゆん間かんだ。

　今より大切な過去なんてありはしない、だけど──、

　それとは違ちがう、別次元の問題で、明らかにできることはしておいたほうがいいのかもしれない。面めん倒どうでも、厄やつ介かいでも、先延ばしにはしないほうがいいのかもしれない。

　なぜだかそんな気がしてしょうがない。

「あのさ」マリアローズは立てた膝をぐっと胸に引きよせた。「……あのね」

「どうしましたカ」ピンパーネルが砂色の静かな瞳ひとみにマリアローズを映した。

　でも、いざとなると、そうたやすくはなかったりする。

　マリアローズはかすかに首を横に振ふった。「ううん。ただ……頭痛も治まってきたし、サフィニアに会いに行きたいなって、思ってさ。あと、きゅーと、──トマトにも。ハニーのお見み舞まいもしなくちゃね。じっとしてるより、少し動いたほうがいいっぽかったりもするから」

「気持ちはわからなくもないけど、無理しちゃだめよ、マリア」

「そ、そうですよ！　ユリカ姉様の言うとおりです……！　せめて、もうしばらくは寝ていてください！」

「いやあ、疲れて眠たなったらぐっすり寝よったらええわけやし、そのへん歩くくらいはべつに平気なんちゃう？」

「本当に・大丈夫でスカ」ピンパーネルは動かない目でマリアローズを見つめた。

　きみこそ、本当に大丈夫なの……？

　言葉には出さなかった。そう思っただけなのに、通じてしまった

らしい。ピンパーネルはわずかに口くち許もとをゆるめて、ほんの少しだけ首を縦に動かした。

「よっ、と—」マリアローズは身体からだの向きを変え、のばした両足をベッドから投げだして肩かたをすくめてみせた。「だから、ほんとに大丈夫だってば。信用ないなぁ」

　ユリカが悪戯いたずらっぽく笑った。「日ひ頃ごろの行いのしぇいじゃない？」

「せや、せや」

「たしかに、マリアさんってときどき無む謀ぼうですもんね！」

「アナタには言う資格・ないデス」

「……うっ。ご、ごめんなさい……」

「腐フッ……」カタリは右手の人差し指と親指を直角に開いて顎あごにあて、恰かつ好こうつけて苦み走らせせようとしてすっ転んでひっくり返ったような表情を浮うかべた。「若さやな……」

　半魚人の考えることだから、その台詞せりふと顔つきにどういう意図があったのか、どんなリアクションを期待していたのか、さっぱりわからない。わかってしまったら大変なので、わかりたくもないけれど、病室の空気が極限を遥はるかに超こえて白けきったことは言うまでもない。

　　　　同日十八時三十三分

　—なんでだ？　どうしてそっちへ行こうとする？　わかっているのか？

　どこにもかしこにもべったりと闇やみが塗ぬりたくられている。通り道だけが灰色だ。道を行く者の後ろ姿は影かげのように黒い。そいつは足を止めて振り返る。こっちを向いても影だ。目も鼻も口もない。お前は本当にこっちを向いているのか。俺に何か言いたいのか。言えよ。言いたいことがあるのなら、言え。言ってくれ。

　でも、お前は何も言わずに行ってしまう。影が灰色の道を歩いてゆき、やがて闇に溶とけこんでわからなくなってしまう。俺は気づく。この塗りたくられた闇には手ざわりがある。俺はそれにふれることができる。それには形がある。重みがある。温度はない。俺はそれを引きはがす。持ちあげてみる。目を凝こらす。これは何なのか。俺は理解して放ほうり投げる。

　死だ……！

　死。

　死。

　死。

　死。

　死。

　死体じゃない。屍しかばねとは言えない。死そのものだ。捨てることはないじゃないか。

　だって、俺には何よりも馴な染じみがあるものだ。そうだろう？

　俺だ。俺が殺した。俺がもたらした死だ。もう行ってしまったあいつも俺が殺した。あいつはある一つの死となって、個性のない、他ほかと区別がつかない死となって、この世界を覆おおっている。死ばかりだ。

　死に埋うめつくされている。

　いったい誰だれのせいだ。俺だ。

　俺がやった。

　大量の死の上に立つ者よと何者かが俺を呼ぶ。違う。見ろよ。

　死は俺の下だけじゃない。

　どこを見ても死しかない。

　俺はせっせと死をあちこちに塗りこんできたんだ。

疲つかれた。

誰か、俺を助けてくれ。

「勝手なことをぬかすなよ、サー・ディオロット・マクスペイン」まだ原形をとどめている死体が口をかたかた動かして喋しやべった。「あんたが救われる前に、俺こそが救われるべきじゃないのか。誰か俺を助けてくれ。誰か俺を助けてくれ。誰か俺を助けてくれ。助けてくれよ。俺、殺されちまったんだよ。俺、死んじまってるんだよ。誰か俺を助けてくれよ」

死体は徐じよ々じよに黒ずんでゆく。もう真っ黒だ。影みたいだ。影になってしまえば口をきくこともできない。何者かが耳許で囁ささやく。「──何も気にすることはありませんよ、サー・ディオロット・マクスペイン。こんな死には一文の価値もない。一文の価値。そういう言葉がたしかあったはずだ。とにかく、こんな死はどうだっていいんです。顧かえりみる必要がありますか？　ありませんよ。あなたは死を撒まき散らすといい。その能力をどんどん研とぎ澄すまして、どうか役に立ってください。何しろ、あなたは神殺しだ。なるほど、この世界は〝斯かく在ある〃ものじゃない、〝斯かく在あれ〃の世界です。しかし、ルールを破るとなると、なかなか難しいんだな。あなたは簡単に──と言ったら、だいぶひどい目に遭あったあなたに失礼かもしれませんが、掟おきて破りをしてしまった。あなたはおそらく最初の〝打ち破る者〃で、今もそうなんだ。あなたが手に握にぎっている、それ──そうです。その剣けんですよ。彷ワ徨ンえダるリ星ン神グソオルが、あの第二の反逆者が、あなたに渡わたしたものだ。聖断罪の剣。ホーリー・コンビクショナー。真の名は〝打ちThe Br破る者eaker〃です。もちろん、知っているでしょう？　これが偶ぐう然ぜんだと思いますか？　違ちがいますよ。必然ですよ。あの反逆神は知っているんですよ。彼は所しよ詮せん、神なんです。ルールの側にいる。第一の反逆者の末路を──ある領域を、新世界を与あたえられて、その支配者の座にしがみつき、しかも結局、ルールを守る羽目になっている先せん駆く者しやを見ているから、彼はその剣をもってしても、彼自身の手では何一つ打ち破ることができないと知っているんですよ。だから、あなたに託たくしたんだ。あなたならできる。彼はあなたに期待してるんだ。彼はただ恋こい人びととの再会を願って彷徨さまよっているわけじゃない。自分の手では壊こわすことができないルールを、あなたに破は壊かいしてほしいと思っているんだ。ようするに、本当はね、鍵かぎはあなたなんだな。あなたは気にくわないかもしれ

ないけど、しょうがないんですよ。あなたはそういうふうに歩んできたんだから。好むと好まざるとにかかわらず、あなたは自ら選んだんですよ、その道を。どれだけの価値があるのかも定さだかじゃない生に執しゆう着ちやくして、竜りゆうを殺して食くらっていたあのころから、こうなることは決まってたんだな。あなたはもしかすると、自分は死をもたらすばかりで、破壊者で、終わりを呼びよせる者になりうると、内心では恐おそれているのかもしれない。ですが、ぼくに言わせれば、それは違うんだな。あなたは扉とびらを開く者なんですよ。あなたが積み重ねてきた死、大量の死を、あなたはむなしく思っているのかもしれない。でも、違うんだな。それらの死はあなたが扉を開くためにあったんですよ。あなたがもたらしたすべての死は有益なんです。だって、こんなにもたくさん殺してきて、あなたはここにたどりついたんだから。そして、あなたが扉を開くんです。それはあなたにしかできないことなんですよ。どのみち、そうすることになるんです。それはもう決まっているんだな。だから、拒こばんだっていいんです。もがけばいい。あがけばいい。ぼくのことが嫌きらいなら、ぼくを殺せばいい。殺せるのなら、ね。でも、あなたはきっと、必ず扉を開きますよ」

「……言ってろ」

　俺はやつの声を聞き流している。

　まともに聞いてなんかいられない。帰らないと。

　もう帰らないと。

　俺は疲れているし、家に帰ればあいつらが待ってくれている。救いなんてだいそれたものじゃなくていい。仲間がいる。友だちと呼んでもいい。俺はあいつらのことが好きで、大事なんだ。それがどういうことか、今の俺にはわかる。

　だから、たとえどれだけの死が俺にまとわりついて、俺の足を重くしても、俺は帰らなきゃならない。帰るんだ。

　灰色の道を、俺は進む。忌いまわしい部屋を出て、あの印が刻まれた扉を閉めて、俺は行く。曲がりくねった灰色の通路を、どこまでも歩いてゆく。

　ようやく外に出ると、玩具おもちゃの兵隊に取り囲まれた。何か言っているやつもいる。叫さけぶ声もする。騒さわぐな。俺を邪じ

や魔ますするな。お前らには興味がない。俺は帰るんだ。

「どけ。お前らも死にたいのか」

　簡単なことだ。この剣を軽く振ふりまわすだけでいい。息をするように、俺は殺す。ひょっとしたら、息をするよりもたやすく。

　苦しいんだ。なんだかやけに息苦しい。呼吸をすることがこんなにつらいなんて、知らなかった。何が俺を押し潰つぶしている？　何が俺を縛しばろうとしてる？　何が俺をがんじがらめにして離はなそうとしない？　出てこい。

　姿を現せ。

　そうしたら俺は殺す。━死。死。死。死。死。死。死。死。死。死。死。死。死。死。

　俺がこの手で撒き散らした死の群れこそが、俺を捕とらえようとしているのか。

　玩具の兵隊は道を空あける。俺は足を前へ前へと進ませながら、安あん堵どしている。殺さずにすんだ。もうたくさんだ。飽あき飽きだ。俺は家に帰る。灰色の道を歩いてゆく。この道以外は塗ぬりたくられた死で真っ黒だ。タールのかたまりみたいなものが、道を行く俺の足をつかまえようとする。抜ぬけ殻がらみたいな、それでいてやけに重い死が、人の形をとどめた黒い死が、俺にしがみつく。俺は振り払はらおうとする。これじゃあ歩けやしない。

「そんなことを言うなよ」と死が囁く。「そんなことをぬかすなよ。俺は歩けないんだよ。もう歩けない。なぜかって？　死んじまってるからさ。だから、俺はお前に運んでもらうしかないんだよ。そうしないと、どこにも行けないんだよ。ちょっとそこまで連れてってくれよ。それくらいしてくれたっていいだろう？　だって、お前が俺を殺したんだから」

　俺は答えない。返事をしない。お前とは口をききたくない。話せば話すほどお前はつけあがる。俺は足を止めてお前を振りほどくこともしない。どうせ無む駄だだ。もういい。この灰色の道以外はお前らでいっぱいだし、きりがない。俺はお前を、お前たちを引きずってゆく。

　家に帰るんだ。

「なんでそんなに重そうにしてるんだ」「本当は違う、軽いんだろう。何とも思ってないんだろう」「どれもこれも、ありふれた死だと。それ以下だと」「俺には母がいた。父がいた。恋人がいた。どうでもいいんだろう」「俺は人を愛した。俺を愛する者もいた。平気なんだろう」「所詮、━だと思っていたんだろう。心の底ではそう思っていたんだろう」「今は違うのか。気づいたのか。考えなおしたのか。考えを変えたのか」「ずっとひとりぼっちで寂さびしかったのかい」「あの反転した砂さ漠ばくで、一人きりでいて、寂しさのあまり頭がおかしくなったんだ。そうだろう」「俺らとは違って、死なないお前は磔はりつけにされ、何度でも蘇よみがえる心臓を串くし刺ざしにされて、それでも死なないお前は、ただただひとりきりでいて、寂しかったんだろう」「早い話、気弱になったんだよ」「恥はずかしいな」「そして、精神ばかりじゃなく肉体も貧弱になった」「ただの容いれ物だからな」「偽にせ物ものだ」「イミテーション」「以前のお前ではいられなくなった」「そりゃそうだ。以前のお前じゃないんだから」「気の迷いだよ」「弱さは何にでもつけこむものだからね」「それは悪魔だ」「いわゆるお前たちが知っているあの悪魔のことだ」「宗教的な概がい念ねんだな。たとえ話さ」「これは違う」「たとえ話じゃない。お前にもようやくわかったのか。俺には母がいた。父がいた。恋人がいた」「俺は人を愛した。俺を愛する者もいた」「お前は俺を殺した」「俺は死ぬ前に泣いた。母を思い、父を思い、恋人を思い、親しい人々を思い、俺は泣いた」「俺は愛する人に別れの言葉を伝えようとしたが、そのとき俺はもう死んでいた。俺を愛する者は俺の死を聞いて、悲しみに胸が潰れたかもしれないが、それすら俺は知ることができなかった」「お前は容よう赦しやなく俺を、俺たちを殺した」「だが、わかってるんだぞ」「知ってるんだ」「お前は悪いなんて思ってないだろう」「後こう悔かいなんかしてない」「これっぽっちも」「お前は俺たちのために苦しんでいるんじゃない」「お前はただ、ようやくわかったんだ」「お前が俺たちを殺したように、何者かがお前の大事な者たちを殺したとしても、おかしくはない。それは十分ありうることだ」「そうでなくとも、お前は失う。お前の大事な者たちを。お前は必ず失う」

「……黙だまれ」

　わかっている。わかってるんだ、そんなことは。言われるまでもない。わかっている。

　それでも、俺は家に帰る。失うことを考えるだけで、足場が消え

去るような思いだ。それは可能性じゃない。決定的な事実だ。俺は知らなかったんだ。こんなにも好きになって、こんなにも大切で、あいつらのためになら身も心も魂たましいも捧ささげたっていい。たとえそうしたところで、俺は失う。みんないつかは目を閉じて、二度と開かない。その瞬しゅん間かんが目に浮うかぶと、全身が凍こおりつく。そのとき俺は叫ぶだろうか。暴れるだろうか。のたうつだろうか。それとも、泣くのか。たぶん、そのどれでもない。

　俺は何もできない。

　何をしたって無意味だからだ。

　そのときのことを考えると、何もかもぶち壊こわしたくなる。今ぜんぶ失ってしまえば、いっそ楽だ。できやしないのに、そんなことを思う。俺は恐おそれているのか。そうだ。怖こわい。怖くって仕方ない。笑えるくらい、痙けい攣れんみたいなその笑いが凍りついて身動きがとれなくなるくらい、怯おびえている。

　それでも、俺は家に帰る。

　死よ、無数の死よ。連れて行けというのなら、俺はそうするだろう。どんなにお前たちが重くたって、俺は歩くだろう。目を、耳を、鼻をふさがれ、何もわからなくて、口を閉とざされて息ができなくなっても、俺は家に帰る。ああ――、

　もうすぐ家だ。

　家のはずだ。

　黒い死はいつの間にか消え失うせて、道は灰色じゃなくて、ここはもうただの夜道で、見慣れた風景、エルデン第十一区、帰るべき場所、家、それがこの先に、ここにあるはずなのに、俺は目を疑う。ない。

　ない。あるはずのものがない。そんなわけがない。打ちよせる波にさらわれて一晩で潰ついえる砂の城じゃないんだ。たしかに砂の城とは違ちがう。崩ほう壊かいの跡あとはある。土台から崩くずれて、大量の瓦が礫れきが道に流れだし、ぶちまけられて、足の踏ふみ場もない。ずいぶん昔、いつのことかもう覚えていないほど、本当かどうかも定かじゃない昔に見た映像が頭をよぎった。『ここは爆ばく心しん地ちから約千五百メートルの場所です。ごらんのとお

り、見る影かげもありません。わずかな残ざん骸がいが爆発のすさまじさを物語っています。この先には進むことができません。正確な犠ぎ牲せい者しゃの数はいまだ明らかになっていませんが、現在のところ確かく認にんされている死者は──』

「おお」

　何だ、これは。どういうことだ。家だ。俺は家に帰ってきた。そのはずじゃないか。

「おおおおお。おおおおおおお。おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

　俺は頭を抱かかえてひざまずく。許してくれ。どうか俺を許してくれ。でも、俺は何に許しを乞こうているんだ？　誰だれかが俺を許してくれるとでも？　何を許してくれるっていうんだ？　許しなんかいらない。そんなものは欲しくない。

　俺は立ちあがる。そこらじゅうに人影がある。野次馬か。どいつもこいつも顔がない。のっぺらぼうだ。やつらは俺を見て何か囁ささやいている。嗤わらっている。「それ見たことか」「因果応報。こうなるに決まっている」「見ろよ、あのざま。えらく必死じゃないか。何かを探しているようだぞ」「そんなに大事なものなら、肌はだ身み離はなさず持っていればいいんだ」「そんなことはできないのさ。偽いつわっているからな。嘘うそだらけだ。見せられないこと、聞かれたくないこと、知られたくないことだらけなんだ」「ごまかしてばかりいる。でも、限界があるからね」「虫みたいに這はいまわっているよ。おおい、そんなところにはないぞ。こっちだ、こっち」「嘘だよ。こっちにはいないよ。あっちだ」「違う、こっちさ」「本当に間ま抜ぬけだな。もういないよ。どこにもいない。ぜんぶ消えちまった。お前は失ったんだよ」

　嘘だ。嘘だ。嘘だ。嘘だ。嘘だ。嘘を言うな。嘘を。そんなわけがない。そんなわけが。

　俺は探す。合成骨材コンクリートのかたまりをどけて、鉄骨を押しのけて、俺は探す。どこだ。どこにいる。俺は呼ぶ。名を呼ぶ。喉のどが破れてもかまわない。俺は大切なものたちの名を呼んで、探す。どこだ。どこにいる。どこだ。いないわけがない。いるはずだ。俺は失わない。まだ失ってたまるか。俺には必要だ。お前たちが必要なんだ。お前たちがいないと、俺はどうしていいかわからな

い。俺には何もない。俺はからっぽだ。ただの器うつわだ。死を撒まき散らすだけの、質たちの悪い器だ。俺は考えなしで、何にしがみついているのかさえわからないまま、ただひたすら生に執しゅう着ちゃくして、殺して、殺して、殺した。俺は臆おく病びようだった。誰よりも臆病だった。それだけなんだ。だから何もかも拒きよ絶ぜつして、向かってくるやつを敵と見なして、そいつらを真っ黒い死に変えて、その死の黒で世界を塗ぬりつぶして、俺は目を、耳を、鼻を、口をふさぎ、一人きりでいれば、何も恐れずにすんだ。死とは俺自身だった。俺が望んだ世界だった。

　もういらない。

　俺は探す。

　のっぺらぼうが言う。「なんて身勝手な言い種ぐさだ。あんなに殺しておいて、もういらないなんて、そうは問屋が卸おろさないよ」「生と死は連れん鎖さだからな。どこまでも途と切ぎれることなく繋つながっていって、いつかは自分自身に降りかかる。そこから逃のがれている卑ひ怯きよう者も、無む縁えんではいられないのさ」「失うんだよ」「失うという形で、死は雨のように降るだろう」

　俺は夜空を見上げる。雨なんか降っていない。俺は探す。いた。瓦礫の中に。見つけた。瓦礫に埋うずもれて、瓦礫と瓦礫の合間に倒たおれていた。真っ白いはずの毛が無残に汚よごれている。

「きゅー……」

　呼びかけても、ぴくりともしない。でも、呼吸はしている。
きゅーは、庇かばうように、守るように、両りよう腕うでで友人を抱だいていた。守ってやらなければならない状態だった。足が。左足の足首から先がない。右足も折れ曲がっている。

「ピンパーネル……！」

　顔を撫なでさすって、何度も名を呼ぶと、唇くちびるがかすかに動いた。俺はその声を聞こうとして耳を近づけた。

「…………り……る…………こ…………」

「リルコ──だと……？」

　何だ？　なんで今さらピンパーネルがその名を口にする？　答えは一つしか思い浮うかばなかった。あいつか。あの女。これはやつの仕し業わざか。

　俺はあの女を拒こばんだ。あの女に従うことも、あの女を従わせることもしなかった。俺の中にずけずけと入ってくることも許さなかった。あの女は孤こ独どくだった。賢さかしくて、何もかも知ったふうで、すべて思いどおりにならないと気がすまなくて、傲ごう岸がんで、不ふ遜そんで、結局、人一倍臆病な女だった。俺は意識していなかったが、あの女と俺には似ている部分があった。似すぎていて、寄り添そうことができない魂たましい同士だった。近づこうとすればするほど、磁石みたいに反発する力が強まって、離れるしかなかった。だからこそ余計に、臍へそ曲がりなあの女は俺を求めたのかもしれなかった。

　あの女は去る前に言った。「あなた、必ず後こう悔かいすることになると思うわ」

　俺はどう答えたんだったか。たぶん、何も返さなかった。これか。

　これが仕返しなのか。復ふく讐しゆうか。

　だとしたら、俺か。

　俺のせいなのか。

「リル
コォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォオオオオッ……！」

　地面を殴なぐりつけた。何度も殴った。剣けんを抜いて大きな穴を穿うがちたかった。そんなことをして、何になる。何にもならない。リルコ。リルコめ。殺す。殺してやる。殺して。殺して。殺して。殺して。殺して。殺して。殺して。殺してやる。お前を殺す。何回も殺す。繰くり返し殺す。お前を殺す。殺す。殺す。殺す。ああ。でも、ピンパーネルは生きている。きゅーも。他ほかのやつらは？　探さないと。そうだ。探さないと。

「待ってろ、ピンプ」

　俺は探す。

のっぺらぼうが言う。「同じことが何度もあったんだ。数えきれないほど。お前が殺した者の亡なき骸がらにしがみついて泣き叫さけんだ人間の数を知らないのか？」

俺は探す。

ユリカを見つけた。息はあるのか。生きているのか。確かく認にんしようとして、俺は震ふるえる。どうしよう。もし息がなかったら、俺はどうすればいい。俺は呟つぶやく。「──助けてくれ」

呟きながら、ユリカの小さな身体からだに手をふれる。動いている。生きている。俺は探す。ルーシーを見つけて、カタリを見つける。

「生きてるな？　生きてるんだろうな？」俺は小声で呟きながら確かめる。「死ぬなよ。死ぬな。死んだら承知しないからな。許さんぞ。生きててくれ」

サフィニアは、マリアはどこだ。それから、ハニーメリー。俺は探す。ハニーメリーを見つけて、あたかも手を繋ごうとして叶かなわなかったかのように倒れているサフィニアとマリアを見つけて、──俺は恐きよう慌こうに陥おちいった犬みたいに吠ほえる。何が。なんで。何が。どうして。リルコ。貴様。ああ。どうすれば。ああ。俺の思いは言葉にならない。

のっぺらぼうどもが囃はやしたてる。「大おお騒さわぎしているよ」「いいぞ、もっと泣き叫べ！」「見み物ものだな」「もっとやれ！」「ほらほら、死んでいるぞ！」「みんな死んでる！　いい具合に死んじまってる！」「とうとう死んだな！」「ざまあみろ！」

俺は荒あらい息をしながら、どうすることもできずに立ちつくしている。死ぬのか。死んだのか。俺は失ったのか。まだだ。そうだろう。誰だれかそうだと言ってくれ。「……助けてくれ」

俺はしがみつくようにして、サフィニアが息をしているかどうか調べる。弱い。微び弱じやくだ。でも、かろうじて息はある。怪け我がをしているが、出血はさほどでもない。マリアはどうだ。火傷やけどがひどい。呼吸はあるかなしか。なくはない。わずかに感じられる。頼たよりないが、心臓も動いている。ハニーメリーはまずい。息をしていない。俺は人工呼吸をする。容よう赦しやのない人工呼吸で、ハニーメリーはなんとか息を吹ふきかえした。死んでい

ない。死んでないんだ。誰も死んでいない。でも、死にかけている。瀕ひん死しだ。どうする。どうすればいい。俺に教えてくれ。マリア、俺はどうすればいい。ひ弱なくせに、自分でもそれをわかっているくせに、意地っ張りで、怖おじ気けづいてへたばって逃にげだしかけても、最後には前を向くお前ならどうする。

　モリー・リップス。

　そうか。アサイラムだ。

　全員連れて行きたい。一度に、全員。無理だ。俺に選べというのか。優先順位をつけないといけないのか。誰かを先に連れて行って、その間に連れて行かなかったやつに何かあったらどうする。でも、選ばなきゃいけない。

　俺は唇を嚙かみしめて、半ば嚙み切りながら、剣を捨ててハニーメリーを背負い、外がい套とうで縛しばりつけて、サフィニアとマリアを両りよう肩かたに担かついだ。「──すぐ戻もどるからな」

　俺は駆かける。早く行かないと。アサイラム。早くたどりついて、引きかえさないと。

　灰色の道を俺は走ってゆく。この灰色の道以外は、どこもかしこも死によって黒く塗ぬりつぶされている。かまわず俺はひた走る。死が俺をつかまえようとする。俺の足どりは次し第だいに重くなる。重くたっていい。どれだけ重くなっても、俺は行く。死よ、無数の死よ、できるものなら俺を捕とらえてみろ。できっこない。俺は行かなきゃならないんだ。何があろうと、走れなければ歩いて、歩けなければ這はってでも、俺は進む。

「もう、遅おそいのに……？」

　行く手に影かげが立ちふさがる。

　女の形をした影に、俺は見下ろされている。俺はとっくに腹這いになっている。こうするしかない。重い。ひどく重い。

「その背に、肩に、死を負っているのだから、重くて当然です」

「……貴様、リルコか」

「必ず後悔することになると言ったわ」

　俺は顔を横に向けて肩のほうを見る。黒い。真っ黒だ。何だ、これは。マリア。マリアじゃない。逆側の肩に目をやる。黒い。やっぱり真っ黒じゃないか。どうしたんだ、サフィニア。どうしちまったんだ。

「だから、もう遅いのよ」

「嘘うそだ」

　黒い、真っ黒い死が、俺が肩に担いでいた、そして背中に負っていた死が、溶とけて広がってゆく。

「嘘だ」

　こんなことってあるか。あっていいのか。俺は死を引きとめようとする。行くな。行かないでくれ。指の合間から流れ落ちてゆくそれを、なんとかしてかき集めようとする。

「嘘だ……！」

　どこにも行くな。ここにいてくれ。

　俺を一人にしないでくれ。

　俺を助けてくれ。

「頼たのむから……！」

　決して届かない遠くへと、手をのばした。

　目を開けると、息が止まりかけた。

「……ここは……」

　頭を振ふって身を起こした。ああ、──そうか。そうだ。アサイラム。

　モリー・リップス・アサイラムの、夕ゆう闇やみが迫せまる中庭だ。芝生しばふの上に寝ね転ころんだことは覚えている。そのまま眠ねむっていたのか。

　放ほうりだしたように置いてあった大たい剣けんを手にとろうとした。

　すぐ隣となりに一人の男が片かた膝ひざを立てて腰こしかけていることに気づいて、手を引っこめた。

「……何をしにきた」

「とくに用事があるわけではないけれどね」純白の布を目ま深ぶかにかぶった男は、右手のような左手で草をつまんで離はなした。
「用がなければ会いにきてはいけないかい」

「どうしろとか何をするなとか、俺が言ったところで、お前は聞くのか」

「是ぜ非ひをよく考えた上で、判断させてもらうことになると思うよ」

「人目がある」

「見るといい」男は左手のような右手を持ちあげ、中庭の真ん中あたりでボール遊びに興じている三人の子供を人差し指で示した。
「ここには君の他ほか、あのように無む垢くな者たちしかいない。彼ら、彼女らは、むやみに僕をあやしんだり、恐おそれたりはしないだろう」

「どうだかな」

「荒あれているね」男の眼まな差ざしは気き遣づかわしげだった。まるで人のようだ。「疲つかれているのだね。すり減っているのだ。君はうなされていたよ。悪い夢でも見ていたのかい」

「何しろ、家を吹っ飛ばされたんでな」彼は髪かみを鷲わしづかみにして、顔をしかめた。「夢見がいいわけがない」

「多事多難だね」

「上から見下ろしてるお前にそんなふうに言われると、腹が立たんでもない」

「僕はほとんど地上にいるのだよ」

「ソオル」

「何かな」

「お前は何を企たくらんでるんだ。俺に何をさせたい。何が望みだ」

「僕の望みなど些さ細さいなことにすぎないよ」〝彷ワ徨ンえダるリ星ン神グ〟ソオルは目を細めてそっと穏おだやかに笑った。「僕は彼女に会いたい。ただそれだけだ」

「信じろって言うのか」

「君が判断すればいい、友よ」

「よせ」彼は大剣の柄つかを握にぎりしめて歯嚙みした。「──戯ざれ言ごとはやめろ」

「どうしたんだい。いくらなんでも様子がおかしいね。もし、僕が君にあげたその容いれ物が、もう保もちそうにないのなら──」

「それがお前の狙いか？」

「代わりを作ってあげてもいいのだよ？」

「ごまかすな、ソオル」

「ごまかしてなどいないよ。考えてみてほしい。僕はあの獄ごくの獄で君を見つけ、君の求めに応じて君を救い、そのために君に仮かり初そめとはいえ肉体を与あたえ、肉を守る鎧よろいを与え、刃やいばを与えた。僕は一度たりとも君の願わぬことを押しつけたことはないよ」

「それがお為ためごかしだというんだ。お前は利用価値があるから俺を助けた。そうだろう」

「友人として言っておこう。僕は何も君に強要したりはしない」

「そうする必要がないからじゃないのか」

「君は君の思うとおりにするといいよ、ディオロット」

「言われなくても──」

　不意にボールが転がってきて、彼は口をつぐんだ。大剣を芝生に置き、ボールを拾って隣を見ると、すでにソオルは影かげも形もな

かった。かわされたか。

　三人の子供がおずおずと近づいてきた。アサイラムには病人や怪け我が人が入院しているだけではなく、身寄りのない子供たちも収容されている。三人はモリー・リップスが引きとって育てている孤こ児じだろう。

　彼はボールを軽く放ってやった。「もう暗いぞ」

「まだ見えるもん！」一番背の高い少女が、ボールを受けとるなり口を尖とがらせた。「ボールが見えるうちは、暗くないんだから、大だい丈じよう夫ぶなんだよ！」

「そうか」彼は知らずに笑っていた。「だが、怒おこられるんじゃないのか」

「平気！」少女は勢いよく踵きびすを返し、二人の少年を引き連れて駆かけだした。

　その途と端たんに、中庭に面している棟とうの通用口から女の医術士が出てきて、三人に向かって声を張りあげた。「──こら！　エランジェール！　アドリー！　ジョーン！　あなたたち、いいかげんにしなさい！」

　若い女だった。一いつ瞬しゆん、ベアトリーチェかと思ったが、別人だった。

　アサイラムには大勢の医術士や、その卵がいる。彼らがいなければ、救われることのない者たちがたくさんいる。一文の価値もないなんて、どうして言える……？

　女医術士に叱しかられて通用口へと向かう子供たちを見送りながら、彼は立ちあがった。自分の足で歩いているくせに、どこへ行こうとしているのか、しばらくの間わからなかった。眠ってばかりいる。今の今まで寝ねていた。それなのに、もう意識に薄うすい靄もやがかかっている。

　保ちそうにないのなら、か。限界なのか。おそらく、そうなのだろう。代わりを作ってあげてもいいと言うのなら、いっそ頼たのんだらどうだ。なぜ拒こばむ？　疑っているのか。信用してはいない。それは間ま違ちがいない。きっと何か魂こん胆たんがあるはずだ。今の自分にはたぶん、その企みを打ち破るだけの力がない。力

を欲ほつするなら、取り戻もどすしかない。そのためには、結局──、

　彼は髪の毛を引っかきまわして、荒あらく息をついた。足が止まっていた。ここはどこだろう。右手には落ちかかる陽ひが微かすかに射さしこむ窓が、左手には部屋が並んでいる。病びよう棟とうか。見覚えがある。はっきりとは覚えていない。曖あい昧まいだ。

　ふと、これも夢なのかもしれないと思った。窓越ごしの暮れなずむ空が迫せまりくるようで、頭上からは半永久灯の白い光が降りそそいでいる。それでいて、明るくも感じない。空を侵おかしつつある闇やみが黒い死ではないと、どうして断言できるだろう。これは夢のつづきなのかもしれない。本当は何もかも失われてしまっていて、彼は夢の中にいるのかもしれない。

　そんな夢なら、早く覚めてほしい。

　夢でもいいから、見つづけていたい。

　目が覚めたら、俺はベッドに寝ている。出会った者たち。別れた者たち。死んでいった者たち。この手で殺した者たち。通りすぎていった事々。この胸をえぐった一つ一つ。手でふれたぬくもりは、やがてつめたくなった。すべて夢だった。最初から何もなかった。なかったのだから、失うこともない。いやだ。

　そんなことはないと、誰だれか言ってくれ。

　彼はドアのノブに手をかけた。

　ドアを開けると、ベッドに寝ていた女が跳はねあがるように身体からだを起こした。

「あ……あ……あ……」サフィニアは目を見開いて口をぱくぱくさせた。最初は蒼そう白はくといってもいいくらいだった顔に赤みがさして、あっという間に真っ赤になった。「……えと……ええと……えと……え、と……」

「どうした」彼は自分の声を他人の声のように聞いた。自分がどんな表情を浮うかべているのかもよくわからない。「まだ調子はよくないんだろう。寝ていろ」

「はい……あ、いえ……そんな……それほど……い、今、ま、マリ

アたちが……き、きていて、その……」サフィニアは下を向いて布ふ団とんをぎゅっとつかんだ。「……ちょ、ちょっと前まで、いたんですけど……あの……と、と、とっ……トマトクン、に……会いに、行くって……」

「そうなのか」

　ベッドのそばに椅い子すが置いてある。ちゃんと目に入っていたのに、彼はベッドに腰こしかけた。何か別の意思が働いていて、この身体を動かしているかのようだ。

「入れ違いになったんだろうな」

「……そう……です、ね。あの……！」サフィニアは顔を上げて、すぐにまたうつむいてしまった。「……あの、あの……そ、その……と、トマトクン、は……大丈夫、ですか……？　あまり、体調が……すぐれないって……」

「俺はちょっと疲つかれただけだ」

「そう……なんです、か……本当に……？」

「ああ。もう若くないしな」

　サフィニアは黙だまりこみ、そのあとで黙らせるようなことを自分が言ったのだと気づいた。どうしようもなくなって、彼は唇くちびるの片かた端はしをつりあげた。「すまん」

「い、いっ、いいえ……！　そんな……」サフィニアは布団をつかむだけでは足りなくなったのか、手た繰ぐりよせはじめた。「……ど、どうして……謝るんですか……謝るようなことは、何もないと……」

「そうか」

「……はい……」

「そうだな」

「……はい……」

「身体はどうだ」

「……はい……」

「悪くはないのか」

「……はい……」

「そればかりだな」

「……はい……？」

「それだ。はい」

「……ごっ……ご、ごめんなさい……！　あの……わたし、根暗というか……陰いん気きで……話題とか、思いつかなくて……つ、つまらない人間……ですよね……ごめんなさい……」

「べつに、何か喋しやべれと要求してるわけじゃないぞ」

「……いえ……でも……う、うらやましいんです……世間話とか、何でもいいのですが……こう、自然に、無理なく……お喋りをして、笑ったりとか……そういうことができる人は、すごいなって……」

「俺もそのへんは苦手だ」

「あ……そう……ですよね……なんて言ったら、失礼……ですよね……ごめんなさい……」

「いや――」彼は布団の上から彼女の足を軽くさするつもりだったのかもしれない。ところが、布団は彼女に手繰りよせられていて、華きや奢しやな素足があらわになっていた。

　彼の手はひんやりした彼女の足にふれて、引っこめることもつかまえることもできず、ただそのままでいるしかなかった。

　彼女と目があった。彼女はむしろ、ぽかんとしているようだった。

　彼もほとんど呆ぼう然ぜんとして、翡ひ翠すい色の瞳ひとみを見つめていた。「――あー……」

　手を動かそうとすると指が動いて、彼女が身を震ふるわせた。そ

の拍ひよう子しに手が浮いた。空くうをつかんだ手には、体温も感かん触しよくも残ってはいなかった。

　彼は目をそらして、ぶらぶらと手を振ふった。「……すまん」

「い、いえっ……」

「わざとじゃないんだ」

「そっ、そう……なんですか……？」

「ああ」

「……ですよ……ね……」

　なんとなく沈ちん黙もくがつづきそうな気がして、言葉を探した。あの女の件を訊ききたくもあったが、今ここでその名を口に出したくはない。何かが噴ふきあがってきて、身も心も破は裂れつしてしまいそうだ。

「あの……」サフィニアは両りよう膝ひざを立てて背中を丸めた。「……マリアから、さっき聞いて……わたし、あまりはっきりとは、覚えてないんですが……ただ、まるで記き憶おくにないわけじゃなくて、漠ばく然ぜんとは……思いだそうとすれば、ぼんやりと、思いだせなくもないんですけど……」

　彼は奥歯を噛かみあわせた。あの女のことか。「何だ」

「わたし……わたし……呪じゆ文もんを詠えい唱しようしないで、魔ま術じゆつを使ったみたい……で……」

「何だと？」

「……たしかに、言われてみれば、そうかもしれない、と……それを願ったというか……そういう覚えは、あるんですけど……でも、信じられなくて……」

「詠唱放棄アリアレナンスか」

「ご存じ……ですよね」

「お前ほど詳くわしくはないだろうが──そんな芸当は、一部の魔導

王にしかできなかったはずだ。魔術士としては、とんでもない領域なんじゃないか」

「ですから……信じられなくて……ですが、マリアが嘘うそをつくはずはないし……」

　本人が言うように、にわかには信じがたいが、それが事実だとすれば納なっ得とくがいく。

　あの女はかなり有能な魔術士で、しかも超越者オーバリストだ。魔術の起源は超越者オーバの業ラーツだから、先祖返りのようなもので、天性の魔術士だとも言えるだろう。現在生存している魔術士のうち、五本の指に入るかどうかは微び妙みようだが、十指にはたぶん入る。ただの魔術士ではないから、力以上に厄やっ介かいだ。家が奇き襲しゆうされて、結果的に一人の死者も出なかったことは、奇き跡せきだとも思える。

　わざとか。意図的に見み逃のがしたのか。

　そう考えることもできるが、詠唱放棄アリアレナンスなどという離はなれ業わざが実現したのだとしたら、あの女が手こずって逃にげだしたのだとしても、あながち不思議ではない。

「……本当だと……思いますか……？」サフィニアはちらりと彼を見た。

「そうだな」彼は少しだけ笑った。「お前なら、できてもおかしくはない」

「……本当の、本当に……そう思いますか……？」

「ああ。お前には才能がある。努力だってしてるだろう」

「努力は……あたりまえ、なんです……まだ、ぜんぜん……足りませんし……」

「でも、他のやつにはできないことが、お前にはできたんだ」

「……実は……」サフィニアは右の手首を左手でつかんだ。「……さっき、トマトクンが部屋に入ってくる前に……少し、試ためしてみていたんです……」

「触しよく媒ばいもないのにか」

「無触媒で、魔術の……準備から発動までを、擬ぎ似じ的に再現する……という訓練法が……この訓練法で成功したからといって……実際に、その魔術が行使できるというわけでは、ありませんけど……ただ、訓練で、できないものは……実地では、絶対に使えないんです……」

「やってみたが、できなかったんだな」

「……はい……」サフィニアは眉み間けんに皺しわを寄せて、唇くちびるをへの字に曲げた。「……正直……どうやればいいのか……できるのか……見当もつきません……」

「焦あせることはないんじゃないか」

「何か、あるはずなんです」めずらしくはっきりとした声こわ音ねだった。サフィニアは右手で握にぎり拳こぶしを作ってうなずいた。「……一度、できたんですから……必ず、できる。何かを、忘れているのか……決定的な、何かを……それとも、あのときは、何かが違ちがったのか……だとしたら、その違いは、何なのか……考えれば、わかるはずだと……思いませんか？　だって、自分のことなんですから……」

「そうかもしれんな」

「……その、はずなんです……入り口からして、ずれているのかも……様式に、とらわれすぎていて……様式は、壁かべを乗り越こえるためにあるものだけど……この考え方自体が、そもそも、壁……壁、なのかもしれない……乗り越えないといけない、そう思うことこそが……」

　サフィニアは小声で呟つぶやきながら、必死に考えこんでいる。こうなるともう、彼の存在も眼中にないだろう。

　魔術士は、素質と適切な指導に加えて、異様なまでの集中力がなければ大成しない。名高い閃せん光こうの魔女マチルダに見こまれて、その手ほどきを受け、このとおり魔術の世界に没ぼつ入にゅうしてしまえるサフィニアは、そのすべてを間違いなく兼かね備えている。

　ただ、魔術士としては異質だ。

サフィニアは力を追求しているが、それを己おのれのためではなく、仲間のために使おうとしている。もっと言えば、仲間たちを守るために、助けるために、より大きな力を求めている。

なんでお前は──お前だけじゃない、お前たちは、そうなんだ。

髭ひげはもとより、あの尊大を絵に描かいたようなジャン・ジャック・ド・ジョーカーですら、クローディアに命の半分を分け与あたえている。その半分の命さえ、友のためには平然と捨てようとする。他ほかのやつらは言わずもがなだ。ただ一人の人間が生きて死ぬだけでも簡単じゃないはずなのに、その上あれもこれも背負おうとして、潰つぶれさせはすまいと支えあう。

一文の価値もないなんて、言わせるものか。ああ──、

胸が締しめつけられる。よくできた飾かざり物みたいな心臓が鈍にぶく疼うずく。俺は失う。確実に失う。こんなあたりまえのことが、ずっとわかっていなかったなんて。笑ってくれ。いっそ笑い物にされたほうがましだ。お前たちが目を閉じて、二度と開かない。そんなことがあっていいのか。いいわけがないじゃないか。

いやだ、と俺は思っている。聞きわけのない餓が鬼きみたいだ。

彼の右手がサフィニアに向かってのびていた。指先が銀色の髪かみにふれる前に、慌あわてて引き戻もどした。本当に、自分でも滑こつ稽けいに思うほど、彼は慌てふためいていた。

サフィニアがこっちを向いて目をしばたたかせた。「……どうか、しましたか……？」

「いや……」彼は首を横に振ふった。「なんでもない」

俺はひどく弱っている。

きっと、もう長くは保たない。

九巡月二番日七時五十一分

「──とっ、たっ、てっ、とっ、たっ、た、大変やあああああああああああああああ……！」

　一いつ匹ぴきの漢おとこが駆かけていた。漢はかなり前から走りどおしだった。先刻まではただひたすら足で地を蹴けり、腕うでを振って身体からだを前進させることに全力をそそいでいたのだが、行く手に目的地が見えた途と端たん、漢は叫さけんだ。漢は漢であるから漢として、叫ばずにはいられなかった。

「た、大変っ！　大変！　たいへっ──た、大変！　へ、変態！　ちゃうわボケェッ……！」

　ただ叫ぶだけではなく、漢の中の漢としてはボケの一つくらいはかまさないと気がすまなかった。どれだけ切せつ迫ぱくしていようと、余よ裕ゆうをかましてボケをぶちかましてみせるのが漢の嗜たしなみというものだ。むしろ、状じよう況きようが緊きん迫ぱくしていれば緊迫しているほど、豪ごう快かいにボケをかましてこますのが漢の心意気というものだと漢は心得ていた。

「大変！　た、大変っ──なんやて！　タイヘーンッ！　大変やああああああああ……！」

　モリー・リップス・アサイラムの門を警護している秩ちつ序じよの番人の隊士たちが、漢を見てモトロール刀を抜ぬこうか抜くまいか逡しゆん巡じゆんしている。漢は内心で（わしや、わし、わしやがな、ジブンらも新米の新顔のド新人やないんやさかい、わしがナニモンかくらいはトーゼン知っとんのやろ、知らんとは言わせへんでえ）みたいなことを思いながらも、何せ漢なのでそんなことはおくびにも出さずに突とつ進しんした。

「たあああ！　いいいいい！　へんっ！　やあああああああああああああああああ……！」

　あたりまえのことだが、結局、隊士たちは刀を抜かずに漢を通した。

　漢はアサイラムに駆けこんで正面玄げん関かんに突入し、まだ朝八時前だというのに外来の患かん者じやたちがひしめく待合室や受付カウンター等々があるＡ棟とうを、光の速さで（ちゅうたら、ちょぉーっぴり大おお袈げ裟さやけど、まあええやろ）走り抜けた。

「大変やでええ！　大変なんや！　大変やっちゅうとんのやろが！　大変やあああああ……！」

　Ａ棟を抜ければ病棟だ。漢はさらに速度を上げて、ついに光の速さを超こえた。

　限界は、だが、まだまだ先だ。限界の向こう側を目指そうとした漢の視界に、横合いから飛びこんでくる者があった。

「廊ろう下かは……！」

　女性用ナース・医術士帽キヤツプが脱ぬげて飛び、金きん髪ぱつがなびいた。

　彼女はすっと身を沈しずめて、すらりとした脚あしを前に出した。

「走るな……！」

　何の前かといえば、漢の前に。

「ぬうぅずぉうっ……!?」

　漢は常人の七百七十七倍を誇ほこる漢的超ちよう絶ぜつ反射神経を駆く使しして彼女のお御み足あしをかわそうとしたが、驚きよう天てん動どう地ちの漢おとこ力ぢからをもってしても、それは果たせない夢だったのか。

「どっ──」

　漢の身体がいっそ華か麗れいに宙に舞まった。

「たっ……！」

　そして、ほとんど雄お々おしいまでに回転した。

「かっ…………!?」

　漢は漢らしく床ゆかに尻しりを打ちつけ、背中をぶつけて目から火花を散らし、後頭部を強打して口から稲いな妻ずまを吐はいた。漢一匹、全身の穴という穴から漢の生いき霊りようが、魂たましいが、白い煙けむりのような物体となって吹ふきだした。

「……へろはろへろ……ほろへろふれほろ……へろふれほろひれ……ひれ──ヒレッ!?」漢は漢にふさわしい勢いで跳とび起きた。「──だぁぁぁれにヒレがついとんのじゃあ！　ヒレなんかついとらんわいっ。ついとってたまるかいっ。わしはヒト科のォォ！　漢の中の漢じゃあああああああああァァァッ……！」

「やかましいっ！」

「ぶべっ」

　クリィーンなヒットやで。

　漢の意識が天てん井じようを突つき破って空の彼方かなたへと飛ひ翔しようした。そうして星にぶちあたって戻ってきたら、漢の肉体は堂々たる大の字になって寝ねていた。

「……きいた……きいたで……ナァーイス・パンチや……」漢は右手の親指を立てて、渋しぶい笑えみを浮うかべてみせた。「──ええモン持っとるやないか、ベアトリーチェッ！」

「拳こぶしでは殴なぐってない、平手ですっ」

「おお。せやったのかぁーい。そのわりにはガツンッ……ときたのう。おーほほほほ。痛、痛、痛、痛……って」漢は螺ら旋せんを描えがいて猛もう然ぜんと起きあがった。「──んなことやっとる場合ちゃうわ！　ものごっつ大変なんやて！　ホンマに！」

「大変だろうと何だろうと、そんなに大おお騒さわぎしないでもらえますか？　ここをどこだと思ってるんです？」

「いやいやいや、たとえここがどこであろうともやな、これが騒がんでいられるかいッ！」

　漢に突き刺さるベアトリーチェの視線は凍いてつくほどにつめたい。「いったい何があったっていうんですか」

「それや、それやがな、せやからあれや、あのう、何や、せ、せっ──」

「……せ？」

「せせ、せ、せせせ、せ、せっ、せせせせせ、せ、せえええええええ

えええぇぇぇぇぇぇぇぇ」

「邪じや魔まなので、あなたの存在ごと処分しますよ？」

「ノォーゥッ！　処分ッ！　ノォーッ！」

「じゃあ、せめて人間の言葉を喋しやべってください」

　漢はビビッと敬礼した。「善処ッ！」

「……そういうのはいらないので」

「了りよう解かいや！　ほんなら、いっくでぇ！　発表しまぁーすッ！」

「そういうのもいらないので」

「カッカしたらあかんて」

「誰だれのせいだと思ってるんですか？」

「わしやッ！　ニカッ！　……すまんっ！　すんまへん！　わかった、わかったわ！　わかったから、殴らんといてくれ！　な？　な？　な？」

「殴られたくないのなら──」

「せ、せ、せせせ、せせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせ戦争やっ！」

「は……？」

「戦争が勃ぼつ発ぱつしぶんばらばぁっ！」漢は口の周りを思いきり揉もみほぐした。「──い、言えてへんっ、このわしが、わしともあろう者が、言えてへんっ！　まあ、そんくらい一大事っちゅうわッけや！　なんしろ、戦争なんやからな……！」

「戦争って……」ベアトリーチェは眉まゆ根ねを寄せて腕うで組ぐみをし、わずかに首を傾かたむけた。「どこか大手のクラン同士が、抗こう争そうでも始めたんですか？」

「そんなんちゃうて……！　あのな！」漢は生なま唾つばを飲みこんだ。しっかし──、

　あれやのう、えっらい別べつ嬪ぴんはんに育ちよったもんやのう。初めて会うたときはよう齧かじられへんくらい青すぎて、もう捨ててまうしかない果実っちゅう感じやったのに──って、何を考えとんのや、わし！　わしには！　アーニャちゃんっちゅう人がおるんやから！　他ほかのオナゴはーいッ切さいッ！　眼中にないっちゅうねん！　──ホンマのホンマにホンマやで？　ちゅうか、そないなことゆうとる場合やッ！　ないッ……！　キリッ！　キリリッ！　キランッ……！

「──ラフレシア第三帝てい国こくが！　帝国軍が、攻せめてきよるんや……！」

　　　　同日八時七分

「ラフレシアが……!?」

　開いた口がふさがらないとはこのことだ。だって、意味がわからない。

　マリアローズはラフレシア第三帝国にいたことがある。だから、風聞や一いつ般ぱん常識よりもいくらかましな程度にはあの国のことを知っているし、直接間接を問わなければ、年がら年中どこかで戦争をやっていて、その状態が建国以来、ずっと継けい続ぞくしていることも承知している。先日、長年最大の仮想敵というか標的だったオークリッド首長国の首都をついに陥おとしいれたらしいから、その平定がすめば、また新しい獲え物ものに狙ねらいをつけて策動したり、兵を動かしたりしはじめるだろう。その触しよく手しゆは十中八九、中部ミツド諸国域ランズに向かって伸のばされるはずだ。

　帝国は東へ、東へと膨ぼう張ちようしてゆく。

　なぜなら、北にはサンランド無統治王国があって、魔導王時代の遺物にして現役の兵器である魔導兵たちに守られているかぎり、その国境が破られることは決してないからだ。

　帝国は過去、何度もサンランドに挑いどんだが、そのたびに呆あっ気けなく退けられた。とうとう懲こりたのか、ここしばらくはサ

ンランドに侵しん攻こうしてくる気配すらなかったのだ。

「え、と……待って。ちょっと頭の中、整理するから。うん……」
マリアローズは胸に手をあてて深呼吸をし、物置を見まわした。

　物置といっても、窓があって、寝しん台だいも備えられている。もともと部品状態で搬はん入にゅうされた大型機械の組み立てに使われる別べつ棟むねで、端はしのほうに予備の部品が置いてあったりもするけれど、たいていがらんとしているから、仮の住まいとしてモリーが貸してくれた。

　マリアローズも昨日の晩からこの物置に移って、今はトマトクン、ルーシー、そしてきゅーの四人（？）で使っている。

　ベッドは一応、五つ置いてあって、三つは空からだ。体力が余っているルーシーは走りに行っていて、きゅーは隅すみっこでベアトリーチェが調達してきてくれた道具を使い、編み物をしている。寝ねているのはトマトクンだけだ。マリアローズはベッドを椅い子す代わりにしている。

　まだ貧血や不整脈などの症しよう状じようがあるサフィニアと、左足の怪け我がを抱かかえているピンパーネル、意識が戻もどらないハニーメリーは病室だ。ユリカはハニーに付き添そっている。カタリはアサイラムの空気が肌はだにあわないようで、昨夜遅おそく自分の貸し宿に帰った。そのはずだった。

　見たところ、カタリの顔はむくみ気味で少し脂あぶらが浮ういているし、目の下にうっすらと隈くまができている。髭ひげも若じゃつ干かんのびているから、結局、帰らずに朝までどこかで飲んでいて、そのままアサイラムに戻ってきたのかもしれない。ちょっと酒臭くさいし。

「ええと……もしかして、酔よっぱらってる？」

「酔うてへんわっ！」

「や、でもさ」

「ホンマなんやて！　第一報が届いたのんが、何時やったかな……ともかく、わしが聞いたのは五時前やった。ファルコーネのおっさんらと飲んどって━」

「ああ。ロドリゴ・ファルコーネ？　鉄の心臓アイアンハーツ協会ソサエテイの」

「せや！　ほいで、わしもおっさんも、そんなんデマやろ、ありえへんやんと思うねやんか。そらそうやで。なんせ、帝国はオークリッドの首都を攻略したばっかしや。それはそれで大ニュースやし、おっさんらともその件でだいぶ盛りあがってたんやけども、昨日の今日っちゅうか、オークリッド侵攻はまだ終わっとらん。制圧が完かん了りようするまでには、まだまだ山あり谷ありやろ。そないな状態で、こっちにまで兵を向けよるなんて、常識的に考えられへん！　しかーもっ！　帝国軍は無傷で国境を突とつ破ぱしたらしいっちゅう話なんや！」

「……無理でしょ？」

「せや！　普ふ通つうに考えたらな！　せやからゆうとるやろ！　わしもおっさんも最初はよう信じられへんかったんや！　ただーしッ！　こっからが二流以下と一流の違ちがいや！」カタリはニヤリと笑ってみせた。恰かつ好こうをつけているつもりなのかもしれないけれど、まったく似合っていない。「──オノレの枠わくにとらわれとったら、超ちようド級のお宝はゲットでけへん！　容易に信じられることも、そうたやすくは信じられへんことも、なんもかも疑うことから始めるんや！　お宝ゲット以外にも有用な、これは思考と行動の大原則やで！」

「まあ、たしかに、そういう心がけって大事なのかも。きみはともかく、ファルコーネさんがそうしてて、あれだけの実績あげてるっていうなら、かなり説得力あるし」

「うっさいわ、一言多いがな！　──とにもかくにもそないなわけで、わしとおっさんらはただちに情報を確かく認にんするために八方手を尽つくしたんや！　そしたらまあ、同じ話があっちでもこっちでも、出てくるわ出てくるわ……！　せやけど、まだほっとーんど誰だれも本気にはしとらんかった！　ただ、目端が利ききよる商人連中は別や！　やつらは情報網もうも持っとるし、一部ではもう動きが出はじめとる！」

「動きって」

「エルデンから逃にげだすための、準備の準備っちゅうところやろな、今のところは！　もっとも、こういうのんは、誰かが走りだし

た途と端たん、ドカッときてガーッとなったりしよるから、もうどないなってもおかしない状じよう況きようやで！」

「けど、逃げるって言ったってさ……」マリアローズは頭を抱えた。「──てゆうか、国境が破られたってだけで、帝てい国こく軍がエルデンまでくるかどうかは……エルデンには魔導兵だってたくさんいるし──あ、でも、国境にもいるんだよね、それなのに、なんで……」

「はっきりしたことはわからんのやけどもな。真しん偽ぎの程ほども定さだかやないし。ただ──」カタリは声を落として表情を険しくした。「帝国軍に、あの〝閃光のスパークル魔女ウイツチ〟マチルダが荷か担たんしとるっちゅう噂うわさがあるんや。マチルダが、キング・グッダーの魔ま術じゆつを打ち破って、魔導兵を無力化したんやないか。そないなことも、まことしやかに語られとる」

八時二十分

「お、お姉様が……!?」

　事が事だけに、いの一番に知らせないわけにはゆかなくて、情報収集だか何だかのためにふたたび旅立ったカタリとは別行動をとり、病室に急行して話したら案の定、サフィニアは目を剝むいて仰ぎよう天てんした。

「──まあ、絶対確実っていうわけじゃないんだけどね。そういう噂があるみたいで」

「お……お姉様が、ラフレシアに……どうして……でも、お姉様のことだから……何を考えて、何をしても……おかしくはないけど……その力があれば、気まぐれに……世界を滅ほろぼしたりも、しかねないし……やってしまったあとに……何もなくなってしまって、つまらないとか、そんなことを言って……弟で子しに八つ当たりとか……いかにも、しそうな人ではあるし……」

「ど、どんな人なの、マチルダって……」

「一言で、言えば……」サフィニアはこくりとうなずいた。「──天

真……爛らん漫まん。欲しいものは、正直に欲ほつして、なんとしても……つかみとる。行きたいところがあれば……何があっても、必ず行く。そのために、躊ちゆう躇ちよすることは……ない。思いついたことは……何でも、実行に移す。お姉様は……そういう人」

「つまり──超わがまま……？」

「超……超……超……超、超、超……超超超超超超超超超超超超超超超超……わがまま」

「しかも、最強とか最上とか最高とか言われてる魔術士で──最悪だよ、それって……」

「だけど……」サフィニアは右手を左手で握にぎりしめ、ひどくせつなくて美しい泣き笑いみたいな表情を浮かべた。「だからこそ、お姉様の愛情は……まっすぐで、大きくて、激しくて……一度でも、お姉様に愛された者は……決して、忘れられない。あの人を……嫌きらいになんか、なれない。お姉様は、どこまでも魔術士で……そしてたぶん、人間でもあるから。自分自身の、何も……何一つ、否定しない。気高くて、突つき抜ぬけていて……あこがれずには、いられない。どんなに目指しても……届きそうにないけど、お姉様は……わたしの目標なの」

「……サフィニアがその人みたいになるのって、ちょっとっていうかだいぶ、想像できないんだけど……」

「……正反対だから……わたしとは……」

「僕としては、明らかにサフィニアのほうが百万倍以上、好ましいけどね？　だって、そんな人とうまくやれるとは思えないし。やりたくもないし」

「もし、会ったら……」サフィニアは目め許もとをゆるめた。「……お姉様は、きっと……マリアのことを、気に入ると思う」

「や、やめてよ。気に入られたりしたら、怖こわいってば。その手の人って、だいたい気に入った相手にはろくなことしないんだから」

「──リルコ……」

　サフィニアの唇くちびるがその名を紡つむいだ瞬しゆん間かん、

病室の温度が一気に二度か三度くらい下がったように感じた。気のせいだろうか。いや、きっと違う。

　ベッドで上半身だけ起こしているサフィニアの身体からだから、何か目には見えない流れのようなものが放散されている。それがきっと空気を冷やしているのだ。

「……紫しのヴェロニカ……〝隠者ハーミット〟。あの人は……お姉様と、同じ師に見いだされて、育てられた……言ってみれば……姉妹のようなもの。知らなかったけど……お姉様は……自分のことは、ほとんどおっしゃらないから……でも、何の繫つながりもないとは、考えづらい……」

「それは──そうかもね」

「あの人は……ハニーメリーを始末しようとした……〝贖罪のスカーレット緋山羊スケープゴート〟の〝隠者ハーミット〟として。わたしたちの、ことは……おそらく、ついでにすぎなくて……動機は、私し怨えん」

「あのさ」マリアローズはベッドの端はしに腰こしかけて、布ふ団とんをつかんだ。「──この際だから、言っちゃっていいかな。僕が考えてること」

「……何でも、話して」

「じゃあ、言うけど──きっと、あのリルコって人、トマトに振ふられたんだと思うんだよね。それで、ＺＯＯにいられなくなって、逆さか恨うらみしてるんじゃないかな。や、まあ、なんか、そんな簡単なことじゃなくて、本当はもっと込み入ってるのかもしれないけど、ようするにそういうことなんじゃないかなって」

「……わたしは……」サフィニアの手が布団をまさぐるように動いている。「……わたしの、考えは……」

「うん」マリアローズはサフィニアの指をそっと握った。

「……あの人は……トマトクンの、恋こい人びとだったんじゃないかと……思ってた」

「そっか」マリアローズは手に力をこめた。

　痛い──んだろうなぁ。

　好きな人の、そういうことを考えるのって。

　僕にはよくわからないけどさ、でも、痛いよね、絶対。胸が、その奥のほうが、心が、痛くてたまらないよね。

「……実際、会ったら……すごくきれいな、人だし……わたしなんかと、違ちがって……大人っぽくて……わたしだって、子供じゃないのに……でも、ぜんぜん違うし。わたし……色気、ないし。たぶん……男の人は……ああいう女の人に、好かれたら……なんていうか……」

「そんなことないって」

「……でも……」

「あれ、どっからどう見ても悪女系だよ？　系っていうか、完全に悪女だよ？　悪い意味で魔ま術じゆつ士し的でさ。性格とかもそうとうひどかったけど、見るからにおっかないよ。普ふ通つう、や、普通じゃなくたって、かなり引くって。それにさ、きれいっていったら、サフィニアのほうがずっときれいだよ」

　サフィニアはうつむいて、無言で首を左右に振った。

「僕はほんとにそう思うけどね。僕が思ってもって感じはするけど、何だろ。あれが復ふく讐しゆうだとしたらさ、てゆうか、──あの人が帰ってきて、あなたがたの亡なき骸がらを見たらどんな顔をするかしら」マリアローズはわざと似ていない口くち真ま似ねをした。「──とか言ってたし、復讐なんだろうけど、ああいうこと考えるのってもう、人としてダメでしょ。超最低ＳＵＣＫだよ。トマトがあんな女と……っていうのはさ。僕はちょっと、考えられないんだよね。ぬぼーっとしてるけど、あ、ごめんね？　こんな言い方して。でも、そこまで見る目がないとは思えないよ。あ、この言い方もまずいかな」

「ううん」サフィニアはマリアローズの手を握りかえして微笑ほほえんだ。「……わたしも、あの人はないって思わなくもないし、そう思いたい……だけど、トマトクンは大きい人だから……どんな相手でも、平気で受け容いれてしまうんじゃないかって……あの人が、ＺＯＯにいたことは、間違いないんだし……」

「うーん……結局、推測だからねえ。いっそのこと、訊きいちゃえばいいんだよね。本人に。ずばっとさ。サフィニアは無理だろうから、僕が確かめたっていいし」

「……知るのが、怖こわいっていうのも、あって……」

「あー。そっか。そうだよね。知らないうちは漠ばく然ぜんとしてて、なんかこう、自分の気持ち次し第だいみたいなところもあるだろうけど、答えが出ちゃったら事実になって、動かしがたくなるわけだから──」

「あと……もし、恋人だったとしても……あくまで、過去のことだろうし……なんだか、そんなことにこだわるのも、どうなのかなって、思ったりもして……勝手に嫉しっ妬として、わたし……いやな女だなって……」

「いやあ、でも、気にはなるんじゃない？　やっぱり。はっきりしないっていうのがね。余計さ。僕だって、なんか気になるもん。僕はただ気になるだけでも、サフィニアの場合はそれじゃすまないでしょ。自然だと思うけど」

「……訊くなら、自分で訊く。なんか、マリアに……そんなことさせるの、悪いし」

「悪くはないって。言ったとおり、僕も気にはなってるんだし。てゆうかまあ、いろいろね。はっきりさせとかないとな、とか……」マリアローズは一度下を向いて、上うわ目め遣づかいでサフィニアの瞳ひとみを覗のぞいた。「──トマトのこと。いろいろ、さ。もしかしたら、さっきの──あの女のことにも何か関係があるのかもしれないし、とにかく……いろいろ、関かかわってきそうな感じがするんだよね」

「トマトクンは……」翡ひ翠すい色の両りよう眼めに、瞬しゆん間かん、深い光が射さした。「魔導王を……直接、知っているんじゃないかと、思う」

「うん」マリアローズは唇くちびるを引き結んでから、静かに息を吐はいた。「……そうだね」

「……だから、どうってことも……ないんだけど……」

「うん」

「ただ……」サフィニアは目を伏ふせた。「一人で……抱かかえこんでいるなら……どうにか、できるなら……どうにか、したい。何でも……したい。それは、たぶん……みんな、同じ気持ちだと思うけど……」

「そうだね」マリアローズは顔をしかめて低く唸うなった。「──そうなんだよねえ。しょいこもうとするなとか、僕には言うけどさ。じゃあ、自分はどうなのって話。一人で何でもかんでも持っちゃおうとしてさ。こっちだって、手伝うくらいのことはできるんだよ。トマトは他ひ人とに頼たよったり甘えたりするのが、すっごい下手なんだよね」

「……マリアが言うと、なんだか……」

「や、僕はかなり頼ってるって。みんなに頼りまくってるって。頼らないと何もできないし」

「わたしも……頼ってる。マリアにも……ユリカにも……他ほかのみんなにも……」

「持ちつ持たれつってやつじゃない？　そのへんは。トマトは、でも、仕事の割り振ふりとかはけっこうやるんだけどさ、何？　こう……気持ちの上でね。誰だれかに支えてもらうっていうのが、あんまりないと思うんだよね。だけど、そういうの、まったく必要ないってことじゃなくてさ。きっと、うまくできないんじゃないかな、とか」

「……求めることが、上手にできないなら……たとえ、求められなくても……こっちから、支えることができたら……いいんだけど……」

「積極性？」

「……ううぅ」サフィニアは眉まゆを八の字にして情けない顔をした。

　あまりにかわいいもので、抱だきしめたくなった。

「砕くだけちゃうってことはたぶんないと思うから、当たってみればいいんじゃない？」

「……そういえば……ハニーに……なんていうか……既き成せい事

実を作ってしまったら……みたいなことを、言われて……」

「きせいじじつ？　ああ──」

　そっちの方面にはかなり疎うといほうだとは思うけれど、なんとなくわかる。いや、意味はちゃんとわかっている。わかってはいるものの、こっちの方面に話題が及およぶと、果たしてついてゆけるかどうか。やや不安だ。

「まあ、それも一つの手かもしれないけど。あっちからはきそうにないし、たとえばほら、寝ね込みを襲おそう……的な？　そういうことでもしないと、それはそれで難しいのかな……とか？」

「……寝込みを……やっぱり、それしか……」

「く、企くわだてちゃってるの……？」

「……だけど、最近、いつも寝ているから……」

「あ。だよねえ……あれ、心配だよね」

「……ハニーも、まだ……意識が戻もどらないし……」

「その上、今度は戦争って……」

「何かが……」サフィニアの表情が突とつ然ぜん、うつろになった。その視線は虚こ空くうをさまようことなく、どこか一点を凝ぎよう視ししている。「……大きな、音を立てて……何かが……すべてが……変わろうとしている……」

　マリアローズはサフィニアの手を強く握った。「──サフィニア……？」

「え……？」サフィニアはこっちに向きなおってまばたきをし、すがるようにマリアローズの手をつかみながら唇をさわった。「……わたし、今……何を……」

十三時四十四分　第五区

「身体からだが……!?」

　何だろう。走って、走って、走りまくって、今の今までへとへとに疲つかれきっていた。もうだめだ。限界だ。さすがに休まないとまずい。息もまともにできていない。このままだと倒たおれる。もう間もなくぶっ倒れてしまう。ああ、空が、昼下がりの太陽が、地面が、ぜんぶ溶とけあって、何もかも何がなんだかわからなくなって、──その直後、突然、全身の血液が熱くてつめたい矛む盾じゆんする強きよう烈れつな流れになって、それが脳のう髄ずいにまで達した途と端たん、こぉーんなに小さく狭せまくなっていた視界が一気に数十倍、いや、数百倍に拡大した。

　空気の味が明確に感じられて、風はまるで心臓の鼓こ動どうのようで、ぼくってもしかしてこの世界の主あるじ的てきな何か？　支配者となるべくして生まれた者？　そうとしか思えない！

　だって、身体が軽い、軽い、軽い！　羽なんか生えてない、それはわかってるけど、でも、目には見えない翼つばさがあるとしか思えない！　今なら何でもできそう！　できないことなんて何もない！　こういうのってなんていうのかなＡ□Ｈａ！　全能感？　万ばん能のう主義者の到とう達たつ点？　神になった気分？　神！　Ｙｅａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ！　たしかに神って感じ！　今のぼくは神！　だから、まだまだ走れる！　どこまでも走って行ける！　必ずたどりつける！

　気持ちいいなぁ。こんなに気持ちいいことがあるなんて。ぼくは正直、どうしようもなくてたまらなくて、自分で自分を慰なぐさめまくったりしてるけど、それよりずっぅーっとイイ！　最高だよ最高、トレヴィアンだよトレヴィアンって何？　わっかんなーい！　わからないけどそんな感じ！　気持ちＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ……！

　ルーシー・アッシュカバードは午後のエルデンを駆かける駆ける駆ける。たしかに気持ちいいんだけど、気持ちよくなりたくて走ってるわけじゃないんだ！　まあ、こんなに気持ちよくなれるなんて思ってなかったし！　むしろ、さっきまで気分は最悪だった。お馴な染じみの無力感、自己嫌けん悪お、ぼくは未熟で力が足りなくて弱くて、もっとぼくがうまくやれたら、もっともっと考えて効率よく動いて効果的な働きができていたら、あんな大おお怪け我がをしていたピンプさんに無理をさせずにすんでいただろうし、そしたら左足がもげちゃったりしなかったかもしれないし、ハニーさんのこ

とだって助けられたかもしれないし、途中で気を失っちゃうなんて失態を演じなかったはずだし、マリアさんとかサフィニアお姉様が死にそうな目に遭あいながら戦っていたときに、ぼくはのんきにのびてたなんてほんともう、考えるだけで頭がパーッて破は裂れつしちゃいそうだし、とにかく許せない！　許せない！　許せない！　許せない！　こんな弱っちい自分が、どうしたって絶対、絶対、絶対、許せない……！

　わかりますか。誰かわかってくれますか。わかってくれませんか。

　ぼくの父はあのＳＩＸなんです。このエルデンでも、あれほど悪逆非道の限りを尽つくした者はいないと思われていたりする、あのＳＩＸです。悪くて、ひどくて、負けちゃったけどやっぱり強かった、あのＳＩＸなんです。

　ぼくはＳＩＸの息むす子こですけど、お母さんはいい人でした。善良で、やさしくて、美しくて、いい女でした。たぶん、あの父でも愛してしまったくらい、いい女でした。

　そんな父と母を持つぼくは、いい人になりたい。

　奪うばうように愛することしかできなかった父とは違ちがう。信じて待つことしかできなかった母とも違う。大切な人たちを、大好きな人たちを、ぼくは守りたい。彼らに何かを与あたえたい。役に立ちたい。喜んでもらいたい。彼らの不幸せをとりのぞきたい。幸せにしたい。

　そして、そして、本音を言います。

　ぼくは愛されたい。

　憎にくまれたくない。恐おそれられたくもない。大事にされたい。抱だきしめてもらいたい。包みこんでもらいたい。大だい丈じよう夫ぶだよと言ってほしい。大丈夫だよ、ルーシー。きみはいい子だよ。がんばってるよ。よくやってる。ちゃんとわかってるよ。認めてるよ。きみが生まれてきてくれて、嬉うれしいよ。きみに会えてよかったよ。きみが好きだよ。大好きだよ、ルーシー。

　寂さびしいときは、ぼくは自分に向かって、そんなことを言ってあげます。言えば言うほど、もっと寂しくなって、胸が潰つぶれそ

うになります。ぼくって、かわいそうなやつだな。でもでも、ぼくは哀あわれまれたくない。ぼくのことを哀れだと思うのは、自分だけで十分！　哀れみじゃなくて、ぼくは愛が欲しい！　ぼくのことを愛してください！　そのためには……？

　そのためには、強くならないと！

　大切な人、全員を守れるくらい、強く！　誰だれよりも強くなって、驕おごらずに、懐ふところが深い、器うつわの大きい人間にならないと！　強くて、度量が大きくて、正しい人間になって、いっぱい、いっぱい、あふれるくらいに愛したら、ぼくはきっと、愛される！

　いつもは不安が九割、期待が一割だけれど、今はなぜか確信できちゃってる。声が聞こえる。大丈夫、大丈夫だよ、ルーシー。大丈夫だよ、ルーシー。大丈夫だよ、ルーシー。大丈夫だよ、ルーシー。大丈夫だよ、ルーシー。Ａ□Ｈａ！　マリアさんの声だな！　ぼく、マリアさんのこと大好きだし！　女の子じゃなくたって関係ないのに！　ぼくはそんなこと気にしないんだけど！　ハニーさんもすてきだけどね！　美人だし、かっこいいし、それから、あのおっぱいにはやられたな！　微び妙みように無防備なところとか、なんかもうやばいよね！　早く目を覚ましてくれるといいんだけど……！

　不安なんて、抱いてたって仕方ないんだ。不安はぼくをうつむかせるだけで、背中を押してはくれない。希望と確信だけが、ぼくを走らせる。飛ぶように、走らせてくれる。すごいよ。ぼくってば速い、速い、速ぁーい。Ｙｅａｙ……！

　こんなふうに走っていても、ぼくの意識はバァーッと開かれていて、よく見えるし、よく聞こえる。スタート地点は第六区のモリー・リップス・アサイラムで、第六区を巡めぐったあと環かん状じよう通どおりを通ってマキシマムＡＭドラゴン・ストリートを北上して北ほく斗と門へ、引きかえして動物園事務所がある第二王立銀行を一回りして南へ、南へ、南へ、第十三区の高層寺院と高層寺院の間を駆け抜ぬけて第一区に入ってひたすらぐるぐるして、それから第二区、第三区、第四区と回って、第五区に入ったところだ。第五区。第五区！　第五区……！　いろんなお店がいっぱい、いっぱいあって、人通りも多いから気をつけないとね！

　でも、平気なんだ。ぼくには見える。人の流れが。それだけじゃ

ない。誰がこっちに注意していて、誰が注意していないか。一人一人の顔が見える。視線の行く先がわかる。口の動きが見える。話し声だって、断だん片ぺん的にだけれど、聞こえる。こんなに全力疾しつ走そうしていても、ぼくにはちゃんとわかるんだ。

　だけど、ちょっと変だな。

　疾走しているルーシー・アッシュカバードを見て、何だ何だ、という顔をする者、またおかしいやつがいるよ、とでもいいたげな表情を浮うかべる者、飛び退のいて、危ねえじゃねえかこのクモソウ野フ郎オ、と悪態をつく者、指さす者、口笛を吹ふく者、拍はく手しゆする者、声せい援えんを送る者、十人十色、反応はさまざまで、それがまた気持ちよかったりする。だけど、ちょっと変だな。

　ぼくをまるっきり無視している人、けっこう多くない？　無視っていうか、他ほかのことに夢中で、ぼくのことなんかそもそも目に入ってないっていうか。

　街がなんだかざわついているんだな。

　それは、ぼくのせいじゃなくて、原因は他にあって。もちろん、ぼくを見て騒さわいでいる人もいるんだけれど、思ったより多くなくて。たとえば、何か盛せい大だいなパーティーが開かれていて、催もよおし物なんかもあって、みんなそれに熱中していて、でも、そっちに関心がなかったり、注意力が散さん漫まんだったりする人もいくらかはいて。ぼくはそのパーティー会場に乱入して、派手なことをやらかして注目を浴びようとするんだけれど、喝かつ采さいしてくれるのは、そういう一部の人たちだけで。もっとこう、パーティーを台無しにしちゃうくらいの騒そう動どうを巻き起こすつもりだったぼくにとっては、物足りなくて恥はずかしい結果だったりして。勝手な話かもしれないけれど、何だよ、みたいに思って。何だよ、何だよ、ちぇっ、何だよ。これじゃあ、なんかぼく、ただの痴しれ者ものみたいじゃないか。いやまあ、そうなのかもしれないけど。

　不本意ではあったが、ルーシーは足をゆるめた。速度を落とすと、急に身体からだが重くなって、全身を濡ぬらしている汗あせにまで重みを感じるようになった。

「……や、やっぱり、疲つかれてたんだ……」

　走るどころか歩くのも億おつ劫くうというか、つらい。立ち止まると、ひとりでに上半身が前に傾かたむいて、放ほうっておいたら転んでしまいかねないから、両手で両りよう膝ひざを押さえるような姿勢になって、なんとかこらえた。うっわわわわ。汗が滝たき。ぼたぼたじゃない、どばどば落ちて、あっという間に水たまりができた。

「……き、きっと……あれだ。なんか、こう……ハイになってて、おかしくなって……それで、あんなふうに……うえええぇ」吐はき気けがして口を押さえると、身体を支える力が半減したせいで、よろめいてしまった。「……だめだなあ、ぼく……こんな……もっと、コントロールできるようにならないと……」

　たまに、別の自分が自分に取って代わって、好き勝手に振ふる舞まうそいつを抑おさえようにも、そのときは自分がその別の自分になってしまっていて、あとでおかしかったと気づく。そういうことがあったりする。その別の自分を、ルーシーは何よりも恐れていた。

　お父さんの血かもしれない。

　そんな考え方はたぶん、責任転てん嫁かなのだろう。たとえ父から受け継ついだ何かが影えい響きようしているのだとしても、ルーシーはそれを自分自身のものとして引き受けなければならないのだ。自分で制せい御ぎよしないといけない。その方法を見つけないといけない。わかっているのに、また乗っとられかけた。

「……あいつは、強いんだ。ぼくより、強い。ぼくは、あいつよりも強くならないと……」

　呼吸を落ちつけて上体を起こし、手の甲こうで顔の汗をぬぐった。

　あたりを見まわすと、さっきよりも視界が狭せまくてクリアじゃない。何か薄うすい膜まくを一枚通して見ているかのようだ。さっきは冴さえていたのに。ぜんぶ新しん鮮せんで、広がりが、深みがあって、色や形の一つ一つに心が動かされた。

　でも、あの状態を欲ほつしたら、あいつにのみこまれてしまいそうな気がする。

　これって、あいつの手なのかな……？

　ルーシーは拳こぶしをきつく握にぎりかためてうなずいた。「──騙だまされない……負けないぞ」

　それにしても、やっぱり街がちょっと変だ。

　このあたりは鉄てつ鎖さの憩いこい場にほど近くて、行き交かう人の流れもそれなりに激しい。いつもならそのはずなのだが、人はたしかに多いのだけれど、立ち止まって話しこんでいる者の姿がやけに目立つ。

　見れば、先ほどのルーシーほどの勢いではないが、慌あわてた様子で走っている者や、道行く人をつかまえて、何やら怒ど鳴なっている者もいる。「──だから！　俺はずっと前から言ってたんだって！　いつか絶対、こうなるってよ！　それを誰だれも聞く耳持たねえから、こうなっちまったんだろ！　もう終わりだ、終わり！　覚えとけよ、終わりだからな……！」

　怒鳴っている男はけっこうひどい身なりで、顔が酒焼けしているし、泥でい酔すいしているだけなのかもしれない。つかまっていた人も、知りあいというわけではないようで、男を振り払はらって足早に行ってしまった。

　その背中に向かって男が叫さけんだ。「──戦争だ！　本物の軍隊が攻せめてくるんだよ！　俺たちのエルデンはおしまいだ、終わるんだよ！　そりゃそうだ！　人間いつかは死んじまう！　こんなのがいつまでもつづくわきゃねえんだからな！　ヒィハハハハハハ……！」

　ルーシーは眉まゆをひそめて首をひねった。「戦争……？」

十七時三十九分　モリー・リップス・アサイラム

　目を開ける前に、熱でもあるのか、と思った。熱。だが、熱いわけじゃない。錆さびついているかのように、どこもかしこも鈍にぶっている。ロボットでもあるまいし。ロボット。あったな。何か、そんなのが。あった？　いつのことだ？　何の話だ……？　わからない。どこかに、それはある。そこに手を突つっこめば、おそらく思いだせる。そこ？　どこだ？　それがわからない。あまりにも時間が経たちすぎていて──、

　だから、俺たちは刻んだ。あの通路に。かろうじて記き憶おくに引っかかっている事こと柄がらを、これ以上、忘れてしまわないように、完全に消え去ってしまわないように、刻みつけた。たとえば、１９１４／０６／２８？　１９３９／０９／０１？　２００１／０９／１１？　２０５２／１０／０９……？　あっているかどうか、自信はない。年月日の並びにこだわるやつがいたっけ。誰だったか。逆が普ふ通つうだとか、何だとか。熱いな。熱い……？

　そうじゃない。

　瞼まぶたを無理やり押しあげると、人間の頭頂部らしきものが目に飛びこんできた。

　自分の身体からだは右みぎ腕うでを下にして横向きになっている。彼はベッドの上で寝ねていた。その胸むな板いたに接してはいないが顔を押しつけるようにして、長い銀ぎん髪ぱつの持ち主が、やはり身体を横向きにしている。

「……お前、何してるんだ。こんなとこで」

「はっ──……」サフィニアは顔を上げようとしてやめ、首を左右に振った。「……あ、あ、あ、あああの！　こ、この、ままで……もう少し、このままで……いさせて、ください……お願い、ですから……」

「むう……」彼は重い瞼を何度か開け閉めして、あくびを嚙かみ殺した。べつにいいのだが、彼は膝を折っていて、サフィニアはそれ

に身体がふれないようにしているらしく、腰こしだの脚あしだのを変に曲げた状態で固定している。どう見ても楽な体勢とは思えない。

「つらくないのか」

「……え」

「こうすれば──」彼は膝を伸のばした。その拍ひよう子しに、彼の脚がサフィニアの身体にふれてしまった。「……ああ、すまん」

「い、いえ……！」サフィニアは顔をうつむかせた。銀糸のような髪かみの毛が流れて、その額がわずかに彼の胸と接せつ触しよくした。「……い、いいんです、ぜんぜん……あの、というか、その……す、す、すっ、す少しだけ……」

「む？」

「……す、少しだけ……」サフィニアは顔面を彼の胸にこすりつけた。「……こ、こうしていても……いい、ですか……？」

「ああ」彼は頭を搔かきたい気分だったが、我が慢まんした。「まあ……いいんじゃないか」

「じゃ、じゃあ……このまま……お話し、させてください」

「話？」

「……はい」

「何の話だ」

「え、と……いろいろと……」

「そうか」彼はできるだけ身体を動かさないようにして、部屋の中を見まわした。

　ベッドと少量の荷物、あとは機材だか何だかの部品があるだけなので、部屋と呼ぶには少々殺風景だが、もともと物置らしいからこんなものだろう。物置のわりに窓があって、射さしこむ光は赤く色づいている。部屋には彼とサフィニアしかいないようだ。他ほかの者はともかく、見知らぬ場所で戸と惑まどうばかりだった人見知り

の激しいきゅーまでいないとは。

　何か、変だ。

　彼自身もおかしい。

　どうも落ちつかないのだ。

「……もう、夕方……です」

「みたいだな」

「お昼も、食べないで……寝て、いたんですよ……わかってますか……？」

「あまり、腹がへらないんだ」

「……食べないと、だめですよ……食欲が、なくても……食べられそうなもの……わたし、作りますから……」

「何でも食えるぞ。ただ、何だろうな。食い気より、眠ねむ気けのほうがまさってるんだ」

「疲つかれ……だけじゃ、ない……ですよね……」

「そうかもな」

「……できることが、あったら……言ってください。できないことでも……言ってください。何でも……言って、ほしいんです」

「何でも、か」

　彼はため息をついて、しばらくの間、黙だまっていた。

　俺は何か考えてるのか。頭の中が泥どろ沼ぬまみたいに濁にごっていて、手て探さぐりで進むしかない。いくらか進むことはできたとしても、その先に何かが見つかる保証はない。

「いるだけでいい」

　サフィニアはゆっくりと顔を上げて彼を見た。「……いる、だけで？」

「ああ」彼は少しだけ目を細めてサフィニアの頭をそっと撫なでた。

　かすかに手が震ふるえた。

　力を入れすぎたら、壊こわしてしまいそうな気がした。

「いるだけで、俺には十分だ」

「だめ……です」

　意外と、──素す早ばやい。

　サフィニアは身体をのびあがらせて、目をつぶった。

　彼の下した唇くちびるに一いつ瞬しゆん、ふれただけの、ほのかな口づけだった。

　サフィニアは自分のしたことに驚おどろいたように目を見開いて、顔を真っ赤に染め、彼の胸にしがみついた。「……ご、ご、ご、ご……ごめんなさい……」

「いや……」彼は髪の毛を引っかきまわした。「……謝られてもな」

「……で、でも……」

「べつに、殴なぐられたわけじゃないんだ」

「……ある意味、それより、もっと……なんていうか……とんでもないことを、わたし……してしまった……ような……」

「まあ、驚きはしたが」

「……です……よね」

「いきなりだったからな」

「……いきなりじゃ、なかったら……よかったですか……？」

「そういう意味じゃないんだが」



「……ごめんなさい……困らせて……しまって、いますね……わたし……でも……」サフィニアは彼のシャツの裾すそあたりを握にぎりしめた。「いるだけでいい、なんて……言わないでください。もっと……できること、あるはずですから。わたしだけじゃなくて、みんな……トマトクンに、助けてもらってきたぶん……どんなことでもいいから……したいんです。支えに……なりたいんです」

「わかった」彼はサフィニアの頭に手をのばそうとして、途と中ちゆうで引っこめた。「話せることは、話す。それでいいか」

　サフィニアは上うわ目め遣づかいで彼を見て、唇を噛かみしめた。それでいいとは思っていないことくらい、彼にもわかった。

「……はい」

九巡月三番日零時三分

　モリー・リップス以下、アサイラムの医術士たちの判断は正しいと思う。

　ハニーメリーが身体からだ中に負った火傷やけどは、一部皮下組織まで達していて、内臓もだいぶやられていた。命にかかわる損傷は医術士たちが懸けん命めいの努力で早期に治ち癒ゆさせたが、継けい続ぞく的な施せ式しきがなお必要だし、今、目を覚ましたとしても、一秒一秒が苦痛でしかないだろう。意識レベルを落として昏こん睡すい状態を保ち、特とく殊しゆな技法で自然治癒力を劇的に高めて回復をうながしながら、それを決して妨さまたげないように治ち療りようを進めてゆく。このやり方は、一見悠ゆう長ちようにも思われるが、肉体にかかる負担が少ない。医術式は万ばん能のうではないのだ。完かん璧ぺきな施式に見えても、一〇〇％元どおりにはならない。そうしたごくごく細かい傷、目立たないずれが積み重なれば、いつかは大きなゆがみとなる。アサイラムのモリー・リップス式とも呼ぶべき独自の医術式は、徹てつ底ていして患かん者じや本位だ。

「見習わないといけないわ」ユリカはハニーメリーの左手を包むように撫でさすりながらひとりごちた。「わたしは思いあがっていたのかもしれない。しゅばやく、手て際ぎわよく治しゅことで、自分の技量に酔よっていたのかも。もちろん、とにかく速しゃが要求しゃれる場合もある。でも、状じよう況きようによって、他ほかの選しえん択たく肢しだってありえるんだわ。視野が狭しえまいのよ。背しえがちいしゃいから？　なんて……」

　誰だれも聞いていないから馬ば鹿かな冗じよう談だんを言って、

落ちこんだ気持ちが慰なぐさめられるわけでもない。

　疲れているのだろうか。疲ひ労ろうは当然あるだろう。ユリカ自身は治療を受けてすぐ覚かく醒せいしたが、それからはアサイラムの医術士たちの治療に手を貸すというよりも邪じや魔ましないように観察して、少しでも何か学びとろうと躍やつ起きになっていた。彼らの医術式にはこれまでも何度か接してきたのに、どうしてもっと興味を持って吸収しようとしなかったのだろう。

「ここで一から勉強しなおしたいくらい……」

　本気でモリー・リップス式を身につけようと思ったら、実際それくらいしないと無理だろう。ここの医術式は何もかもが違ちがう。しかも、絶えず進歩しつづけている。

「型にはまってしまったら、だめなんだわ。考え方を柔じゆう軟なんにしないと……思いかえしてみたら、わたし、ＺＯＯでもじゅっと同じようなことしかしてない。マリアなんて、クランに入ったころとはじぇんじぇん違うのに」

　そのマリアのおかげもあって、自分も変わった──とは思うけれど。

　マリアローズがいなければ、きっと飛燕フエイヤンを受け容れることはできなかっただろう。何かを受けとるのはとてもへたくそなのに、あの子は惜おしみなく与あたえようとする。一いつ緒しよにいると、自分たちのことが、ＺＯＯが好きでたまらないという気持ちが、ひしひしと伝わってくる。この大切な時間が一分でも一秒でも長くつづけばいいと、あの子は願っている。それは大それた願いかもしれない。あの子はたぶん、そう思っている。

　そんなことないわ。

　そんなこと、絶対にないんだから。

　この毎日が当然だって考えても、ちっともおかしくないのに、大事に、大切に、刻みつけるように、あなたは一歩一歩、歩いてゆくでしょう。

　だから、わたしは思ったの。自分の気持ちを裏切ったり隠かくしたり騙だましたりするのは、なんてもったいないことなんだろうって。

飛燕が好きなら、好きだって認めないといけない。素直になるのは難しいけれど、嘘うそをつきつづけるよりも大変かしら？　本当のことを言葉にする勇気くらい、探せばどこかにあるんじゃないの？　探そうとしてこなかっただけなんじゃないの？

—本音。

実はけっこう本当に、アサイラムで勉強したい。

もしユリカが本心から望んで、真しん摯しに説明したら、みんなはきっと反対しないだろう。

でも、今はいろいろなことが起こっていて、それどころではないかもしれない。

「平へい穏おん無事には縁えん遠どおいのかしら。あなたもしょういう人生を歩んできたのよね」

いくら話しかけても、昏々と眠ねむっているハニーメリーはもちろん答えない。

時刻は日付が変わって零れい時じを回ったあたりだ。あと一時間もすれば、アサイラムの医術士がやってきてハニーメリーに施式を行う。それまでの間に眠くなってしまいそうな気がした。

ユリカは椅い子すを少し前に進めて、ハニーメリーの身体にふれないように気をつけつつ、自分の腕うでを枕まくらにしてベッドに伏ふした。短時間うとうとするだけでもだいぶ違う。目を閉じたら、病室のドアが音を立てた。

何だろう。アサイラムの医術士ではないはずだ。まだ早い。

目を開けて身体を起こすと、ドアが開いてフードを目ま深ぶかに被かぶった男がさっと素早く病室に入ってきた。

男は後ろ手にドアを閉めて、胸を張ってみせた。

「じゃーん」

「—飛燕、あなた……」ユリカは額を押さえた。「じゃーん、じゃないでしょう……。何やってるのよ。だめじゃない。もし秩ちちゆ序じよの番人に見ちゅかったりしたら—」

「わァーってるってンなことは重々」飛燕は軽い足どりで歩いてきてユリカのすぐそばにしゃがみ、ニカッと笑ってみせた。「そンでもユリィに会いたかったからよォ。つい忍しのびこんできちった。アヒャッ」

「アヒャッ、じゃないわよ。お互たがいに不ふ可か侵しん、不ふ干かん渉しようっていう暗あん黙もくの了りよう解かいを守ることで、なんとか揉もめないようにしてるんじゃない。あなたの軽けい率しよちゆな行こう為い一ひとちゅのしぇいで、しょれこしょ戦しえん争しようになってしまいかねないのよ？」

「ンなセッキョーとかすンなよォ。目にクジラとか立ててよォ。ンだよォ……」飛燕は口を尖とがらせた。「オレァ、どォーしてもユリィに会いたくってよォ。そンできたワケだろォ。だァーってよォ。待ち合わせしてたのにこなかったからよォ」

「あ、──しょれは……ごめんなしゃい」

「イヤイヤ、そのへんはいンだって。調べたらジジョーはすぐわかったし。大だい丈じよう夫ぶっぽいのもね。そんな心配とかはしてなかったけどさァ。やっぱ顔ォ見たいじゃん？　声とかも聞きたいじゃん？」

「……もう」ユリカは横を向いた。そうしてほっぺたを膨ふくらましたりして、なんて大人げないのだろう。飛燕の前だと、ついこうなってしまうのだ。「知りましぇんっ」

「イヤイヤ、オレァちゃァーんと知ってっからダイジョブよ。ユリィも会いたかっただろ？　それどころじゃなかったかもしンねェーけど、一秒くらいは会いたい思念波とかビーンって飛ばしたよな？　な？　な？　なァ？」

「……そりゃあ、──一秒、くらいは」

「だよなだよなだよなァ。うんうんうんうんうん。ウシャシャシャシャシャ」

「変な笑い方っ」

「だァーって嬉うれしィーんだもんよォ。ウクククククク」

「静しじゆかにしてよねっ。……怪け我が人がいる病びよう室しち

ゆなんだから」

「オオッ。そだったッ」飛燕は両手で口をふさいで立ちあがり、腰こしを屈かがめてハニーメリーをじろじろと眺ながめた。「……つか、誰だれコレ？」

「ハニーメリー」ユリカは顎あごに人差し指をあてて首をひねった。「……新人しゃん、ていうことになるのかしら。でも、しょういうわけでもないのよね。──〝ピンクショット〟っていう人、知ってる？」

「うん。機術士だろ。有名人じゃん。生きてっかどうか、わっかんねェーっぽいけど」

　ユリカは頭を振ふった。「……亡なくなったみたい。この子、しょの〝ピンクショット〟の娘むしゆめしゃんなの」

「ほえェェ～……」飛燕は目をまん丸くした。「ったく、変なのばっか集まってくンなァ、ユリィんトコはよォ。ＳＩＸ野や郎ろうのガッキーだの、ピンクシャッターのムッスィーだの」

「ほんとにしょうね……」ユリカはハニーメリーの手をそっと握にぎった。「とっても頭のいい子で……でも、父親も、育ての親みたいな人も亡くして、今までしゅごく大変だったのよ。じゅっと一人でがんばってきたあげくに、今度は自分がこんな目に遭あわしゃれるなんて」

「悪ィーの？　状態っつゥーか。何、あのホラ、容態？」

「命に別べちゆ状じようはないわ。ただ、時間がかかりしょうなの」

「ありゃりゃりゃ。なんッかアレだろ。さっき戦争とかユリィ言ってたけど、それこそラフレェースィアがどォーとかゆってんじゃん、今。ンなやばめなトキにいろいろあって、まいるよなァ。ユリィも」

「飛燕はどうなの？」

「あァー。軍隊関係とかがエルデンまでくるかもって話？　ンン～……」飛燕は頭の後ろで手を組みあわせて唇くちびるをひん曲げた。「ま、モチのロンで情報は集めてッし、対策っつか考えてはい

るけどね。そのへんはジンが中心にやってッけどさ。オレァ、アレ。いろんなトコ顔出して、落ちつかせてみたいな」

「じゃあ、忙いしよがしいでしょう？　こんなところにいる暇ひまなんて、ないんじゃないの？」

「ダーイジョビだって。キッチリ合間にきてんだから。オレもそんなさぼったりとかしねェーって。ユリィに怒おこられるし、手下どもァ、かァーいいかンなァ」

「しょれならいいけど」

「けどなァ。マジでくンのかどォーか知ンねェーけど、きたとしてどうするっつゥーのもねェ。他ほかに行くトコあったら、そもそもエルデンきてねェーとかゆー話だし。闇やみ市いちなんかもォー、オレらの家みたいなカンジだしよォ。捨てるって選せん択たく肢しなんかあンのかよみたいな」

「たしかに、エルデン以外では、わたしたちの暮らしは成り立たないわね……」

「だろォ？　困っちまうよなァ……」飛燕は顔をしかめてフード越ごしに頭を掻かいた。「アアアアアァーッ。やめッ、やめッ。ンなこと話しにきたんじゃねェーし」

「べちゅにいいのよ？　飛燕の立場だと、愚ぐ痴ちを言えるような相手も、しょうしょういないでしょう」

「ン～や。ジンとかもいるしな。そォーでもねェーよ。てか、そォーゆー問題じゃねェーの。オレはつまりなんつゥーか、ユリィの前ではカッコつけたいワケ。装よそおうっつゥーんじゃなくて、ヨユーでカッコつけちゃったりできるくらい、ユリィはオレにパワーくれンだよ」

　ユリカは頬ほおに手をあてて顔を半分くらい隠かくした。「……しょういうこと、面と向かって言わないで」

「なんで？」

「恥はじゅかしいから」

「テレテレさんだもんなァ。ユリィは。イザッてトキはなんか、

ぜェーんぜん違ちがったりもすッけどよォ」

「いじゃってときって、どういうときのことを言ってるの？」

「イヤイヤイヤ。ソレはほら、言わぬが腹ってヤツ……？」

「腹じゃなくて、花、でしょう！」

「オ。そだっけ」

「しょうよ」

「な、ユリィ」

「はい？」ユリカは飛燕のほうに顔を向けた。

　ぺろっ、──と、唇を舐なめられた。

「なっ……」

「シィーッ」飛燕はいつの間にか手て袋ぶくろを外していた。人差し指がユリカの唇にふれた。

　軽く、噛かんでやった。

　何、やってるの、わたし。

　飛燕は人差し指を引っこめて、また、ちろりと舌先でユリカの唇を舐めた。くすぐったくて、ユリカは眉まゆをひそめ、小さく息をもらした。

「だめ」

「じゃねェーよ」

　飛燕は三度、四度、ユリカの唇に自分のそれを押しあてた。舌がのびてきた瞬しゆん間かん、ユリカは口を開けていた。迎むかえ入れるどころか飛燕の舌を吸って、自分のそれを絡からめた。音が立って、気になった。そんなことも、すぐに意識からこぼれた。互たがいの顔の位置を入れ替かえながら、夢中になって口づけを交かわした。

　どれだけそうしていたのかわからない。もう本当にだめだと思っ

た。こんなところで、こんな場所で、何してるのよ、わたし。病室なのに。だけど、やめたくない。離はなれたくない。やめないといけない。抑おさえられなくなってしまうから、自分を止めないと。

　飛燕のほうから離れてくれた。でも、すぐにきつく抱だきすくめられた。

「あァー。あァー、やっべ。すっげェー好き。好きすぎて、どうすりゃいィーんかねってくらい好きだよ」

　ユリカは飛燕をぎゅうっと抱きかえした。「……わたしもよ。あなたが好しゆき」

「いよッしッ」飛燕はユリカの両りよう肩かたに手をかけ、自分自身を引きはがすようにして身を引いた。苦しくても、あえてそうしてくれたのだと、ユリカは理解していた。

　そういう男らしいところも、好き。

「オレ、帰るな。見つかるとアレだしよォ。それに、ユリィの邪じゃ魔まとかもしたくもねェーし。どォーせ三十分こうやってたって、十時間こうしてたって、足ンねェーワケだし」

「……しょうね」

「そやって寂さびしそォーな顔してくれンのも、嬉うれしかったりすッけどよォ。心配になっちまうから、チラッとでいィーんで笑ってくれよ」

「はい」

　ユリカは笑顔を浮うかべてみせた。

　あなたが好きよ。

　あなたのぜんぶが好き。

　大好き。

「ン」飛燕はユリカの頭を撫なでて、背を向けた。「じゃ、またな」

　ユリカは何も言えなかった。それがたとえほんの少しの間だとしても、別れの言葉なんて見つからない。

　飛燕が行ってしまってから、しばらく息を止めていたことに気づいた。

　吐はきだして、吸いこみながら、かきむしるように胸を押さえた。

「……もう」

　　　　　同時刻

　虫の知らせ、というやつだろうか。

　急にぱっと目が覚めて、一瞬もぐずぐずせずにベッドから身を起こすと、物置のドアが音もなく、少しずつ少しずつ開こうとしていた。

　明かりはつけていない。暗いけれど、真まっ暗くら闇やみではないから、まあなんとか見える。

　トマトクンは寝ねている。ルーシーも熟じゅく睡すいしているみたいだ。寝息が聞こえる。カタリはまだ情報収集をしているようで、たまにアサイラムに顔を出しても、すぐどこかへ行ってしまう。サフィニアは病室からこっちに移るという話もあったのだが、発熱したせいでとりやめになった。ちょっとだけ聞いたけれど、あんなことをしてしまったのなら、熱が出てもしょうがないだろう。うーん。しっかし、サフィニアがねえ。うーん。そっかそっか。うーん。でもなあ。うーん。すごいよね……。

　やれ、やってしまえ、行けと、さんざん背中を押してきたくせに、本当に踏ふみだせるとはあまり思っていなかったのかもしれない。正直、かなりびっくりしている。で、どうなるの、これから？　とかも思うしね。トマトは平然としてるけど。なんで平然としてられるわけ？　そういうものなのかな。わっかんないなぁ。てゆうか、あれ？　きゅーは……？

　ドアは二十サンチか三十サンチほど開いたところで、動きを止めた。

　その決して広くはない隙すき間まから、何者かが身体からだを横に向けて物置に侵しん入にゅうしようとしている。

　一いつ切さい物音を立てないやり口はまあ、それなりにたいしたものだけれど、あいにくこっちは起きていて、その場面をこうしてばっちり目もく撃げきしている。

　しかも、夜よ更ふけの招かれざる客を、ただ見ているだけではなくて、待ち構えている者がもう一人（？）いた。

　招かれざる客の身体が、すっかり物置に入りきった。その瞬間だった。

　ドアから少し離れたところに積まれている機材の陰かげに、きゅーは身をひそめていたのだ。そこから地を這はうような低い姿勢で飛びだして、招かれざる馬ば鹿かに猛もう然ぜんと襲おそいかかった。

　馬鹿はすぐさま察知して飛び退のいたが、きゅーはそれも見み越こしていたようだ。追いすがって右みぎ腕うでを一いつ閃せん、馬鹿はこれを左腕でがっちり受け止めて、そうかと思ったらきゅーの右腕をつかんで背負うようにして投げる体勢に入っていた。きゅーは、でも、自分から飛んだ。そのままでんぐり返しをして起きあがり、目にもとまらぬ連撃──馬鹿も防ぐ、受け流す、逆ぎやく襲しゆうに転じて、攻こう守しゆが入れ替わり、またきゅーがやり返して、馬鹿も負けじと押しかえす。

　物置は普ふ通つうの部屋よりずっと広い。そうはいっても、広々としているというほどではないし、いつもだいたいトマトクン邸ていの庭でやりあっていたきゅーと馬鹿の闘とう技ぎ場としては、少々手て狭ぜまだ。それなのに、両者は限られたスペースの中でぞんぶんに動きまわり、巧たくみに自分の距きよ離りを作って攻こう撃げきを繰くりだし、また防いでみせている。見事としか言いようがない。でもさ。見事だから何？　それがどうしたっての？

「……だって、夜なんだよ。夜。深夜なんだからさ。当然、寝てたし。まだまだ眠ねむりたいし。完全に安あん眠みん妨ぼう害がいだし。何なんだよ、いったい。いいかげんにしてよ……」

　マリアローズは寝ね癖ぐせがついている髪かみの毛を引っかきまわした。

「ヌッ……!?」馬鹿がきゅーの体当たりを避よけそこねて吹ふっ飛とばされた。

「ＧＡＵ……！」きゅーは、でも、すぐには追撃しないで、いったん重心を落とし、胸の前で両手の肉球を外側に向ける構えをとった。

　馬鹿はすぐさま体勢を立てなおして、たぶん、馬鹿のくせに馬鹿らしくもなく一瞬、迷ったのだ。そのときにはもう、きゅーは馬鹿に詰つめよっていた。消えて、離はなれた場所に現れるかのような歩法。馬鹿も同じことをやって、きゅーから距離をとろうとしたが、きゅーにとっては想定内だったようだ。きゅーも消えて現れ、ものすごく低い姿勢で馬鹿に密着して、両手の肉球を馬鹿の腹に押しあてた。

「──グッ、フッ……！」馬鹿の身体が浮いた。その直後、きゅーは身体を縦回転させて馬鹿の頭頂に踵かかと落としを見み舞まった。馬鹿は打ち落とされた。「──ガッ……！」

　きゅーはまだ止まらない。すくいあげるような蹴けり。馬鹿は舞いあがり、またきゅーに叩たたき落とされて、間を置かずにまた打ちあげられ、さらに突つき落とされた。

「……す、ごっ……」ルーシーの声がした。

　見れば、いつから目覚めていたのか知らないけれど、ルーシーはベッドの上で女の子座りをして、きゅーと馬鹿の白熱した勝負に熱い眼まな差ざしをそそいでいた。

「いいなぁ。楽しそうだなぁ。ぼくも混ざりたいなぁ。でも、邪じゃ魔まになっちゃうかなぁ。あっ。反撃！　うわっ……そこ、そう返しちゃうんですか……!?　わわわっ、ちょ、ちょっと、そうくるとは……うひゃっ。ああっ。ろっ。ばっ。こぉーふっ……！」

　なんかもう、わけのわからない奇き声せい発しまくってくるし。こいつも馬鹿だ。とっくにわかってたけどね。

「てゆうか……」マリアローズはなんとなく枕まくら元もとに置いてあったタオルで頬ほお被かむりをして、ため息をついた。「……

いつ終わるの、これ？　いつか終わるの？　ずっとやってるつもり？　やめてくれない？　眠りたいんだけど……」

「──クゥッ……！」馬鹿がきゅーの攻撃を必死に（馬鹿は馬鹿なだけに、戦闘だけは得意なので信じられないけれど、少なくともマリアローズの目にはそう見える）捌さばきながら、マリアローズのほうに視線を投げてきた。「──ち、違ちがうんだヨ、マリアッ！　ボクにはキミのッ、ムッ！　安眠を妨さまたげ、クッ！　妨げるつもりは毛頭ゥウッ!?　なくてただ、ヌンッ……！」

「ＳＹＡＡＡＡＡ！　ＧＡＡＡＡＡ！　ＧＯＯＯＯＨＨ！　ＳＹＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨ！」

「オオウッ……！」

　馬鹿がきゅーに突き倒たおされ、組み伏ふせられた。

　これは、だけど、ちょっと本当にすごいかもしれない。馬鹿はおそらく試合モードで、きゅーを打ち負かす気はあっても、倒すつもりはない。変に手を抜ぬいたりしているわけではなくても、やはり加減をしている。それにしても、ここまできゅーが馬鹿を追いこむ場面は、これまで見たことがない。

「すごい！　すごいですよ、きゅー！　超ちよう強いじゃないですか……！」小馬鹿は無邪気に喜んでいるけれど、なんだか変だ。

　馬鹿もそのあたりを感じているらしい。

「……どうしたんだい!?　やけに気合いが入っているじゃないか！　しかし──侵入者はボクだけじゃない、もう一人いるっていうのに、そっちは見み逃のがして、ボクのことはあくまで許さないんだネ！　こういうときくらいは、ちょっと配はい慮りよしてくれてもいいと思うのは、ボクの甘えなのかい!?　キミならば、それくらいはわかってくれると──」

「ＧＡＡＡＡＡ！　ＵＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＮ……！」きゅーは馬鹿の両りよう肩かたを押さえつけて、激しく揺ゆさぶった。

「ンッ……！」馬鹿は苦く悶もんに次いで疑問の声をもらした。「──え……？」

マリアローズは胸を押さえた。何だろう。きゅっと締しめつけられて、痛いほどだ。

もしかして、きゅーは──苛いら立だっている？　もどかしい……？

何か言おうとしていて、伝えたくて、でも、きゅーは人間の言葉を喋しやべれない。理解はできるのに、自分の思いを正確に表現することはできない。それがつらい。苦しくてたまらない。

マリアローズの勘かん違いでなければ、きゅーは今、たぶんそう感じている。

だけど、きゅー、きみは何を言いたいの……？

「そうか」

ひょっとして、馬ば鹿かにはわかったのか。

馬鹿は二度、三度、うなずいてみせた。「……そうか。わかった。わかったヨ。──キミは強くなりたいんだネ。もっと、ずっと、強く。キミの仲間──友だちを、守りたいのに、守れなかった。自分自身の力不足が許せないんだネ。キミは憤いきどおっていて、その気持ちをうまく吐はきだすことができなくて、つらくて、悲しいんだネ」

きゅーはしばらくじっとしていたけれど、やがてこっくりと首を縦に振ふった。

ルーシーが「ああ……」と呟つぶやいてうなだれた。

マリアローズも下を向いてしまいそうになった。

きゅーはけっこう強きよう烈れつに人見知りをする質たちだから、アサイラムでは居い心地ごこちがよくなさそうにしている。それだけだと思っていた。なんて迂う闊かつなのだろう。きゅーも傷ついていたなんて、考えもしなかった。

いろいろあって、だから考える余よ裕ゆうがなかったなんて、そんな言い訳を思いつく自分自身に反へ吐どが出る。

きゅーはやさしい子だ。マリアローズが一人、リビングで落ちこ

んでいたりすると、きゅーはそっと近づいてきてそばに座り、ときに手招きした。おいでと言われて、そのうえ無理やり抱だきよせられないとくっついたりできない臆おく病びよう者が、きゅーにはいくらでも甘えられた。こだわりなく甘えさせてくれる、素そ朴ぼくなやさしさにあふれている。そんなきゅーが、傷ついていないわけがない。

「大だい丈じよう夫ぶサ」馬鹿はきゅーの腕うでをどけて、その首筋を軽く叩いた。「キミは強くなっている。というか、一段、ぐっと強くなった気がするヨ。キミのひたむきな思いがキミを強くして……きっと、これからもそうなのサ。今より強くなったキミがみんなを守る──その日がいつか必ずやってくるヨ」

「くう」きゅーは力強くうなずいて、馬鹿から飛び離はなれた。

　馬鹿も心得たもので、すぐさま跳とび起きた。「──じゃあ、やろうか？」

　きゅーは首を振って外を示した。ここでは狭せまい、というわけだ。まあ、これ以上、中でやられるよりはマシだけどさ。

「フッ。いいだろう」

「きゅう！」

「あ、あの！」ルーシーが挙手した。「ぼ、ぼくも加えていただけないでしょうか!?　だめなら、観戦するだけでもいいので、是ぜ非ひなんとか……！」

　馬鹿ときゅーは目と目を見み交かわした。二人の間に言葉はいらないようだ。

　馬鹿は指先で前まえ髪がみをさっと払はらった。「勝手にするがいいヨ」

「は、はいっ！　それじゃあ、勝手にさせてもらいます……！」小馬鹿は寝しん台だいから躍おどりあがって、脇わきに立てかけてあった刀を手にとった。あの小馬鹿、本気だ。

　きゅーが物置の外へと飛びだしてゆき、小馬鹿がそれを追いかけた。

馬鹿は突つっ立たって、こっちに顔を向けている。

あんな馬鹿野や郎ろうのことなんて見たくないのに、どうしてか目を離せない。

暗いから、表情はよくわからなかった。

マリアローズは少し顎あごを上げて「何だよ」と言おうとした。声が出なかった。唇くちびるが震ふるえている。震えを止めるために、歯を食いしばらないといけなかった。

「マリア」アジアンは静かに息をついた。「──何はともあれ、無事でよかったヨ。それだけは言いたかったんだ」

「うん」

自然と返事をしていた。

物置は暗いはずなのに、なぜだか瞬しゆん間かん、闇やみに光が射さしたかのように、あいつの笑え顔がおがはっきりと見えた。短い、とても短い返事にすぎなかったのに、あいつはそれを百万倍以上の言葉として受けとったみたいに、笑ってみせた。

あいつは背を向けて歩きだし、出入口の手前で一度、足を止めて振り返った。

「いつも、いつまでも、ボクはキミを愛してる」

黙だまっていると、あいつは行ってしまった。

ドアが閉まってから、うなずいた。

「うん」

力が抜ぬけて、天てん井じようを見上げた。

愚ぐ痴ちの一つでもこぼしたい気分だけれど、口を動かすのもめんどくさい。

寝ね転ころがろうとしたら、「大丈夫か」と声をかけられて、驚おどろいた。

「えっ……あ──な、何？　と、トマト……」マリアローズは慌あわ

てふためいてトマトクンの寝台のほうに目をやった。トマトクンは寝台に身を横たえたまま、肘ひじ枕まくらでこちらを見ているようだった。「――お、起きてたんだ……？」

「うむ。なんだか、やかましかったからな。それで目が覚めた……のか？」

「や、訊きかれても」

「おそらく、そうなんだろうな」トマトクンは大きなあくびをした。

「まだ眠ねむいんでしょ。寝たら？」

「うむ」

　曖あい昧まいな返事を聞きながら、マリアローズは「よいしょ」と小さな声をかけて寝台から下り、トマトクンの寝台に歩みよった。

　なんとなくトマトクンの額に手をあててみてから、熱でも出していないかと心配だったのだと気づいた。

　熱くはなかった。

　むしろ、つめたかった。

「無理しちゃダメだよ」

「ああ」

「そんなふうに言ってても、いざとなると……だからね。トマトは」

「お前に言われたくはないな」トマトクンは笑って寝返りを打った。「……まあ、眠いような気もするから、寝る。お前も眠れ」

「うん」マリアローズはさっきまでトマトクンの額にふれていた右手の掌てのひらに、左手の親指を強く押しつけた。「……わかった」

　つめたかった。

　つめたすぎた。

　気のせい──だよね……？

　俺は夢を見ていたのか。

　違ちがう、そうじゃない。

　あれは記き憶おくだ。

　たぶん、目覚めるか目覚めないか、境界線上を漂ただよっていた脳のう裏りに、どこからか浮うかびあがってきたのだろう。

「始まるんです」

　イアン・タイドムードは、そう言って引き金を引いた。

　始まる。

　何が始まるというのか。

　目的はわからないでもない。でも、そのために何をしようとしている……？

　始まる。

　もう始まっているのか。

　　　　　同日十一時五分

「一晩で、だってよ」「それどころか、ほとんど一瞬だったらしいぜ」「一瞬って」「ありえねえだろ、そんなの」「どうなってんだよ」「やばくね？」「魔ま術じゆつだって、魔術」「あのマチルダがやったとか」「いくらなんでも、なあ？」「ありえなくね？」「でも、マチルダだからな」「知らないくせに」「誰だれも生き残らなかったって。全ぜん滅めつしたらしいよ」「どうやって？」「街がさ」「街全体が、あっという間にめちゃくちゃになっちゃっ

たとか」「デマだろ」「いや、見たやつがいるんだって。俺の友だちの友だちの友だちの友だちが」「見知らぬ他人だろ、それ」「誰かさ、確かめに行ってこいよ」「行ってこい、行ってこい」「おまえが行け」「どれだけかかると思ってんだよ。散歩がてら行ける距きよ離りじゃねえんだぞ」「とにかく、壊かい滅めつしたことはもう間違いねえだろ」「なんで間違いねえんだよ」「ていうか、これってやばいんじゃねえの」「やばいやばい」「マジでここまで攻せめてきちゃう？」「時間の問題だったりして」「マジか」「おいおい、冗じよう談だんじゃねえぞ」「シャレになりましぇーん」「いや、笑ってる場合じゃないって」「逃にげたほうがいいのかな」「つっても、どこに逃げるんだよ」「てか俺、もともと逃げてここにきたんすけど」「だからさ、デマなんじゃねえの？」「デマだって、デマ」「デマだよな」「誰かが騙だまそうとしてんだろ」「そうじゃなかったらどうすんだよ」「どうするって」「エルデンも二にの舞まいか？」「──カリオサークの」

　すでに昨日、九巡じゆん月げつ二番日の夜から一部ではあやふやな噂うわさとして囁ささやかれていたらしいが、その報しらせがはっきりした形で広まりだしたのは三番日の朝からで、昼前にはほぼ確定的な事実として受け止めている者も少なくなかった。

　カリオサーク、壊滅。

　詳しよう細さいは不明だが、百万人以上の人口を抱かかえていた魔術と官能、文化学芸の都市カリオサークは、その都市圏けん全域が完かん膚ぷ無きまで破壊され、住民はこれに巻きこまれて大半が死亡したらしい。占領ではない、破壊だ。

　これがラフレシア第三帝てい国こく軍の意図に基づく行こう為いの結果だとしたら、彼らは征せい服ふくを望んではいないということになる。征服とは攻めて従わせることだ。街をぶち壊こわしてしまい、そこに住む者たちを皆みな殺ごろしにしてしまったら、服従も何もない、略りやく奪だつさえ難しいだろう。

　帝国は何を考えているのか。ただサンランド無統治王国に押し入って、街々を踏ふみつぶすことが狙ねらいなのか。そんなことをして何の意味があるのか。ともあれ、もしそうだとしたら、カリオサーク以外も同じように破壊されるかもしれない。

　この首都エルデンも。

「……お姉様なら……」

　サフィニアは熱が引いて、物置に移った。ユリカは依い然ぜんとしてハニーメリーに付き添そっているけれど、あとはピンパーネルも、ルーシーも、きゅーも、トマトクンも、それからカタリも、モリー・リップス・アサイラムの物置に集合している。

「お姉様の、古代呪じゅ式しき──戦略級ストラテジック・魔術マジックなら……都市を一つ、破壊することも、あるいは……可能かもしれません。たとえ、お姉様でも……たぶん、お一人では無理で……多くの魔術士を動員して、大規模な儀ぎ式しきを執とり行う……そういう形態になるとは、思いますが……」

「やっぱし、マチルダの仕し業わざなんかのう……」カタリは無ぶ精しよう髭ひげがこびりついている顎あごをこすって、ふうむ、と唸うなった。「魔導王時代ならいざ知らず、魔術士が世せ俗ぞくの権力と結びつくっちゅうのんは、常識的にはちぃーっと考えづらいんやけども」

「……権力には……お姉様は、関心がないと思います。そういう人では……ありませんから。きっと……何か、別の目的があるのではないかと……」

「目的とか、どうでもいいっちゃあ、どうでもいいんだけどね」マリアローズはなんとなく結んだ髪かみをさわって、抱えた膝ひざに顎を押しつけた。「──問題は、どうやらマチルダが間違いなくラフレシアに協力してるっぽいこと。それから、そのラフレシアが、エルデンにまで押しよせてくるのかどうか。きたら、どうなっちゃうのか……」

「せやなあ……」カタリは首を曲げて膝に手をついた。「むうぅ～ん……」

　ほとんど不ふ眠みん不休で情報収集にいそしんでいたので、さすがに疲ひ労ろう困こん憊ぱいしているみたいだ。床ゆかの上にあぐらをかいて座っているカタリは、黙だまっていると瞼まぶたが落ちてしまうようで、なんとかそれに抗あらがおうとして、魚目が変な半開きになっている。

「さすがに、エルデンは……」サフィニアはトマトクンが横になっている寝しん台だいの隅すみっこに腰こしかけている。あからさま

に恐きよう縮しゆくして身体からだを縮こまらせてはいるものの、すごい進歩だ。「……いくらお姉様でも、そう簡単には……いかないと思いますが。規模の問題より……ここは、普ふ通つうの街とは違ちがいます。九頭竜レガシオス・大骨格ノ・インの上にあって……その下のアンダーグラウンドは……言ってみれば、巨きよ大だいな空くう洞どうのようなものですから……」

　きゅーは物置の隅っこで編み物をしていて、ピンパーネルはその膝の上に座らされている。きゅーが自分を椅い子すにするよう、自分からピンパーネルにうながした。脚あしが痺しびれてしまわないのか、ちょっぴり気がかりではあるけれど、そうとう座り心地ごこちがよさそうだ。あと、見ていて癒いやされる。

　のんびり癒されてる場合でもないんだけどね。

「でも、さ」マリアローズは鼻をすすった。「べつに、必ず魔術でどうにかしないといけないってわけじゃないだろうし。かなりの大軍なんでしょ。まともに攻められたって、きついことはきついんじゃないの」

「魔ま導どう兵がおる」カタリは目を見開いたが、すぐに半開きに戻もどった。「──しゃあけど、国境が突とつ破ぱされてもうたわけやからなぁ。魔導兵もアテにはならへん。エルデンの城じよう壁へきはちょっとやそっとで破られるようなモンやないし、物資は豊富にある。門を閉めて籠ろう城じようっちゅうことになったら、そうたやすくは落ちへんやろ。普通なら、や。今の帝国軍は、普通やない」

「あのう……」

「何や、ルーシー」

「つまり、あれですよね。なんていうか、そのうちエルデンが戦場になるかもしれない──っていうこと、なんですよね」

「まあ、その可能性は少なくない。大中小でゆうたら、大──っちゅうことになるやろな。そう考えざるをえん状じよう況きようや」

「どのくらいで、ここまでくるんですかね。その……ラフレシアの、帝国軍？」

「うむ。それなんやが」カタリは床に指で何やら書きはじめた。

「情報によると、やな。帝国軍が国境を突破したんが、八巡月二十八番日。ほんで、国境から約百八十キルメーテルのカリオサークが壊かい滅めつさせられよったのんが、九巡月一番日。二十九、三十、一。三日の間に百八十キルを移動したことになるんやけど、どう考えたっても無理や。軍隊の移動は、時間がようけかかりよるからな。せいぜい一日三十キル、これでもそうとう速いで。まあ、限度やろ。せやから、カリオサークについては、マチルダが単独ないし少数の部下を引き連れて急行、決行したっちゅう具合に考えるべきやろうな」

　カタリが言うには、急ぎに急いだとしても、二十八番日に国境を破った帝国軍がカリオサークに到とう達たつするのは、その六日後の九巡じゆん月げつ四番日━ようするに明日、そして、カリオサークからエルデンまでは約三百六十キルメーテルあるから、さらに十二日かかるはずだ。

「━ほんなわけやから、九巡月十六番日」カタリは人差し指をピッと立てた。「……ま、このあたりやな。遅おそくともそれまでには、わしらも態度をハッキリ決めとかなあかんっちゅうことになるやろ」

「態度を決めるだけじゃダメでしょ」マリアローズはちらりとトマトクンを見た。

　トマトクンは眠ねむってはいない。かすかに目を開けて、なんとかみんなの話を聞いているようだ。だいぶ眠そうではあるけれど。

「具体的にどうするか決めて、行動しないと」

「せやな……」カタリはため息をついた。やはり、とてつもなく疲つかれているのだろう。いつも無む駄だに生きのいい半魚人にしては、あまりにも元気がなさすぎる。「━実際、抜ぬけ目がない連中は、もう逃にげだしはじめとる。ゆうても、いろんな意味で身軽やないと、そうもいかんしな。今のところはまだ、念のためっちゅうことで一時退去しとっても、すぐに戻ってこられるようなヤツがほとんどやろうけども」

「モリーは、昨日から対応を協議しはじめてるみたい。まあ、アサイラムはそれこそ、身軽とは言えないどころか……施し設せつはもちろん動かせないし、ハニーみたいな状態の患かん者じやもいたりするからね……」マリアローズは下した唇くちびるを噛かんだ。

　モリーとは今朝、会ったけれど、いつもどおりだった。

　何があっても、モリー・リップスは、モリーだけは、いつもどおりでいないといけない。そうじゃないと、アサイラムにいる者たち全員が動どう揺ようしてしまう。

　糞くそ度ど胸きようの持ち主で、常人とは覚かく悟ごが違うとはいえ、いついかなるときでも平然としているために、モリーがどれだけがんばっているかを考えると、息が苦しくなる。

「──難しいよ。すごく」

「さんざんっぱら駆かけずりまわって、情報集めまくっとるわしがゆうのもなんやけどな。正味の話、いまいち実感がわいてこおへんねん。ホンマに帝てい国こく軍がエルデンまで攻せめてきよるとは思ってへん自分がどっかにおる。いや、どう考えたかて、このままいったら確実にくるはずなんやけどもな」

「……わたしたち、だけじゃなくて……他の人たちも……それが正直な気持ち……なのかもしれないですね……」

「そうだなぁ。僕もなんか、近い感じはあるかも。この国ってそういうのとは無む縁えんだったし、これからもずっとそうだっていうふうに、自然と思っちゃってたんだろうね。いきなり言われても、みたいな」

「イザと・なったら」ピンパーネルは左足を軽く叩たたいてみせた。「ワタシは平気です。このままデモ動ける。だから・気にしないでくだサイ」

　ピンパーネルの復元治ち療りようはまだ地ならしの段階で、本格的には始まっていない。完かん了りようするまで半年かかるという話だから、それまでアサイラムが健在であってくれないと困る。それなのに、そこまで考えが及およばないほど、ひょっとしたらエルデンが陥かん落らくするかもしれないという想像には現実感がないのだ。

「むむむむむ……」ルーシーは腕うで組ぐみをして顔をしかめた。「困っちゃいましたね、本当に。なんでこんなことになっちゃったんだろ……」

「ああ！　あかん！」カタリは弾はじかれたように立ちあがった。

「ここでじぃーっとしとったら、落ちつかんくて、頭がおかしィなってまいそうじゃ！　わし、もっと情報集めてくるわ！」

「……いいんだけどさ。シャワー浴びたり、髭ひげ剃そったりくらいはしたほうがよくない？　きみ、今けっこうひどい顔してるよ？　正直、薄うす汚ぎたないよ？　どっかでクルチバに出くわしたら、きっと嫌きらわれちゃうよ？」

「アホダラァッ！　余計なお世話やっ！　こんなんなってもうて、アーニャちゃんかて夜もよう眠らんで、あちこち動きまわっとるっちゅうねん！　わしだけ休んどれるかいなっ！」

「あー……そういうこと」

「そういうことやっ！　ほな、なんかまたわかったら、戻ってくるさかいな！」

　カタリが物置から出てゆくと、しばらくの間、誰だれも口を開こうとしなかった。

　なんだか重苦しい空気がたちこめている。

　正確に言えば、重苦しそうな空気がたちこめているのだけれど、感じている重さも苦しさもどこか空くう虚きよで、本物らしくない。

　結局、本当だと信じきれていないか、事の重大さを受け止めきれていないのだ。

「ちょっと……」マリアローズは抱かかえていた膝ひざを解き放って、足を床ゆかに下ろした。「僕も外に行ってみようかな。なんか、実際どうなってるのか、この目で確かめたほうがよさそうだし」

「あっ！　じゃあ、ぼくも！」ルーシーがこっちを向いて手をあげた。

「……ええと、わたしは……」サフィニアはうつむいた。

「や、サフィニアはほら、病やみ上がりだからさ。また熱とか出ちゃったら困るから」

　もしかすると、トマトクンのそばにいたほうが、発熱のリスクは高いかもしれない。そう思わなくもなかったけれど、言わないでおいた。

「じゃ」マリアローズはピンパーネルときゅーに微笑ほほえみかけた。「行ってくるね」

「くう」

「はイ」ピンパーネルは目め許もとをゆるめた。無意識の動作なのかもしれない、その手が左足をさすっている。少し胸が痛んだ。

「ぬ……」トマトクンがむくりと上半身を起こして、まばたきをした。「……何だ。カタリはどこに行ったんだ」

「……うん。さっきまでいたんだけどね。ついさっきまではね。……おやすみ」

「うむ……」トマトクンは木の板が倒たおれるように、ぱたんと寝しん台だいに身を横たえた。

　ほんと、大だい丈じよう夫ぶなのかな、この人。

　大丈夫──なわけないよね、やっぱり。

同時刻　マーベラス・グッダー・ストリート

　ま、待て、待ってくれ、待てと言っておろうに、待ちたまえよ、キミタチィ……。

　フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトの唇くちびるはしかと動いていた。それであるのにもかかわらず、言葉が声にならない。これまで苦楽をともにしてきて、これからも一いつ緒しよに輝かがやかしい未来を切り開いてゆくはずだった愛すべき仲間、同志たちに向かって差しのべた手は、泥どろ水みずのような手て応ごたえの空くうをつかんでは離はなし、離してはつかんでいる。

　嗚あ呼あ、噫ああ、同志たちは彼を一いつ顧こだにせず、足早に

去ってゆく。しかも十一名、彼が青雲の志を立てて創設し、手塩にかけてここまで育ててきたクラン〝創世の翼ジエネシスウイング〟の全員、彼をのぞく総員が一人の例外もなく、おそらく全家財道具なのだろう重い荷物を背負って、彼を置き去りにしようとしている。

　同志たちの行く手にはエルデンの東門がある。シャイニンググローリーパレスから発して東門へと至るマーベラス・グッダー・ストリートは、エルデンから出てゆこうとしている人や馬車でごった返していた。同志たちの姿はすぐに見えなくなってしまった。まさか、まさか本当に、これでおしまいだとでもいうのかね……？

　彼が頭を振ふると、黄金の兜かぶとにつけてある金の飾かざりがじゃらじゃらしゃんしゃん音を立てた。彼には信じられなかった。どうしても信じられずにいた。

　それはたしかに、平へい坦たんな道のりではなかった。彼の目もく論ろ見みでは、とうに巨きょ大だいクランに成長しているはずだったが、構成員の数は二桁けたに届いたり届かなかったり。ときには激減することもあり、急きゆう伸しんすることはついになかった。アンダーグラウンド探たん索さくが主たる活動内容だったが、常に目覚ましい戦果をあげてきたかといえば、必ずしもそうとは言いきれない部分もなきにしもあらずだ。それは彼とて認めざるをえないところではある。クランの指導者、統とう括かつ者として、彼も己おのれの力不足を反省するにやぶさかではない。しかし、そのあたりは何も彼だけの責任に帰するものではないはずだ。やはりそこは同志なのだから、キミタチも無関係ではないはずで、肩かた代がわりというか何というか、つまりこの私だけに押しつけるのは違ちがうのではないかというか何というか、私だけが悪いわけではなかろう？　キミタチにも省かえりみて改善すべき点は多々あったはずではないのかね……？

「そ、そうだッ！　話しあおうッ……！　今からでも遅おそくはないッ！　話しあって──」彼は絶句した。話しあう……？

　いったい誰と話しあうというのだ？　遅くない？　何が？　もう同志たちの背中は見えないというのに……？

　追いかけようにも、この人ひと混ごみだ。強ごう引いんにかきわけて進んだとしても、簡単には追いつけまい。そもそも、その力が今の彼にはない。足が萎なえて、一歩たりとも進めそうにないの

だ。

　兜を脱ぬいで地面に叩たたきつけたら、撥はねて通行人Ａの足にあたってその通行人Ａはこっちを向いた瞬しゅん間かん、何か叫さけびながら拳こぶしを繰くりだしてきた。避よけられなかったわけではない。断じて。そうではなく、彼は甘んじて通行人Ａの拳を右みぎ頬ほおで受け止めた。悪くないパンチだった。彼は踏ふんばろうとしたが踏んばりきれず、その場に崩くずれ落ちた。四つん這ばいになった彼を、通行人Ｂが「どけ」と蹴け飛とばし、通行人Ｃが「邪じや魔まだ」と蹴倒した。通行人Ｄは彼を蹴り転がし、通行人Ｅは彼を蹴り弾はじいた。気がつくと彼は、道みち端ばたのさらに端はしに、一いつ匹ぴきの名もなき脂羽蟲ゴキのごとくへばりついていた。

「……黄金のような日々……だったではないかぁ……つらくとも……苦しくとも……さしていいことがなくとも……黄金のような……私は……キミタチに……生活苦だけは味わわせなかったではないかぁ……それだけは……マスターとして……私は……それだけは……私財をなげうって、私は……だから、だというのかね……？　生活のため……ただそれだけのために……今まで、私についてきたと……？　私の夢など……どうでもよかったというのかね……？　すべては私の……幻げん想そうにすぎなかったというのかね……？　キミタチを仲間と……友と思い……いつの日かこの命果てるまで……ともに歩むのだと……そう考えていたのは……ただ一人、私だけだったと……？　それが真実だというのかね……？　それが……フフフ……ククク……ツツツ……ンフフフフ……イヘヘへへ……ヌホホホホ……」

　認めろ。認めがたくても認めるしかない、認めるのだ、フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフト、ファニー・フランク。

　彼らは私に内緒で相談していた。それも、ごくごく短期間のうちに意見を一いつ致ちさせ、私に短い別れを告げて、振り返らずに行ってしまった。ということは、ということは、だ。

　彼らはもとからそのつもりでいたということだ。彼らはクランから離り脱だつする機会をうかがっていた。私一人をのけ者にして、たぶん酒を酌くみ交かわしながら私を罵ののしったり嘲あざ笑わらったりしながら、いつか皆みなでクランを辞やめてやれと、彼らはずっと話しあっていたのだ。

　誘さそい入れた私が言うのも何だが、彼らは侵入者クラッカーとして優ゆう秀しゆうだったとは言いがたい。半はん端ぱ者ばかりだった。このまま侵入者クラッカー暮らしをつづけていても先がない。さりとて、手に職があるわけでもなく、帰る場所もない。なれば、皆で畑でも耕して自給自足の生活でもするか。あるいは、そんな夢でも描えがいていたのかもしれない。ちんけな夢だ。ちっぽけで、嗤わらうべきだ。吐はき捨てるべきだ。漢おとこなら……！

　漢なら！　年ねん齢れい性別問わず、漢なら！　大きな夢を見るべきだ！　実現不可能と思えるほど大きな夢を！　どでかい夢なくして、何のための人生かッ！　一度きりの人生に夢を見つづけずして、他ほかに何を見るというのかッ！　この目が光を失うまで、天を覆おおう巨大な夢をまっすぐ見すえつづけるッ！　それが漢の生き様ざまというものだッ……！

「……ククク……ムフフ……ツフフフ……ヌハハハ……ブフフフ……ルハハハハ……」

　嗤いたくば、嗤え。私を〝おフかアしニなー〟フランクと呼んだ者たちよ。私はいくら嗤われても平気だ。へっちゃらだ。私の夢は折れぬ。曲がらぬ。否いな、たとえ折れ曲がろうと、私は進む。突つき進む。漢として。──何処いずこへ……？

　彼は身を起こし、東門に殺さつ到とうしようとしている者たちを眺ながめる。あさましい。

　実に、あさましい。みじめだ。

　弱き者たちよ。力ではない。腕わん力りよくでは、武力ではない。知能でもない。心が弱い。キミタチは臆おく病びようで情けない、哀あわれで悲しい、弱虫毛虫たちだ。通行人Ａ？　通行人Ｂ？　Ｃ？　Ｄ？　Ｅ□Ｆ□Ｇ？　仲間？　同志？　違う。違ァーう。違ァーう。違ァーう。彼らは違う。

　ただの逃とう亡ぼう者だ。

　戦わずして敗れている、寂さびしき軟なん弱じやく者、とるにたらない敗残者たちだ。

「──私は」彼はすっくと立ちあがった。「私は、違うッ……！」

　誰だれも、誰一人として、彼に一いち瞥べつすらくれない。彼は

独りだ。

　それがどうしたというのだ。彼は実質、独りだったのだ。仲間の、同志の皮を被かぶった寄生生物どもとの楽しい思い出など、ここで、今この瞬間、すべて捨ててしまえ。

　彼の涙るい腺せんが一瞬、緩ゆるみそうになる。しかし、彼はこらえる。涙なみだはいらぬ。

　夢を描き抱いだく者にふさわしい表情、それはあくまで笑え顔がおである。笑え。

　笑え！

　たとえ万ばん人にんに嗤われようとも、彼は燦さん々さんと輝かがやく太陽のように、強く、高く、寛ひろく、底そこ抜ぬけに明るく、笑わねばならぬ。笑え……！

「そこなエルデン市民諸君！　もはや、元、とつけるべきなのかもしれないが、私の声が聞こえるだろうか！　おそらく聞こえていなかろう！　キミタチは逃にげるのに必死だ！　尻尾しつぽを巻いて逃げるキミタチに、私の言葉が届くだろうとは思っていない！　それでもいい！　一向かまわない！　私は壁かべに向かってでも叫びつづけることができる！　なぜか⁉　それは、私が夢見る漢だからだッ！　あえて言わせてもらおうッ！　私はッ！　キミタチのような立ち向かうことを知らぬチキチキ臆チ病キ者ンどもとはモノが違うのだよッ！　モノがッ！　ダンチだッ！　段だん違ちがいッ！　違いすぎーるッ！　理由を知りたいかッ⁉　知りたくなくても教えて進ぜよう！　今、もしかすると、このサンランド無統治王国は、エルデンは、未み曽ぞ有うの危機に瀕ひんしつつあるのかもしれないッ！　何やらそのような情報が流る布ふしているし、そういった気配が漂ただよっていることは間違いないッ！　そして、キミタチは逃げようとしているッ！　いったいどこへ逃げるというのか、私は知らないし知りたくもない、どうでもいい話だが、とにかくキミタチは逃げるッ！　あえて言わせてもらおうッ！　恥はずかしくはないのかね⁉　その行こう為い、我先に逃げようというその姿勢、恥はじだとは思わんのかね⁉　キミタチはこの最果ての街、エルデンでのみ許されたエルデンの民たみではないのかね⁉　この街だからこそ、キミタチは人生を様々に謳おう歌かできたのではなかったのかね⁉　この街こそがキミタチの理想郷だったのではないかね⁉　それを捨てて、キミタチはどこへ行こうというのだッ！　私

はッ！　私は、私は、私はッ！　逃げたりなどしないッ！　偽いつわりだったかもしれないとはいえ、黄金の日々をもたらしてくれたこの街を、私は見捨てない、裏切らない、私はこの街を愛しているからだッ！　そう！　私は愛している、この街をッ！　このエルデンこそが私の故郷であり、終ついの棲すみ家かであーるッ！　いいだろう、キミタチは逃げたまえ！　どこへなりとも行きたまえ！　二度と帰ってくるなッ！　キミタチの顔など見たくもないッ！　反へ吐どが出るッ！　ペッペッペッ！　だがしかし、私は逃げんぞッ！　何があっても逃げるものかッ！　ラフレシア第三帝てい国こく、何するものぞッ！　くるならこい、返り討うちにしてくれるッ！　私はキング・グッダーになど頼たよらんぞッ！　魔ま導どう兵なんぞアテになるものかッ！　私がッ！　この手で！　愛する故郷、私のエルデンを守るのだッ！　そうだッ！　私は戦うッ！　帝国軍が押しよせてきたなら、刀折れ矢尽つきるまで、血の一いつ滴てきになるまで、私は戦うッ！　エルデンを守り、必ずや救ってみせるッ！　私は英えい雄ゆうになるッ！　私は私の名を歴史に刻みこむッ！　聞こえなくても聞けッ！　諸君ッ！　私は今、ここに宣言するッ！　エルデン自由軍、略りやく称しようＥＦＡの誕生をッ！　エルデンを愛する者よ、自由をこよなく愛する者よ、愛するエルデンと自由のために喜び惜おしまず命を捨てる真の勇者よ、集つどえ、我がもとにッ！　　私、このフランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトこそが、エルデンの救い主、エルデン自由軍総そう帥すいであるッ……！」

　　　　十二時四十分　トワイライト・ドレッドスターズ・ストリート

　とりあえず第六区にあるアサイラムから一番近い西門のほうへ行ってみたら、とんでもないことになっていた。

　エルデンの中心に鎮ちん座ざしているシャイニンググローリーパレスから西門へとつづくトワイライト・ドレッドスターズ・ストリートは馬車、人、馬車、人、馬車、人に埋うめつくされ、しかも十台以上を巻きこむ玉突き事故があったらしく、横転したりひっくり返ったりしている馬車も多数あって、それらの車体と馬の死体、散乱した積み荷が通行の妨さまたげになっていた。

　どう考えても、まずは事故車両等々を撤てつ去きょしないと、混雑の度合いがどんどん増してゆくだけだ。でも、そんなふうに冷静な判断を下して、周りの人々に協力を呼びかけたりする者は誰もいない。本当はそうしたほうがいいんだよなあ、ていうかそうしなきゃまずいんだけど、みたいに思っている者はきっといるだろうが、何しろここはエルデンだ。見知らぬ他人と手と手をとりあって何かしようなんて、常識を知らない阿あ呆ほうの発想だし、阿呆にはだいたい阿呆にふさわしい末路が用意される。余計なことは考えないことだ。見れば、横よこ倒だおしになっている馬車に入りこんで、堂々と盗ぬすみを働いている者もいたりする。死ななくても、動けなくなるような傷を負えば、身ぐるみ剝はがれるのがエルデンの習いだ。隙すきを見せたら、絶対にやられる。自分のことを、自分自身のことだけを考えろ。

　その結果、エルデンの中ではマキシマムＡＭドラゴン・ストリート、環かん状じよう通どおりにつづいて広いトワイライト・ドレッドスターズ・ストリートが、ほとんど通行不能の状態に陥おちいってしまっているのだが、一度こうなるとなかなか収拾がつかないだろう。

　西門は遥はるか遠くにあって、べつに行く予定はないけれど、たとえそのつもりでがんばったとしても、たどりつけそうな気がしない。

「……てゆうか、ルーシー、どこ行ったんだよ。さっきまで、隣となりにいたのに……」

　マリアローズはぶつぶつ言いながら細い道に入って、ようやく一息ついた。

　顔というかこの髪かみをさらすとろくなことにならなかったりするので、用心のためにフードを被っていたから、暑くてたまらない。フードを外し、ボディスーツのゆるめられる箇か所しよをゆるめて風を送っても、気休め程度だ。ベルトの小物入れからタオルを出して顔や首の汗あせをぬぐってみたところで、あとからあとから噴ふきだしてきて、まったくきりがない。

「これって、西門以外の門も似たようなことになってたりするのかな。門を通らないで出入りする方法って、たしかないはずだし、だとしたら……逃にげるにしても、地味にかなり大変なんじゃないの……？」

　たとえば今、エルデンから離り脱だつするとしたら、ハニーメリーやピンパーネルは馬車に乗せる必要があるだろう。何のかの言って、徒歩ならどうにかなりそうな気もするけれど、馬車はかなり厳しそうだ。ようするに、出るに出られない、ということか。

「なんかさ……」マリアローズは細い通りからさらに細い路地に足を踏ふみ入れて、ため息をついた。「踏んだり蹴けったりっていうか。ろくなことないよね。家もなくなっちゃったし。それで、こうだもん。愚ぐ痴ちってもしょうがないけどさ。どうにもならないし。でも、ほんっとに、どうにもならなくない……？」

　仲間たちと一いつ緒しよにいるときは、もうちょっと前向きでいられる。

　どんなにひどい状じよう況きようでも、たぶん、きっと、なんとかなるよね？　今までだって、けっこう危ない目に遭あってきたし。いろいろ乗り越こえてきたんだし。

　でも、一人になると、ダメだ。つい下を向いてしまって、身体からだに力が入らなくなる。

　マリアローズは建物の外がい壁へきに背中を押しつけて、狭せまい、細長い空を見上げた。「……カリオサーク、か……」

　あのやさしい魔術士は無事だろうか。

　すぐに頭を振ふり、打ち消して、「マリア」と名を呼ばれた瞬しゆん間かん、必要以上に驚おどろきうろたえた自分をあやしんだ。

　なんかまるで、こっそり悪いことをしていて、その場面を見られちゃった、みたいな──これって何？　しまった、まずった、しくじった、やっちゃった的な、胸を刺さすようなこの痛みは──罪悪感……？

　マリアローズは声のしたほうに向きなおりながら、フードを被かぶった。「……な、何？」

「マリア」馬ば鹿かは耐たえかねたように、しまいこむようにもう一度、そう呼ぶと、ゆっくりと路地の奥から歩いてきた。「──マリア。こんなところにいるとはネ。様子を見にきたのかい」

「まあ……ね」マリアローズはちょっと迷ったけれど、フードを

とった。だって、なんか過か剰じよう反応っていうか。変でしょ。普ふ通つうにしてればいい話だし。「──すごいことになっちゃってるからさ。きみのとこも、あれなんじゃないの。大変なんじゃない？　ＺＯＯうちよりはずっと大所帯だし」

「そうだネ……」馬鹿は眉まゆをひそめてうつむいた。

　ひょっとして、迷ってる？　悩なやんでたりする……？

　あたりまえか。悩まないわけがない。

　馬鹿は馬鹿だけれど、昼飯時ランチタイムっていう、ちょっと変わってはいるものの有名な、一部では有力だとも見なされているクランの、頭領マスターなんだから。

「こんなこと……訊きいてもいいのかな。きみのとこは、どうするの？」

「だいたい、ネ。決めてはいるヨ」

「そう……なんだ」

「いずれにしても、ボクが決断する。それだけは間ま違ちがいないネ」

「そっか」

「ありがたいことに、とにかくみんな、ボクのことが大好きだからサ」馬鹿は冗じよう談だんめかして笑ってみせた。「全員、ボクの言うとおりにしてくれると思うヨ。そこはこれっぽっちも疑ってないんだ」

「じゃあ、なおさらだね」

「何がだい？」

「なおさら、重いね。責任」

「たいしたことはないヨ」

「無理しちゃって」

　なぜだか腹が立って仕方なかった。でも、腹を立てているなんて

知られたくない。平静を装よそおっていると、馬鹿はマリアローズの隣で似たような体勢になって、細長い空を仰あおいだ。

「無理は、してない。これは嘘うそじゃなくて、本当なんだ」

「だったら、無理じゃなくて、何をしてるの」

「さあ……何だろうネ。ボクにもよくわからない」

「重くて、つらいんだったら、いっそやめちゃえばいいんだよ。でも、そんなことできないんでしょ。だったら、やるしかないじゃないか」

「ああ……」馬鹿はこっちに向けた顔をほころばせた。

　ほっとしたように。

「まさしく、それかな。正直……ネ。たしかに、たまに重かったりもするんだけどサ。放ほう棄きする気はさらさらないから、無理をしているとはこれっぽっちも思わない。きっと、そういうことなんだ」

「あっそ」マリアローズは鼻を鳴らした。「それはそれは、ごちそうさま」

「え？」

「……なんでもない」

　僕は、どうかしてる。

　だって、こんなに苛いら々いらしてさ。いったい、何が気にいらないんだか。馬鹿の存在自体？　そうかも。こいつがいなくなっちゃえば、こんな思いをしなくてすむ。それは間違いない。

　いなくなる。

　消える。

　二度と会わない。

　──二度と、会えない。

「わ……」

　やばい。

　いきなり視界がゆがんだ。

　マリアローズは慌あわてててしゃがみこみ、両手で顔を覆おおった。

「どどど、どうしたんだい、マリア……!?」

「な、なんでもないっ。なんでもないからっ。ちょっとあの、め、目にゴミが入っただけで」

「目にゴミがぁっ……!?　それは大変じゃないか！　見せてくれ、ボクが──」

「いらないから！　さわらないで！　近よるな！　どっか行っちゃえ！」

「い、いや、でも……」

「平気だからっ！　ちょっとゴミが入ったくらいで、どうにかなるわけないし！　大おお袈げ裟さすぎて、わざとらしいんだよ！」

「そ、そんなつもりは──」

「なくても、きもいから！　はっきり言って！　ああ、やだやだやだやだやだ、鳥とり肌はだが……離はなれて！　離れろったら！　もう……！」

　やだ。本当に、やだ。こんなの、やだ。いやすぎて、たまらない。

　指と指の合間から見てみると、あいつは適切な距離をとって、おろおろしている。

　昔はもっと強ごう引いんなところもあった。たまに、どさくさに紛まぎれて変なことをしようとしたりもしたし。いつからだろう。

　やさしくなった。用心深くなった。慎しん重ちようになった。



適切な距離をとるようになった。

それが不満なわけじゃない。そんなこと、ない。ただ、──つらいんだよ。

やさしくしないでよ。僕のこと、そんなに大事にしないでよ。僕

は応こたえられないんだよ。そんな資格、ないんだよ。大事にしてもらえるような人間じゃないんだよ。それに、僕はひどいじゃないか。ずっとひどかったじゃないか。きみの仲間たちみたいに、きみのそばにいるわけでも、きみを支えるわけでも、きみをどこまでも信じているわけでもない。結局、僕は信じてないんだよ。こんな僕を受け容いれてもらえるとは思ってないんだよ。僕は怖こわいんだよ。怖くてたまらないんだよ。そのことさえ言えないんだよ。きみには言えないんだよ。これってようするに、きみを信じてないってことでしょ？　違う？　違わないでしょ？　ああ──、

　そっか。そうなんだ。

　馬ば鹿かみたいだよ。

　てゆうか、馬鹿だよ。

　ようやく気づいた。気づいちゃったよ。

　マリアローズは顔を覆ったまま立ちあがった。それから手をどけて、二度、深呼吸をした。

　呼吸を整えて、僕は何を言おうとしていたのかな。わからない。ぜんぜん、わからない。

　どうしようとしていたのかな。わからない。まるで、わからない。

　どうしたいのかな。

　わからない。

　そうじゃない。

　どうにもできない。どうしようもないんだ。

　こうすればいいのかもしれない、この道を歩いてゆけば光が射さしこんでくるかもしれない、楽しい明日あしたが待っているかもしれないなんて、まったく思えない。

　怯おびえているようなあいつの顔を見て、笑ってみた。

　少し笑うだけで、こんなにも苦しい。

「元気でね」

　あいつが表情を変えるところなんて、目まの当たりにしたくなかった。

　背を向けて、歩きだした。

「まっ──」

　あいつは僕の名前を呼ぼうとしたのかな。それとも、待ってほしいと呼び止めようとしたのかな。どっちだっていい。どっちにしても、聞きたくない。

　耳をふさいで駆かけだした。追いかけてこないで、と願いながら。そう強く願えば、あいつはきっと追いかけてこないだろう。追いかけてきてはくれないだろう。痛いよ。

　苦しいよ。肋ろつ骨こつが軋きしんでいる。いったい何が心臓と肺を鷲わしづかみにしているのだろう。そんなに締しめつけないでよ。息ができない。止まってしまう。だけれど、足は止まらない。振ふり返りたかった。そんなこと、できない。あいつはもう遠くにいる。遠く、小さくなったあいつの姿を目にしたら、たぶんどうにかなってしまう。

　僕はね。受け容れてもらいたかったんだ。きみに受け容れてもらいたかったんだよ。もしかしたら、誰だれよりも、きみに。それがおそらく、僕の本音だったんだよ。でもね。怖いんだよ。たぶん無理だって思うから、怖いんだよ。そんなこと、ない。受け容れてくれるかもしれない。きっと受け容れてくれる。そう思うのが、怖いんだよ。保証なんてないから、怖いんだよ。期待すればするほど、怖いんだよ。信じることも、信じられずにいることも、怖いんだよ。大切な仲間がいて、その人たちに大事に、大事にされている、そんなきみを見ていると、つらいんだよ。悔くやしいような気もするし、なんだか寂さびしかったりもするし、そんなふうに感じる自分が醜みにくく思えていやだし、僕なんていらないんじゃないかとも思うし、だって、きみにはすてきな仲間が大勢いるんだから、僕なんて必要ない、いないほうがいいって思うし、だから、受け容れてもらえなくたっていい、そんなことを望むのがそもそも間ま違ちがっていて、これでいいんだって、そのほうが楽だって、考えてしまう。

　でも、胸が痛くて苦しくて、もうどうしようもないんだよ。

　　　　　十五時十七分　マクスペイン・ストリート

「──しかし、ひどいな」

　男はかつて〝神しん剣けん〟と呼ばれていた。今、その名は返上している。男は自らを〝神剣〟と呼ぶ者を決して赦ゆるさない。男は一度、くたばり──否いな、みじめに、あえなく敗死し、蘇そ生せいしたあと、〝神剣〟ではなくなった。そうではなく、もともと〝神剣〟などではなかったのだ。男はただのシャット・グレヒャに立ち戻もどり、神ならぬ人の剣を磨みがく日々を送ってきた。

　独ひとり立てた誓ちかいがある。

　私は二度と、鎧よろいを着ない。

　秩ちつ序じよの番人において、隠おん密みつ活動中の無名隊隊士をのぞけば、〝純血のピュアブラッド司祭プリースト〟のプロヴィデンス・シリーズを身につけず任務にあたる者は、現在、シャット・グレヒャただ一人だ。

　グレヒャは濃のう紺こんの平服を身にまとい、ローリー・アギャンスタ作「淫靡浪漫インヴイローマン」とサハ・リドル作「鼈べつ甲こう」の二振りを帯びただけの姿で、常に彼が率いる八番突とつ撃げき隊の先頭に立つ。

　リヴァイス事変からのち、八番突撃隊の損そん耗もう率は低いどころかゼロだ。隊士は一人も、一筋の手傷も負っていない。隊士が敵と刀を交えることはめったにないのだから、当然だ。斬きるべき敵は皆みな、シャット・グレヒャが斬る。隊士たちが不満を抱いだいていることはグレヒャも承知しているが、斟しん酌しやくしようとは思わない。

　斬りたければ、グレヒャより捷はやく駆けて、疾とく刀を奔はしらせればいい。それができぬのなら、無能、ただただ無能。無能者は指をくわえて血の匂においでも嗅かいでいればいい。

シャット・グレヒャを、悪あつ鬼き、と恐おそれる者がいる。人斬りの怨おん霊りように取り憑つかれた、人の皮を被かぶっている悪鬼だと。

否定はしないが、グレヒャとて秩序の番人の一員だ。義を差し置いて、見境なく斬ることはしない。

首都エルデン南門まで約一・五キルメーテルの地点で立ち往生しているグレヒャの手は、刀の柄つかにかかってすらいなかった。八番突撃隊の隣となりには、シャルロット・リンデの十二番遊撃隊も展開しているが、同じようにひとかたまりになってただ突つっ立たっている。他ほかに何ができるというのか。

「我々に交通整理でもしろと……？」

笑う気にもなれない。シャイニンググローリーパレスから南門までを貫つらぬくマクスペイン・ストリートは、さながら人、馬、車のごった煮にを流しこんだ水路のようだ。水なら多少濁にごりよどんでいても流れるだろうが、人間だの馬だの馬車だのではそうもゆかない。皆、エルデンの外へ、外へと向かっているのだが、物の見事に渋じゆう滞たいしている。改善の兆きざしは見えない。

「どうします、リンデ隊長」

羽根付きの兜かぶとで完全に素す顔がおを隠かくしているリンデは一いつ瞬しゆん、こちらを向いただけで、うんともすんとも答えない。南門付近の秩序維い持じが我々に与あたえられた任務なのだから、黙もく々もくと従うのみといった態度だ。惚ほれた男以外にはとことん愛あい想そが悪い。

「他も似たようなもの、なのでしょうな」アポローン・ギフカ隊長補が、グレヒャのすぐ後ろでため息をついた。「──しかし、あるいは、南門はまだましな部類かもしれません」

「ラフレシアは南から押しよせてくる。だからですか」

「ええ。心情として、他の方角に逃にげたくなるものでしょう」

「裏を掻かいて、ということもありますよ」

「それで、これだけの数が集まっているのではありませんか」

「でも、どうでしょうね。そこまで深く考えている者が多いとは思えませんが」

「隊長ならば、どうなさいます」

「私？　私が逃げるわけないでしょう」グレヒャは淫靡浪漫の柄を叩たたいた。「くだらないことを言うんだな。ああ、でも、そうですね。どうせなら、南門から外に出て、敵を待ち構えますよ。帝てい国こく軍は三十万以上でしたっけ？　彼らにどんな大義があるのか知りませんけど、私たちにとってはただの悪あく辣らつな侵しん略りやく者だ。義を乱す悪党バスターどもだ。皆殺しにしたって、総長も文句は言わないでしょう。むしろ、褒ほめてくれるんじゃないかな。そうだ、そうだ。これは名案だと思いませんか、ギフカくん。帝国軍はどう考えても義の敵ですよ。我々は義によってこれを除かねばなりませんよ。だって、カリオサークを破は壊かいしたというんだから。ひどい話じゃないですか。女子供も無む慈じ悲ひに虐ぎやく殺さつしたということなんですから。エルデンでも、絶対に同じことをしますよ。これは見み逃のがせませんね。そうでしょう、ギフカくん？」

「……はあ。それは、まあ」

「まあ、じゃありませんよ、ギフカくん。君はそれでも秩序の番人ですか。悪即そく斬ざんですよ、悪即斬。わかるでしょう。帝国軍は討うたないといけないな。うん。そうだ。何しろ、三十万以上ですからね。斬っても斬っても終わらないと思うな。それだけ数がいれば、中には骨のある相手もいるだろうし。本当は、雑ざ魚こには興味がないんですけどね。そこは、ほら、私は秩序の番人ですから。仕事は仕事として、ちゃんとやりますよ。どんなに歯ごたえのない相手でも、義を乱す者ならば斬りますよ。義務ですからね。義務を果たしたうえ、倒たおし甲が斐いのある相手とやりあえたら、私にとっては重ちよう畳じようだな。その意味で、三十万という数は魅み力りよくですよ。いくらなんでも、三十万もいたら、何人かはものすごい手て練だれが紛まぎれているはずだ。宝探しだな。ともあれ、総長に進言しよう。我々は義の旗を掲かかげて振ふり、その旗下で義の大敵、悪逆非道のラフレシア第三帝国軍を討つべきだ。我々がやらずして誰だれがやる。キング・グッダーなどあてになりませんからね。エルデンを守るために身命をなげうって剣けんを振るうとしたら、我々秩ちつ序じよの番人だけですよ。そうでしょう、ギフカくん」

「ええ、それは……ですが──」

「君の意見はどうでもいいんです。要は、総長がどう思われるか、なんだ。あの御お方かたはああ見えて理想家だが、一方でとにかく責任感が強い現実主義者でもある。勝ち目のない戦いくさはしたがらない。否いや応おうなく戦わざるをえない状じよう況きように持ちこめばいいんだろうな。どうすればいいか。問題はそこだな」

　思案しながらも、グレヒャは数分間に一歩程度の速度で進む人や馬車の流れに目を配っていた。かつて〝神剣〟と呼ばれた男は、常人離ばなれした視力の持ち主でもある。わざわざグレヒャの目が届く範はん囲いで悪事を働いたのだから、それ相応の覚かく悟ごがあると見なさざるをえない。

　グレヒャはわずかに膝ひざを曲げて、次の瞬しゆん間かん、跳とんだ。

　何人か踏ふみ台にして、彼ら、彼女らの肩かたや頭の上を走る恰かつ好こうになったが、義のためだ。死ぬわけではないし、その程度は勘かん弁べんしてもらうしかない。

　二秒後、グレヒャは一人の男の両肩を足場にして直立していた。

「盗人ぬすつと」

「……な──」

「先刻、前の者から掏すった財さい布ふを、今すぐ懐ふところから出して返してさしあげろ」

「え、あ……」

「何だ。自ら犯おかした悪事を認めないんですか。やむをえないな」グレヒャは淫靡浪漫インヴイローマンを抜ぬくなり、逆手に持ちなおして男の頭頂に突き入れた。「──死して償つぐなえ」

「ぐえ……」男は白目を剝むいて、ふらつきはじめた。

　その前に、グレヒャはまた四、五人の肩の上を伝い歩いて、もとの場所に戻もどった。

「……た、隊長……」アポローン・ギフカは暑苦しい顔に大量の汗

あせをかいていた。

「何ですか。見苦しい」

「い、いえ……」

「馬ば鹿かが多くて困りますね」グレヒャは淫靡浪漫を鞘さやに収めて、シャルロット・リンデにちらりと視線を送った。

　リンデは不動。けちな掏ス摸リがくだらぬ死に様をさらした一帯で、ようやく悲鳴だの何だのが起こりはじめたが、どこ吹ふく風といった様子だ。気にくわない女だが、杓しやく子し定規な小心者のギフカくんよりはずっといい。それが義を守るためなら、彼女は三十万の帝国軍にも臆おくせず立ち向かうだろう。

　リンデ以外にも、秩序の番人にはそうした剣士が幾いく人もいる。敵にも味方にも、そのような戦士だけがいればいい。互たがいに際限なく斬きりあえば、弱者は滅めつして強者のみが残るだろう。グレヒャがもし最後の一人となれば、ふたたび〝神剣〟を名乗るのもいい。そのときには、この剣に神が宿っているはずだ。否いな、彼こそがすなわち剣神となっているはずだ。

　グレヒャは淫靡浪漫の柄つかを撫なでて、ひっそりと笑った。
「楽しみだな」

　　　　十七時四十三分　第八区

　その店はクァラナドの外れの外れ、第八区にある。

　龍りゆう州しゆう風の建築ということになるのだろうが、何もかもが調子外れだ。柱や梁はりは鮮あざやかすぎる朱しゆ色いろで、床ゆかや壁かべは光こう沢たくのある黒、天てん井じようには華はなやかな色しき彩さいであまり趣しゆ味みがいいとは思えない絵が描えがかれている。あちこちに施ほどこされた金メッキの飾かざりは毒々しいほどだ。もはや龍州風でも何でもない。そう思う反面、実はこんなものだったのかもしれないと思いもする。こんな夕刻ではなく、店が通常営業している夜に訪れれば、今はどこか白けて感じられる外観、内装も、それなりに見えるのかもしれない。

　店の奥まった一室で顔をつきあわせている者たちは全員、龍州人だ。元龍州人というべきなのかもしれないが、龍州からこの最果ての街に流れついた者たちは、どういうわけかあの遠い故郷を捨てきれずにいる。

　郷土愛か、愛あい惜せきか。単に粘ねん着ちやく質しつで執しゆう念ねん深いだけかもしれない。彼も己おのれの渇かわいた心のうちに底深い泥どろ沼ぬまの存在を感じることがある。島国のやたらと湿しつ気けの多い長雨の季節が、鬱うつ陶とうしい執着を育はぐくむのか。そうかと思えば、彼の隣となりに座っている男のように、明朗快活の権ごん化げのごとき者を生む気まぐれも見せる。

　俺は懐なつかしんでいるのか。二度とは帰れぬ郷里を夢に見ることさえ稀まれにもないというのに。

　荊王ジンワンは色眼鏡サングラスを押しあげて、卓たくを囲んでいる龍州人たちを見まわした。「──つまり、現時点で、昏劾子フンヘージとして一いつ致ちした行動をとる合意には達していない。陸統ルートン、辛亥シンハイ、禁子党ジンシーダン、頓死連ダンシリアン、笛吹子ジチユイシーも同じ、というわけだな」

「付け加えれば」と卓を太い指で叩たたいた老人は、七十の坂をとうに超こえているはずだが、鋭するどい双そう眼がんには壮そう年ねんの眼光が宿っている。

　頭頂のやや後ろで結ゆってある白はく髪はつがその名の由来なのか。無数の刀傷めいた皺しわが刻まれていながら、やけに張りのある肌はだの質感も、老人を化物じみて見せるのに一役買っている。

　白豹公バイバオグオン。

　豹公バオグオン、とも呼ばれている。

　現存する龍州人のクランとしては最古の部類に入るだろう昏劾子フンヘージは、伝統的に複数の老頭ラオトウに統制されていて、その活動領域は広く、深く、内部の者ですらそうたやすくは実態を把は握あくできないという。この老人は最有力の老頭と見なされており、本人はその評価を否定することも肯こう定ていすることもないが、昏劾子フンヘージの代表者と思ってまず間ま違ちがいなかろう。

「名にし負う龍州連合も、未いまだ態度をお決めになっておられぬ。そう考えてよろしかろうな」

「まァーね」飛燕フエイヤンは頭の後ろで手を組んで首を左右に曲げてみせた。「とりあえず、今ンとこはそォー思ってくれてかまわねェーよ」

「まあ、当然と申せば、当然」豹公は唇くちびるの端はしをゆがめた。「捨てて遁にげるには、あまりに多くのものを、我らはこの地で擁ようしてしまっておる。儂わしのごとき老い先短い老骨は何物も惜おしくはないが、事は儂一人の問題ではないのでな」

「いッやァー。アンタァ、あと二十年くらいは平気で生きそォーだけどな。オレが見たカンジだと。つっても、そォーゆージジィにかぎって突とつ然ぜんポックリ逝いったりすンだけどよォ。キャハハハハハハ」

「フッ……」豹公は目を細め、口くち許もとをゆるめた。孫を見るような眼まな差ざしと言ったら言いすぎかもしれないが、他ほかに適切な表現が思いつかない。この老ろう獪かいの極きわみに達しているような御ご仁じんに、そんな表情を浮うかべさせる。飛燕ならではだ。人徳と称しようしてもいいかもしれない。

「とりあえずよォ」飛燕は唇をぺろりと舐なめた。「利害とか何とかゆってらンねェーっぽいだろ。のっぴきならねェー異常事態ってワケだし、今後ソレゾレがどォーするにしても情報交こう換かんだけは密にしてこォーぜ。ゆってもオレらァ、同じ龍州人だしよォ。お手々つないでランランランっつゥーようにはいかなくても、最低ラインの協力関係？　そのへんは維い持じしてよォ。共存共栄とはゆわねェーけど、まずは生き残らねェーとな。そンくらいシビアな状じよう況きようだったりするって認にん識しき？　そのへんは共有してよォ。甘い考えだけは捨てちまォーぜ」

「お説のとおり」豹公は眉まゆ根ねを寄せてかすかにうなずいた。「楽観はできぬ情勢だ。たとえエルデンから退去したところで、国内にとどまるかぎり、一時しのぎにしかならぬやもしれぬ。さりとて東のトレイン公国、ベルドリッド王国、エーメン大君国、アセチナ法国は、すでに難民流入を警けい戒かいして国境地帯に軍を展開しているとの情報もあり、南はラフレシア、北はクライドの大山脈を越こえねばモトローリィには入りこめぬ。ジェードリあたりに逃のがれ、海路でいずこかへ向かうか。しかし、彼かの帝てい国こく

は巨きよ大だいな海軍をも有しておるでな」

　荊王は色眼鏡サングラスに指をかけ、そっと離はなした。「帝国が本気なら、俺たちに逃にげ場はない」

「こちらも本気になれば、手はあろう。だが、身一つで逃げることも覚かく悟ごせねばならぬ」

「鉄の心臓アイアンハーツ協会ソサエテイのロドリゴ・ファルコーネはもうエルデンを出たそうだな」

「彼の財宝を満まん載さいした高速馬車の列は、人目につくこともほとんどなかったという。まるで周しゆう到とうに準備していたかのようだ」

「赤子同盟ベイビーユニオンも近々脱だつ出しゆつするらしい」

「ギャプ・ド・レエはおそらく割れよう。もとより一枚岩ではないのでな」

「俺たちは同志じゃない」荊王は色眼鏡サングラスを外して卓に置いた。「──だが、誰だれも彼も龍州で居場所を失い、何の因果かこの街に行きついた。飛燕が言ったように、生き残るためには協力するべきだ。何をどう決断するにせよ、ともに道を歩くことがあれば、行き倒だおれる前に肩かたを貸しあう程度のことはする。目の前に敵がいれば、目配せして挟はさみ撃うちにする。少なくとも、俺たち龍州連合はそうするつもりだ」

「豹児バオアー」豹公は後ろに控ひかえていた男を振ふり返った。それが、豹ひようの子という名のとおり豹公の秘蔵っ子で、後こう継けい者しやと目されている男だということは荊王も知っている。だが、万事控えめで、豹公の陰かげに隠かくれて表に出てこようとせず、今も従者のように振る舞まっていた。その実、見かけより老いている豹公の実務は、ほとんど豹児が処理しているとも言われている。いずれにしても、豹公ほどの人物が信を置き、重用しているのだから、無能な男であるはずがない。

　豹児はいったん部屋から辞し、黒い盆ぼんを持ってすぐに戻もどってきた。盆の上には白い酒さか瓶びんと杯さかずきがある。大きな杯だ。豹児は一礼して盆を卓に置くと、また豹公の後ろに控えた。

「ナニナニ？　何するワケ？」飛燕が目を丸くして身を乗りだした。

「儂は古い人間です。ここにお集まりの方々は皆みな、儂よりずいぶんお若い。旧ふるきしきたりゆえ、お笑いになるやもしれぬが──」豹公は杯に酒を満たすと、懐ふところから小刀をとりだして、その刃は先さきを親指にあてた。「戯たわむれと思ってもらってもよい。しかし、斯か様ような折にこそ、戯れも必要と存ずる」

　豹公は親指から血を数すう滴てき、杯の中にしぼり落として、荊王を見た。

「やろう」荊王は作さく為いではなくわずかに笑い、豹公に倣ならって己の血を杯に落とした。

「よっし。オーレもッと」飛燕も手て袋ぶくろを外して杯の酒に血を流しこみ、──やや多すぎる量ではあったが、居並ぶ他の者たち、昏勀子フンヘージの老頭ラオトウである無双蝗ウーシヤンフアン、同じく狒狒フエイフエイ、悶ハメンバー、陸統ルートン頭目トウムーの顔礼ヤンリー、辛亥シンハイを束ねる獅子唐シージータン、禁子党ジンシーダンの党首ダンシヨウである七威チーウエイ、頓死連ダンシリアンの鳳凰四岐フエンフアンシキ、笛吹子ジチユイシーの民漠君ミンモージユンも、次々と彼らの血を杯に吸わせた。

　透とう明めいだった酒は紅酒ホンジウと化して、龍州人たちはそれを一口ずつすすった。

　こんなことをしたところで、何が変わるわけでもない。彼らを縛しばるものは何もない。だからこそ、彼らはこのエルデンに居つくことができたのだ。そして、これからある者は去り、ある者はあくまでしがみつくのだろう。一いつ杯ぱいの紅酒が彼らの判断に及およぼす影えい響きようは、おそらく皆かい無むに近い。

「我らはしぶとい」豹公は刀傷のような皺をゆがめ、ふてぶてしい笑えみを刻んだ。「それだけは確かであろう。諸兄も賛同していただけると愚ぐ考こうするが、如何いかん」

　一同「是シー、是シー」と唱和して、誰からともなく笑い声が起こった。

　豹公はあえて約定をもうけず、誰もそのことにふれなかった。ま

さしく形だけの戯れだ。それでいい。

　何にせよ取り決めをしようとすれば、論争は避さけられない。エルデンではまず通用しないが、曖あい昧まいさの中に機き微びを察して融ゆう通ずうしあう文化が龍州にはある。彼らは龍州人で、それを忘れていなかったのだ。

　店をあとにして、飛燕と二人になった。もちろん供の者はいるが、距きよ離りをあけて前後左右を目立たないように歩いている。不要といえば不要なのだ。二人とも、自分の身くらいは自分でどうにでもできる。むしろ、そばをうろちょろされると、かえって邪じや魔まだ。

「なァ、ジン」

「何だ」

「あのさァ……」飛燕はそう言ったきり黙だまりこんで、なかなか口を開こうとしない。

　荊王は色眼鏡サングラスの位置を直し、重ねて問うた。「何だ」

「テメェーはアレだ。アレ。アレだよ」飛燕は鼻をすすった。

「風か邪ぜでもひいているのか」

「ヤ、ひィーてねェーって。そォーじゃなくてよォ。だッからさァ～……」

「だから、何だ」

「こっから出てってくンねェーかなァ」

「……意味がわからない」

「悪ィ。ちゃんと説明すッからよ。えーッと、なんつゥーかようするに……ほら、オレァ、みんなの様子とか見てまわってンじゃん。抑おさえ効かす？　的な。ある意味、オマエよっかオレのほォーが空気？　的なの、肌はだで感じてたりするワケじゃん」

「それはそうだろうな」

「そンで思ったんだけどよォ」

「ああ」

「無理だわ」

「……何が」

「ある程度、年くってるヤツとかはいィーんだわ。あと、腹ァ据すわりまくってるヤツ。オレらに惚ほれ抜ぬいてやがる犬タイプ。このへんはいィーんだよ。けどさァ。オレらもいいかげんでかくなって、いろォーんなヤツがいるワケじゃん。目隠しして突つっ走ぱしっても自分はすッ転ばねェーとか思ってるガキみてぇーなヤツとかも、大勢いたりするワケじゃん。とりあァーえず、ここにいりゃァー食いっぱぐれねェーかなァーとか思って、アホみてぇーに余よ裕ゆうぶっこいてるヤツとかもいるワケじゃん」

「まあな」

「ソレが悪ィーってゆってるワケじゃねェーんだよ。数が増えりゃァー、どォーしたって粒つぶぞろいってワケにゃァーいかねェーんだし。そのへん許容できねェーと、組織はでかくなれねェーんだろうし。アホだったりクソだったりボケだったりしても、オレはそれなりにかわいィーワケ。なんつゥーの？　使えねェーヤツがいッから、使えるヤツがいるんだろうなァー的な。全員使えたら、使えるヤツがフツーってことになって、そしたら使えるも使えねェーもねェーワケじゃん。わかる？　オレの言ってるコト」

「理解はしている」

「だから、ヤツらも必要なんだよな。使えねェーヤツにもなんッかこう、テキトーにやらせたりしてさ。お茶濁にごす的な？　いるッてことが重要なワケだからさ。そりゃァー、使えるようになってくれたほォーがいィーワケだし、イロイロ言ったりケツ叩たたいたりはすッけど、なれなくてもまァー、食いモンに困らねェー程度の生活はさせてやってさ。そォーゆうのって、厚みっつゥーのかねェー。そんなカンジになると思うんだよね。組織のね。オレはね」

「立派な考えだ」

「テメェ」飛燕は荊王の脇わき腹ばらを軽く叩いた。「ンだよ。馬ば鹿かにしてンのかよ」

「いや」荊王は色眼鏡サングラスの奥で目を伏ふせ、そっとため息をついた。「本音だ」

「そっかァ～？」

「ああ」

「ンならいィーんだけどよォ」

「お前は変わった」

「どォーだかなァ」

「おそらく、女のおかげだ」

「あァー……」飛燕は鼻の頭を掻かいた。「ソレはなァー。あるかも。ユリィ見てたらさァ。人間、強つェーだけじゃダメなんだなァーってな。強ェーと、ぶちかましてやっつけて踏ふみつぶしちゃったり容易にできるワケじゃん？　けどさァ。気にいらねェーからってぶっ潰つぶして、ンなことやってて何が残ンのかって話でさァ。強ェーだけじゃァーなんつゥーか……むなしィーんだよなァ。けどさァ。強ェーってコトでできるコトは増えるワケじゃん。強くなりてェーってオレァやっぱ思ってるけど、何？　その強さ利用して？　できるコトもいっぱいあったりするんだよなァ。ユリィは強ェーんだけど、目的があンだよ。そのために強くなりたがってる。そォーゆうのもかっこよくね？」

「あれはいい女だ」

「やらねェーぞ？」

「わかっている」

「で、だ。話は戻ンだけど」

「俺に出ていけと？」

「そ」

「どうしてだ」

「簡単にゆゥーとだなァ」飛燕は右手の手刀を左手の掌てのひらに叩きつけてみせた。「割れる前に割るっつゥーコト。昏効子フンヘージなんかもカナリの大所帯だけどよォ。アッコとウチはまるっきし違ちがうだろ。歴史？　とか体制とかイロイロ。はっきしゆってウチにハガネの団結は期待できねェーよ。一部をのぞいて、な。カチカチの部分もあッけど、やァーらけェー部分もある。このままだとそのやァーらけェー部分が裂さけて、バラバラになっちまう」

「俺はそのやわらかい部分を引き連れて、エルデンを出る」

「オレは筋金入りの連中と一いつ緒しよに残る」

「そして、俺はどうすればいい」

「まずはケメックとか、そのあたりかなァ。ジェードリでもいィーけどな」

「小なりとはいえ第二の闇やみ市いちを作る、か」

「わッかんねェーけど、たぶん、な……オレも結局、あと追うコトになると思うんだわ。だったら最初ッから一緒に行けって話なんだけどよォ」

「闇市を捨てるのは惜おしい」

「万が一もあるしなァ」

「あの場所は俺たちの城だ」

「奪うばいとって、整備して、作りなおして。手間ァかかったよなァ、実際」

「城で討うち死にを遂とげるつもりか」

「ソレはねェーよ。オレは死なねェーし、死にたかねェーもん」

「女もいる」

「うん」

　即そく答とうした飛燕が、黒く色のついたレンズ越ごしでもいや

にまぶしかった。

「……ＺＯＯあのクランはどうなんだ」

「さァーね。今、アサイラムにいッから、アッチにあわせて行動すンじゃねェーかなァ。もともと関係深ェーしな」

「お前はどうする」

「どォーって？」

「いざとなったら、女と手下ども、どっちをとる」

「どっちも、だよ」

　思わず笑ってしまった。「──欲張りなやつだ」

「そのためにオレァ、もっともっと強くなりてェーんだよ」

「わかった、飛燕」荊王は飛燕の肩かたをつかんだ。「そうしよう」

「頼たのんだぜ、ジン」飛燕は荊王の腰こしをさすった。「テメェーはいい相棒だ」

　とんだ不意討ちだった。

　今ほど色眼鏡サングラスをしていてよかったと思ったことはない。

　おかげで、開きかけた口を無理やり閉じるだけで表情を消すことができた。

「ン……？」飛燕は荊王の顔を見上げてのぞきこんできた。「なんッか、顔赤くね……？」

　荊王はわずかに首を曲げてから前に向きなおった。「夕ゆう陽ひのせいだろう」

同時刻　鉄鎖の憩い場

　彼女には年の離はなれた兄がいる。兄とはもう長らく会っていない。

　当時、彼女はまだ幼く、兄はもう大人だった。兄は軍人で、遠くの戦場へと向かおうとしていた。

　やさしい兄ではなかった。つめたくもなかった。兄は幼おさな児ごにも「貴様は何者なのだ」と問いかけるような人だった。実際、言葉にはしなくても、青みを帯びた瞳ひとみはいつも彼女の存在の奥底を見すえていた。「貴様は何者なのだ」「貴様は何を求めている」「貴様は何を訴うつたえようとしている」「貴様はなぜそれを口にしない」「貴様はどこにいる。貴様が立っているその場所はどこだ」「貴様はなぜ求めて泣き叫さけぶだけで行動しようとしない」「なぜその小さな手をのばして、それをつかもうとしない」

　彼女は兄が怖こわかった。恐おそろしかったが、慕したわしかった。

　あの日、彼女は初めて兄に向かって両手をのばした。兄は初めて彼女を抱だいてくれた。

　欲ほつするものがあるのならば、歩いて、近づいて、つかまえて、手た繰ぐりよせなければならない。そのことを彼女は学んだ。兄が教えてくれた。

　彼女はまだ幼く、兄のことなどよく知りもしなかった。それでも兄は彼女の誇ほこりだった。

　その兄が、彼女の家を没ぼつ落らくさせた。彼女は幼かったので、詳くわしい事情を知らないが、そう聞かされた。何もかも、行方ゆくえをくらました兄のせいだと。

　真しん偽ぎの程ほどは不明だが、事実、デュパン家は所領のカリエールをとりあげられ、伯はく爵しやくの位とともに、皇こう帝ていから拝領したラスペードの名を剝はく奪だつされた。一族郎ろう

党とうは落ちぶれて離り散さんした。

　彼女は最初、母に手を引かれて各地を転々としていたが、やがて彼女が母の手を引くようになった。そのうち母が死に、彼女は身軽になった。

　彼女は生きた。生きたかったから、生きた。生きるためにできることは何でもした。欲しいものがあれば、手をのばした。拒こばみたければ、襲おそいかかってくる手を撥はねのけた。

　彼女はときに自分自身の表面にこびりついている女を使い、女に飽あきて、女を捨てた。余人に奇き矯きようだと思われようと、彼女は己おのが欲する衣服を身にまとい、髪かみを短く切った。付け髭ひげをつけた。知りたいことがあれば学んだ。興味を引かれるものがあれば臆おくせず飛びついた。

　彼女は戦場を歩き、戦記を読み、戦史を漁あさった。武術を身につけるというよりは研究した。酒をたしなみ、絵画や彫ちよう刻こくを鑑かん賞しようして、気がつくと兄を思っていた。

　彼女は気づいた。知らずに彼女は兄を追っていた。神童の名をほしいままにして、ありとあらゆる学問、芸術に造ぞう詣けいが深く、逸いつ材ざい中の逸材として軍人になった。そして、ある日、忽こつ然ぜんと姿を消した。兄の影かげを彼女は追っていた。彼女は兄を求めていた。

　追いきれぬ、いくら手をのばしたところで届かない兄の影を憎にくみ、恨うらみ、酒に溺おぼれ、潰つぶれた彼女は、一人の取り立て屋に介かい抱ほうされた。

　取り立て屋に、兄というより父の匂においを嗅かいで、彼女はたぶん初めて恋こいをした。成じよう就じゆなど願いもしない恋だった。取り立て屋には愛する女がいて、彼女は女を愛する取り立て屋を欲しいとは思わず、乱暴に手をのばすより静かに見ていたかった。

　情に厚い取り立て屋には友が多かった。彼ら、彼女らは皆みな、それぞれに興味深い男たち、女たちだった。取り立て屋は友らを置き去りにして先に行ったが、愛する女との間に二人の娘むすめを残した。油断すると彼女の付け髭を剝はごうとする取り立て屋の娘たちを、彼女は心底から愛いとしく思った。取り立て屋が愛した女

は、おそらく彼女の真情に気づいていたが、何も言わなかった。そういう女だからこそ、取り立て屋は愛した。

　彼女はここに骨を埋うめてもよかった。しかし、夕暮れの路みちに落ちる自身の長い影が兄の影と重なって、忘れていない、忘れることなどできはしないと自覚するたびに、彼女は口髭をつまんで尖とがらせた。

　彼女の中には衝しよう動どうがあった。それはこれまでたびたび彼女を破は壊かいしようとし、同時に彼女の足を前へ前へと進めてくれた。

　このところ、彼女は折に触ふれて考えていた。自分にとって、もはや影でしかない兄とは何なのか。第五区、鉄てつ鎖さの憩いこい場の公園前で足を止め、地面を汚よごす影にステッキを突つき立てて、砕くだけ散らない影を忌いま々いましく思った。

　これは兄の影ではない、私の影だ。

「皆さん、終わりです……！」薄うす汚ぎたない身なりの男が、公園の隅すみでゆがんだ看板を振ふりまわしながら叫んでいる。「エルデンは終わります！　エルデンが終わるということは、すなわち自由が終わり、死ぬということであります！　自由が死ぬということは、世界が滅ほろびるということであります！　そうです、世界は間もなく滅びるのです！　滅びるのです！　滅びるです！　滅びます！　さあ、ごーいつ緒しよに滅びましょう！　さあ……！」

　誰だれもいかれた男の言葉になど耳を貸さない。言われずとも、滅びるかどうかは別として、いずれラフレシア第三帝国軍がエルデンまで押しよせてくるのではないかという噂うわさは、五歳の子供でも耳にしているはずだ。

　超ちよう大規模な魔ま術じゆつによって、カリオサークは徹てつ底てい的に破壊されたらしい。帝国軍はすでに魔導兵を無力化して国境を突とつ破ぱしているから、エルデンの防衛にあたっている魔導兵にも過か剰じような期待はできないだろう。常識的に考えれば、帝国軍は近い将来、エルデン攻こう略りやくにとりかかる。わかりきったことなのに、一も二もなく逃にげだそうとする者もいれば、市場でのんきに買い物をしている者もいて、あの男のように乱心して滅びを説く者もいれば、彼女のようにぶらぶらと散歩をしている者もいる。

　もしかすると今のエルデンは、彼女が知る範はん囲いにおいて、もっとも混こん沌とんとしているかもしれない。

　何かが大きく変わる。何かというよりも、すべてが。

　その気配が街中に充じゆう満まんしていて、ずいぶん前から彼女の胸を騒さわがせていた。

　もともと、とてもじっとしてはいられず、貸し宿の部屋をあとにして、用もないのに街中へと繰くりだしたのだ。

　いかれているわりに控ひかえめな男とは違ちがい、やたらと派手な金ぴか男が公園のど真ん中で何やらわめいている。「──誰か！　誰かいないというのかねッ！　この私とともに、エルデンを、自由の象しよう徴ちようたるこのエルデンを、我々の父なる母なる故郷エルデンを守るべく立ちあがろうという者が、一人もいないというのかねッ⁉　こォォォォの、恥はじ知しらずどもがァァァァッ！　それでもエルデニアンかァァァァァッ……！　喝かつ、喝、カァァァァーツッッッッ！　そんなこっちゃあいかんよ、キミタチィィィィィ！　ここはいっちょ漢おとこを見せるときだよッ！　漢の見せ所だよッ！　ちなみに、女性も大だい歓かん迎げい！　老いたる者、幼き者、病をえたる者、誰でもけっこう！　必要なものはただッ！　戦う意志！　決意！　勇気！　元気！　そう、元気だよ、ウアハハハハハハッ！　元気があれば何でもできるわけだよッ！　元気がないと、朝食のトゥーストにバァタァーを塗ぬることすら億おつ劫くうだったりするわけだからねえッ！　いや、そんなことはどうでもいいのだが、とにかく誰かッ！　誰かいないのかねェッ⁉　私とともに戦おうという気き概がいのある者はいないのかねェッ⁉　我がエルデン自由軍ＥＦＡは、元気な老若男女を常時募ぼ集しゆう中ちゆうなわけだよ！　まあ、元気がなくてもよろしいッ！　私、ＥＦＡ総そう帥すいたるフランク・ゴールディング・レイヴンズクロフト、通つう称しよう〝おフかアしニなー〟フランクはねえ、ここは一つ二つ、堅かた苦くるしいことは言わんことにしようかなッ！　正直、誰でもいいッ！　この際、人間でなくたってかまわないよ！　誰かッ！　頼たのむ！　頼みますッ……！」

　ゴールディング・レイヴンズクロフトとかいう名は初耳だが、ファニー・フランクならば知っている。あくまで知っているだけだが、たしか〝創世の翼ジエネシスウイング〟という、名前だけたいそうで規模は小さいクランのマスターだ。そのはずなのだが、エルデン自由軍ＥＦＡとは何だろう。

「どうかッッッッッッ……！」ファニー・フランクはいきなり跳とびあがり、何か液体を撒まき散らしながら回転して着地した。

　両りよう膝ひざ、両手を地面についている。

　土下座だ。

　泣いているのか。鼻はな汁じるも垂らしている。

「このファニー・フランクッ！　伏ふしてお願いするッ！　どうか何とぞッ！　私と一緒に戦ってほしいッ！　エルデンを守る、そのためにッ！　エルデン自由軍ＥＦＡは参加者大、大、大、大、大募集中なのだッ！　しかも、今すぐにッ！　キミタチの力をこの私に貸してほしいッ！　一人でもいい、二人でもいい、お誘さそいあわせの上、ＥＦＡ！　ＥＦＡ！　ＥＦＡッ！　ＥＦＡに、きたれ、ろうにゃくにゃんにょっ──否いなッ！　ろうッ！　にゃくッ！　なんッ！　にょッッッ！　メルシィー・プリィィィィィィ────────ズッ……！」

　演技にしては真に迫せまりすぎている。さすがにこのパフォーマンスは効いた。何人もがファニー・フランクのほうを見て立ち止まったが、驚おどろいているか、おもしろがっているだけだろう。彼女は、だが、必ずしもそうではなかった。

　あのみっともない男に将器があるとはとても思えない。きっと何らかの理由で自暴自じ棄きになり、かのごとき醜しゆう態たいをさらしているのだろう。それくらいのことは見ただけでわかる。

　にもかかわらず、彼女はステッキの握にぎりに左手を置き、右手で付け髭ひげをしごきながら、ファニー・フランクを凝ぎよう視ししつづけた。

九巡月四番日一時七分　モリー・リップス・アサイラム

　病室のドアを開けると、黒い肌はだのウィルネム・ジャッター医士とベアトリーチェ、それに数名の医術士の姿が目に飛びこんできた。ハニーメリーのベッドは人ひと垣がきの向こうにあって見えない。病室へと足を踏ふみ入れたマリアローズに、ほんの少しだけ遅

おくれてユリカがつづき、間もなくサフィニアとルーシーも駆かけこんできた。

「どうなんですか……？」マリアローズはジャッター医士に訊ききながら、医術士たちを迂う回かいしてベッドに近づいた。

「ああ、意識が戻もどった。というより、目を覚ましてしまった、という感じなんだが」

「体力、回復力がわたしたちの予想を超こえていたんだ」ベアトリーチェの表情は険しい。

　マリアローズはユリカと肩かたを寄せあってベッドにとりついた。何度も見み舞まっているから、容態は知っている。身体からだの中もひどかったけれど、体表の前面に負った火傷やけどが深刻で、ふだんは全身包帯だらけだ。今は、でも、治ち療りようの最中だったらしく、腕うでや足の包帯はとりのぞかれて、無残に損傷した皮ひ膚ふがあらわになっている。頭部は目と鼻、口、耳だけが包帯の隙すき間まからのぞいている状態だ。ただ、今までとは違って、目が開いている。

「ハニー」

「ハニーしゃん」

　やはり包帯の合間からのぞいている唇くちびるが動いて、かすれた声をしぼりだした。「……ぁあ」

　サフィニアがマリアローズとユリカの間に割りこんできて、ルーシーはユリカの隣となりでベッドのフレームにかじりついた。

　ベアトリーチェがそっとハニーメリーの手を握った。「喋しやべらないほうがいい」

「……ん」ハニーメリーはかすかに首を横に振ふった。「……へいき」

　ベアトリーチェはジャッター医士と目を見み交かわした。ジャッター医士は小さくうなずいて、ハニーメリーの腕や足に布をあてがいはじめた。

「……ああ……なんか……かなり、ひどいことに……なってそ

う……」ハニーメリーはかぼそい笑い声を立てた。「……落ちこむなぁ……さすがに……」

「大だい丈じよう夫ぶよ」ユリカは強い笑え顔がおを浮うかべてみせた。「心配しないで。アサしやイラムの医い術じゆちゆ士ししゃんたちの腕は確かだから。しゅっかりもとどおりにしてくれるわ」

「そのとおりだ」ベアトリーチェはハニーメリーの手の甲こうを指で軽く叩たたいた。「わたしたちに任せておけ」

「……ありがと……ていうか……」ハニーメリーは、はあ、と息をこぼした。「……死んだかと……思った。なんか……最後、思ったのが……もう、だめだなって……そしたら、生きてるみたいだし……なかなか、死なない……ものなんだ……すごいね……生きてるって……」

　ドアがまた開いて、松まつ葉ば杖づえをついているピンパーネルとトマトクンが病室に入ってきた。閉じないドアから、きゅーがおそるおそる顔だけ出している。

「はいはい、ごめんなさい」きゅーを軽く押しのけて、乱みだれ髪がみを引っかきまわしながらモリーが姿を現した。もちろん火はつけていないけれど、煙草たばこをくわえている。目がえらく充じゆう血けつしているし、化け粧しようも落ちかけていて、明らかにここしばらく眠ねむっていませんといった様子だ。

　モリーはマリアローズを一いち瞥べつして、疲つかれた微び笑しようを投げてよこしてから、医術士たちの肩かた越ごしにハニーメリーを見た。「──で、どうなの？」

　ジャッターは手を止めずに逞たくましい肩をすくめた。「強きよう靭じんとしか言いようがないですね」

「もうちょっとペース上げてもよかったのかしらねえ」モリーは手をのばしてハニーメリーの胸むな元もとに指をふれさせ、目をつぶった。「──うん。よさそうね。以後、ＡＷＣに移行、ＥＭＦＡ、強度プラス１・５。とりあえず、それで」

「了解ライク」ジャッターが短く答えると、ベアトリーチェがバインダーのカルテに素す早ばやく何か書きこんだ。

「もう大丈夫よ」モリーはハニーメリーの頬ほおを軽くさすった。

「安心なさい。わたしたちが治すから。信じていいわ。てか、信じなさい。──ジャッター、リーチェ、あとお願いね」

　それだけ言い残して、モリーは行ってしまった。ただでさえ常時多た忙ぼうなのに、状じよう況きようが状況だから、眠るどころか本当に息をつく間もないのだ。倒たおれちゃわないといいんだけど。

　ジャッター医士とベアトリーチェ以外の医術士たちがひとまず退出して、トマトクンとピンパーネル、きゅーもベッドを囲んだ。

「まあ……」トマトクンはとてつもなく眠そうで、何がかろうじてその瞼まぶたを持ちあげているのか知りたいくらいだ。「よかったな、バリーボリー」

　マリアローズはすかさずトマトクンの脇わき腹ばらに肘ひじ打ちを見舞った。「ハニーメリー」

「む。すまん」

「……くっ……」ハニーメリーは身体を引きつらせるように震ふるわせた。

「ど、どうしたんですかっ……!?」ルーシーが慌あわてて身を乗りだした。

「……いや……お、おもしろくて……笑いたいんだけど……笑うの、ちょっと、つらい……」

　サフィニアがほっとしたようにため息をついて、その肩をユリカがごしごし撫なでた。

　ふと、きゅーが思いだしたようにピンパーネルの手から松葉杖を奪うばい、自分にもたれかかるよう仕し種ぐさで示した。たぶん、とにかく仲間に頼たよられたくて仕方ない気分なのだろう。ピンパーネルは言われたとおりにした。「ありがトウ」

「くう」

「……あれ……？」ハニーメリーはほとんど頭を動かさず、目の動きだけで病室の中を見まわした。「……一人、足りない……」

「カタリは、元気よ」ユリカが間かん髪はつを容いれずハニーメリーに笑いかけた。「元気しゅぎて、ちょっと迷めい惑わくなくらい。今は外しよとに出てるけど、しょのうち帰ってくるんじゃないかしら」

「……そう……なら、よかった……けど……」

　ハニーメリーにしてみれば、責任を感じざるをえないだろう。もしかしたら、心情的には自分の怪け我がよりもつらいかもしれない。マリアローズは唇を嚙かんだ。こんなときに、何をどう言ってあげればいいのか。

「……あの……」ハニーメリーはピンパーネルのほうに視線を向けて、結局、自分からそのことにふれた。「……足……どうかしたのかなって……やだな、あたし……どうかしたに、決まってるのに……」

「コレは」ピンパーネルは目め許もとをゆるめた。「名めい誉よの負傷デス。──ようやく使えまシタ。覚えた・言葉」

「……ごめんなさい……」

「ワタシは平気デス。アナタはアナタの怪我・治してくだサイ。しっかりト」

「……わ、やばい……」ハニーメリーは目をつぶり、歯を食いしばった。「……こんなときで、あれだけど……あたし、好きだな……あなたのこと。ピンパーネル……あたし、あなたのこと、好きになっちゃった。最初から……ちょっといいかもって、思ってたけど……」

「おおっとぉ……」ルーシーは赤い眼めを瞠みはって顔面をこわばらせた。

　ほんとに、おおっと──だよ。いきなり何言いだすんだよ、目覚めた途と端たんに、この子はいったい。びっくりだよ。告白だよ。突とつ然ぜんだよ。唐とう突とつすぎるよ。や、気に入ってるっぽいのは知ってたけど。そういう問題じゃないと思うんだよね。じゃあ、どういう問題なのかって訊きかれると、返答に窮きゅうしちゃうけどさ。

　すごいよ。病室の空気。みんな固まってるよ。かっちかちだよ。

どないしてくれよんねんって感じだよ。怖こわいよ、この子。ありえないよ。

　ピンパーネルなんて、めずらしすぎる反応示しちゃってるよ。眉まゆを八の字にして口を潰つぶれた菱ひし形がたに開けてるピンパーネルなんて、今までかつて見たことないよ。たぶん、この先も見られないよ。貴重すぎるよ。

「……よければ……」それでもハニーメリーときたら、おかまいなしだ。「……あたしと、セックス……してください……あ、もちろん……動けるようになったら、だけど……でも、傷きず跡あととか残っちゃうかもしれないし……だめ、かな……」

「いや、時間さえかければ、傷はすべて消せると思うが……」ベアトリーチェのフォローが適切なのかどうか、もはや誰だれにも判断がつかない。

「そう……なんだ……すごいんだね」ハニーメリーは、すでにきれいに治ち療りようされている右手で胸を押さえた。「……で……返事は……？」

「返・事……」ピンパーネルは我に返ったように、何度もまばたきをした。



　マリアローズは固かた唾ずをのんでピンパーネルを見守った。
だって、さ。

　だって、だって、これって──この返事って、その、何？　好きですつきあってくださいじゃなくて、あの、なんていうか、そういう行こう為いそのものをしようっていう誘さそいに対する答えなわけ

だから、うんって言っちゃったらつまり、えええええええええ？　や、や、やっちゃうってこと？　だよね？　こんなのあり？　公開はまずくない？　せめて非公開がよくない？　二人きりのときとか。とかってより、二人きりのときじゃないとダメでしょ。ダメだってば。

　ピンパーネルは小さく咳せき払ばらいをした。「……考えて・おきマス」

　だよねぇ。

　なんかこう、ハニーも療養中だったりするし、きっぱり断るのもあれだし、とりあえず保留みたいな。妥だ当とうだよね。それ以外ないよね。考えてみたら。うん。とりあえずは、ね。まだいいよね。保留でも。このケースは。でも、僕の場合は、もういいかげんって感じだし。そんなに短くもないし。けっこう長いしね。だけど――、

　元気でね。

　あれってもしかして、微び妙みようじゃなかった……？　自分的にはあれっきりみたいな、そんなつもりだったんだけど、ちゃんと通じたのかな。地味に、てゆうかわりと、そんなにはっきりした言葉でもない――かも？　あいつもあいつで、鈍にぶいところもあったりするし。鈍どん感かんっていうのも、ちょっと違ちがうんだけど。変にポジティブだったりもするし。そのわりには、いまいち押しが弱いんだけど。や、弱くていいんだけどさ。強かったら困るし。

　通じてなかったりして。

　その可能性も――どうなのかな。なくもない……？　それってどうなの、僕にとっては。どうって。どうなんだろ。どうなんですかね。わかんないけど、もうああ
あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。

　思考の波にのみこまれてしまったせいで、ピンパーネルの返答に対してハニーメリーが何を言ったのか、まったく記き憶おくにない。気がついたら、アサイラムの医術士たちと入れ替かわりに病室から出る流れになっていた。

「マリアローズ？」

　肩かたに手を置かれて、びっくりしてそっちのほうを見た。「――えっ。な、何？　どうしたの、リーチェ」

「こっちの台詞せりふだぞ、それは」ベアトリーチェはマリアローズの鼻を軽くつまんだ。「どうしたんだ？　なんだか上の空だったみたいだけど」

「……そ、そお？　まあ、ほら……夜遅おそいしね？　寝ねてて、起こされたし。それで、かな？」

「そうなのか？」

「うん、――あ、先に行ってて」マリアローズはこっちをうかがっていたサフィニアやルーシーらをうながしてから、ベアトリーチェのくすんだ金きん髪ぱつを指で梳すいた。「……なんでもないよ。ほんとに。リーチェこそ、疲つかれてるんじゃない？　モリーがあんなに忙いそがしいってことは、リーチェも同じくらい寝てないでしょ」

「わたしは平気だ。母様よりずっと若いからな」

「いいの？　そんなこと言って。聞いたら怒おこるよ、モリー」

「だって、事実じゃないか。母様にはもっと自覚してほしいんだ。いくら人並み外れていても、人間なんだから限度というものがある」

「たしかに、今はかなりきつそうだね……。あんなに疲れ前面に押しだしまくってるモリーって、ちょっと見たことないかも」

「やむをえないけどな……」ベアトリーチェはため息をついて、マリアローズの耳たぶをさわった。いつだったか教えてもらった話だけれど、なんでも幼いころのベアトリーチェは大の耳たぶ好きだったようで、今でもたまに、寝て起きると自分の耳たぶをつかんでいることがあったりするらしい。「――あ。すまない」

「や、いいけど……やっぱりだいぶ疲れてる？」

「かもな」ベアトリーチェは頬ほおをほんのり赤らめて、自や棄けになったようにマリアローズの耳たぶをいじりつづけた。「……母

様のお気持ちを考えると、正直、つらい。体力的には問題なくても、精神的にな。母様もたぶん、そうなんじゃないかと思う。どんなに頼たのんでも、重い荷物を肩代わりさせてはくれないんだ、母様は」

「性格だしね。こればっかりは。そういうところがないと、モリーじゃないって気もしなくはないしさ」

「愚ぐ痴ちだな。こんなことを話したかったわけじゃないのに」

「いいよ。リーチェの愚痴なら、いくらでも聞くから。──あと、耳も、好きなだけさわっていいよ？」

「そんなことを言ったら、容よう赦しゃしないぞ」

「だから、いいってば」

「よーし……」ベアトリーチェは目を閉じて、ひとしきりマリアローズの耳たぶをもてあそんでから、一つうなずいた。「──いい耳たぶだな。上物だ」

「そ、そお？」

「うん。ああ、でも、本当にこんなことをしている場合じゃないんだ」

「……ハニーのこと？」

「まあ、それもあるんだが──」ベアトリーチェはマリアローズの耳たぶを名残なごり惜おしそうに手放した。「母様が指示したＥＭＦＡとは、緊きん急きゅう措そ置ちとしての応急処置、という意味だ。具体的に言うと、今までの治療をつづければ、動けるようになるまで、まだまだ時間がかかる。これを大おお幅はばに短縮して、できるだけ早く動けるか、動かせるようにする」

　マリアローズは目を伏ふせて、さっきまでベアトリーチェにいじくりまわされていた耳たぶをつまんだ。

　少し、熱い。

「……モリーがそう判断したってことは、ようするに──」

「わたしたちは、移動することになるかもしれない」

「そっ……か」

　半ば覚かく悟ごはしていた。情勢からして、いずれそのときがきてもおかしくない。ただ、アサイラムは事情が特とく殊しゆだから、移動はすなわち大移動になる。

「いよいよ準備が始まるってことだね」

「始まった、と言ったほうがいいかもしれない。こうなったら早いぞ、きっと。母様のことだからな」

「だろうね」マリアローズはベアトリーチェの肩をそっと叩たたいた。「僕も──僕たちも、できるだけのことはするよ」

　ベアトリーチェはマリアローズの手をつかまえて握にぎり、静かに微笑ほほえんだ。「頼む」

同時刻　第二区

　闇やみを、暗闇を、男が、女が走る。

　男に、女に、獣けものたちが追いすがる。

「はいはいはぁーい」「だめですよぉー。逃にがしませんよぉー」「はいはいはぁーい」

　獣たちは人語を喋しやべる。

　人間の姿をしている。

　だが、彼らは獣だ。

　獣たちは男を、女を突つき倒たおし、群がって、荷物を奪うばう。衣類を剝はぎとり、隠かくし持っていた硬こう貨かをとりあげて、一頭の獣が硬貨の数をかぞえているうちに、別の獣が男を撲ぼく殺さつし、女にのしかかる。男も、女も、悲鳴をあげて、人間の言葉で助けを求め、慈じ悲ひを乞こう。しかし、獣たちの耳には届

かない。獣は人間の言葉になど耳を貸さない。獣たちは裸はだかになった男を殺して、裸ら身しんの女を代わる代わる犯おかし、用済みになったら息の根を止める。

「戦利ひぃーん」「分けろよちゃんと」「うるせえ」「死ね」「あ、分けろって」

　一頭の獣が別の獣に飛びかかって、戦利品とやらをひったくろうとする。獣たちは獣同士で揉もみあい、殴なぐりあい、興奮しきって、ついに殺しあう。

「欲、掻かきすぎなんだよ」「なあ」「しかし夜はまだまだこれからです」「なあ」

　獣たちは第二区から第三区を縄なわ張ばりと決め、細い通りや路地を通り抜ぬけて門を目指しているらしい獲え物ものを見つけると、これに狙ねらいをつける。

　獣は、彼らだけではない。他ほかにもいる。大勢いる。出自はさまざまだが、ほんの少し前まで、彼らの大半は悪党バスターではあっても、獣ではなかった。何かが彼らを獣に変えた。あるいは、彼らの中の獣を目覚めさせた。

「はいはいはぁーい」「だめですよぉー。逃がしませんよぉー」「はいはいはぁーい」

　獣たちは、暗がりの路みちに一人の女を見つけて、これを獲物と認にん識しきした。手て提さげ籠かごしか持っていない、薄うす着ぎの、軽装の女で、追い剝ぎの対象としては、おそらくうまみが少ない。わかっていて、獣たちは女を追いかける。

「やるぞー」「俺いちばーん」「俺にばーん」「つっこむぞー」「穴があれば入れたい季節、なんちゃって」「はいはいはぁーい」「逃げんな逃げんなー」「逃げたって無む駄だぁー」「はいはいはぁーい」「わんちゃんわんちゃん」「かわいいメス犬ちゃん」「やらせろよー」

　獣は彼らだ。しかし、彼らは獲物を犬と呼び、自分たちの行こう為いを〝犬狩りストレイツオ〟と称しようして悦えつに入っている。だが、彼らこそ獣だ。

　彼らは人間世界の都合、状じよう況きようなど気にしない。なぜ

人間たちが街から逃げだそうとしているのか、彼らは考えない。ただ、彼らの前に獲物がいる。金目の物を持ち歩いて、そのせいで動きが鈍にぶっている、馬ば鹿かな獲物が。いつもは用心に用心を重ねて、人通りがない道など決して歩かないのに、今は襲おそってくれと言わんばかりにそのへんをうろついている、無防備な獲物が。目の前に獲物をぶら下げられたら、獣たちは我が慢まんできない。何がどうしてこうなっているのか。そんなの知ったことか。糞くそ食くらえだ。明日あしたは明日の風が吹ふく。風なんぞ吹かなくたってかまうものか。風が食えるか、うまいのか、やれるのかよ、入れる穴ついてんのかよ、それって気持ちいい？　ねえ？　気持ちいいの？　どうなの？

「はいはいはぁーい」「俺、俺、チ●ポしゃぶらせたい」「かまれるぞー」「それでもしゃぶらせたい」「俺はじゃあ後ろの穴でいい」「やりたい」「やりたい」「やりたい」「やりたーい」「待てよ、メス犬ちゃーん」「待ってくれよー」「はいはいはぁーい」

　獣たちは女を追う。女はたぶん、若い。少女にすら見える。それで余計に、獣たちは欲情している。獣たちは見境ないが、好みがないわけではない。獣たちは今夜、もう何人もの女を犯した。どれもろくなものではなかった。あの女は若い、若すぎるかもしれないが、きっと上物だ。ひらひらのワンピースなんか着て、帽ぼう子しなんぞ被かぶってやがる。普ふ通つうの女だ。そういうのが、一番いい。そういう女をめちゃくちゃにするのが、最高にいい。

　ところが、女はけっこう足が速い。一向に獣たちとの距きよ離りが縮まらない。それどころか、少しずつではあるが、離はなされつつある。

「ちょっとちょっとちょっと、本気で逃げるなよー」「こっち、息切れちゃうって」「なんだよなんだよなんだよー」「はあはあはあはあ」「そろそろつらいそろそろつらい、俺、腹痛い、腹」「逃がすかぁー」「はあはあはあはあはあ」

　女は、だが、止まるわけもなく、足をゆるめもしない。獣たちが人間のふりをして、人間の言葉でいくら叫さけんでも無駄だ。

　細い、暗がりの道を、女は駆かけ抜ける。

　第二区から第一区へ。この先だ。もうすぐ第一区だ。

　女はとうとう第一区に足を踏ふみ入れた。

　その途と端たん、女は道を横切ろうとしていた男とぶつかった。「きゃっ」「──ひょっ……!?」

　逃のがしかけて、転がってきた幸運に、獣たちが喜び勇んだ。獲物が一いつ匹ぴき増えて、その獲物がもとからの獲物の逃とう走そうを阻そ止ししてくれたのだから、投げてもいない、どこからか飛んできた石が二羽の鳥を打ち落としたようなものだ。獣たちは勢いづき、思い思いの奇き声せいを発しながら、やや萎なえかけていた足に力をこめた。

　女は、だが、弾はじき飛ばされることも、逆に男を突き飛ばすこともなかった。男はとっさに女を抱だきとめていた。「──アーニャちゃんやないか……!?」「あなた、どうして──」

「アーニャ」「アーニャ」「アーニャ」「アーニャ」「アーニャ」「アーニャ」「アーニャ」

　獣けものたちは駆けながら、女の名前らしい「アーニャ」を連呼して、牙きばを剥むく代わりに得物を抜いた。

「話はあとや！」男は女を背に庇かばい、腰こしに吊つるしてあった斧おのを両手に握にぎりしめた。「──アーニャちゃんに手ぇ出そうとしくさりよって、ジブンら、覚かく悟ごはできとんのやろな……！」

「アーニャ！」「やりたい！」「アーニャ！」「やらせろ！」「アーニャ！」「アーニャ！」

「話が通じんのかい、クッソボケどもぉッ……！」

　男は一人で、獣は五頭もいる。獣たちは微み塵じんも恐おそれを感じていない。牙代わりの得物が男を引き裂さき、ずたずたにすることを疑っていない。その逆の結果など、獣たちには想像できない。想像は獣の習性ではない。しかも、彼らは本物の獣より慎しん重ちようさに欠け、本能に磨みがき抜かれた無駄のない知性を持たず、ただ欲望に振ふりまわされているだけの、所しよ詮せんは紛まがい物でしかない。実のところ、彼らは獣ですらない。

「我流──」

男は獣でも、紛い物でもない。両手に握りしめている二本の変形斧は、野や獣じゆうの牙ではない。紛い物たちの呼吸、動きがばらばらであることに、男は気づいている。タイミングも、速度も、位置取りも、何もかも、一いつ致ちしてもいなければ、意図的に乱されてもいない。

男は飛びだし、一人目の紛い物をすれ違ちがいざまに斬きり伏ふせて、その直後、二人目の紛い物を蹴け倒たおし、三人目の紛い物のどたまをかち割ってから二人目にとどめを刺さして、四人目の紛い物の右みぎ腕うでを斬り落としながら五人目の紛い物の左腕を叩たたき斬った。そうして一回転、四人目と五人目の首を同時に斬り飛ばし、血ち飛沫しぶきを浴びる前に跳とび退のいたときにはもう、紛い物はきれいに一いつ掃そうされていた。

「──飛とぶ鳥とり浮うき島しま疾しつ風ぷう烈れつ斬ざんンンンンヌ……」男──否いな、漢おとこは、両手の斧を血ち振ぶるいして、首をひねった。「……長いか。長すぎか。技わざ名めい。いや、そういう問題やあらへん気も……どうもしっくりこおへんな。むむむむぅ~ん……」

「……どうして」アーニャ・クルチバは唇くちびるを噛かんでうつむいた。「なぜ、こんなところに」

「腐フッ……。正直にゆうで」漢は振り向いて肩かたをすくめた。「偶ぐう然ぜんや。こないなときはな。まずは情報やろ。できるだけぎょうさん、正確な情報集めるために、あっちこっち駆けずりまわっとってな。さっきまでクァラナドにおったんやけど、その帰りっちゅうわけや。アーニャちゃんは、──仕事中か。愚ぐ問もんやな」

「助けてくれなんて、頼たのんでいませんよ。ちゃんと、逃にげきれたんです」

「ほんでも、わしは黙だまって見とられへん」

「余計なお世話なんだから」

「そうやとしても、指ィくわえて見とるなんて、わしにはでけへん」

「どうして──」

「惚ほれとるからや」漢は会心の決め顔を作ってみせた、しかし──、

　常夜灯はだいぶ遠くにあるきりで、あたりは暗い。おまけに、アーニャは漢から五メーテルくらい離れている。暗視鏡でも装着しないかぎり、表情など見分けられるわけがない。というか、それ以前の問題だ。アーニャは下を向いている。

　漢はそんなことにも気づかず、必死で慣れない決め顔を維い持じしつつ、言葉を重ねた。「惚れ抜ぬいとるからや」

「……馬ば鹿かじゃないの」アーニャは握りしめた拳こぶしを自分の腿ももに押しつけた。「似合わない。ぜんぜん、似合わないんだから。そういう台詞せりふも、何もかも。恰かつ好こうつければつけるほど、恰好悪い。すっごく！　恰好悪いんだからっ……！」

　漢はよろめきかけ、胸を手で押さえそうになったが、なんとかこらえた。な、な、な、なんのこれしき、やでえ。よくあることやないか。こんくらい、屁への屁のもへじや。ちゃうか。屁のカッパッパや。ん？　これもちゃうか？　何でもええわ。

　ともかく、あれや。

　アーニャちゃんは素す直なおになれへんだけで、本心からゆうとるわけちゃう。そらそうやろ。このわしが恰好悪いて──恰好悪……いや、わしが恰好ええかどうかっちゅうたら、そら微び妙みようっちゅうたら微妙かもしれへんけども、そのために努力はしとんのやけども、問題はソコやなくてやな、漢はいかなるときも耐たえてナンボっちゅうことや！　バビーンとなッ！　ガッシーンとやで……！

「恰好悪うたってええ」漢はもはや決め顔を崩くずそうにも貼はりついたように微動だにせず、声を発するたびに口の周りの筋肉がギシギシ変な音を立てた。泣きたかったが、一いつ滴てきの涙なみだも出てこなかった。「恰好つけるのんが目的やないわけやからな……！」

「じゃあ、何なの……!?」

「愛やッ！　愛しとんねん！　アーニャちゃん、ジブンのことをッ！」

「気持ち悪いっ！」

「ぐほぉっ」と思わず口にしてしまったが、漢はすぐに態勢を立てなおした。立てなおしたつもりだ。しっかし、アーニャちゃん、手て強ごわいなんちゅうモンやないでしかし。つきあい深ふこうなるごとに、どんッどん舌ぜつ鋒ぽう鋭するどうなってきとるような……？　もしかして、Ｓやったりして？　稀まれに見る、ドＳやったりして……⁉　否いやァッ！　アーニャちゃんはただ、ちょっぴぃーり照れ屋さんなだけやァッ……！　──たぶん。

「き、気持ち悪うてもなあ！　わしはやめへんでえ！　何があろうと、アーニャちゃんを愛することを、やめたりせえへん……！」

「しつこいっ！」

「ごふっ」

「粘ねん着ちやく質しつ！　変質者！」

「だごっ」

「変態！　頭、どうかしてるんじゃないですかっ⁉　見るからにおかしいけど！」

「ぎべっ」

「わたしのことなんか放っておいて、治ち療りように専念してください！　きっと生まれつきで慢まん性せい的な異常だから、一生治らないと思うけど！」

「なごらっ」

「だって、変！　変すぎる！　完全な異常者！　わたしなんかを──」

「わたしなんか、て！　そ、そないな言い方すんなやっ！　卑ひ下げしたらあかん！」

「そうね！　わたしがわたしを貶おとしめたら、わたしなんかのことが好きなあなたも、同時に低くなる！　それ以上、低くなりようがあるなら、見てみたいけど！」

「きっつぉーう」漢は両手で左右の頬ほおを挟はさんだ。「うっひょーう。きっくぅーう」

「すぐそうやって、おちゃらけて！　人が真しん剣けんに話してるのに！　人間性に欠けつ陥かんがあるとしか思えない！」

「……ほい。ソノトオリデス」

「反省してみせても、すぐ忘れてけろっとしてるし！　記き憶おく力がないんでしょう⁉」

「……ほい。物覚エノ悪サハ折リ紙付キデス」

「だから……だから！　こうやってわたしがひどい言葉をぶつけても、あなたは……！」

「……アーニャちゃん」

「あなたは……！」アーニャは目の周りをごしごしこすった。「あなたは……！　とっても罵ののしり甲が斐いがありすぎて、おかげで、わたしは隠かくれていた自分の本ほん性しように気づいて──じゃなくて」

「むぉ……？　今、なんやおかしなことを……」

「言ってない！」

「……ほい。ソノトオリデス」

「あなたは、あなたは……！　お魚みたいな顔してるくせに！」

「そこ、いらんわ……」

「はあっ⁉」

「……申シ訳アリマセン。口ガ滑すベリマシタ。コノ口ガコノ口ガコノ口ガコノ口ガコノ口ガ」

「毎度、毎度、冗じよう談だんも滑りまくってるけど、あなたは……！」

「……ソノトオリデス」

「あなたは！　あなたは、こんなわたしでも──」

「そ、そっ、そ、そぉーらそうやで!?　いったん愛しちゃったんだぜベイビー!?　なんやこの言こと葉ば遣づかい、ええとええと──せや、いったん愛してもうたんやからなッ！　漢おとこは節を曲げたりはようせん！　愛した女は愛して、愛して、愛し抜くッ！　どんなアーニャちゃんでも、アーニャちゃんはアーニャちゃんや！　ぜぇーんぶひっくるめて、アーニャちゃんや！　受け止めるがな、受け容いれるがな、どぉーんとこいやでッ！　わしはッ！　一いつ切さいの誇こ張ちようなく断言したるわッ！　アーニャちゃんの何もかもが愛いとおしぃーてたまらんッ！　アーニャちゃんの全身が、全ココロが、言葉の一つ一つ、髪かみの毛、爪つめの垢あかまで、愛しとるっちゅうねんッ……！」

「ほんっと、きもいっ……！」

　さすがにこのタイミングでこの一言は効いた。漢は今度こそぶっ倒たおれそうになったが、その前にアーニャがぶつかってきた。

　違ちがう。

　しがみつかれた。

　アーニャは漢を強く、きつく抱だきしめて、漢の胸に顔を埋うずめた。「……ひどいこと、たくさん言って、ごめんなさい」

「も、無問題モーマンタイ」

「なんで龍州語なの？　どうしてそこまで頭の出来が残念なの？　お魚に似てるから？　それとも、死ぬの？　ねえ、脳のう細さい胞ぼうが今にも死に絶えそうだから、そんなに間の抜ぬけたことしか言えないの？　死んじゃうの？　ごめんなさい、死なないで……死なないでっ……！」

「し、死なんてっ！　わしは死なんっ。死んだりせえへんから、な……？」

「好き」

　徹てつ底てい的に叩たたき落とされてぶちのめされ、実は心のほうが若じゃつ干かん死に絶えそうになっていたところに、この短い、単純な、誤解のしようない言葉は沁しみた。見る間に沁みわ

たって、漢を幸福の絶頂へと導いた。

「カタリさん。好きよ。ごめんなさい。好きなの」

「わ、わしも──」

「言わないで。あなたの発音は美しくないから。言葉が汚よごれるから、今は何も言わないで」

「ス、スビバセン」

「ただ、抱いていて。もう少しだけ、このままで──」

　漢は言われたとおり、愛する女の身体からだを力いっぱい抱きすくめた。

　ホンマ、思うたより難なん儀ぎな子ぉやけど、言葉の鞭むちはものっそいきっついけども、しかも激化の一いつ途とをたどっとるような気もするんやけども、わしはほれ、マリアローズあたりに鍛きたえられとるし、大だい丈じよう夫ぶやし、むしろ癖くせになって──はない、ない、それはないわ、せやけど、ちょぴっとだけ快感──ではない、ない、それもないけども、好きや。アーニャちゃん。黙だまっとれっちゅう命令やから口には出さへんけども、わし、ジブンのことがむっちゃ好きや。一等好きや。何がなんでも、大好きや。

　　　　　　　　同日四時四十二分　マキシマムＡＭドラゴン・ストリート

　朝焼けに染められたマキシマムＡＭドラゴン・ストリートを、一台の馬車が疾しつ駆くしている。

　まっすぐひた走るというわけにはゆかない。エルデンでもっとも広いこの大通りも、生きている人間と死んだ人間、馬車、その残ざん骸がい、馬の死体でごった返している。北進して北ほく斗と門に近づけば近づくほど混在の度合いはいや増しに増し、やがては完全に行き詰づまるだろう。

　馬車の乗客も御ぎよ者しやもそんなことは予想しているが、列の

最さい後こう尾びに並ばなければ、いつまでたってもエルデンの外には出られない。他に方法がないのだ。であれば、帝てい国こく軍が押しよせてくるという南の反対、しかも、最大の道みち幅はばを誇ほこるマキシマムＡＭドラゴン・ストリートを突つっ切きって北斗門から出るルートを選せん択たくする以外ないではないか。当然、同じように考える者も多いだろうが、それでもこのルートが最善のはずだ。

　御者のオイゲン・〝クコ〟・リバースはその熟練した腕うで前まえを買われて、サドモン元男だん爵しやくとやらに雇やとわれた。

　クコは「走り屋」と称しようされる雇われ御者の一人で、車体の振しん動どうを感じながら馬を御し、最大限の速度を体感することのみを喜びとしている。ふだんは大陸南北横断道や大陸東西縦断道を休みなく突っ走っているのだが、たまたまエルデンで仕事が途切れて酒さけ浸びたりの休きゆう暇かをとっていたところ、今回の騒さわぎが起きた。クコにとってエルデンは、割のいい仕事を見つけやすい街ではあるものの、それ以上でもそれ以下でもない。戦争になりそうだから、さっさと抜けだして遠くへ行きたいが、徒歩はごめんだ。どうせなら馬車に乗るより走らせたい。そんなわけで急きゆう遽きよ雇い主を探し、二時間で見つけた。

　それから一晩で準備を整え、今朝出発したのだが、トレイン公国レインドロー工こう房ぼう製四頭立てのまだ新しい馬車は悪くない。馬もそこそこの良馬がそろえられている。ただ、こうも路面の状じよう況きようがひどくて、障害物が多いと、走り屋としてはまったく楽しくない。

「しかも、そのうち止まらなきゃならねえんだろ……」クコは嚙かみ煙草たばこをくちゃくちゃやりながら、胡ご麻ま塩しおの髭ひげがこびりついた赤黒い顔をゆがめた。「馬車が止まってどうすんだ。馬車は走るもんだぞ、ちくしょう。こんな仕事、受けるんじゃあなかったな。どの馬車も同じか。同じなんだろうけどよ。まあ、ひいこら歩く気にはなれねえし、しょうがねえんだ。まじで。つうか、俺の尻しりの皮がなんで分厚いと思ってやがる。御者席に座りつづけるためじゃねえか。ああ、やってらんねえ。そもそも、こんなときにこんな街にいたのが運の尽つきってやつだよな。天下のクコ様ともあろう者が──」

　クコは仲間内では「垂れ流し野や郎ろう」というありがたくない異名で呼ばれることもある。馬車を操あやつっている間、ほとんど

ずっと、絶え間なく何か呟つぶやきつづけているせいだ。

　そのクコが口をつぐんだ。喋しゃべっている場合ではなくなったからだ。

　重い破は壊かい的な音がした。車体の側面か。不規則で不快な振動がクコの尻を直ちよく撃げきした。クコはとっさに歯を食いしばって手た綱づなを引いた。まずいと感じてすぐにゆるめたが、だめだ。車輪か。左の前輪が何かを噛んでいる。回らない。止まっている。

　クコはふたたび手綱を引き絞しぼったが、すでに馬車は左側に曲がりながら傾かたむきつつあった。ド、ドド、ドドド、ドドと突きあげてくる衝しよう撃げきが尻穴に響ひびく。箱形の座席で雇い主たちが悲鳴をあげている。クコは、でも、無言だ。上の歯と下の歯をきっちり噛みあわせて、前方と左右に視線を巡めぐらせながら、さすがに落ちついてはいられないが、これは横転する、と判断していた。もう二十五年もの間、馬車を走らせているから、事故は何度も経験している。こいつはだめだ。間違いない。転ぶ。

　こんなとき、御者席の造りがちゃちだと、御者は真っ先に放りだされて、地面に叩きつけられるか、馬か車体に踏ふみ潰つぶされる。さいわい、この馬車は高速仕様で、なかなか上等だ。御者の身体を御者席にしっかりと固定できる安全留め具が備わっている。ちゃんと備わっているのに、窮きゆう屈くつだからと安全留め具を装着しない間ま抜ぬけは長生きできない。走っているかぎり、確率が低くても事故はつきものだし、いつか必ず遭あうと考えなければいけない。

　クコは間抜けではない。もう手綱を握にぎっていても無む駄だだ。手放して、両腕で頭を抱かかえ、できるだけ身を縮ませる。用意はできた。できた、と思った途と端たん、恐きよう怖ふは消し飛ぶ。さあ、くるぞ。三、二、一。

「──ウウウッ……！」

　噛みしめた歯がガタガタ鳴って、喉のどの奥から声がもれた。クコは我知らず目をつぶっていた。ひどく揺ゆさぶられた覚えはあるのだが、一いつ瞬しゆんだった。腰こしだの背中だの胸だの首だの、どこもかしこも痛いというより痺しびれている。力が入らない。たぶん、馬車は横よこ倒だおしになっていて、クコの身体は安

全留め具がなければ落っこちている。留め具に固定されている箇か所しよがすさまじい痛みを発しはじめた。

　クコは目を開けた。首を動かすと、抜けてしまいそうな感じで、こいつはやばいと思った。おそらく、首の筋がいっている。それでも眼球を動かして周りの様子をうかがうと、誰だれかが馬車に近づいてくる。救助か。

「……なわけ、ねえな……」

　ここはエルデンだ。ついてねえ。ぼやこうとしたら、水色の髪かみを逆立てたごつい男がクコのそばにしゃがんで、首を傾かしげた。

「おーい。大丈夫かぁー？」

　エルデンなんだけどな。このくそったれな街にも、たまには親切なやつがいたりするのか。信じられないが、信じようとしたのだろうか。

　クコは口を開いた。「ああ……」

「知らねぇーよ」

　クコが最後に聞いた人間の声がそれだった。水色髪の男は笑え顔がおで立ちあがりながら、クコの喉のど頸くびに薄切り斧スライスアツクスを叩たたきこんだ。

　こうやって走り屋、垂れ流し野郎のクコを殺した水色髪の男は、ＤＩＥという名のクランに所属していて、仲間からは〝ハネモン〟と呼ばれていた。ＤＩＥはいわゆる悪党バスターたちのクランで、他国でいえば犯罪結社ということになるのだろうが、法が存在しないこの国では犯罪も糞くそもない。ハネモンはＤＩＥの若衆頭ヤングマンの一人だ。ＤＩＥは空中分解しかけているが、生きのいい若衆頭ヤングマンたちはやる気のある気のいいやつらをとりまとめて、ギャプ・ド・レエや平面爆弾フラットボンバー、カラナビス、ベス公といったクランの若手連中と連れん携けいし、〝強盗団ロバーツ〟を結成して、荒あら々あらしくきわめて生産的な血湧わき肉躍おどる活動に精を出しはじめていた。

　ハネモンが率いる強盗団ロバーツ〝ピーナッツ17ブルース〟は現在のところ総勢二十八名、ＤＩＥとカラナビス、ベス公の混成部隊

で、とりあえず金持ちの馬車を専門に狙ねらっちゃおうかなどと考えているところだ。

「かーっ……」ハネモンは喉にからんだ痰たんを御ぎよ者しやの生首に吐はきかけた。「ぺっ」

　そうして薄切り斧スライスアツクスを肩かたに担かつぎあげ、横倒しになった馬車に群がっている陽気な手下どもを眺ながめながら「ライライライライ」叫さけんでいると、あー俺生きてるって感じがする。ハネモンは馬ば鹿かじゃないので、ラフレシアが攻せめてきてエルデンも陥かん落らくするかもしれなくて、それってちょっとやばいかもしれないということはちゃんと理解していたが、だからといってこの大混乱、混こん沌とんとした状じよう況きよう下かはいまだかつてない稼かせぎ時だし、今を逃のがしたらこんな機会は二度と巡ってこないだろうし、そんなチャンスを逃すなんて正気の沙さ汰たじゃないし、仮にエルデンが帝てい国こくに占せん領りようされたとしても、そうなったらそうなったで稼ぎようはあると思っていた。まだ若くて猛たけ々だけしい狼おおかみみたいなハネモンは自信にあふれていた。二十六年生きてきて、何度も危ない橋を渡わたってきたし、この先も必ずなんとかなる。だいたい俺ってどんな抗争でいりでも死にそうな怪け我がとかしたことねぇーし、でもビビリなわけじゃなくて戦やるときゃ最前線だし、それなのにヤバイ傷一回も負ったことねーってことはそうとうな強運の持ち主で、そんな俺の前ぜん途とはまぶしくて目とか開けてらんねーくらい明るすぎるに決まってんだっつーの。

「ライライライライ。ライライライラー。ライライライライ。ライライライラー」ハネモンは叫びながら跳とびはね、身体からだをくねらせて踊おどり狂くるった。もっと下したっ端ぱのころは奪うばったり剝はぎとったりする作業も自分でやったが、今はそのへんは手下どもの仕事だと心得ている。金だの何だのは、手下どもからあとで徴ちよう収しゆうすればいい。

　ハネモンは荒事担当だ。たとえば、さっき走行中の馬車の車輪めがけて頑がん丈じような鉄製のぶっとい投なげ槍やりをぶちこんだのはハネモンだし、もし腕うで利ききの護衛でもいれば、ハネモンは率そつ先せんしてそいつを片付けようとするだろうし、そういう勇姿を見せつけていれば、手下どもは喜んで収穫の何割かをハネモンに差しだすだろう。つまり、俺はみんなを喜ばせてやってんだよ。これは喜びのダンスなわけよ。喜びに満ちあふれた男なわけよ。俺って最高。

「ライライライライ。ライライライラー。ライライライライ。ライラ──」ハネモンは唐とう突とつに口をつぐんで、歓かん喜きのダンスを中断した。何？　野性の勘かん？　てやつ？　違ちがう？　違うか。ただ単に、視界に入っただけだ。

　それは最初、光としてハネモンに認にん識しきされた。

　銀色の輝かがやきは、自由を愛して自由を謳おう歌かしている生きつ粋すいのエルデン市民に、いつだって反感、憎ぞう悪お、警けい戒かい、そして恐怖を催もよおさせる。しかし、ハネモンはそんじょそこらの弱気ベイベーどもとはモノが違うので、銀色のボケナスどもを恐おそれたりしない。やつらとは何度かやりあったことがあるし、同どう輩はいや手下どもが何人も殺やられたが、ハネモンは深ふか傷でを負わされたことすらないから、意外とたいしたことねーんじゃねーのと思っている。

「きたぞきたぞきたぞおいでなすったぞぉこら！　やるぞやるぞ野や郎ろうどもっ！　迎げい撃げき準備迎撃準備っ！」ハネモンは血走った目で銀色の一団を睨にらみつけたまま、薄切り斧スライスアックスを頭上で振ふりまわした。「──きやがったきやがった、クソ秩ちつ序じよのクソ番人どもがよぉぉぉ……！」

　手下のうちのいったい何人がハネモンの命令どおりただちに迎撃準備を整えたか、そんなことは気にしていなかった。ハネモンの戦せん闘とう哲てつ学がくは簡素シンプルだ。戦やれるうちは思いきり戦って、やばくなったら一目散に逃にげる。小難しいことを考えるやつは馬鹿だ。馬鹿はたいてい死ぬ。

「ライライライラララライライライラララライライライライラララライライ」ハネモンは薄切り斧スライスアックスをひっさげて駆かけだした。番人どもはすでに隊たい伍ごを組んでこっちへ向かってきている。あいつらは見た目時代錯さく誤ごの鎧よろい兜かぶとに身を包んで盾たてまで持っているし、しかもそれがやたらと高性能ときているから、そう簡単には殺せない。自分は死ににくいとわかっているものだから威い張ばっていられる、卑ひ怯きようで下げ劣れつなケツ毛にも劣おとる鼻毛未満のクソなのだとハネモンは思っている。あんなやつらにこの俺が殺とられるわけねーんだよ。つーか、あいつらの隊列の一番前というか、隊列を無視して一人だけむちゃくちゃにこっちめがけて突つっ走ぱしってくる、あの妙みような顔面から頭頂部までを覆おおう面のようなものをつけている番人は、──あれってもしかして、あれか。

　死神を模した面。

　秩序の番人二代目総長にして現総長代理〝死神〟羅ラ叉サか。

「ライライラララライ俺俺俺の！　ライラララライライ俺の獲え物もの！　ラララライラララライ俺俺俺のライラララライライ俺の獲物……！」ハネモンは歌いながらこの感覚は何かに似ていると思った。あれだ、あれ。二時間くらい焦じらした末に射精する、その寸前の感じ。あれにそっくりだ。出る。出る。出る。出ちまう。いっちまう。くるぞ。死神が。行くぞ。俺が。ハネモン様が。もうちょっとだ。うひ。うひひひ。うは。いく。いく。いくーッ。

「ハッッッ……！」ハネモンは薄切り斧スライスアックスを斜ななめに振りあげようとした。

　どういうわけか、目の前に死神の面がある。

　本当に、すぐ目と鼻の先に。

「あ、れ……？」

　だって距きよ離り──もっと遠く　近すぎ　なわけ　いきなりそんな　待っ──、

　ハネモンは振り返った。

　衝しよう撃げきがあった。

　俺がいる。

　首から上がない。

　わけわかんねー。

　血みたいのとか、噴ふきだしてるし。

　だいたい、俺の首から上、どこ行ったんだよ。あ──、

　これか。

　意識が遠のいた。急速に。落ちる。どこかへ落ちてゆく。

　逃げなきゃ。

　だめだ。やべえ。逃げないと。

　勝てっこねえ。あんなの。知らなかった。こんなに強いなんて。逃げないと。

　だけど俺　もう

　首　だけ―。

「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」ハネモンの素っ首を叩たたき斬きってその脇わきを駆け抜ぬけた死神は、面の奥で無意識に低い唸うなり声をもらしながら、もう次の標的に狙ねらいを定めていた。

　その手に握にぎられたるは、あまたの鍛か冶じ士が目指していまだ到とう達たつしえぬ高い高い境地にいる刀鍛冶〝人ならデスヒざる者ユーマン〟ツギ・イデルの作とされる大刀「夢む天てん全ぜんーいつ」。刀身も拵こしらえもきわめて無骨、無愛想だが、人斬りの目にはただそのためだけに鍛きたえられ、生みだされた刀だということは一目瞭りよう然ぜんだ。正確な作年は不明だが、明らかに古刀の部類に入る。それにもかかわらず、欠けず、折れず、曲がらず、乱れず、狂くるわず、ひたすら斬れる。

　ある日、死神自ら作った義に背そむく者たちの血だまりの中に、抜き身の夢天全一が転がっていた。死神は魅み入いられてこれを拾いあげ、以後、愛刀の一振りとなった。

「忌忌」

　死神の前に立ちふさがる者などいなかった。敵は早くも完全に浮うき足あし立だっていた。しかし、死神が容よう赦しやするわけもない。その理由がない。

　悪即そく斬ざん、悪なれば即すなわちこれを斬る。これが我らの義である。

　我らは義によって悪を斬る。

　義に背く者を斬る。

　我らを阻はばむ者を斬る。

　斬る。斬る。斬る。

　我は義の死神である。

　死神は及および腰ごしでかかってこようとした悪二名の首を刈かりとって、逃げ腰になっていた悪一名の両りよう腕うでを斬り落とし、踵きびすを返した悪一名の首を後ろから斬り飛ばした。

　死神は飛んだ。

　飛ぶように奔はしった。

　斬った。

　吹ふき渡わたる風のごとく斬った。

　悪九名を斬ったとき、残りの悪が動きを止めた。悪だけではない。行き交かう人々も足を止めて息をのんだ。

　死神は夢天全一を中空に突き立てて、今さら命じた。「──悉ことごとく殺せ」

「応」「応」「応」「応」「応」「応」「応」「応」「応」「応」「応」「応」「応」「応」

　ようやく死神に追いついた隊士たちが、声をそろえて応こたえながら馬車の周辺にいる悪どもに襲おそいかかっていった。

「くだらん」死神は低く、低く呟つぶやいた。「痴しれ者ものどもが。しかし──」

　死神は北に視線を投げかけた。このマキシマムＡＭドラゴン・ストリートの果てには北ほく斗と門がある。門一帯は人、馬、車が押しあいへしあいしていて圧死する者多数、死し骸がいは間もなくめちゃくちゃになる有様とのことだから、悪事を働かんとする悪どもも近づくことができないだろう。そして、それは秩ちつ序じよの番人にしても同じことだ。

　強盗団ロバーツだか何だか知らないが、痴れ者どもが騒さわぎだせば、我ら秩序の番人が黙だまらせる。可か及きゆう的てき速すみやかに。手の届く範はん囲いならば。

　届かなければどうする。手が足りなければどうする。

「俺は考えぬ」死神は奥歯を噛かんだ。「ヨハン、貴様の仕事だ。どうにかしろ」

　　　　　七時二十四分　銀の砦

「──そうか」ヨハン・サンライズは執しつ務む机に視線を落として、右手の中指で眼鏡めがねを押しあげた。「モリー・リップスは決断したのだな」

「ええ」琺瑠フオール副長は目を伏ふせてうなずき、書類の束を執務机に置いた。「朝一番で報しらせがきました。すでに仮の支し援えん計画、実じつ施しにあたっての問題点、その対策等はまとめてあります。ただ、状じよう況きようの推移が急で、錯さく綜そうしていて、確定できる条件が決して多いとは言えない。どれだけ準備しても万全にはならないでしょうし、臨機応変に対処せざるをえないわね」

「我々がもっとも留意すべき点は──」ヨハンは書類を手にとり、琺瑠の隣となりに立っているマシュー・シュナイデル副長、二人の後ろに並んでいる無名隊の隊長たちを撫なで斬りにするように見た。「人的資源の集中だ。果たさねばならない目的は数多いが、優先順位をつけ、切り捨てるべきは切り捨て、可能なかぎり縒よりあわせる」

　一同、押し殺した声で応じてうなずいた。

　ヨハンは椅い子すの背もたれに体重をかけて瞑めい目もくした。「──判断すべきことは私が判断する。三十分くれ。いや……二十分でいい。琺瑠副長」

「はい」

　瞼まぶたを押しあげると、琺瑠と目があった。顔色がすぐれない。少しやつれている。疲ひ労ろうはもちろんあるだろうが、それだけではあるまい。

「個人的な用件がある。残ってくれないか。時間はとらせない」

「わかりました」

　他ほかの者たちが退室して、二人だけが残った。

　ヨハンは椅子から立ちあがって執務机を離はなれ、客人を応接するために設しつらえたソファーに腰を下ろした。琺瑠も無言で隣に座った。

　わずかに腕を動かしただけでふれあう距きょ離りだった。たったそれだけの距離が遠かった日々を思うほどのゆとりもない。いまだに飛び越こえなければならない気分にさせられる。だが、飛び越えられる。

　ヨハンは右手をのばして琺瑠の左手を握った。

　傷つけてしまわぬように、そっと。

「体調はどうだ」

「悪くないわ」琺瑠は微笑ほほえんでヨハンの手を握りかえした。

　強く。

「君のことだ。無理をするなと言っても無む駄だだとは思っている」

「ええ、そうね。多少無理はしてしまうかも。あなたほどじゃないにしても。けれど、無茶はしない」

「そうしてくれ」

「まだ──」琺瑠はうつむいて、右手を腹部にあてた。「まだわからないのよ。今の段階ではどうなるか」

「説明を受けた。理解はしているつもりだ」

「大変なときだし、気き遣づかいは無用だから」

「そんなわけにはいかない」ヨハンは右手に力をこめた。「不可能だ」

「そう」

「ああ」

「嬉うれしいのよ。本当に。でも――」

「すまないが、この件に関して君の意向を汲くむつもりはない。おれは執しゅう念ねん深くて頑がん固こだ。知っているとは思うがね」

「わたしが知っているのは、あなたが意志の強い人だということよ」

「大事にしてくれ」

「気をつけるわ」

「大事にさせてくれ」

「……そんなことを言われて、拒こばめるわけ、ないじゃない」

「拒まなくていい。拒ませはしない。うなずく以外の返事はいらない」

「じゃあ、これは？」

　琺瑠は素す早ばやくヨハンの唇くちびるに自分のそれを押しつけ、すぐに離した。

　数秒、見つめあった。

　ヨハンは左手でぎこちなく眼鏡の位置を直した。「……了りよう解かいと受けとっておく」

　琺瑠は小さく吹ふきだした。

「何だ。なぜ笑う」

「だって」

「とくにおかしなことは言っていないはずだがね」

「そうだけど」

「そうだろう」ヨハンは眉まゆ根ねを寄せかけて、こらえた。

　逡しゅん巡じゅんのあとに手放そうとした珐瑠の左手に引きとめられた。

「……もう少しだけ。あと五秒でいいから」

　蚊かが鳴くような声だった。

「七秒だ」

　声には出さず、ゆっくりと数えた。

　一。

　二。

　三。

　四。

　五。

　六。

　━━七。

「あと……」ヨハンは短いため息をついた。「五秒」

「六秒」と珐瑠が言った。

　　　　　十三時五分　第五区

　道みち端ばたで血ち塗まみれの男に馬乗りになっている男が両りよう腕うでを振ふりあげて吼ほえたところに、別の男が後ろから飛び蹴げりをかました。そのすぐそばで酒さか瓶びんを抱かかえた半はん裸らの女が眠ねむりこけている。せいぜい十二、三歳の子供たちが叫さけんだり奇き声せいを発したりしながら殴なぐりあい、蹴りあっていて、制止する者がいないのはエルデンなので当然かもし

れないが、ほとんど注目されてもいないのはやはり異様だ。大荷物を背負ってせわしく歩いたり走ったりしている男女の姿がやたらと目につく。そうでなくてもすごい人出なのに、荷物の量のせいで一人一人が占しめる空間が大きくて、その結果、道が狭せばめられる。ぶつかる者たちがいる。押しのけようとして文句をつけられ、言いかえしたり手を出したりして、揉もめ事ごとを起こす者たちがいる。ぶちまけられた荷物に群がる貧しい子供たちが蹴飛ばされ、意地汚きたない大人どもが金目の物をかき集める。街頭で声を張りあげ、自由の終しゅう焉えん、世界の滅めつ亡ぼうを唱える酔よっぱらいたちは、誰だれが呼んだか空談士チヤツターと称しようされているらしい。女と見ればすがりついて、笑いながら、あるいは涙なみだながらに「頼たのむやらせろ、一回でいいからやらせてくれ、ちょっとでいいから先っぽだけでいいから入れさせてくれ」とか何とか頼みこんでいる男たちは、いったいどういうつもりなのだろう。やりたければとっつかまえて暗がりに連れこんで暴行するのがエルデン流だから、今までああいう連中にはお目にかかったことがない。全裸でそこらをうろついて、女に飛びついては肘ひじ鉄てつをお見み舞まいされている男たちもけっこういて、ああいう手合いはそれほどめずらしくもないが──いや、そうでもないか。夜のクァラナドの外れあたりならともかく、真っ昼間の第五区ではめったに見かけない光景だ。しかも、数が多い。まるでああいう馬ば鹿かげたことをするのが流行してでもいるかのように、あまりにも多すぎる。多いといえば、顧かえりみられることのない死体の数も多い。誰も彼も殺気立っているか、浮うわついているか、頭がぶっ飛んでしまっているみたいだ。誰も彼も、といったら言い過ぎか。よく見れば、いつもと同じように暮らしている人々も決して少なくはない。でも、それはそれでどうなのかな。十人十色で、形なんてろくすっぽ定まっていないのかもしれなくても、もし僕らに日常というものがあるとしたら、もうすぐ、そう遠くないうちに、それが壊こわされて、失われてしまう。その可能性を突つきつけられているのにふだんどおりでいるのも、変と言えば変だ。まあ、門のほうはしっちゃかめっちゃかになっていて、街の外に出ようにも出られないわけだから、ただ投げ遣やりになっているだけの人も、きっとそれなりにいたりするんだろうけど。

　とにかく、こんなエルデンは初めてだ。

　不安、焦しよう燥そう、憤いきどおり、狂きよう気き、諦あきらめ、開き直りのような平へい穏おんが入り交じり、充じゅう満まんして、噴ふきだすこともできずに渦うず巻まいている。

「すごいな。なんか……」マリアローズは休みなくあたりに目を配りながら、フードを少し引き下ろした。

　こんなときなので、いつも以上に警けい戒かいしないといけない。そう思う一方、みんな自分のことで手一いつ杯ぱいで、他人のことなんか考えていられないだろうし、すっかり染しみついている自衛のための用心だけあれば、それほどひどい目には遭あわないような気もする。ただ、こうなるともう、いつなんどき何が起こっても不思議じゃないから、次の瞬しゅん間かん、何か想像もつかないような事態に巻きこまれるかもしれない。てゆうか、ある意味、そうなってるんだけどね。戦争とか、わけわかんないし。

　ともあれ、アサイラムでじっとしていても、今のところはできることなんて一つもない。外に出て、街の状じよう況きようを肌はだで感じて、ついでに可能なら買い出しでもしておこう。いつもこういうときにもっとも力になってくれるピンパーネルは、左足の傷口を完全にふさいで、義足を装着する処置を受けているところだから、ルーシーにつきあわせることにした。まあ、何か頼めば飼い犬みたいに尻尾しつぽを振って大喜びして、断るということを絶対にしない子だ。ルーシーは大張りきりだった。

「──なのに、なんですぐはぐれるんだよ、あの子はもう。どっかおかしいんじゃないの。や、おかしいっちゃあ、わりとおかしいんだけどさ……」

　たぶん、通りすがりのかわいい女の子にでも見とれているうちに、離はなれてしまったのだろう。そんな冗じよう談だんみたいなことを、平気でしでかす。それも、けっこう頻ひん繁ぱんに。

「おもしろいんだけどね。どんなことでも、並じゃないってのはさ。やっぱり興味深くはあるよ。自分にとってあんまり害にならなければ、だけど。迷めい惑わくはこうむってないし。そんなには。がんばってるしね。あの子はあの子で……」

　一人きりでいると、どうしても独り言が多くなる。癖くせなのだろう。そうとう小さい声で喋しやべっているし、口だってほとんど動かしていないから、いかれたやつだと思われることはないはずだ。でも──、

「やな、癖……ん？」マリアローズは足を止めて、何度かまばたきをした。

僕、どうして立ち止まってるのかな。

頭ではそんなことを考えていたが、身体からだは勝手に動いていた。

マリアローズは跳とび退のいた。

くる。

何かが、落ちてくる……？

マリアローズはベンテン・カフェに程ほど近い通りの端はしのほうを──といっても、通りに面した建物からは一メーテル以上離れた場所を足早に歩いていた。

たぶん、近くの建物の窓か、屋根の上からだ。

それは落下してきた。

わ、人だよ、と思った。見えたからだ。はっきりと見た。奇き妙みような落ち方だった。そいつは頭を下に向けて、両りよう腕うでを広げ、揃そろえた両りよう脚あしをぴんとのばしていた。そして、見み間ま違ちがえでなければ、地面を見すえて笑えみを浮うかべていた。

そのまま、そいつは地面に衝しよう突とつした。おそらく、顔面から。

割れたり潰つぶれたりする音がして、いろいろなものが飛び散り、そいつは一秒間くらい、両腕を広げて脚をのばした姿勢を維い持じしていた。

そうして、脚を開きながら倒たおれた。というか、倒れかかってきた。

こっちへ。

嘘うそ。

何それ。だめだめ。なしなし。やめてよ。やめてってば。目を見開いて愚ぐ痴ちりつつ、マリアローズはさらに跳び退すさった。それで落下者からは逃のがれられたが、後ろを歩いていた誰かにぶつ

かって「ぅおいっ！」とキレられた。非は明らかにこちらにあるから、一言謝って飛び離れようとしたら、また頭上から何かが迫せまってきた。振ふり仰あおぐと、何かも糞くそもない。

　人間だ。

　やっぱり両腕を広げている。よけられない。いや、━間かん一いつ髪ぱつ、大だい丈じよう夫ぶだった。

　第二の落下者は、マリアローズの爪つま先さき三十サンチほどの場所に顔から突っこんだ。かなり近かった。おかげで浴びたくないものを多少浴びる羽目になってしまった。マリアローズは呻うめいた。「━うっ……」

　四、五メーテル前方にいた男を、第三の落下者が直ちよく撃げきした。ガツングシャッとなって二人が倒れると、第四の落下者がそのすぐそばの地面に激げき突とつして、矢や継つぎ早ばやに第五、第六の落下者が何人かの通りがかりを巻き添ぞえにした。な、な、何これ何これ何これ。何なの。

「てゆうか、ちょっ……」と、待って━また上……？

　見上げたときにはもう、そうとう接近していた。至近距きよ離りといってもいい。そいつも両腕を広げていて、たぶん両脚を揃えてぴんとのばしている。目と目があった。

　そいつは四十年配の痩やせこけた男で、楽しそうに笑っていた。よけられそうにない。無理だ。これはどうやっても間に合わない━かも……？　それでもマリアローズは横っ跳びした。その直前だった。

「ああああああああああＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」

　声が聞こえた。どこかあやうく底知れない、突つき抜ぬけたものを感じさせる声だった。マリアローズはその声の主を知っていた。

「ＫＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」

　なんて跳ちよう躍やく力だろう。

　声の主は第七の落下者にドズガゴンッと飛び蹴げりを食らわして、吹ふっ飛ばした。

　第七の落下者は建物の外がい壁へきに叩たたきつけられ、声の主はマリアローズから二メーテルくらい離れたところに着地した。

「──マリアさんっ……！　大丈夫ですか……!?」

「あっ……」マリアローズはうなずきかけてやめ、もう一度、上を見た。ちょうど屋上からまた別の男が飛び降りようとしているところだった。一人じゃない。三人、いや、四人か。何がなんだかさっぱりだけれど、どうやら身投げ志望者の集団があの建物の屋根の上に集まって、みんなで仲よく投身自殺を遂とげようとしている、そんなわけのわからない現場に居あわせてしまったらしい。マリアローズは駆かけだした。巻きこまれないように、まずは建物から距離をとらないと。「──ルーシー！　こっち……！」

「ぬぇっ!?　あ、はいっ……！」

　むかつくことに、ルーシーは一いつ瞬しゆんでマリアローズに追いついた。とんでもない瞬発力、ふざけた加速力だ。二人は並走して道を挟はさんで逆側の建物のそばまで行った。振り返ると、どうやら身投げ志望者たちは全員、本ほん懐かいを遂げた模様だ。例の建物の上に人ひと影かげはなかった。

「何なんですかね、あれ……」ルーシーは引きつった笑みを浮かべている。「なんか、はぐれちゃって、探してて、見つけたと思ったら、マリアさんめがけて飛んでく人がいて……」

「や、僕めがけてってことはないんだろうけど……」マリアローズはため息をついて、唾つばをのみこんだ。「……あの人だけじゃないし。何人もいたし。てゆうか……何なんだろね」

　身投げ志望者たちが選んだ建物は、窓の数をかぞえたかぎりでは七階建てだ。あの高さだと、足から落ちたら即そく死ししないかもしれないが、あんなふうに頭から、というか顔面から落ちたらまず死ぬ。蘇そ生せいも不可能だ。彼らは死にたくて飛び降りたのだろうし、勝手に死ねばいいけれど、巻き添えにされた人たちは気の毒きわまりない。自分もそうなりかけたのだ。

　通りは騒そう然ぜんとしている。それはそうだろう。いくらエル

デンでも、一人や二人ならともかく、あれだけの人数が次々と同じ建物から飛び降りるなんて、そうあることじゃない。もしかしたら、前例がないかもしれない。少なくとも、マリアローズは聞いたことがない。

「自殺──っていうやつなんでしょうか。ひょっとして」

「まあ、そう……なんじゃない？　死にたくなきゃ、ああいう飛び降り方はしないだろうし。その前に、飛び降りないだろうし」

「けど、なんか」ルーシーは両腕を広げて、ぴょんと跳はねてみせた。「こうやって、飛び降りるっていうか、飛ぼうとしてたように見えたんですけど」

「や、だって飛べないでしょ。鳥じゃないんだから」

「……ですよね」

「だよ」

「わけ、わかんないですね。変ですよね。すごく。街中が」

「だいぶね。こういうときだし、しょうがないっていうか、こんなものなのかも、だけど。なんていうか、もともと破れかぶれ気味な人とかも、わりと多かったりするしね。こんなふうになると、精神的なバランスとか一気に崩くずれちゃって、突飛なことしたりする……のかな？　よくわかんないけどさ」

「死んじゃうくらいなら、もっといろいろやれることありそうだけどなぁ……」ルーシーは口を尖とがらせて、飛べずに墜つい落らくした鳥ならぬ者たちの死し骸がいを眺ながめている。

「いろいろ、ね……」

　そうかもしれないけれど、たとえば自分が、仲間も友人もいない鳴かず飛ばずの侵入者クラッカーだったらどうだろう。

　エルデンから出るのも容易ではない。脱だつ出しゆつすることができたとしても、帰ることのできる故郷も、十分な蓄たくわえも、手に職もなく、先の展望がない。しかも、もとから日々の暮らしもつらいだけ、みたいな状態でこんな事態に直面したら、もう死んでしまったほうがましだという気分になるかもしれない。そして、エ

ルデンにはそんな境きよう遇ぐうにある者たちがごまんといるだろう。マリアローズだって、ＺＯＯに入るまでは、ひとりぼっちの三流侵入者クラッカーだったのだ。

　今は違ちがう。

　だから、必死になることもできる。

　守りたいものが、捨てられないものがたくさんあるからだ。

「ルーシー」

「はい？」

「さっき、助かったよ。ありがと」

「へっ……!?」ルーシーはだらしなく相好を崩しまくって頭を掻かいた。「いやあそんなぼくはべつに。もとはといえば、ぼくがはぐれたのがあれだし、たいしたことはしてないっていうか。ぜんぜん、ねえ？　まだまだですよ、ぼくなんか。もっと皆みなさんの力になれるように、強くなりたいんですけど。できるだけ早く」

「きみはがんばってるよ」マリアローズはルーシーの肩かたを軽く叩たたいた。

　しっかし、のびたなぁ。

　背。

　ピキッときた。

　そんな自分がうっとうしくて、マリアローズは無理やり笑え顔がおを浮うかべた。

「みんなそう思ってるしさ。ちゃんと認めてるから、あんまり焦あせっちゃだめだよ」

「そ、そうですかぁ？　うふふふ。そうですかねぇ。そうだといいんですけど。体力はついてきたなって、思うんですけどね」

「うん。体力はかなりおかしいレベル」

「おかしいなんて、照れちゃうなぁ。自分で言うのもなんですけ

ど、けっこう動けるようにもなってきたような気がするんですよねぇ。まだまだ無む駄だが多いんですけど」

「できてるできてる」

「ほんとですかぁ？」

「ほんとほんと」

「実は、剣けんも地味に上達してきたんじゃないかなって。いや、もちろんちょっとだけ、ですけどね？　素人しろうとに毛が生えてきたかなって感じだとは思うんですけど」

「そんなことないそんなことない」

「ですかねえ……？」

「うん」マリアローズは笑い顔のまま、気がついたらルーシーの頭をぽかりとやっていた。

「あだっ⁉」ルーシーは叱しかられた子犬みたいに身を縮めた。「──え？　え？　え……？　な、なんで……？」

「なんでもないなんでもない」マリアローズは深呼吸をした。「──うん。なんでもない」

　落ちつけ、落ちつけ。ルーシーはまっすぐな子で、ひたすら素す直なおで、ちょっと無神経で、微び妙みようにうざいだけで、悪気はこれっぽっちもないんだから。急成長しているのは事実だし、それ自体は当然いいことだし、正直、嫉しつ妬としてしまいたくなるけれど、てゆうかしてるけど、先せん輩ぱいとして、年長者として、もっと余よ裕ゆうを持って──いられるような度量の広い人間だったら、こんなに苦労してないってば。

　今に始まったことじゃないけれど、ずっとこうだし、そう簡単には変われそうにない。でも、いちいちみみっちくて、やになっちゃうな。それどころじゃないっていうのに。

　ルーシーに助けられたのが、そんなにショックだった……？

　否定はできない。そりゃあね。あのままだったら、たぶんけっこうやばかったし。大おお怪け我がするのは間違いなかっただろう

し。下手したら、死んでたかもしれないし。そういう危機を回かい避ひできなかったっていうのがね。人が落ちてくるなんてまったく想定外で、予知能力でもないかぎり予想できるわけがないから、仕方ないんだけど。なおかつ、助けられちゃってさ。

　よりにもよって、ルーシーに。

　なんでルーシーなんだよ、みたいな。

　じゃあ、誰だれだったらいいんだよって話だけど。

　マリアローズはあたりに視線を巡めぐらせた。

　今、僕、何を探そうとしたんだろ……？

「あの」ルーシーが顔をのぞきこんできた。「マリアさん……？」

「え？　何？」

「大だい丈じよう夫ぶですか？」

「な、何が？　どうして？」

「えっと、なんかその……」ルーシーは目を伏ふせて口ごもった。「泣きそうっていうか、そんなふうに見えたので──あ、ご、ごめんなさいっ、ただ、あくまで、ぼくの目にはなんとなくそう見えたっていうだけなんですけど」

　マリアローズは右手の人差し指と中指で、ルーシーに目め潰つぶしをお見み舞まいした。「節穴発見」

「ぎゃっ」ルーシーは両手で目を覆おおってうずくまった。「……い、痛い。本気で痛かったです。今も痛いです……」

「変なこと言うからでしょ？　自じ業ごう自得だよ。泣くわけないし」

「……ご、ごめんなさい。本当に、ごめんなさい。もうしません。許してください……」

「どうしよっかなぁ」マリアローズはにやにやしながら、鈍にぶく疼うずいている胸をさりげなくさすった。きっともう、あいつに助

けられることもないんだ。

　そうかもしれない、と思っている自分も、そんなはずない、と思っている自分もいる。

　めんどくさいからどうだっていいような気もするけれど、どうでもいいんだったらこんなこと考えなきゃいいんだよ。やになっちゃうな。それどころじゃないっていうのに。

十四時四十二分　n'ebula

　ダリエロはもともと左右非対たい称しようでゆがんでいる顔をさらにいっそうゆがめ、世界中でもっとも苦い虫を嚙かみ潰したような顔をして、厨ちゆう房ぼうから勝手に持ちだしたオトミ秘蔵の酒をちびちび飲やっている。さぞかし機き嫌げんが悪いのだろう。上機嫌なことのほうが圧あつ倒とう的に少ない。

　頰ほお杖づえをついて、どこか遠くへ目をやっているベティも、なんだかぴりぴりしている。体調がよくないのかとも思ったが、どうやらそうではなくて、何か気にかかることがあるようだ。おそらく、帝てい国こく軍に荷か担たんしているらしい閃せん光こうの魔ま女じよ絡がらみだろう。ほとんど口にしないが、師と数名の同門の魔術士との関係は、ベティにとって刺さささったまま抜ぬけない棘とげなのだ。

　リキエルは椅い子すに座ってじっとしているのかと思いきや、実は腰こしが浮いていて、片手の小指だけで体重を支えている。

　その他ほかにも、アルバート、シュトレーハウゼン、ヘンドリク、ドルゲイ、寂星ジヤクセイ、ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒ、ナツコ、ヴィクトリア、ミシーリャ、白妙シロタエが、何をするでもなくそこかしこの席に散らばっているn'ebula一階の定食屋は、どことなく色あせた午後の重ったるい空気に包まれて、疲つかれたように静かだ。

　朝から建物の外がい壁へきをキャンバスにして不思議な絵を描かきまくっていた〝巨きよ匠しよう〟ボンドが、そっと店に入ってきて床ゆかに何か描きはじめた。追いかけてきたボダダグは、少し離

はなれたところにしゃがんでボンドの仕事を眺ながめる構えだ。唯ゆい一いつの従業員で、オトミがいない今、身体からだを張って店を守らなければならないはずのカツヲは、カウンターに伏して鼾いびきをかいている。

「今にここ全体がゲージツ作品になっちまうな」ダリエロは、ふん、と鼻を鳴らしてグラスを振ふった。「ババアが帰ってきやがったら、連帯責任で何やらされるかわかったもんじゃねぇ」

　ベティが頬杖を外してダリエロに一いち瞥べつをくれ、何か言いかけて口を閉じた。それから、ダリエロを嘲あざけるというよりは自じ嘲ちようするように笑ってみせた。「そうね」

　リキエルの身体がゆっくりと上下しはじめた。ただ体重を支えているだけでは飽あきたらなくなってきたのだろう。

「──ともかく」アジアンは向かいの椅子に腰かけてまっすぐこちらを見つめている女と目をあわせた。「キミの意思はわかったヨ」

　彼女にはずっと訊ききたいことが一つだけあった。

　男物の服を着たり、付け髭ひげをつけたりしているのはまあいい。

「できれば──でいいけど、一つ教えてくれないか」

　ジャン・スタンバックは付け髭をつまんで微笑ほほえんだ。「何なりと」

「キミはいつも手て袋ぶくろをつけているネ。でも、片手だけだ」

「いかにも」

「どちらか一方じゃない。右手だけのときと、左手だけのときがある。会うたびに違ちがうような気がするんだけど、ボクの思い違いかな」

「いいえ。おっしゃるとおりです」

「……よく見てやがるな」ダリエロが小さく呟つぶやいて舌打ちをした。「気色悪ぃ奴やつだ」

　ベティは肩かたをすくめた。「気づいてなかったわ。いつも右手だけだと思ってた」

「それは、何か意味があるのかい？」

「バランスの問題です」ジャン・スタンバックはすっと両手を持ちあげてみせた。「私は女ですが、男を装よそおうことでバランスをとっている。私は右利ききですが、ときに左利きを意識することでバランスをとるのです」

　アジアンは顎あごを軽くつまんでうなずいた。「なるほどネ」

「……いや、普ふ通つうに意味わかんねぇだろ」

「うるさいわよ、ダリエロ。大事な話をしてるんじゃない」

「黙だまれ、ベティ。てめぇだってくっちゃべってるだろうが」

「あたしはあんたみたいに邪じや魔まはしないもの」

「俺の邪魔をしやがってるのはどこのどいつだ」

「誰？　どこにいるの？」

「物の見事にてめぇだよ」

「だりゅりぇろーっ！」

「がーっ。ミシーリャ、てめぇ、くっついてくんじゃねぇ！　あっちぃーんだよ、ボケが！」

「だりゅりぇろー。らっこらっこー」

「うっせぇ！　殴なぐられねぇうちにどっか行け！」

「あら。そんなにつめたくすることないじゃない。みんなが見てないとこではやさしくしてやってるんだから」

「だ、誰だれがっ──」

「らっこー。だりゅりぇろー。らっこー」

「だぁーっ……！　マジうぜぇ！　消すぞ、どけっ！」

「子供ができたりしたら、あんた、意外といいお父さんになるわよ。ていうか、一人か二人いないの？　いてもおかしくなさそうだけど」

「いねぇよ！　餓が鬼きなんざ作ってたまるか！　くだらねぇことぬかしやがって、孕はらまされてぇのか！」

「ああ──」ベティは見えないものを手で払はらう仕し種ぐさをした。「あたし、無理」

「はぁ？」

「ほら。身体、いろいろいじっちゃってるから。機能的に無理。あんまり知られてない事実かもしれないけど、魔術士ならめずらしくないのよ？」

「そいつぁ……」ダリエロは何度引き離してもしがみついてくるミシーリャに絡みつかれたまま、グラスを傾かたむけた。「面めん倒どうじゃなくていいな。餓鬼なんざ、ろくなもんじゃねぇ」

　ジャン・スタンバックはダリエロとベティを視界に収めて、かすかに目を細めている。

「キミは」と声をかけると、すぐさま「はい」と答えが返ってきた。

　感情的になっているわけでもなく、感情を抑おさえている様子もない。緊きん張ちようも感じられない。どちらかといえば、穏おだやかに満ち足りている。自分の観察眼があてになるとも思えないが、そんなふうに見える。

「昼飯時ウチを抜ぬけて、どうするつもりなのかな」

「考えがあります」

「やるべきことがあるのかい」

「いいえ。やりたいことがあるのです」

「ここではできない？」

　ジャン・スタンバックは尖とがらせた付け髭の先せん端たんを指

でいじりながら、ざっと店内を見まわした。「はい」

　アジアンは小さく息をついた。「わかったヨ」

　ジャン・スタンバックは無言で椅い子すから立ちあがり、テーブルに立てかけていたステッキを手にとって一礼した。

　壁かべにもたれて立っていたヨグが、黒くろ縁ぶちの眼鏡めがねを押しあげた。「ご武運を」

　ジャン・スタンバックは虚きよを突つかれたように一いつ瞬しゅん、目を瞠みはったが、すぐに表情を消して背を向けた。「感謝します」

　そうして彼女は行ってしまった。

「しかし、よ──」ダリエロはミシーリャに髪かみの毛を引っぱられながら、唇くちびるの右みぎ端はしと左目をつりあげた。「結局、最後まで謎なぞな奴だったな。クラニィの塵屑ゴミクズ野や郎ろうに惚ほれてたってこと以外はさっぱりだぜ」

「えっ」アジアンはテーブルに手をついて身を乗りだした。「クラニィに……!?」

「えっ」ベティはアジアンをまじまじと見た。「あんた、まさか知らなかったの……？　冗じよう談だんでしょ？」

「超ちよう見え見えだったんですけどぉ……」呆あきれ顔のナツコの隣となりで、ヴィクトリアが大きな身体からだを無理やり縮こまらせている。「……わたしも……知っていたかも……」

　他の連中も、全員ではないにしろ、大半がうなずいたり苦く笑しようしたりしている。

「──ったくよ……」ダリエロはミシーリャの手首を握にぎって髪の毛から引き剝はがした。「変なとこは見てやがって、鋭するでぇんだか鈍にぶいんだかわからねぇな、てめぇは。つうか、単にそっち方面がからきしなのか」

「そ、そんなことはないヨ」アジアンはそっぽを向いた。「そんなことはない」

「だったら、どもったり二回も言ったりするんじゃねぇ」

「やめなさいよ、ダリエロ。かわいそうじゃない。お子様なんだから」

「まぁ、そうだな。餓鬼をいじめたってな」

　黙れと言うのは逆効果だろう。稚ち拙せつな挑ちよう発はつに乗ってたまるものか。そんな気分でもない。

　━元気でね。

　あの一言が、逡しゆん巡じゆんの果てに何かを吹っきったような表情が、重くのしかかっている。

　強い拒きよ絶ぜつでも、明確な決別でもなかった。だからこそ余計に真実味を感じた。

　正直、嫌きらわれてはいないと思っていた。今もそう思っている。というか、思いたい。信じたい。とはいえ、嫌われていないから何の問題もない、というわけにはゆかない。簡単ではないのだ。ままならない。

　昼飯時ランチタイムの仲間たちも、それぞれ込み入った事情を抱かかえている。そのせいで、進みたい道が見えていても、いろいろあってなかなかそちらには行けない。まっすぐ歩いてゆくことが、どうしてもできない。そういうことだってある。そんな生き方しかできない者もいる。

　やりたいことがある、とジャン・スタンバックは言っていた。

　彼女は行きたい道を進むつもりだ。突き進んでほしいと思う。そのためにここから飛びださなければならないのなら、そうすればいい。そうするべきだ。ともに歩むことはできなくても、幸運を祈いのることくらいはできる。

　キミが離はなれたいと本心から願っているのなら、身を切るほどつらくても、ボクは耐たえないといけない。耐えられる。

　耐えられない。

　耐えられる。

耐えられない。

耐えられる。

耐えられない。

耐えられる。耐えられる。耐えられる。耐えられる。耐えられる。耐えられる。耐えられる。

耐えられなくても、耐えないといけない。

キミのために……！

突とつ然ぜん、天てん井じようを叩たたく音がした。椅子上の小指立て伏ふせでは満足できなくなったのか、リキエルが逆立ちの体勢になって巨きよ体たいを持ちあげた結果、天井を足で蹴けってしまったのだ。

「何やってんだよ、てめぇ……」

「鍛たん錬れんしている」

「そうかよ……」

「必要なことだ」

「年々ガタイよくなりやがって。汗あせくせぇし、きもいんだよ」

「限界など、存在しない」

「話が通じねぇ。わかってるけどよ。──おい、大将」ダリエロは叩きつけるようにグラスをテーブルに置いて、げっぷをした。

ベティは顔をしかめた。「汚きたないわねえ」

「かまととぶるんじゃねぇ」ダリエロは首をひねった。「──いや、かまととっつったら、かまととか」

「どういう意味よ！　殺されたいわけ!?」

ダリエロは顔を赤らめているベティを無視してアジアンを睨にらみつけた。「そろそろ決めやがれ。そいつはてめぇがやらなきゃならねぇことだぞ」

「言われるまでもないサ」アジアンは一心不乱に絵筆を走らせて、床ゆかをゲージツ作品に変えようとしているボンドを見やった。「ボクらにとって必要不可欠なものは、この街じゃない。場所じゃない。ボクらがいるところこそが、すなわち昼飯時ランチタイムだ。──ころあいを見計らって、エルデンを離り脱だつするヨ」

十八時八分　アンルックの野

　暴れ馬の一群が、汗を、唾だ液えきを撒まき散らして、夕ゆう間ま暮ぐれの緑野をまっしぐらに駆かける。さながら怒ど濤とうだ。いったいどこを目指しているのか。向かう方角は北西、ひたすら北西だ。

　不意に、一頭の馬が血の混じった泡あわを吹ふきながら、脚あしを折ってつんのめった。他ほかの馬たちはかまわず走る。仲間のことなど気にしてはいられない。彼らはとにかく駆けねばならない。駆けつづけねばならない。どこを目指しているのか。彼らもそんなことは知らない。わからない。もし考える能力があったとしても、考えるゆとりがない。

　彼らは突つき動かされている。恐きよう怖ふに。

　支配されている。完全に。

　彼らは追い立てられていた。彼らのすぐ後ろにそれは迫せまっている。言うなれば怪かい物ぶつだ。彼らはその怪物の聞こえない足音を聞いている。息づかいを感じている。近い。至近距きょ離りだ。今にも踏ふみつぶされてしまう。もう半分潰つぶされかけている。

　また一頭の馬が脱だつ落らくしようとしていた。先頭の馬だ。

　その背の上に人間の姿があった。

　男だ。顔の上半分を覆おおうゴーグルをかけている。頭頂部に一ひと房ふさと、あとは耳と耳を繋つなぐようにして残っている髪かみの毛は真っ白だ。白と黒の小こ袖そでを身につけ、はだけさせた襟えりに右みぎ腕うでを突っこんで、左手は袂たもとの中に収めて

いる。一ひと振ふりの長大な刀を背に負っているが、どう見ても若くはない。老人だ。

　野生の、当然のことながら、裸はだか馬うまの群れだ。鞍くらなどつけていないし、馬たちは全力疾しつ走そうしている。またがって乗るのも難しい。それなのに、男は立っている。

　馬の背で、一房の白はく髪はつと小袖の裾すそをなびかせて、年老いた男が、一本の棒のように、事もなげに直立している。

　常人なら、いや、常人でなくとも目を疑う光景だ。老人はあくまで平然としている。そのことが問題なのではなく、あんなふうに立っていられるわけがない。現象としてありえない。

　そうはいっても、馬が前のめりになっては、さしもの老人もそのままでいるわけにはゆかなかったようだ。

　馬が前まえ脚あしを折る寸前に、老人は跳とんだ。

　隣となりの馬の背に飛び移ると、一いつ瞬しゆん前までと何ら変わらない直立不動の姿勢に戻もどった。

　果たして、馬たちは気づいているだろうか。彼らを休みなく走らせている恐怖の主は、老人だということに。老人は泰たい然ぜん自じ若じやくとして微び動どうだにしていないように見えるが、馬たちを威い圧あつしつづけている。

　老人にとっては造作もなかった。練りこみ、磨みがきあげ、高めてきた老人の刀を抜ぬくまでもない。ただほんの少し、このわきあがる熱情を抑おさえきらずにもらせばいい。

　思うだけでいい。

「師よ……」

　わざわざ思いだそうとするまでもなく、こびりついている。まるで頭の裏側に貼はりついているかのようだ。あの春の日が。

　紛まがうことなき春でありながら、春の匂においなど微み塵じんもしない、あれは地の底だった。地下だった。アンダーグラウンド。六人で潜もぐった。老人はまだ若かった。向こう見ずな一匹ぴきの餓が鬼きだった。D13下層ダーナムレーン。蜥蜴とかげ人の巣

そう窟くつにいるはずのない贄にえの園そのの住人が猛もう威いをふるっていた。六本腕うで、三ツ首、全身に無数の太くて長い針が刺さささりまくっている〝苦く喪も津つ〟が、墮亞亞亞墮亞亞亞墮亞亞亞墮亞亞亞叫さけびながら蜥蜴人どもを蹂じゆう躙りんして、喰くらっては吐はきだし、嘔おう吐としては食い散らかしていた。常識的に考えれば逃にげるべきだった。怖おじ気けづく者もいた。逃げだそうとする者も。尻しりを叩いて立ち向かった。無む謀ぼうだった。愚おろかな若い侵入者クラツカーたちは呆あつ気けなく死んでいった。殺された。食われた。若き日の老人だけが残った。そんな負け方なんて想像したこともなかった。死を意識したこともなかった。自分は死なないとさえ思っていた。勘かん違ちがいだった。恐おそろしくて身体からだがすくんだ。小便をもらした。助けてくれ、とは言わなかった。言っても無む駄だだった。贄の園の住人に人間の言葉なんか通じるわけがない。苦喪津は赤黒い涙なみだを流して墮亞亞亞墮亞亞亞墮亞亞亞墮亞亞亞叫びながら、若き日の老人を、一匹の餓鬼を、六本の腕でつかまえた。丸かじりにされる寸前だった。

　紅あかい疾風が吹いた。

　苦喪津の六本腕はそのすべてが断ち斬きられていた。

　人だとは思わなかった。人の形をしていたが、明らかに違った。まったく別のものだった。それでいて人と称しようするしかなかった。その紅あかい人は美しかった。ただただきれいだと感じ入って、見とれた。心を奪うばわれて、返してくれとも思わなかった。あれ以来、この心は奪われたままだ。

「気配を感じてきてみれば」と紅い人は女の声で呟つぶやいたのだ。「この程度の相手か」

　頭頂から踵かかとまでの丈たけは二メーテル七サンチ。その全身を覆う紅の外装そう甲こうは、ザイエン纖せん維いとゲドマイト特とく殊しゆ鋼の複合材製だというが、そんな素材を知る者がこの世に幾いく人いるのか。当時、若かった老人もむろん、知らなかった。苦労に苦労を重ねて、しかし、ほとんどそれを苦労とは感じずに探さぐった。彼女は自らの手で自分自身を創つくりあげてきた。明確な証しよう拠こを握にぎっているわけではないが、そう確信している。身体つきは女性のそれだ。人間の女を土台ベースにして、闘とう争そう、戦闘向けに特化させるため、調整に調整を繰くりかえして、できあがった形状と言うべきか。とはいえ胸にふくらみが

あり、腰こしは細くて、手足が長い。非常に長い。どのような機構によるものか、その両腕に収納されている双そう刀とうは、彼女の手によるものではない。刀身に刻まれている銘めいは〝緋ノ魂滅〟。神しん霊れいジャニス・イデルと悪魔大公グランヴエリオンアーマンの息むす子こであるという、半神半はん魔まの〝見捨てフオーられ子セイカン〟ヨヴィ・イデルが単たん為い生せい殖しよくで残した子の末まつ裔えい〝鍛冶鬼マツドスミス〟シニ・イデルが鍛きたえたる、アルティメットブレイド・〝ギャラクシー〟・ダブルオーセブンティーエイト・メタルデス。

目もく撃げき談は数知れず。人の口くち端はにはのぼれど、実在を信じる者は多くなかった。

それでもいつしか彼女は人々に〝剣けん聖せい〟と呼ばれるようになっていた。

またの名を〝血をヴア求めン・ヴる者ラド〟あくまＸで不詳Ｌ。

さらには〝地獄送モータルりの赤レツド〟。

その剣は仮借なく苛か烈れつにして華か麗れい、どこまでも鮮せん烈れつで、途と方ほうもなく美しかった。

若く未熟で無謀なだけが取り柄えの餓鬼は、刹せつ那なで彼女に魅み入いられた。それ以来、彼女を追いかけ、見失えば捜さがし求めた。その行為自体が心身の鍛たん錬れんになるという意識は皆かい無むだった。気がつけば、乳臭くさい向こう見ずな侵入者クラツカーではなくなっていた。一度、彼女を捕ほ捉そくすれば、最低でも三十分、長ければ半日、張りついていられるようになった。

彼女を見つめた。アンダーグラウンドの異界生物フリークスどもを相手に剣を振るう彼女を見つめつづけることで、何かを身につけよう、極きわめよう。そんなことは考えもよらなかった。

ただ憧あこがれていた。恋こい焦こがれていた。惚ほれ惚ぼれしていた。たとえようもなく幸福だった。

知らずに剣を握って、異界生物フリークスどもを斬っていた。妨さまたげになれば人も斬った。知らずに彼女の技を模も倣ほうしていた。しかし、彼女と自分とでは体形も膂りよ力りよくも、何もかもが違う。自然と修正し、変へん更こうを加えていた。

いつの間にか、彼女を追いまわしつづける彼女の信しん奉ぽう者が、剣聖と並び称されるようになっていた。おそらく地上の誰だれよりも彼女を知るがゆえに、彼女との圧あつ倒とう的な、断絶よりも広く大きく深い差を理解している者にとって、それは耐たえがたかった。自分は剣聖に比ひ肩けんする剣客などでは決してない。あくまで剣聖を仰あおぎ見る青二才でしかない。それでいつしか剣聖の弟で子しを自じ称しようするようになった。

親など知らない。

物心がついたらエルデンをうろついていた。

誰が名付けたのだろう。覚えていない。ただ、糞ふん尿にょう臭い洟はな垂たれ小こ僧ぞうの時分から、バラッド、と呼ばれていたので、それが名だった。バラッドの剣筋は炎ほむらが走るがごとしと語る虚うつけ者がいて、〝燃える剣バーニング〟バラッドと称された。望んだわけでもないのに名が高まると、勘違いをした腕うで自じ慢まんの馬ば鹿かどもが次々と襲おそいかかってきて、蹴け散ちらせば蹴散らすほど名が知れ渡わたった。

剣の腕を見こんで、仕事をもちかけてくる者がいた。際限なく降る雨のように金が入ってきた。入ってきた先から使った。女が群れをなして寄ってきた。敵が増えた。剣聖を知る者にとっては敵ではなかった。

強い、と初めて思った。

自分は強い。有う頂ちよう天てんになった。初めて剣聖に挑いどんだ。なすすべなく右みぎ腕うでと左ひだり脚あしを斬り飛ばされた。殺されはしなかった。バーニング・バラッドは血だまりの中であえぎながら問うた。どうして。なぜ自分は生きている。なにゆえ自分を殺さないのか。

剣聖は素す顔がおをさらして答えた。「お前はまだ使えるようになる」と。言葉ではない。剣聖の目がそう語っていた。彼は剣聖を知る者だ。たちどころに合点がいった。

剣聖にはもう敵がいない。敵と見なせるほどの相手がいない。剣聖は常に歯ごたえのある相手を求めている。今の彼はそうではない。ただ、そうなる見込みはある。もっと、もっと強く、強くなれば、剣聖の役に立てる。

「師よ。師よ。師よ」バーニング・バラッドは片かた頬ほおに笑えみを刻んだ。「──お慕したい申しておりますぞ」

　暴れ馬の一群が、大量の汗あせを、唾だ液えきを撒まき散らしながら、落ちかかる陽ひに暗く燃えるアンルックの緑野を、ひた駆かけに駆ける。

　向かう方角は北西。

　目指すは、エルデン。

二十三時五分　第九区

　なんで生きてるんだろう、と思う。どうして生まれたんだろう、と思う。

　彼は背が低い。それほどたくさん食べているわけではないのだが、どういうわけか年々太ってきている。胴どう長なが短足で、猪い首くびで、頭がやたらとでかい。体形も悪いが、鮫さめ肌はだで乾かん癬せんだらけだから、見るにたえないと自分でも思う。顔はさらにひどい。左右の目はやけに離はなれていて高さまで違ちがうし、鼻はひん曲がっているし、ところどころ引き攣つれている紫むらさき色いろの唇くちびるが、嫌いやみなほど分厚く膨ふくれている。大きすぎる丸っ鼻の両側に思いきり張りだした小鼻には、どうか自己主張してくれるなと頼たのみたいほどだ。針金みたいな髪かみの毛のまばらな生え具合も、鏡に映して見ていると気持ち悪くて寒気がしてくる。濃こい灰色の瞳ひとみにはどうやっても感情や知性の光が宿らなくて、我ながら生きている人間のものとはどうしても思えない。

　こんな生き物が生きていてもいいのか。許されるのか。

　見た目だけではない。性格もねじ曲がっている。とにかく卑ひ屈くつで意地汚きたなくて、卑ひ怯きようになれないのはただ単に頭が悪いせいだ。ずるく立ちまわりたくても、そうするための才覚がない。どんな人間でも、たいていはあらゆる意味で自分より上等だから、競ったり争ったりするだけ無む駄だだ。こんな自分では何をやってもうまくゆくはずがない。自分ごときが明日あした、天気になれと祈いのったら、きっと雨が降るだろう。期待は禁物だ。逆効果だし、他人の迷めい惑わくになる。

　下層にも下層があって、底辺の底辺にはへばりついていられる隙すき間まくらいあるものだ。腐くさった食い残しや、その食べ滓かすくらいにはありつける。そうして彼は生きながらえてきた。

　なんで生きてるんだろう。

　とりたてて生きていたいわけではないが、死ぬのはなんとなく怖

こわいので、生きている。

　どうして生まれたんだろう。

　幼い彼を捨てた母親と、顔も知らない父親のせいだ。

　蠅はえになれない蛆うじ虫むしみたいに、掃はき溜だめの街の片かた隅すみを這はいずり回っていた十四歳の彼の肩かたを叩たたいて、「生きてさえいりゃあ、きっとなんかいいことあるさ、なあ」と言って笑った老ろう爺やは、拾った五ダラー緑銅貨を嬉き々きとして仲間に見せびらかし、腕ずくで奪うばわれた拍ひよう子しに転んで頭を打ってくたばった。

　いいことなんて、あるわけないと思っていた。

　でも、やっぱり何かあってほしいと、心のどこかで願っていたのかもしれない。

「ぼ、ボンド！　トト！　ロロ！　ちゃ、ちゃんといるよな!?　いるな!?　へ、返事くらいしろって！　返事だぞ！　返事！　で、できねえのかよ！　い、いいけどよ！」

　ボダダグは〝巨きよ匠しよう〟ボンドと〝占うらない師し〟トト、〝骨女〟ロロのお守りを命じられた。

　痩やせっぽちのボンドはほとんど絵を描かくことしか頭にないし、褐かつ色しよくの肌をした子供みたいなトトは心霊体アプラマを用いた占いしか能がない。がりがりの魔ま術じゆつ士ロロは百十七本の棒を使う占いに取り憑つかれている。

　三人とも他人と意思の疎そ通つうをはかるのが苦手で、ボンドに至っては言葉を発することもめったにない。厄やつ介かいといえば厄介な連中だが、そもそも他者にあまり関心がないから、ボダダグの醜しゆう悪あくさにも無む頓とん着ちやくだ。おかげで、劣れつ等とう感を刺し激げきされなくてすむし、彼らのやっていることを眺ながめていてもいやな顔をされないので、ボダダグにとってはけっこうつきあいやすい。

　だから、ダリエロはボダダグに任せたのだろう。ダリエロにしてみれば、役立たずに面めん倒どうを押しつけただけなのかもしれないが、ボダダグは嬉うれしかった。こんな自分にもやることがあるなんて、信じられないほど幸せだ。ダリエロは口が悪いし、乱暴だ

し、遠くから見るだけで冷や汗が出てくるほどおっかなくて大だい嫌きらいだが、感謝している。

「……だ、だけどよ、おれ、だ、大だい丈じよう夫ぶかな……ふ、不安だな──って、おいっ、ボンド、ど、どこ行くんだよ！」ボダダグはふらふらどこかへ行こうとしたボンドの襟えり首くびをつかんで引き戻もどした。「だ、だめだって！　だめだからな、ボンド！　わかったかよ！　わかんねえか……」

　トトとロロは今のところじっとしているが、ボンドと同じくいつ突とつ拍ぴよう子しもない行動をとるかわからないので、片時も目を離せない。マーベラス・グッダー・ストリートへと通じるこの小道には、ボダダグたちの他にも、雷切ライキリ、祝花ノリカ、寂ジヤク星セイ、アンガルセン、レイジ兄妹きようだい、白妙シロタエ、ミョーチが配置されているが、皆みな、それぞれ役割がある。いざとなれば、俠おとこ気ぎにあふれている雷切あたりはボダダグを助けてくれるかもしれないが、できるだけ手を煩わずらわせたくない。

「……お、おれがやらねえとな。こ、これくらいのことはやらねえと、おれ、いる意味ねえもんな。も、もともと、おれなんか、いねえほうがいいんだし……」

　自分の醜悪さが見る者に否いや応おうなく嫌けん悪おを催もよおさせ、ときには怒いかりさえ喚かん起きすることを、ボダダグは身をもって知っている。気持ち悪くて目め障ざわりだという理由で殴なぐられ、蹴けられ、小石や何かの破片をぶつけられることなどしょっちゅうだったし、慣れていた。それでもボダダグは顔を隠かくさなかった。

　どうしてだろう。

　当時は考えたこともなかったが、たぶん、そうしたら本当に誰だれもボダダグに注意を払はらわなくなって、死ぬより寂さびしいからだ。

　あのときも、通りがかりの酔よっ払ぱらいにいきなり飛び蹴りを食くらわされ、何だかんだと罵ののしられながら、ぼこぼこにされた。相手はたしか三人だったと思うが、はっきりとは覚えていない。とにかく、今はもういない取り立て屋がそいつらに一声かけた。「よう、何してるんだ」

　そいつらは逆上し、身の程ほど知らずにも取り立て屋をふくめた数名に殴りかかろうとして、あっという間に返り討うちに遭あった。取り立て屋はボダダグを助け起こし、「なんだかよくわからんが、気をつけろよ」と言って去ろうとした。ボダダグはうなずきながら、取り立て屋ではなくて別の男に見入っていた。

　きれいな女はいくらでもいるが、呆ぼう然ぜんとしてしまうほどきれいな男を目にしたのは生まれて初めてだった。

　顔形が整っているだけではない。もし世の中に一千億ダラーの宝石があるとしても、あの薄うす青あお色の澄すみきった瞳には太た刀ち打ちできないだろう。あんな目をしてるってことは、心の中まできっとめちゃくちゃきれいなんだろうな。そんなことを考えていたら、男がこっちを見ていることに気づいて、ボダダグは大おお慌あわてで目をそらした。やべえ、と思った。おれなんかが見たら、あの瞳が曇くもっちまうぞ。おれは生まれつきものすごく醜みにくいから、きれいなものみんな、汚よごしちまう。もったいねえ。

　そのとき男が「くるかい」と言ったのだ。

　男の連れが男に何か文句をつけた。それに対する男の返事を、はっきりとボダダグは覚えている。「だって、ついてきたそうにしているように見えたからサ。何か問題があるのかい？」

　たしか取り立て屋が笑いだして、ボダダグの肩を抱だいた。「よし、わかった。何せ、我らが大将の仰おおせだからな。お前さん、飲めるならちょっとつきあえ。飲めなきゃまあ、氷水でもちびちび飲やってりゃいいさ」

　どこかの店に連れてゆかれ、男の隣となりの席に座らされて、酒の味を初めて知った。男の連れの中にはボダダグの容姿についてさんざんこきおろす者もいたが、殴られたり蹴られたりすることはなかった。その日は朝方に店を出て、男たちと別れた。

　それ以来、ボダダグは男を捜さがしつづけた。三度、あとをつけて、たぶん、男には気づかれていた。四度目の尾び行こうの最中さなか、男を見失ったと思ったら、どういうわけかすぐそばにいた。男はあの薄青色の瞳でまっすぐボダダグを見すえて言った。「ボクらの仲間になるかい」

　仲間って、何なんだろうな。

まあ、おれにとっては、すべてだな。ぜんぶ、だよな。他ほかには何もいらねえってより、何もねえしな。

だから、おれみたいなのは、本当はいねえほうがいいと思うんだけどよ、でも、おれには他に何もねえわけだから、昼ク飯ラ時ンのためにああしろこうしろって言われたら、そりゃあ、やるよな。何だって、やるよ。やってやるよ。死ねっていうなら、今、ここで、すぐ死ぬよ。

そんなこと、アジアンは言わねえけどな。言われなくても、そうしたほうがいいなら、おれ、やるよ。いつでも死ぬよ。だって、おれ、幸せだからな。はっきり言って、おれは不細工で能なしで生きてる価値もねえけど、仲間がいて、一人じゃなくて、幸せだからな。こんなクズ以下のクズが、誰よりも幸せなんだからな。おれは最低なのに、気分はずっと最高なんだから、いつ死んだっていいだろ。思い残すことなんて、ひとつもねえもんな。

「──ボンド！　だからよ、お、おまえは離はなれるなって！　トト、ロロ！　だ、だめだって、占うらないとかしてる場合じゃねえんだからな！　ちょっと我が慢まんして、おとなしくしてろ！」

昼飯時ランチタイムはエルデンから脱だつ出しゆつしようとしている。どうもラフレシア第三帝てい国こくが攻せめてくるらしいので、絶対に狙ねらわれる首都にいたら危ない。とりあえずエルデンを出て、仲間の一人のドルゲイが以前、頭を張っていた山さん賊ぞくの砦とりでに身を寄せるか、先方が受け容いれてくれない場合は、乗っとってしまう予定だ。

とはいえ、エルデンを離れようとしている者は多い。とてつもなく、多い。

現在、エルデンでもっとも人口密度が高いのは、四つある門の付近と、それから二つある王立銀行の周辺だ。銀行に預けてある金を下ろして、エルデンから抜ぬけだす。誰もがそうしたいと思っているから、銀行の窓口は数千人待ちで常時乱らん闘とう状態だというし、門はほぼ完全につっかえている。金は資産家のリー・ブラックやクララあたりがそうとうな額の現金を持っているし、戦争になったらそれどころではないからひとまずあきらめるとしても、門を通らないと外には出られない。普ふ通つうの方法では、どうやっても門を通ることはできそうにない。

「そろそろだ」前のほうにいる雷切が野太い声を出した。「進むぞ」

　ボダダグをふくめた昼飯時ランチタイムの一隊は、ひとかたまりになって小道を進んだ。門へと繋つながる四つの大通りと、その大通りに流れこむ通りは今やどこも混みあっているから、この細い小道を制圧してマーベラス・グッダー・ストリートに近づくのも一苦労だった。といっても、ボダダグはボンド、トト、ロロの面めん倒どうを見ていただけだ。楽をしていて申し訳ないが、ボダダグにできることはこの程度が関の山なので、しょうがない。ちなみに、人が少なめの通りを占いでいくつか見つけたのは、トトとロロの手て柄がらだ。二人もちゃんと役に立っている。

「ボンドは、絵がうめえしな……って、そ、そっちじゃねえってば、ボンド！　こっちだこっち。そ、そっち行ったら、戻もどっちまうだろ。トト、ロロはき、きてるな、よし……」

　もうすぐマーベラス・グッダー・ストリートだ。

　隊列の先頭に立っているアンガルセンが足を止めた。アンガルセンの向こうには壁かべがある。壁といっても、向かって右、東へ東へと移動しようとしているのだろうが、ほとんど進んでいない、人間たちの壁だ。祝花が雷切の背中をつついた。「時間」

「おう」雷切は半分だけ振ふり向き、たくましい腕うでで祝花を抱きよせてアンガルセンの横に進みでた。白妙とミョーチが、アンガルセンと雷切、祝花の後ろについて、ボダダグとボンド、トト、ロロ、寂星、レイジ兄妹きようだいも、ぎゅうぎゅう詰づめになるまで互たがいの距きよ離りを狭せばめた。

「始まっちまうぞ、おい」アンガルセンは真ん中分けの金きん髪ぱつをかきあげて、何度も鼻を鳴らした。「準備だ、準備。準備しろよ、くそったれども。まずはあれ、心の準備な」

　気どり屋でずる賢がしこいが、アンガルセンはけっこう小心だ。声がちょっと震ふるえているし、かなり緊きん張ちようしていて、怖おじ気けづいてさえいるのかもしれない。ボダダグも意い気く地じなしだが、今はまるっきり恐おそれていなかった。だって、心配することなんてねえだろ。うまくいくに決まってんじゃねえかよ。むしろ、楽しみなくらいだけどな。おれは、わくわくしてるけどな。

今か今かと心待ちにしていたその瞬しゆん間かんは、すぐにやってきた。

この通りは暗いが、マーベラス・グッダー・ストリートには街路灯が設置されているので、いくらか明るい。

そのマーベラス・グッダー・ストリートの上空──といっても地上から五、六メーテルの低空を、何か黒い影かげがものすごい速度で飛んでいった。

「おおぉっ……！」ボダダグは目を見開き、白妙とミョーチを押しのけてアンガルセンと雷切の間に割りこんだ。東のほうを見ると、ちょうど黒い影が急旋せん回かいしたところだった。マーベラス・グッダー・ストリートを埋うめつくしている人々も、黒い影の存在に気づいたようだ。

「な、何だ」「鳥……!?」「でかいぞ！」「夜なのに」「何だよ」「おい、あれ──」

黒い影を見上げる者がいる。指さす者がいる。その間も黒い影は彼らの頭上を飛び交う。黒い影は一つなのに、とてつもなく速いせいで、乱れ飛んでいるように見えるのだ。実際にはそれほど接近していなくても、ぶつかってきそうな気がして、悲鳴をあげる者がいる。伏ふせる者がいる。伏せようとした者に突つき倒たおされる者がいる。昼間なら、常人並みの視力でも黒い影の形をなんとか視し認にんできたかもしれないが、今は夜──そろそろ深夜だ。街路灯程度の明かりでは、それが黒いこと、翼つばさらしきものを備えていること、そこらで見かける鳥よりはだいぶ大きいことくらいしかわからない。人々は正体不明の黒い影に驚おどろき、怯おびえ、恐れていた。

「ば、化物だ……！」と誰だれかが叫さけんだ。ありえないことではない。ここはエルデンだ。過去にはあのＳＩＸが巨人族ギガントや半鬼人ハーフオーガといった異形の者どもを率いて暴れまわったこともあるし、巨きょ大だいなギニェス大亜あ鳥ちようがエルデンの空を飛んだこともある。本来、アンダーグラウンドから出てくるはずのない異界生物フリークスどもが、地上で猛もう威いを振るうという事件もあった。エルデンでは何が起こってもおかしくはないのだ。ただでさえとんでもないことになっているのに、この上さらに由々しき事態が発生したとしても、驚くに値あたいしない。悪いことはだいたい重なるものだ。泣きっ面つらに蜂はちどころか、泣

きべそをかいていたら八やつ裂ざきにされかねない。何しろ、ここはエルデンなのだ。

「た、助けてくれ！」「逃にげろ……！」「押すな」「どけ！」「痛い痛い痛い痛い……！」

　やばそうなときは二つに一つだ。知らんぷりを決めこむか、一目散に逃げだすか。この状じよう況きようでは逃げるしかないが、こう混みあっていると、逃げようにも逃げられない。黒い影が高度を上げ下げしながらマーベラス・グッダー・ストリートの上を飛びまわって、混乱に拍はく車しやをかけた。進むことはできない、戻ろうにも戻れない、とにかくマーベラス・グッダー・ストリートから離れたい。横道だ。

　横道に逃げこめ。

　ボダダグたちがいる通りにも大勢が殺さつ到とうしてきた。押しよせてくる直前だった。

　黒い影が空中で急に静止した。

　ずっと黒い影を目で追っていたボダダグには、はっきりと見えた。すげえ。

　すげえな。すげえよ。すごすぎだろ、アジアン。

　だって、羽が生えている。黒い翼だ。

　アジアンは黒い仮面をつけている。顔は見えない。でも、やっぱりきれいだ。とてつもなくきれいだ。ああいうの、美しいっていうんだろ。おれなんかが口に出したら、美しいって言葉が汚きたなくなっちまいそうだけど。

「耳、ふさげ！」と雷切が怒ど鳴なった。

　アジアンが右手で泣き叫ぶ短たん剣けんを抜ぬいて、左手の甲こうに突き刺さした。けっこう距離があるので、さすがに聞こえなかったが、きっとこう呟つぶやいたことだろう。

　キミよ、泣き叫べ。━━「scream, baby.」と。

「あ……」ボダダグは目をしばたたかせた。アジアンに見とれてい

て、耳をふさぐのを忘れていた。それなのに、ふさがれている。自分の手ではない。後ろから──ボンドか。

　百の、千の、万の、それ以上の、切り裂くような、掻かき乱す、ごちゃ混ぜにするような、打ち砕くだこうとする、悲しみの、恐きよう怖ふの、苦痛の、絶望の叫び声が、降りそそいできた、撒まき散らされた、炸さく裂れつした。それは音というよりも威力だった。ほとんどの者はしゃがむか座りこむか伏すかして頭を抱かかえたが、そうすることで耐たえようとしているのではない。他ほかにはどうしようもないのだ。

　ボンドが両耳をふさいでくれているので、ボダダグはそれでもいくらかましだ。そうはいっても、脳が、身体からだの中心が、奥のほうが激しく揺ゆさぶられて、涙なみだが勝手にあふれてくる。この声を聞いたのは、これが初めてではない。聞くたびに、ボダダグは謝りたくなる。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。本当にごめんなさい。何もかもごめんなさい。生まれてきてごめんなさい。まだ息をしていてごめんなさい。ボダダグがおかしいのか。違ちがう。実際、マーベラス・グッダー・ストリートでこの圧あつ倒とう的な泣き叫ぶ声を聞いている者たちの中にも、手をあわせたり頭を下げたりして、涙ながらに謝罪している男女の姿がちらほら見受けられる。のたうち回る者もいる。喉のどをかきむしっている者もいる。自分で自分の首を絞しめている者もいる。ただただ縮こまって震えている者もいる。

　悔かい恨こんと恐怖と狂きよう気きと絶望の上に、左手から血を流して、黒い翼を生やしたアジアンが君臨している。

　この世のものとは思えない。

　残ざん酷こくで、どこまでもやさしい、神さまみたいだ。

「行くぞ！」雷切が祝花を抱かかえて走りだし、アンガルセンが、ミョーチが、白妙がつづいた。

　ぼんやりしていたら、レイジ妹にサハ・リドル作「道徳刀」の柄つかでどつかれた。「ヤイこの腐くされ大福早く行け邪じや魔まだっつーのＧＩＨＡ！」

　レイジ兄とレイジ妹の二人は、正真正しよう銘めいの殺し屋だ。仲間の息の根は止めないが、半殺しくらいには平気でするかもしれ

ない。

　ボダダグは慌あわてて駆かけだそうとして、ボンドのことを思いだし、大慌てで振ふり返った。

　ボンドは涙と鼻水と唾だ液えきを垂れ流して白目を剝むき、泡あわを吹ふいていた。ボダダグはボンドに耳をふさいでもらったが、代わりにボンドはあの泣き叫ぶ声をまともに聞いたのだ。胸がぐわっと熱くなった。

「お、おまえ、バカだな！　お、おれなんかのために……！」ボダダグはしゃがみこんでいたトトとロロを急いで立たせ、ボンドを背負った。ボンドは痩やせこけているので軽い。大だい丈じよう夫ぶだ。行ける。というか、行かないといけない。

　祝花を抱だいた雷切とアンガルセンは人々を押しのけ、たまに踏ふみ越こえて、どんどん東へ東へと向かっている。ミョーチと白妙も遅おくれずにつづいている。

　少し離はなれた場所で、リー・ブラック、リョーヨルカ、シャマニ、オーノ、ドルゲイら、ダリエロ組の連中が大暴れしているのが見えた。だ、だ、大丈夫かな、あいつら。やりすぎねえといいけど。

「ボダダグ」と後ろから声をかけられた。寂星だ。ちょっと皮肉っぽくて冷静な男だが、レイジ兄妹きようだいほどではないにしても、怒おこらせるとけっこう怖こわい。

「トト、ロロ！　つ、ついてくるんだぞ……！」ボダダグは走りだして、うずくまっている男の肩かたに足をかけ、誰かの背負い袋ぶくろを踏みつけて、東を目指した。昼飯時ランチタイムとその関係者若じやつ干かん名は、東門からエルデンを出る。一人たりとも欠けてはならない。アジアンが悲しむ。見知らぬ他人の心配なんかしてる場合じゃねえんだ。おれはおれのやること、やらねえと……！

　　　　同時刻　牢獄

　小さな牢ろう獄ごくの外はずいぶんと騒そう々ぞうしい。何が起

こっているのか。正確に知るすべはないが、牢獄はマーベラス・グッダー・ストリートと環かん状じよう通どおりが交わる場所にあって、その唯ゆい一いつの囚しゆう人じんである彼は、しばらく前から東門へと向かう大勢の男女の姿、そして多数の馬車を目にしていた。どうやら人々は、このエルデンから逃にげだそうとしているようだ。

　エルデンで何かが起こっているのか。それとも、エルデンの外で、なのか。

　そうかと思えば、つい先刻から人の流れが逆流しはじめた。東門方面から環状通へ、あるいはエルデン中心部へ。彼ら、彼女らは混乱していて、恐きよう慌こうに陥おちいってさえいるようだった。中には監かん獄ごくを乗り越えてゆく者もいた。

「どうも……よくない予感がするねえ……」

　腸はらわたが己おのれの意思とは関かかわりなく蠢しゆん動どうしている。そんな感覚が彼の精神の表面にさざ波を立てている。

「こんな夜には……歌いたいものだけど、さて……何も思いだせやしないし、何一つ浮うかばないよ……Ｋｕ□ｋｕ……」

　いずれにしても踏みとどまるだけさ、と彼は呟いた。

　それが誓ちかいだ。相手のない誓いだ。

　踏みとどまるだけの彼を省かえりみる者はもはや皆かい無むに近く、彼には価値などない。

　無価値であることが恐きよう怖ふだった。無視されたくなかった。注目を浴びたかった。簡単に言ってしまえば、ようするにそういうことだ。変わっていない、と彼は思う。こうなる遥はるか前から、幼い子供のころから、彼はそうだった。ぼくをみてよ！　ぼくのはなしをきいてよ！　ぼくをみとめてよ！　ＳＯＳ！　メーデー！　メーデー！　たすけて！　たすけて！

　きみの中に、ぼくはいますか。ぼくはここにいるよ。みとめてよ。うけいれてよ。

　いつだって他人の目を気にしていた。怯おびえていることを知られたくなくて、虚きよ勢せいを張っていた。ぼくはこわくなんか、

ないぞ。気が弱いくせに、ふてぶてしいふりをして、それが板についてしまえば、泣き虫を踏みにじっても心が痛んだりしない。自分が踏まれたときに、思いだす。あいつ、あのとき、きっと、いたかったんだろうな。

　だからどうしたってんだ。ぼくの知ったことじゃない。弱虫の、泣き虫の、あいつが悪い。そうだろう？　違う？　違わないだろう？

　なんてことはない。ありふれた、どこにでもいる──いや、あのときは、あの国には、あの場所にはどこにでもいた、本当になんてことはない、ぼく。遠い、遠い、遥かな昔。シブヤ・イチル。渋谷一流。名前がよくなかった。一流なんて。いちる、じゃなくて、いちりゅう。そう読まれるに決まっている。変な名前、つけるなよ。名前？　つけた？　誰だれが？　名付け親。誰だったっけ。そう、親だ。親。父さん。母さん？　パパ？　ママ？　覚えてないな。パパも、ママも、思いだせない。いたはずだ。絶対にいたはずなんだけど、わからないよ。

　恐おそろしいことが起きたんだ。とっても、ものすごく、恐ろしいことが。たくさん、たくさん、起きたんだ。そして、もっとひどいことが起きようとしていた。みんなそのことで頭がいっぱいで、その話ばかりしていた。どこでも、かしこでも。世界は昼間でもすこぶる暗かった。世界をあたためて、すべてのエネルギー源になっているはずの日ひ射ざしよりも暗いものが、重く、重く、世界にのしかかって、覆おおい尽つくしていた。

　もうそれが誰かなんて覚えていないけど、とにかく誰かがこんなことを話してくれたんだ。いいかい、これはみんな、きみのせいじゃない。ぼくのせいでもない。一つ一つは誰かがやったことかもしれなくて、その誰かのせいかもしれない。でも、誰も、結局、誰も、こうなることを止められなかった。本当はわかっていた、こうなるんじゃないかって、いつこうなってもおかしくないって、警告していた。そんなふうに言うやつも大勢いた。たとえばシーオーツーだ。温暖化はさかんに喧けん伝でんされて、事実、気温は上がりつづけたし、あるときを境に、主要な穀物をふくむありとあらゆる種類の作物が、そこらじゅうで不作に見み舞まわれるようになった。毎年、毎年だ。食しよく糧りよう難なんがひっきりなしにやってきて、ついには恒こう常じよう化した。温暖化だけじゃない。排はい出しゆつされる膨ぼう大だいなシーオーツーが海に吸収されることによって、二千百年までに海水のペーハーが七・八まで下がる

という予測が今世紀の初めには出されていた。それなのに、耳を貸す者は少なかったし、実際にはその倍以上の速度で酸性化が進んだ。急激すぎる酸性化は生物の大量絶ぜつ滅めつを招いて、生態系への大きすぎる影えい響きようはぼくらにも当然、及およばないわけがなかった。数々の危機を乗り越えるための技術革新は格差を是ぜ正せいするどころか拡大して、虚きよ飾しよくやお為ためごかしやごまかしが剝はぎとられ、麗うるわしい善意も吹ふき飛ばされた。こうして搾さく取しゆによって成り立っている構造が誰の目にも明らかになると、主義主張も宗教も、何もかもが奪うばいとるための手段として堂々と利用されるようになったし、そのことを恥はじる前にまずサバイバルしなきゃいけない。だいたい、問題はたくさん、たくさん、ありすぎるほどあって、複雑に入り組み、関係しあって、こんがらかっていて、どうやったって解きほぐせそうになかった。先行きは不ふ透とう明めいどころか暗かった。みんな不安だった。不安は自制心を叩たたき壊こわして、愚おろかで哀あわれな煽せん動どう者とその追従者を大量に生みだした。理性を失わず、どうにかしようとするやつだっていた。真しん剣けんに討論する者、迅じん速そくに行動する者、分からず屋と争う者、打開するために手段を選ばない者もいた。だけど、誰も、結局、誰にも、こうなることを止められなかった。止まらなかった。遅おそかったんだ。遅すぎた。手て遅おくれだった。だから、これはみんなのせいだ。きみのせいだ。ぼくのせいだ。誰か一人一人のせいだ。みんなのせいだ。こうなることを、みんなが選んだんだ。

　ぼくにはよくわからなかったな。何を言ってるんだよって感じだった。みんなのせい？　そんなの馬ば鹿かげてる。だって、ぼくは何もしてない。そんなことにはこれっぽっちも手を貸してない。物心がついたころには、もうこうだったんだから。ぼくに何かできたとは思えない。ぼくには責任なんかない。ぼくは──俺はただ、暗い、暗い世界がたまらなくいやで、誰も俺を見てくれないのがいやで、たまらなくなるといつも歌をうたっていた。声を張りあげて、歌ばかりうたっていた。それだけだった。

　現実感リアリテイーなんてなかったよ。

　ひどいことだらけで、何が起こってもめずらしくなくて、どうしようもないことに慣れきっていて、慣れるしかなくて、これがぜんぶ嘘うそじゃなくて本当なら、救いがない。そうさ。救いなんてない。救いだと信じた、すべてがまやかしだった。そんなものはなかったんだ。

　運が悪かったよな、と誰かが言った。不幸な時代に生まれついたんだよ。もっとましなときに生まれたかったな。

「……でも、俺は生きてる」

　彼は笑った。

　かすれた笑い声しか出なかった。おかしかった。

「ずいぶんとまあ……長い時間がかかったものさ……」

　彼は狭せまい牢ろう獄ごくの中で大の字になって横になっている。天てん井じようの高さは一メーテルほどだ。かつては両手の甲こう、十本の手指、両りよう肘ひじ、両りよう肩かた、腹部、両りよう脚あしの付け根、両りよう膝ひざ、左右の足首に杭くいを打ちこまれ、十七の枷かせを嵌はめられていて、ほとんど微び動どうだにできなかったが、今はその気になれば腕うでや脚は動かせる。自ら望んで牢獄に入ってからこれまでの間に、大勢が鉄格ごう子しの隙すき間まから槍やりだの何だので彼の肉体を思うさまに傷つけた。強酸の液体をぶっかけられたこともある。油をひっかけられ、火をつけられたことも。そうして痛んでは再生するうちに、ほとんどの杭や枷が彼の身体からだから抜ぬけ、外れてしまった。動きまわることはできないにしても、体勢を変えることくらいはできるだろう。しかし、彼は動かない。動かずにいる、ひどく、これ以上ないほど限定された、ここが彼の世界だ。

　でも、生きてる。

「……踏ふみとどまるさ。何があろうと、ねえ……」

　彼はしばらくの間、鉄格子を叩いた者の存在に気づかなかった。

　やがてその何者かが屈かがんで鉄格子の隙間から顔をのぞかせた。彼は胸を突つかれて息が止まりかけた。何者かは頭ず巾きんを被かぶって顔を隠かくしていたが、すぐに誰だれかわかった。彼女だと思いはしたものの、にわかには信じられなかった。これは夢なのではないか。都合のいい夢くらい見てもおかしくない。それが今までなかったことのほうが、むしろ異常だ。

「何か──」

　取り澄すまそうとしている自分に気づいて、自じ嘲ちようしなが

らもいくぶん落ちつきを取り戻もどすことができた。彼は首を振ふった。頭が錆さびた鉄のかたまりみたいに重かった。

「会えて嬉うれしいよ」

「……あまり時間がない。手短に言う」彼女はそっとため息をついた。「ラフレシア第三帝てい国こくの軍隊が攻せめてくる。カリオサークは壊かい滅めつした。帝国軍はエルデンにまで押しよせてくるだろう。わたしはアサイラムのみんなと一いつ緒しよにエルデンを離はなれる」

「ラフレシアが……」

　ジュジか。

　そうとしか思えない。きっとやつが糸を引いている。だが、なぜ。何のために。ここはグッダーの国だ。どうしてジュジがグッダーの国を攻める？　何の必要があって？

　所しよ詮せん、彼は蚊か帳やの外だ。推測しようにも、手がかりになる情報が少ない。ただ、ジュジは何か企たくらんでいる。それは間ま違ちがいない。ジュジ、ジュジ、ジュジ、いつもジュジが何だかんだと策さく謀ぼうを巡めぐらしている。彼が言えた義理でもないが、もはや人の形すらとどめていない、生きているのかどうかさえ定かではないあの男が。

「……そうかい。エルデンを。そうだね。そのほうがいい。モリー・リップス。彼女は聡そう明めいで強いし、きっと大だい丈じよう夫ぶだろうが、気をつけて行くんだよ。できるだけ遠くへ逃にげるといい」

「言われるまでもない」

「あなたも強い人だからね。しかも、誰かを守るために、どこまでも強くなれる。だけどね。無茶はいけないよ。世の中には、あなたの想像を遥はるかに超こえるような、とんでもない力を持ったやつもいる」

「大丈夫だ。味方にもそういう者はいるから」

「秩ちつ序じよの番人と行動をともにするんだね。いいことだよ。ヨハン・サンライズなら、自分自身の命と引き替かえにしても、あ

なたたちを守るだろう」

「ＺＯＯもいる」

「もっと安心だ」

「だいぶ腐ふ食しよくしているな」彼女は牢獄の鉄格子に掌てのひらを押しつけた。誰が手入れをするわけでもないから、鉄格子がそうとう傷いたんでいることは彼も知っていたが、力を加えれば揺ゆれるほどだとは思っていなかった。

「……早く行ったほうがいい。時間がないんだろう。正直、ねえ……あなたには、ここにいてほしくない。だってさ、ひどく臭におうはずだよ。俺はもう、麻ま痺ひしちまって、ほとんど感じないけどね。鉄格子にも、さわらないでもらいたいんだ」

「わたしは医術士だぞ。まだ見習いだけどな」

「行ってくれ。お願いだよ」

「ＳＩＸ」

　その名ではなく、遠い昔に捨て去った、捨て去るしかなかった名で呼んでほしいなどと一いつ瞬しゅんでも思った自分は、この期ごに及およんで甘ったれているのだろう。

「……何だい」

「わたしはお前と話をしにきたわけでも、別れの挨あい拶さつをしにきたわけでもない」

「じゃあ──」

　何を、と尋たずねるよりも早く、彼女は一歩下がってモトロール刀を抜いた。

　充じゅう溢いつして、放散されずにとどまりながら、今にもあふれそうな気のようなものが、彼にも感じられるほどだった。

「ッ……！」彼女は声にならない気合いを発してモトロール刀を振るった。

閃ひらめいた。ちゃんとは見えなかった。なんて疾はやい。

彼女は刀を鞘さやに収めると、鉄格子をつかんで引いた。抜けた。

斬きったというのか。

「自分自身で選べ」彼女は腰こしの後ろから何かをとりだして、牢ろう獄ごくの中に放ほうった。

それは彼の腹にあたって、床ゆかに転げ落ちた。短刀だった。

「前にも言ったな。わたしはお前を許さない。でも、今のお前は信じられる。どうしてか、そう思うんだ」

去りゆく彼女の後ろ姿を目で追いながら、彼は短刀の柄つかに指を這はわせた。指は思うように曲がらず、襤ぼ褸ろ布きれを何重にも巻きつけてあるかのように感覚は鈍にぶかった。それでも、動いた。

九巡月五番日四時七分　エーメン大君国モスカ高原

「しっかし、つまらんのう……」

赤や黄、青で縁ふちどられた目が伏ふせられて、小さな花びらのような唇くちびるがすぼまり、頬ほおがぷっくりと膨ふくらんだ。黒くろ髪かみを六本の角のような形に結ゆいあげてあるちんまりした頭が、華きや奢しやで汚けがれを知らないやわらかな素す足あしをぶらぶらさせる動きにあわせて、かすかに揺れている。

姫ひめは忠実な従者の肩かたの上にいる。姫は姫であるがゆえに、めったなことでは自分の足で歩いたりしないのだ。だって、めんどくさいから。

麼禱埜マトウーヤ霊れい国こくの根幹をなす霊典をになう霊れい姫きとして生を受け、物心がつく前から厳しい訓練を受けていた姫は、同時に国の宝としてこれ以上ないほど丁てい重ちように扱あつかわれた。霊法を修めて儀ぎ式しきをとどこおりなく行いさえすれ

ば、どんな我わが儘ままでも通るのが霊姫の立場だった。

　問題は、多くの人間は気が利きかないことだ。たまにいくらか使える人間がいても、うっかり壊こわしてしまったり、物の弾はずみで殺してしまったり、そのうち老いて性能が低下してしまったりする。つまるところ、たいがいの人間は役立たずなのだ。

　だから姫は、自分の要求をちゃんと満たす従者を自らの手で作ることにした。

　霊姫は、端たん的てきに言えば超越者オーバリストだ。

　霊法とは、古代の実証主義魔ま術じゆつに基づく生体工学の知識を利用して、超越者オーバリストが死体を操あやつるための全手法と、霊典と呼ばれる各種儀式の詳しよう細さいな手順一式だ。

　麼禱埜霊国では、死者を葬ほうむらずに保存する。霊姫の役目は、できるだけ生前に近い姿を保った死体を操って、霊典を執とり行うことだ。霊典によって、死者が死なない特別な国を演出し、年中深い霧きりに包まれている国土を、神秘と畏い怖ふによって守護する。ようするに霊姫は、制度化された茶番劇で国民をたぶらかすための装置で、霊国は偉い大だいにして深しん淵えんな霊力に守られている、ゆえに外敵を寄せつけないのだと多くの国民は信じているが、実情は違う。幸か不幸か天然の要害であり、特筆すべき資源も産業もなく、耕地も少ない、閉へい鎖さ的で旧態依い然ぜんとした霊国は、隣りん国ごくに軽視されるどころか、ほとんど無視されている。ただそれだけのことだ。

　姫は様式化されすぎて陳ちん腐ぷ化していた霊法に革新をもたらし、死し霊りよう術を完成させた。

　霊法は所詮、定められたとおりに死体を動かすことしかしない。死霊術はその次元にとどまらず、屍しかばねを姫の簡単な命令に従う自じ動どう骸むくろに変えることも、少し手間をかければ、姫に絶対服従する無む命みよう衛え士じに仕立てることもできる。



　死霊術さえあれば、生きている者より死者のほうが遥はるかに、圧あつ倒とう的に、絶対的に役に立つ。

　姫はお付きの者たちを気儘に次々とぶち殺して、有用な死体にしてやった。刃は向むかう者、煩わずらわしい者は全員、殺して手て駒ごまにした。そんなことをしているうちに、安っぽい恐きよう怖

ふや逆さか恨うらみで結びついた愚ぐ鈍どんきわまりない阿あ呆ほうな連中が決起して姫を討うとうとしたので、馬ば鹿か馬ば鹿かしくなって姫は霊国を捨てた。愚ぐ劣れつな阿呆どもは姫の乱心、悪行、そしてその死を喧けん伝でんしたが、死を自在に操って死を最愛の恋こい人びととしているこの阿ア麼マ李リ姫さまが、あの程度で死ぬわけないだろが。ばーか。ばーか。ばーか。

「ほんと、つまらん……」

　姫はお気に入りの無命衛士、身の丈たけ二メーテル三十七サンチ、体重二百五十キルグラハムを超こえる烏ウ大ダイ男ナンの肩に乗って、暁あかつき前まえのモスカ高原をのんびりと散策していた。

　この高原の半分は、サンランド無統治王国と国境を接するエーメン大たい君くん国こくの領土だ。東に目を向ければ、大君国軍の野営地を望むことができる。まだ夜が明けていないので、大君国軍の愚図な見張りどもは姫を見つけられないだろうが、かわいくて強くて偉えらい姫には丸見えだ。

「非情につまらん。時間はまだ早いけど、もう我が慢まんしなくてもよかろ？　そもそも、なんでわらわがあのクソにゃんこの言うことなんぞ聞かないとならんのだ。むしろ、クソにゃんのほうこそ、わらわの言うことを聞くべきであろうが。それが筋というものではないか……？」

　呟つぶやいているうちに、だんだん腹が立ってきた。

　だいたい、前代未み聞もんのおもしろいことが待っているというから、仕方なくいろいろと頼たのまれてやった。ただそれだけのことで、言われたとおりにしてやる義理なんか、本来どこにも、これっぽっちもありはしないのだ。姫は力強くうなずいた。

「うん。やっぱり、わらわは好きにする。我慢は身体からだによくないし。わらわはけっこう健康志向だからの。死体は好きだけど、死ぬのはいやだから。死んでしまったら、死体で遊べないからの」姫は大君国軍の野営地を指さした。「──行くぞ、烏ウ大ダイ男ナン！」

　烏ウ大ダイ男ナンは返事をしなかった。一応、うーとかあーとか呻うめくことくらいはできるのだが、あまりに耳みみ障ざわりな醜

みにくい声なので、上うわ顎あごと下顎をきっちり留め金で固定した上、鋼鉄のマスクを装着させている。その他、いろいろな部分を改造しまくって、生きているウスノロどもよりだいぶ使えるようにした。即そく席せきで量産可能な自動骸と違い、無命衛士は姫の作品で、使い捨てにするにはちょっぴり惜おしい玩具おもちゃだ。

　最高傑けつ作さくの烏ウ大ダイ男ナンには及およばないにしても、そんな無命衛士たちが、モスカ高原のそこかしこで、地の底から這いだし、あるいは樹上から飛び降りた。

　総勢百七十四人。姫が手塩にかけて作りあげた無命衛士たちは、万の軍を向こうに回しても決して怯ひるまない。戦力的には生きた千人の兵隊と互ご角かくといったところだろう。ただし、無命衛士に命を奪うばわれた者は、ただちに姫が自動骸にしてしまう。自動骸は無命衛士の足あし許もとにも及ばない鈍どん重じゅうな兵士だが、何物も恐おそれず、ためらわず、かつての仲間に襲おそいかかる。その気になれば、姫は十万以上の死体を同時に操ることが可能だ。

　姫が率いる無命軍団に敵はいない。

　無敵だ。

「待っておれよ、阿呆ども」姫は舌なめずりした。「わらわが汝うぬらぜーんぶ死体に変えて、いっぱいもてあそんでやるからの」

同日五時　サンランド無統治王国首都エルデン環状通

　重苦しい雲に押し潰つぶされまいとして、東の彼方かなたの空が燃え立っている。

　シャルロット・リンデは兜かぶとの面めん頬ぽおを下ろし、エルデン南門へと至るマクスペイン・ストリートをほとんど埋うめつくしている市民の群れに金属で鎧よろわれた顔を向けた。ヨハン・サンライズ総長率いる一番総長直属隊、二番親衛隊以下、秩ちつ序じょの番人突とつ撃げき、遊撃諸隊は、マクスペイン・ストリートと交わる環かん状じよう通どおりで隊たい伍ごを組み、脱だつ出しゅつ市民たちを静かに、つめたく睨にらみつけている。持てるかぎり

の荷物を持ち、なんとか少しでも門に近づこうとして果たせずにいる脱出市民たちは、誰だれも彼も不安げだ。中には銀の軍団をちらちら見て近くの者と何やら囁ささやきあったり、侮ぶ辱じよくの仕し種ぐさをしてみたり、遠くから罵ば声せいを投げつけてきたりする者もいる。彼らは何かが起こるのではないかと恐れていて、その危き惧ぐは正しい。

　秩序の番人はただ市民を威い嚇かくするためだけに仰ぎよう々ぎようしく整列したりはしない。我が団の行こう為いには常に明確な目的が設定されている。市民たちもそのことを知っているはずだ。我々は行動しようとしている。ここで雁がん首くびを並べて、それでお終しまいでは断じてない。

「ぬう……」とリンデの隣となりで巨きよ漢かんの同志が唸うなった。突撃隊と遊撃隊は交互に配置されている。リンデの十二番遊撃隊の左は六番突撃隊だ。巨漢はその六番突撃隊を束ねている。銀色の甲かつ冑ちゆうを剝むけば、程ほどよく体毛に覆おおわれて薄うすく脂し肪ぼうがのった逞たくましい肉体が、兜を脱ぬげば、獰どう猛もうにしてどこか愛あい嬌きようのある熊くまのような髭ひげ面づらが現れるはずだ。

「気が進まないのですか、ワーノン隊長」リンデが小声にも満たない小声で問うと、巨漢はかすかに身じろぎした。

「そんなことは」

「当然です」

「うむ……」

　ラッド・ワーノンは根っからの闘とう士しだ。剛ごう直ちよくの士で、勇猛果か敢かんを絵に描かいたような戦士だ。鈍感な怖こわいもの知らずではなく、恐怖をねじ伏ふせるすべを知っている男の中の男だ。義のためとあらば、親兄弟であっても涙なみだをのんで手にかけるかもしれないが、その分厚い胸むな板いたの奥で大量の血を流し、洗われることのない傷口を抱かかえてまた剣けんを振ふるうだろう心根のやさしい男だ。それだけに、この任務はワーノンにとってつらいはずだ。どれだけつらくとも、やれと言われればやる。それが男というものだ。

　しっかりなさい、ワーノン。

　リンデは胸の裡うちで呟いた。おおかた脱出市民の中に幼児を抱いだく母親やまだ幼い子供がいるのを見て、気が萎なえかけたのだろう。人目がなければ尻しりを叩たたいているところだが、そのようなところもワーノンの美点ではある。長所であり、欠点にもなりうる甘さだから、自分が補ってやらねばと思う。自分はどこまでも非情になれる。義のためならば、そして愛する男のためならば、シャルロット・リンデは何もかも斬きり捨てられるし、我が身も魂たましいさえも捨て去ることができる。自分はそういう女だ。

　ひとり兜を被かぶらず素す顔がおをさらしている総長が、二歩前に進んで隊列から離はなれ、脱出市民たちを睥へい睨げいした。

「秩序の番人総長ヨハン・サンライズである」

　あたりの脱出市民たちが一いつ斉せいに口をつぐんで総長のほうに視線を向けた。

　瞬しゅん間かん、時間が停止したかのようだった。

「これより暫ざん時じ、道を空あけてもらう。なお、抗あらがう者は排はい除じよする。どうか心してもらいたい」

　ヨハン・サンライズの声量は十分豊かで、よく通る。しかし感情をうかがわせない、どこまでも落ちつきはらった声こわ音ねだ。

「よって私、ヨハン・サンライズが、秩序の番人総長として、以下の行動を君らに強く推すい奨しようするものである。即そつ刻こく、退去せよ。我らは行く手に立ちふさがる者に容よう赦しやはしない。繰くり返す。即刻、退去せよ。さもなくば、強制的な手段でもって排除する。命の保証はしない」

　一人の男が「やべえぞ……！」と叫さけんで駆かけだそうとした。何しろ混こみあっているから駆けようにも駆けられないのだが、男に押されて何人かが隣の者を押し、その者たちがさらに近くの者たちを押した。「痛っ──」「うわ」「ちょっ、待っ──」「何す……」「おおあっ」

　それでも、程なく秩序の番人の前にいくばくかの空間ができた。マクスペイン・ストリートはたしかに南門を目指す脱出市民であふれかえっていたが、他ほかの三つの大通り──北ほく斗と門へとつづくマキシマムＡＭドラゴン・ストリート、東門へと至るマーベラ

ス・グッダー・ストリート、西門で終わるトワイライト・ドレッドスターズ・ストリート──では、こうはいかなかったに違ちがいない。マクスペイン・ストリートは他と比べていくらかすいていた。これには大きな原因が二つあった。

　一つは、昨夜、マーベラス・グッダー・ストリートに正体不明の飛ひ翔しよう生物が出現、詰つめかけていた脱出市民がその姿や鳴き声に驚おどろき、恐きよう慌こうに陥おちいって、散り散りになる騒さわぎが起こった。これはあくまで一時的な現象にすぎなかったが、その後、できた空くう隙げきを埋めるように脱出市民たちが大挙して殺さつ到とう、マーベラス・グッダー・ストリートはまたたく間にもっとも人口密度が高い大通りに成り果ててしまった。

　二つ目は、ラフレシア第三帝てい国こく軍がもう間近に迫せまっているという流言飛語が飛び交かい、急速に広まって、南に逃にげるのは危険だと考える者が以前にもましていっそう増えていた。それで、南門は脱出市民の間で不人気となっていたのだが、現在、エルデンから出る者はいても、外から入ってくる者は皆かい無むだ。これでは帝国軍の動向など把は握あくできるはずもない。流言飛語はまさしく根も葉もない噂うわさにすぎず、その出所は何を隠かくそう秩序の番人無名隊だ。

　つまり、情報操作による脱出市民の誘ゆう導どうも計画の一部で、これにマーベラス・グッダー・ストリートの騒そう動どうという偶ぐう然ぜんが重なった。

　風向きは悪くない。

　総長が右手を挙げた。「総員、盾たて構え」

「盾構え！」リンデをふくめた各隊隊長が唱和しながら盾を前方に差し向けると、全隊士がほぼ一糸乱れずこれに倣ならった。

「再度、繰り返す」総長の冷れい淡たんすぎる声が脱だつ出しゆつ市民たちを打ちすえた。「今すぐ退去したまえ。妨ぼう害がいする者は悉ことごとく排除する」

「斉セイ……ッ！」一番総長直属隊隊長補コンラッド・アシャーが吼ほえると、つづいて総長をのぞく全隊士が声をあげた。「斉！」「斉！」「斉！」「斉！」「斉！」「斉！」「斉！」「斉！」
「斉！」「斉！」「斉！」「斉！」「斉！」「斉！」「斉！」

「斉！」「斉！」

　潮が引くように、とはいえ押しあったり突つき倒たおしたり転てん倒とうしたり踏ふみ越こえたりしながら、脱出市民たちが我先に秩ちつ序じよの番人から遠ざかってゆく。「──何なんだよいったい！」「ふざけてんじゃねえぞ、超最低ＳＵＣＫ」「これだから番人はよぉ！」「いででっ、踏むな！」「やめろって、痛えっつってんだろ……！」「助けて」「どこにいるの、ジョニー⁉」「押すなよ！」「死ぬって死ぬって」「逃げろ」「くるぞ」「やべ」「やべって」「早く──」

「秩序の番人」総長が右手を振りおろした。「前進を開始せよ」

「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」
「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」
「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」

「──きたぁっ……！」

　秩序の番人が一歩進む間に、脱出市民たちは二歩も三歩も下がった、最初のうちは。長くはつづかなかった。マクスペイン・ストリートの混雑具合が他よりましで、環かん状じよう通どおりと接しているこのあたりは南門へと向かう列の最さい後こう尾びから遠くないとはいっても、小回りのきかない馬車や荷車が多数混じっているせいもあって、人波は流れる水のようには動かない。みるみるうちに秩序の番人と脱出市民たちとの距きよ離りが狭せばまってゆく。驚きよう愕がくと恐きよう怖ふに引きつった男たちの、女たちの顔がよく見える。彼ら、彼女らの足どりは乱れている。リンデは隣となりのワーノンを一いち瞥べつして、素顔をさらしたまま盾も刀も構えず最前列に立って着々と足を進める総長に視線を向けた。ヨハン・サンライズならば、盾など使わず自らの手で直接脱出市民を押しのけて道を切り開くだろう。仮に血を流さねばならないとしたら、まず自身が率そつ先せんしてそれを行うだろう。そして、守護隊や警けい邏ら隊の隊士たちならば、あるいはそれでも多少は逡しゆん巡じゆんするかもしれないが、総長直属隊、親衛隊、突とつ撃げき隊、遊撃隊の隊士たちにかぎって迷いはすまい。少なくとも、リンデは微み塵じんも迷わない。自分の部下には決して迷わせない。

　行く手で一人の男が尻しり餅もちをついて、すぐさま起きあがろうとしている。男はやたらと大きな背負い袋ぶくろを背負って、鞄

かばんを三つも四つも肩かたに掛かけていた。あれではろくに動けまい。迂う闊かつなのだ。リンデは足をゆるめることも速めることもしなかった。軽く歯を食いしばって、しかし決して力まずに、慌あわてふためいてこちらに背を向けた男の背負い袋に盾をぶちあてた。男は悲鳴をあげてつんのめった。「どへっ」とでもいうような、まったく気構えのできていない者が出す、あまりに無様な声だった。男のくせに情けない。

「退のけい……！」頭にのぼりかけた血を怒ど声せい一つで急降下させ、リンデはさらに足を前へと進めた。大荷物の男は鞄を捨てて這ほう々ほうの体ていで逃げようとしている。そうだ、懸けん命めいに逃げろ、とは思うまい。ひとたびこの道を選んだからには、男を踏みにじってでも我らは進まねばならない。総長はむろんのこと、リンデら各隊隊長が率先してその意志を表明しなければならない。

「どけと言っているのだ……！」ワーノンが吼えて、鈍どんくさい脱出市民の一人を盾の一撃で吹ふき飛ばした。きっと兜かぶとの奥で髭ひげ面づらを真っ赤に染めてしかめていることだろう。意外とつぶらな目は血走っているだろう。脱出市民に対してではない、命令を下した総長にでもない、自分自身への憤いきどおりが炎ほのおとなってその身を焦こがしていることだろう。リンデは少しもつらくないが、ワーノンの苦く衷ちゆうを思うと胸が軋きしむ。今はすべて忘れて猪いのしし武む者しやになりなさい、ワーノン。言われずとも彼女の男はそうするだろう。

　実質的にはコンラッド・アシャー隊長補に統率されている一番総長直属隊は、総長の手足だ。苛か烈れつきわまりない〝小羅ら刹せつ〟李イ童ドウ晏アンの二番親衛隊は遠えん慮りよ会え釈しやく容よう赦しや一いつ切さいない。この二隊と巧たくみに連動して、小こ柄がらなチェス・ピード率いる七番突撃隊はいつもどおり迅じん速そくにして着実に突き進み、脱出市民たちを駆く逐ちくしてゆく。その隣にジョービー・カラマーの十一番遊撃隊を配置した総長の判断は完全に正しい。〝夜の遊撃手〟の異名をとるカラマーは女全ぜん般ぱんに甘すぎる。やつの部下もそうだ。いちいち女を大目に見ていたら任務の遂すい行こうはおぼつかない。真ま面じ目めで、それでいて堅かた物ぶつではない、ただしきわめて忠実なチェス・ピードが目を光らせているので、色しき魔まのカラマーもそうそう愚おろかな真ま似ねはできないだろう。見た目は伊だ達て男おとこだが、その本ほん性しようは戦せん闘とう馬ば鹿かでしかない

デートニッヒ・ボルボンゾルの九番突撃隊、天性の楽天的な武人である太臺子タイダイシーの十番遊撃隊は問題ない。多少気がかりなのはシャット・グレヒャの八番突撃隊だ。八番突撃隊はグレヒャの突出した個の力に依い存そんしすぎている。というより、グレヒャが己おのれを抑よく制せいできずに突っ走って、隊士たちはなすすべなく引きずられているように見える。

　もともと性格に問題のある男だったが、〝神しん剣けん〟の二つ名を自ら捨てて以来、グレヒャはとみに何かを踏み外しつづけている。もっと明確に、常じよう軌きを逸いつしていると言ってもいい。あの男は危あやうい。もしリンデにその権利があるのなら、グレヒャに隊一つ任せてはおかない。総長はなぜあの男を放置しているのか。何か考えがあるのか。あの壊こわれた男を使いこなす自信があるのか。だが、今は亡なき初代であれば、楽々と使ってみせただろうとも思える。

「はいはいはいはい、どいてくださいどいてくださいどいてください」グレヒャは一応盾を持っているだけで用いず、脱出市民たちを次々と蹴け倒して駆かけてゆく。銀色に輝かがやく鎧よろいではなくて、濃のう紺こんの平服を身につけているのはあの男だけだ。あげくの果てに、総長が先頭に立って示している最前線を越えようとしている。リンデはのろのろと後退しようとしてできずにいる脱出市民を盾で押しながら歯は噛がみした。やはりあの男は我が慢まんならない。思わず痛つう罵ばしそうになった。その前に総長が研とぎ澄すました刃やいばのごとき鋭するどい声を発した。「──シャット・グレヒャ！」

　グレヒャはわずかに身を震ふるわせて足を止めた。それから総長をちらりと見て露ろ骨こつに舌打ちをし、いかにも嫌いや々いやながらといった様子で他の隊に足並みをそろえた。何だ、あの態度は。許しがたいが、馬鹿者に腹を立てている場合ではない。

「ぬう……！」ワーノンが一人の脱だつ出しゆつ市民を突つき倒たおした。年老いた男だった。男は地面に顔を打ちつけて派手に出血した。ワーノンは男をまたいで前進する。隊士の誰だれかが男を踏ふみつけ、蹴け飛とばすかもしれない。あの老いた男は命を落とすかもしれないが、考えるな。考えてはだめ、ワーノン。私は考えない。痛む心があるのなら鋼はがねにくるんでしまえばいい。我々は鋼と化せばいい。そこに義はあるのか。問われても鋼は答えない。

同時刻　第三区

「このまんま、なぁーんも起こらんかったらええんやけどな」と間ま抜ぬけ魚が小声で呟つぶやいた。

　モリー・リップス・アサイラムの職員、入院患かん者じや、子供たちだけではない。アサイラム関係者以外にも秩ちつ序じよの番人と関かかわりの深い者たちが大勢、総長代理の羅ラ叉サ、琺瑠フオール副長、マシュー・シュナイデル副長の直属隊、各守護隊、警邏隊、それから無名隊に守られて移動している。

　ＺＯＯは秩序の番人後備隊に協力する形で、アサイラムの入院患者や子供たちの移送、引率を手伝っている。といっても、ユリカは医術士として患者の世話に手を貸しているけれど、あとはトマトクンが五歳児と六歳児を両りよう肩かたにのせて、きゅーが三歳の子供二人を背負っているくらいで、義足を装着したピンパーネルは平然と歩いているし、どうにか自力で歩行できるところまで回復した──というより、無理やり回復させられたハニーメリーの面めん倒どうを見るくらいのことしか、今のところはやることがない。

　マリアローズは横目で馬鹿魚を睨にらみつけた。「……そういうこと言わないでくれる？」

「なんでやねん。わしはただ、誰もが抱いだいとってもおかしない、ごくごく一般的な懸け念ねんを口にしただけやないか」

「きみが言葉にすると、なぁーんか現実になっちゃいそうな気がしてやなんだよね……」

「……それは……」サフィニアはうつむいて眉まゆをひそめた。「……たしかに……」

　ルーシーが元気よく挙手した。「ぼくも同感です！」

「ま、それ以前の問題として、きみの存在自体、けっこうやだったりするんだけどさ」

「えっほほほ。またまたずぅーいぶんなゆわれようやな。わしやなかったら、メタクソに傷ついとるところやで。いやいや？　わしかて傷つく心くらい持ちあわせとるっちゅうねん、人間なんやから

な」

「へえ……」

「何や。みんなして、疑わしい目ぇで見よって。今の台詞せりふのどこに疑う余地があんねん」

「あえて言えば・ぜんぶデス」

「ぜんぶかいっ。そこは一部にしとけやっ。しといたってくれやっ。頼たのむわ、ホンマ。な？　わしとジブンらの仲やないか？　のう？」

「……下手に、出られても……気持ち悪いだけ……なんですが……」

「サーフィーニア。サーフィニアッ。今のんはグサッときたでっ。なんや知らんけども、グサササッとな。突き刺さりよったでっ」

「ていうか、カタリさん、さっきからかなりうるさいですよ……？」

「おっとととととと。おっとっと。四六時中やかましいルーシーにゆわれてもうたら、もうしまいやがな。終わりやっ。わしの青春はぁっ。終わってもうたわぁぁぁぁぁー」

「そこっ！」と、銀色に輝く胸当てをつけた救護剣士が、モトロール刀の切っ先を半魚人に向けた。「いいかげん黙だまらないと、そのふざけた素っ首を叩たたき落とします」

「え、えらいすんまへん……」腐くされ半魚人は首をすくめて反省するふりをしてみせたけれど、すぐに本性を現した。「──て、ふざけた首って何じゃぁい！　そないなふうにさらぁーってけなすやり口、なっかなかやのう、にょほほほほほ、なんちゅうてな、感心しとる場合ちゃうわボぐわっ」

「ごめんね、リーチェ」マリアローズは後頭部への一いち撃げきで超ちよう馬ば鹿か半魚人を黙らせてから、手をあわせてベアトリーチェに謝った。「このろくでなしには死んで償つぐなわせるから」

「是ぜ非ひそうしてくれ」

「埋うめずニ・燃やしまショウ」

「……灰は、一箇か所しよじゃなくて……何箇所かに、ばらまかないと……ですね……」

「あはは。なんか、カタリさんって、灰からでも蘇よみがえってきそうですもんね」

「蘇るかいっ。いっくら不死身なトコがチャーモポインツなわしでも、灰になってもうたらどもならんがな！」

「チャーモポインツって何？」

　ハニーメリーは包帯だらけの身体からだで無理やりボディスーツを着込み、顔には火傷やけど隠かくしのマスクをつけている。そうとう痛々しい姿だし、痛みも実際あるはずだから、つらくないわけがない。それなのに、口数こそ少ないものの、遅おくれずについてきている。

「お、おふっ⁉」塵ゴミ魚は大おお袈げ裟さに魚顔をしかめた。「そ、そら、チャーモポインツちゅうたらアレやろ。こう、チャーゆうてな、モッ！　ボインのツ──て、あかんなこの線はこれ以上はきっついわごめんちょい」

「単なる言い間ま違ちがいですよね！」

「うっさいわ、ルーシー、ジブンそないな傷口に粗あら塩じおゴッシゴッシ塗ぬりこむような真ま似ねして何が楽しいねん。しかも大事な心やさしい先せん輩ぱい相手にやな」

　ハニーは「ふふ」と小さな笑い声をもらした途と端たん、おなかのあたりを押さえた。「──いったた。笑うとちょっと響ひびくけど、笑いたい気分。どうしよ。あ、心配はしないでね。わりと大だい丈じよう夫ぶだから」

　マリアローズはため息をついた。「正直、大丈夫そうには見えないんだけどね……」

「そ？　でも、ほんとなんだけど。起きて動けるってだけで、あたし的にはすごく助かる。あとはもう、よくなるしかないわけだし」

「前向きなやっちゃなぁ。まっ、後ろぉー向いとるよりは、

ずぅーっとええなっ」

「あなたは少し・前ばかりでなク・たまに後ろモ見たほうがいいデス」

「おぉ、ゆうたな、ピーンプ。ゆうたな？　ゆうたな？　ゆうてもうたな？　せやったらわし、これからしばらくの間、後ろ向きで歩いたったるからな？　ええんやな？」

「……勝手にすれば……いいんじゃないですか……」

「えっらいつめたい言い方やのう、サフィニア。心まで冷えてまうわ。さぶっ。さぶっ！　あ、さぶっ……！」

「はいはいはいはい」

「はいは一回でええやん？　ええとこ二回やろ？　四回はちびーっと多すぎやし、しかも矢や継つぎ早すぎやで、マァーリアロォーズ」

「そのイントネーション、すっごいむかつくからやめて？」

「してやったりやっ」

「でも、考えてみたらカタリさんの場合、前向きでも後ろ向きでも、目は横のほうについてるんで、けっこうアレですよね」

「アレって何じゃいっ。そんなジブン、目ぇが横についとるて魚やあるまいし。こう見えて人間なんやでわし。なんや。嘘うそやないわい。れっきとした人間やっちゅうの。なんでこんな必死になってこないなこと主張せなあかんのや、だいたい」

「てゆうかさ――」マリアローズはずいぶん長い間、一言も発してないトマトクンの様子を横目でうかがってみた。まさかと思ったけれど、やっぱりだった。「……寝ねたまま歩いてる人がいるんですけど」

「そやって話そらしてな。わしをナイガシロにしようとしてな」カタリはトマトクンをちらっと見て、さらに一いち瞥べつし、もう一度見なおしてから、目の玉が飛びだしそうな勢いで半魚眼を見開いた。「――って、ホンマやないかーいっ！」

　トマトクンは右みぎ肩かたに六歳の女の子を、左肩に五歳の男の子をのせている。二人は肩にまたがってトマトクンの頭にしがみついているので、落ちる心配はなさそうだ。トマトクンが転てん倒とうしたりしなければ。

　目をつぶって、鼾いびきに近い寝息まで立てているのに、あれでなぜちゃんと歩くことができてしまっているのだろう。ちょっと、じゃなくて、かなり信じられない。

　その隣となりで三歳の女の子二人を背負っているきゅーは、人見知りをする質たちなので最初は緊きん張ちようしていたようだけれど、だいぶ慣れたようだ。この子なら平気だろうとベアトリーチェが選び抜ぬいた二人だから、人ひと懐なつこいながらもおとなしい。たしか、ジェニーと璃梨リーリーといったか。彼女たちはすっかりきゅーが気に入ったようで、真っ白い毛に半分埋まってじっとしている。まあ、あのもふ毛のすばらしい心地ここちよさには、天下御ご免めんの悪逆非道な腐れ外げ道どうでも心がとろんとろんになっちゃうと思うけどね。

「きゅー。いつから寝てるの、その人……」

「きゅう」きゅーは両手を広げてみせた。

「……そっか。けっこう前から寝たまま歩いてたんだね」

「くう」

「やっぱり……起こさないほうが……いいですよね……？」

「や、それはどうなんだろ。普ふ通つうこういう場合、起こしといたほうが無難なんじゃない？」

「でも、気の毒かなって……とりあえず、問題ないみたいだし……」

「そらジブン、なんぼなんでも過保護すぎやで」

「──む」

　トマトクンの目がいきなりカッと見開かれた。

　何か起こるのかと思って即そく座ざに身構えたら、トマトクンは

目をつぶった。「……ぞるつか」

「な、何、ぞるつかって……」

「さ……さあ……？　何でしょう……？」

「くくく……」ハニーはまたおなかを押さえた。「ぞ、ぞるつか。ぞるつかだって。何それ。痛い痛い。くふふふ。だめ。なんかツボに入っちゃった。うくくくく……」

「だ、大丈夫ですかっ、ハニーさん……!?」

「大丈夫、大丈夫。ていうか、ぞるつか。いたたた。くくくく……」

「ぞ、ぞるつか……」サフィニアは小さく吹ふきだした。「……ぞるつか……」

「や、だから、ぞるつかって何なの……？」

「わたしには、わからないけど……ぷっ……ぞ、ぞるつか……」

「やばいですよ、マリアさん。なんか、謎なぞのぞるつかが伝染しつつありますよ。でも、ぞるつかって……くぷっ。ぞるつか……」

「ジブンらなぁ。そんなんどこがおもろいねん。ぞるつかぞるつかゆうて」

「ぞるつか」とピンパーネルが無表情で呟つぶやいた瞬しゅん間かん、カタリの魚面が一気に崩ほう壊かいして、すぼめた魚口から魚液的なものを「ブーッ」と噴ふん出しゅつさせた。

「──ぐぼっ、ぶぼらっ、ぞ、ぞるつかっ、ぼへっ、ぐへっ、どわはははは っ、ぞるつかっ」

「ちょ、ちょっとぉ、うはは、カタリさん、や、やめ、ぷはは、やめてくださいよもう、ぞるつかっ、くひひひひ」

「……ぞるつか……っ、っ、っ、っ……ぞるつか……っ、っ、っ……」

「ど、どうしよ、あたし、いたた、うふふ、ぞるつか、やば、いた

たた、くくく……」

「や、とくに笑えないよね……？　だって、ぞるつかでしょ？　僕は平気だし──」マリアローズはあたりを見まわしてみた。トマトクンは寝ながら歩いているし、きゅーはきょとんとしているけれど、ＺＯＯの面々だけじゃない。そばにいる子供や職員、大人の患かん者じゃたち、それに秩ちつ序じよの番人後備隊の隊士の中にも、笑い声を立てている者、肩を震ふるわせて笑いをこらえている者がけっこういる。不自然なほどきつく唇くちびるを引き結んでいるピンパーネルも、ひょっとして我が慢まんしているのだろうか。てことは何？　おかしくない僕がおかしいのかな？　でも、ぞるつか、ねえ。ぞるつか。ぞるつか。べつにおもしろくないと思うんだけど、みんなの笑い顔を見ているうちに、なんだか腹筋がぷるぷるしてきた。

「んくっ──」マリアローズは思わず手で口を押さえた。いやいやいやいや。僕は笑わないからね？　引きずられて笑ったら負けた気分になりそうだし。「く、くくくくくくくく……」

「お前たち」

　ひやっとして声のほうを見ると、ベアトリーチェの両目が逆三角形になっていた。

「うるさいと言っているのが聞こえないのか……？」

　笑っていた全員が一いつ斉せいに口をつぐんで頭を下げた。

「……ごめんなさい」「……すみませんでした……」「ご、ごめん」「すんまへん……」「ごめんなさいでしたっ」「もうしませン」

　とてつもない迫はく力りよくだった。ものっすごく怖こわかった。おかげで何の罪もないきゅーまで悄しよう然ぜんとしている。本気で反省しているみんなの気持ちが通じたのかもしれない。ベアトリーチェがうなずいて顔を前に向けると、途と端たんに張りつめまくっていた空気がゆるんだ。ベアトリーチェの怒いかりが一帯の大気に何らかの影えい響きようを与あたえていたということだろう。恐るべし。

　それにしても、周囲に目を配りながら馬ば鹿か話ができてしまう

ほど平へい穏おん無事すぎて、アホアホ半魚人ならずとも何か起こるんじゃないかと警けい戒かいしてしまう。一方で、困難が待っているとしたらこの先のはずだし、今から必要以上に身構えていてもしょうがないとも思う。

　秩序の番人に先導、警護されて、アサイラム関係者以下の一団は第三区の比ひ較かく的てき広い街路を選んで進んでいる。新旧大小様々の集合住宅が建ち並んでいる第三区は、まだ朝早いからというだけではたぶんなくて、すでに避ひ難なんしたり避難しようとしていたりする住民が多いのだろう、閑かん散さんとしている。第三区といえばn'ebulaがマスクペイン・ストリートの東側にあって、でも、ここは西側なので、けっこう遠い。どうでもいいんだけど。昼飯時ランチタイムはどうしているのだろう。本当にどうでもいいんだけど。

　大勢の体たい臭しゆうに混じって、埃ほこりの匂においがする。建物の合間から突つき刺さすような朝日が射さしこんできて、マリアローズはわずかに目を細めた。

　ものすごい速度で物事が進行しているわりに、けっこう冷静だと思う。

　ヨハン・サンライズ率いる先行隊は、すでに環かん状じよう通からマクスペイン・ストリートに突とつ入にゆうして、後続隊のために脱だつ出しゆつ市民を追い散らしてくれているはずだ。もちろん混乱は生じているに違ちがいないし、怪け我が人も、ひょっとしたら死者すら出ているかもしれない。それも覚かく悟ごの上で、アサイラム関係者らをとにかく全員無事にエルデンから離り脱だつさせる。秩序の番人はこの計画をやり抜ぬくだろう。ヨハン・サンライズ。あの男のことはやっぱりどうも好きになれないけれど、意志の強さは尋じん常じようじゃないし、信しん頼らいに値あたいする人間ではある。少なくとも、何もかも守ろうとして、その結果、一番大事なものまで失ってしまうような愚ぐを犯おかすことはない。つらい役回りを下の者に引き受けさせるような厚顔無む恥ちでもない。眉まゆ一つ動かさずに率そつ先せんして自ら手を汚よごすことを厭いとわない、べつに平気なわけではないくせに冷れい酷こく非情を装よそおうことが上手なかわいげのない男だ。そういうところが余計にむかつくんだけどさ。

　間もなく環状通に出る。本当にもう間もなくだ。

「ふぅーっ」とカタリが強く息を吐はいた。

　マリアローズは義足をつけているピンパーネルと傷だらけのハニーをちらりと見て、それからトマトクンに視線を向けた。トマトクンは薄うす目めを開けていた。

　後続隊の先頭はすでに環状通に入っている。

　環状通には東から西へ、つまりマクスペイン・ストリートから遠ざかるほうへと向かう人の流れがあった。誰だれも彼も大荷物を持っている。脱出市民だ。後続隊はそうした脱出市民たちには見向きもせずに東進する。

「だいぶ片づいてるみたいだな」上背があるから遠くまで見えるトマトクンが低く呟いた。

「気を引き締しめて」言ってすぐ、言わずもがなのことだと思ったけれど、いい具合に緊きん張ちようしている証しよう拠こだ。軽く舐なめた唇も乾かわいている。自分の状態としてはそう悪くない——と思う。

「盾たて構えい」総長代理の羅叉が叫さけぶと、「応」の返事とともに、後備隊をのぞく番人たちが携たずさえていた盾を構えて防ぼう御ぎよを固めた。

　ベアトリーチェは近くにいるけれど、モリーはずっと前のほうにいるから、マリアローズの位置からだと見えない。

　もう一度、唇を少し湿しめらせて、わずかに顎あごを引いた。

　後続隊が右へ右へと曲がってゆく。もうここはマクスペイン・ストリートだ。そういえば、マクスペインって——マリアローズはトマトクンを横目で見て、すぐ前に向きなおった。今はいいや。あとでいい。

　遠く、ずっと前方から、悲鳴や怒ど号ごうみたいなものが聞こえる。でも、それ以外にこれといった変化はない。と思ったら、舗ほ装そうされた地面にべったりと血ち糊のりがついていた。折れた歯とおぼしきものが落ちていたりもする。アサイラムの子供が、脱出市民の落とし物なのだろう背負い袋ぶくろを踏ふみ越こえようとしてしくじり、後備隊の番人に支えられた。うしろめたい思いがまったくないとは言えない。でも、僕らは運命に身を任せてじっとして

いる方法を選ばなかった。他ほかの人たちを、それが敵だろうと敵じゃなかろうと、とにかく目の前の誰かを押しのけて道を切り開くことに決めたのだから、こうなることは目に見えていた。今さら気き後おくれしたりためらったりしてもしょうがない。そんなことは許されない。

　マリアローズは短く三度、息を吐いてから、深く吸いこんだ。とりあえず、先行隊はうまくやっている。それは間違いない。

　不意にピンパーネルが後ろを向いた。その直後だった。

「敵てき襲しゅう！　後衛、迎げい撃げき用意っ……！」女性の声がした。後続隊の後衛で指揮をとっている琺瑠副長だ。

「敵って——」マリアローズは足を止めずに振ふり返って、ぴょんぴょん跳はねた。だめだ。見えない。超最低ＳＵＣＫ。

「むう……」トマトクンは両りよう肩かたにのっている子供を手で押さえて振り向いた。

「止まるな！」羅叉が声を張りあげた。「迎撃は後衛に任せる！前衛及および中衛は微び速そくで前進継けい続ぞく！」

　そう言われても、実戦慣れしている秩ちつ序じよの番人と違って、アサイラムの患かん者じやや子供たち、他の避難者たちは素人しろうとだ。途端に足並みが乱れに乱れた。中には担たん架かで運ばれている患者もいるから、歩調があわなくなるとぶつかったり転びそうになったりする者もいた。

「落ちつけ！」「大だい丈じよう夫ぶだ！」「きみたちのことは我々が守る！」「慌あわてることはない！」

　番人の声、声、声が飛び交かって、素人集団が落ちつきを取り戻もどす前に、後衛は反転していた。マリアローズはここにいて何をしているわけでもないし、むずむずして仕方ないけれど、好き勝手に動いたら邪じや魔まになるだけだ。何をしているわけでもないのなら、何かできることはあるわけだから、せめて自分にできそうなことくらいはやらないと。

「大丈夫だから！　ね！」マリアローズはそばできょろきょろしていた子供の肩を抱だくようにして歩かせた。敵って何だろう。誰なんだろう。気になる。だけど、見えないし。

「やつら、〝強盗団ロバーツ〟とかゆうとるで！」カタリは好こう奇き心しんを隠かくそうともせず、つま先立ちをして後ろ歩きをしている。「ＤＩＥやとかギャプ・ド・レエ、平面爆弾フラットボンバー、カラナビス、ベス公あたりの若手連中が結成しよった略りゃく奪だつ集団やな！　秩序の番人に挑いどんできよるとはええ度胸やないか！」

「なんできみ、そんなに嬉うれしそうなの……」

「誰が嬉しがっとんねん。ちょぉーっとばっかし血湧わき肉躍おどっとるだけやんか。かーっ。わしも迎撃したいわっ！」

「ぼ、ぼくも……！」

「おお。ルーシー。ジブンもかい。なんやかんやゆうて、すっかり一人前の漢おとこやのう」

「えへへ。そうですか……？　でも、なんかこう、迎撃っていう言葉って、ときめくものがありますよね」

「漢の証あかしやで」

「……救いがたいです……この人たち……」

「救わなくていいデス」

「……ですよねー……」

「てゆうかさ」マリアローズはトマトクンを見上げた。「問題なさそう？」

「うむ」トマトクンは五歳児と六歳児に髪かみやら耳やらを引っぱられながら、片方の眉まゆをつりあげた。「後ろは平気なんじゃないか」

「後ろは──って……」

「きゅう！」きゅーが鋭するどい声を発して東のほうを見た。それとほぼ同時に、ピンパーネルが腰こしを低くして西に目をやった。「──挟はさみ撃うちデス……」

　マクスペイン・ストリートの東も西も第七区だが、趣おもむきは

だいぶ違ちがう。東側は機術工場や各種工こう房ぼうなどが乱立している第八区とほとんど変わらないし、西側には瓦が礫れきを寄せ集めて建てたようなめちゃくちゃな建物が隙すき間まなく密集している。

　背せ伸のびをしてもマリアローズにはやっぱり見えないのだけれど、背後のみならず、どうやらその東と西からも敵は殺さつ到とうしてこようとしているらしい。いや、見えた。西のほうだ。朽くちかけているとしか思えない残ざん骸がいの集積物みたいな建物の窓から、ストライプのボディスーツを着た禿はげ頭あたまの男が飛び降りた。ライム色とレモン色のストライプは、たしかベス公という悪党クランのシンボルカラーだ。あまり大きいクランではないけれど、色合い的にけっこう目立つから覚えている。後ろと左右から襲おそわれて、後続隊の足は完全に止まってしまった。

「ウケケケケッ」半魚人が不ふ愉ゆ快かいきわまりない奇き声せいを発した。「挟み撃ちっちゅうのんも、なかなかええ響ひびきやなァ……？」

「同感ですっ！」ルーシーはもうモトロール刀を抜ぬこうとしている。

「あたし、自分のことくらいは自分でなんとかできるから」ハニーは左手で腰のケースをまさぐった。あの中には拳けん銃じゆう、リトルジョニーが収められている。

　ピンパーネルも雌し雄ゆう一対ついの短たん剣けんをぶら下げるように握にぎっているし、きゅーも全身の毛を少しだけ逆立てて臨戦態勢だ。

「サフィニア、遠いけど狙ねらえる？」

　尋たずねると、サフィニアは右手だけで杖つえの下か端たんを握りしめ、その先端を西のほうへと差し向けた。いつ精神集中チヤネリングに入って準備を終えたのかまったくわからない。日ひ頃ごろの修練の成果なのか、それだけじゃない天てん賦ぷの才の発はつ露ろなのか、何かきっかけがあるごとに、サフィニアは確実に進歩している。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　杖の先から放たれた幾いく条じようもの雷かみなりは、二十メーテル以上離はなれている西の建物──その窓から飛びだしてこようとしていたベス公の男たち四、五人を直ちよく撃げきして吹ふっ飛とばした。相手はベス公だけじゃない。カタリの言葉を信じれば、ＤＩＥやギャプ・ド・レエといった名の知れた悪党クランや、それよりは若じやつ干かんマイナーな平面爆弾フラツトボンバー、カラナビスの連中もいるようだ。けっこうな頭数をそろえているみたいだから、四、五人の損失自体が形勢に決定的な影えい響きようを及ぼすことはないだろうが、西方面の敵が一いつ瞬しゆん、怯ひるんだ。その間に、意表を衝つかれて多少動どう揺ようしていた秩序の番人がすっかり態勢を立てなおした。東のほうは、しかし、いくらか押され気味だ。

「──トマト、きゅー、ピンパーネル、ハニーは残って！　僕とカタリ、ルーシー、それからサフィニアは東に！　行くよ！」

　マリアローズは返事を聞かずにアサイラムの患者やら子供やら職員やらをかきわけて東へと向かおうとした。

　なんで上のほうを見たのか、そのときはわからなかった。

　とにかく何かに突つき動かされて振ふり仰あおぐと、山なりの軌き道どうを描えがいて──三つか四つの何か丸い物体が飛んでくる。

　マリアローズはとっさに腰に手をのばしたが、そこに吊つるされているはずの小型強弩ベイビーファイアは崩ほう壊かいしたトマトクン邸ていと運命をともにした。だいたい、撃ち落とすなんて無理だ。一つじゃない、複数だし、もう遅おそい。

　物体は子供たちや職員らが集まっているあたりに落ちた。心臓が握り潰つぶされるかと思った。でも、予想に反して、ぼふっ、みたいな軽くて鈍にぶい音がした。物体はどうやら何か粉状のものを詰つめた袋ふくろか何かだったらしい。それが破れ、中身が飛散して、近くにいた者たちが咳せきこんだりくしゃみをしたりしながら、叫さけんだりもがいたりしはじめた。

「なっ、何なんですか、あれ……!?」

「胡こ椒しようやんか……！」

「てゆうか、まだくるんだけど……!?　サフィニア……！」「──っ

……！」

　マリアローズはサフィニアを抱だきよせて、飛んでくる丸い物体をかわそうとした。それでまともに食らう事態だけはなんとかさけられたが、物体はそう離れていない地面に落ちて、胡椒らしい粉をぶちまけた。その寸前に目をつぶって息を止めた。そのつもりだった。ちょっとだけ遅かったのか。まず鼻に刺し激げきがきて、次に涙なみだがあふれてきた。息ができなくて口を開けてしまい、吸いこんだ粉が喉のどを刺さして、咳せきだかくしゃみだかわからないものが止めどなく出た。目を開けられない。何も見えない。だけど、サフィニアも、カタリも、ルーシーも、似たような有様だ。それはわかる。胡椒。まぎれもなく胡椒だ。言うなれば、胡椒爆ばく弾だん。おそらく、紙で胡椒を包み、紐ひもで縛しばって口を閉じただけのものだろう。

　そうか。わかった。建物の屋上だ。何かをぐるぐる回している男がいた。それを見て、あいつは何か投げようとしていると、瞬間的に判断した。きっとあれは簡単な投石機だったのだろう。そうして上を見ると、胡椒爆弾が飛んできた。そういうことだったんだ。くそ。超最低ＳＵＣＫ。胡椒はわりと安くなかったりするけど、こんな単純すぎる武器とも呼べないようなものにまんまとしてやられるなんて。誰だれでも考えつきそうで、たやすく作れそうなのに、なぜか今まで一度もお目にかかったことはない。そして、効果は絶大だ。

「えほっ、ぐしゅっ、こほっ、かはっ、さ、サフィ、あくっ、ニア、だ、だいじょ、ぶしゅん、だいじょ、べぐしっ」

「だい……ふしゅん、じょ、くしゅん、ぶ……ひしゅん」

　目も鼻もきかないので、どうなってしまっているのか、はっきりとはわからない。でも、間ま違ちがいなく大混乱に陥おちいっているはずだ。非戦せん闘とう員はもちろん番人たちだって、完全武装していても目だの口だの鼻だのは無防備に近いから、これはきいているだろう。まずい。まずいってば。まずいよ。や、冷静に。冷静にならないと。一時的には押しこまれる展開になるかもしれないけれど、絶対に持ちこたえられる。秩ちつ序じよの番人はそんなにやわじゃない。

「くっそ、けど見えないし、くしゅん、鼻とか喉とかぐしゅん、もう頭にくるなあ……！」

　マリアローズは左手で口と鼻を覆おおってまばたきを繰くりかえした。うん。ぼやけてるけど、何も見えないってことはない。サフィニアはすぐ後ろにいて、魔ま術じゆつ士衣の袖そでで目のまわりをぬぐっている。カタリとルーシーはなぜか抱きあっていた。見ようによっては、抱ほう擁ようしあって号泣しているようにも見えなくはない。何やってるんだか。

「カタリ！　ルーシー！　しっかりして！」

「━へぐしゅおんらっ！　ぼ、ボケェッ！　わしはしっかりしとるっちゅうげしゅんっ！」

「ご、ごべんださいっ！　へきしっ！」

「さあ、くしゅんっ、行って行って、ぷしっ」マリアローズはサフィニアの手を引きながらカタリとルーシーを蹴けり進ませ、とろくさい二人に腹が立って追い抜いた。番人たちは動かずに盾たてを並べて壁かべを作り、防戦に徹てつしているようだ。さすが、と言うべきだろう。現状ではああやって凌しのぐのがおそらく最善だ。目が痛い、痛い、痛いけどかまうものか。子供は邪じや魔までも突き飛ばしてしまわないように。大人はちょっと失礼してどいてもらって。胡椒爆弾はまだ降りそそぎつづけている。敵は何らかの備えをしているのか。まあ、ゴーグルとマスクを着用すればいいわけだから、それくらいの用意はしているのかもしれない。こちらに背を向けている番人の列に近づいてゆくと、案の定だった。番人たちめがけて突っかかってくる敵は全員、防毒防ぼう塵じんマスクやゴーグル、各種マスクなどをつけているようだ。

「サフィニア……！」

「……わたしは、くしゅん、へ、平気だから……！」

　マリアローズはサフィニアの手を放して、ベルトのホルダーから小こ瓶びんを抜きとった。家があんなことになって、在庫も製作するための器具もぜんぶ失ったから、もう六つしか残っていない。こんなことになってしまったので補ほ充じゆうできるあてもないし、あまり使いたくはないけれど、えてしてこういうときにけちると後こう悔かいする羽目になったりするものだ。でも、やっぱりもったいないから、一個だけ。

　マリアローズが投じたハーレム・ゴードン入りの小瓶は、番人た

ちの列に押しよせてきている敵の後方で爆発した。至近距きょ離りで食くらわなければ死ぬことはない程度の威い力りよくだが、閃せん光こうや音、煙けむりはけっこう派手だ。敵が目に見えてうろたえた。

「カタリ、ルーシー……！」

「ほいきたっ！」「行ってきまぁーすっ……！」

　カタリとルーシーが番人たちの間をすり抜けて敵に突っこんでいった。たった二人とはいえ、その突とつ進しん力は半はん端ぱじゃない。

「ずらずらずらずらずらずらァァッ……！」「Ｉ□Ｙａｈａａａａａａａａｈｈｈｈ……！」

　けしかけられたときのカタリとルーシーは獰どう猛もうな獣けものだ。ルーシーは戦いとなると視野が狭きよう窄さくしてしまう欠点を抱かかえていて、目の前にいる敵しか見えなくなる傾けい向こうがあるけれど、カタリは半魚人なりに経験豊富だし、目が離はなれているから見み渡わたせる範はん囲いもそこそこ広い。見た目に反して老ろう獪かいなところもあったりする。向こう見ずなルーシーをそれとなく援えん護ごしつつ、複数の敵を効率的に傷つけて戦闘能力を奪うばったり損そこなわせたりといった芸当もできるから、一足す一が二どころか三にも四にもなる組みあわせだ。当然、四だろうが五だろうが、数は相手のほうが多いわけで、カタリとルーシーの快かい進しん撃げきがいつまでもつづくことはない。というか、いつまでもつづける必要はないのだ。流れが少しでもこちらに傾かたむいたところで、地力では遥はるかにまさる秩序の番人が攻こう勢せいに転じれば、一気に勝負を決めてしまえるだろう。

「十九番警けい邏ら隊前へ出ぇーっ……！」「十五番守護隊遅おくれをとるなッ……！」

「よし……！」マリアローズはうなずいた。だけどまだ気を抜いちゃいけない。強盗団ロバーツはたしかに秩序の番人に押しまくられている。胡椒爆弾の雨もやんだ。負け戦いくさにはならない。それはもう十中八九、間違いないと思ってもいいだろう。ただ、盾を並べて前進する番人たちはさながら鋼はがねの壁のようだが、それはあくまで比ひ喩ゆにすぎなくて、実際には番人と番人の間に空くう隙げきがないわけじゃない。どうやら敵にも無む手てっ法ぽうな

いかれたやつがいるみたいで、その隙すき間まを通り抜けてくる者がたまにいたりする。こっちには守らないといけない人たちがいるんだから、一人たりとも通しちゃダメなのに……！

　マリアローズは右手でＡＮＧＲＡロンド09を、左手でＡＮＧＲＡレクイエム04を抜いた。番人の間を抜けてきたやつ──赤ら顔が妙みように細長くて、緑色に染めた髪かみの毛は頭のてっぺん以外、剃そってある。ニンジン……？　一度そう思ってしまうともうニンジンにしか見えない。ニンジン男は鉈なたみたいな剣けんを両手に一本ずつ持っている。放っておいたら、職員や子供がニンジン男の毒どく牙がにかかるかもしれない。マリアローズは「ふっ……！」と息をつめてニンジン男に迫せまった。正直、ちょっと怖こわかった。だって、ニンジン男の顔色も顔つきも明らかに異常だ。いっちゃってる。顔がやたらと細長く見えるのは筋肉がすごいからだし、背も高い。百八十以上ある。かなり力があるだろう。その膂りょ力りょくを効果的に使われたらやばい。マリアローズは祈いのった。どうか馬ば鹿かでありますように。果たしてニンジン男は「ケヒャッ……！」と両りよう眼めを見開き、左右から挟はさみこむように鉈を繰りだしてきた。何のひねりもない。やった。馬鹿だ。助かった。マリアローズは限界まで体勢を低くして鉈の下をくぐり、ニンジン男の懐ふところに入りこんだ。そうして身体からだをねじりながら右手のロンドをやつの顎あご下へ、左手のレクイエムを鳩尾みぞおちあたりにぶっ刺さしてやった。「ウヘッ。ウハハッ」ニンジン男は笑った。薬ヤクでもキメているのか。だとしたら危険だ。マリアローズはニンジン男を突つき倒たおしながら跳とび下がった。ニンジン男は後ろへ倒れこみながら鉈で斬きりつけてこようとしたが、かすりもしなかった。

「は、ハネモン、ハネモンの仇かたきだオラァッ……！　エヘッ！　ウヒハハハッ！」ニンジン男は腹から、そして喉のどから血を噴ふん出しゆつさせ、わけのわからないことをわめきながら、倒れたまま鉈を振ふりまわしている。そのうち起きあがってきそうだし、危ないったらない。

「この……！」マリアローズは右みぎ膝ひざを思いきり曲げて左ひだり脚あしをのばし、地面すれすれにロンドを振ってニンジン男のニンジンみたいな頭に叩たたきこんだ。側頭部から頭頂までザックリやられると、さすがのニンジン男もおとなしくなった。まったく、何なんだよ。冗じよう談だんじゃないっての。そんなことを思いながら前に向きなおると、ライム色とレモン色のボディスーツを

着たベス公の若い男が棘とげだらけの棍こん棒ぼうを振りかざして肉にく薄はくしていた。やば。よけないと。動くより早く、マリアローズの斜ななめ後ろから何かが飛びだしてきた。何か、じゃない。サフィニアだ。

　サフィニアは杖つえでベス公の横っ面をぶん殴なぐった。「──えい……！」

　ベス公は頭から地面に突っこみ、白目を剝むいてぐったりした。

「あ、ありがと、サフィニア」

「……どういたしまして……！」

　細いわりに、その気になったらけっこう力あったりするんだよなぁ。まあ、魔ま術じゆつ士だしね。いろいろ見た目どおりじゃなくてあたりまえなんだけど、そんなことはどうでもよくて、よくないのはこの状じよう況きようだ。秩ちつ序じよの番人が圧あつ倒とう的に有利で、大たい勢せいは変わらないだろうが、このままだと非戦せん闘とう員に死傷者が出てしまいかねない。そうなったとしても、たぶん少数にとどまるはずだ。許容するしかないのかもしれない。ただ、一人でも犠ぎ牲せい者しやが出たら、秩序の番人にとっては失敗に等しい。それはＺＯＯにとっても同じだ。

　なんとかしたいけれど、個人の力でどうにかできるようなことでもない。力が抜ぬける。無力感というやつだ。それでも気合いを入れなおして、自分にできることをやるしかない。

　そうしようとしたら、わあああああああ、おおおおおおお、というような、なんだかちょっとやけくそっぽい喊かん声せいが轟とどろき渡わたった。

「……え？」

　秩序の番人じゃない。じゃあ誰だれ？　敵？　強盗団ロバーツ……？　違ちがう。そうじゃない。

「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」

　北のほうからだ。人の群れが口々にＥＦＡを連呼しながら駆かけてくる。脱だつ出しゆつ市民ではなさそうだ。荷物を背負ったり担

かついだりしていないし、手に手に剣だの斧おのだの棍棒だのを持っている。てんでんばらばらではあるものの、武装している。男もいれば、女もいる。中年もいれば、まだ若いどころか子供もいる。老人もいる。何だろう。あの集団は。ＥＦＡ……？　クランの名前？　聞き覚えはない。だけど、けっこうな人数だ。けっこうというか、かなりといったほうがいいかもしれない。

　ぴったりしたボディスーツを着ていて、突きでた腹がはちきれそうな中年男が、ベス公の男を剣の平で殴り倒した。白髪しらがの老人が先を尖とがらせた木の棒をモヒカン男の土手っ腹に突き刺し、四十年配の小太りの女がフライパンで禿はげ頭あたまの男をガッツリ殴おう打だした。なんだかよくわからないけれど、士気は妙に高いようだし、やっぱり数が多い。それに、こんな加勢は強盗団ロバーツにとって想定外だっただろう。加勢。そう。これは加勢だ。でも、もちろん、こっちだって予想していなかった。てゆうか何？　ほんとに何なの……？

「Ｅッ！　Ｆッ！　Ａッ！　Ｅッ！　Ｆッ！　Ａッ！　Ｅッ！　Ｆッ！　Ａッ！」

　どこかで聞いたことがあるような気がしなくもない、変に響ひびきのいい声が降ってきた。

　マクスペイン・ストリートに面している建物の屋上だ。

　金ぴかの悪あく趣しゅ味みこの上ない鎧よろい兜かぶとを身にまとった男が、大きな旗を振っている。

　地が黄色で、四よ隅すみに赤いラインが入っていて、同じく赤で太陽を意い匠しよう化したものらしい紋もん様ようが描えがかれている旗だ。

「Ｅッ！　Ｆッ！　Ａッ！　Ｅッ！　Ｆッ！　Ａッ！　Ｅッ！　Ｆッ！　Ａッ……！　秩序の番人諸君ーッ！　どうか安心してくれたまーえ！　我々ッ！　エルデン自由軍通つう称しようＥＦＡがァァハァッ！　義によって助すけ太だ刀ちいたァーすッ！　不届き者に正義の鉄てつ槌ついをォォォォッ！　下すぞォォウッ！　そォーれッ、ＥＦＡッ……！」

「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」

誰も彼も黄色い布を腕うでや頭に巻いていて、その中には侵入者クラツカーらしい者の姿も見受けられる。とはいえ、素人しろうととしか思えないような者も多い。というか、素人のほうが多そうだ。それにもかかわらず、エルデン自由軍、ＥＦＡを名乗る謎なぞの軍団は強盗団ロバーツを圧倒しつつある。

まあ、もともと秩序の番人が優勢だったわけで、ＥＦＡはそれに便乗したようなものだ。戦闘に参加するタイミングがよかった。絶妙だったと言っても、さして大おお袈げ裟さではないかもしれない。偶ぐう然ぜんか。時機をうかがって、ここぞというときに介かい入にゅうしてきたのだとしたら、指揮官が優ゆう秀しゅうなのだろう。指揮官って──まさか、あの金ぴか男が……？

「てゆうか、あれ……あのファニー・フランクじゃ……」

「我こそはァッ！」と金ぴか男が絶ぜつ叫きょうした。「フラァァァンクッ！　ゴールディンッグッ！　レェェェェェェェェェェェェェェイヴゥゥゥゥゥンズクロフトッ……！」

「……フランク……」

「私はァーッ！　一介のエルデン市民にすぎない、だがしかァーしッ！　このエルデンを誰よりも愛する者であることは断言できィーるッ！　ＥＦＡッ！」

「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」

「我々ＥＦＡはァーッ！　自由の象しょう徴ちょうエルデンをこよなく愛しィーッ！　これを守らんとする者たちが手と手をとりあって一いつ致ち団結しィーッ！　この未み曽ぞ有うの危機から我々の愛する自由の象徴たるエルデンを守るべく立ちあがった勇者の軍団であり我々ＥＦＡはァーッ！」

「……何回同じこと言うんだよ」

「長年このエルデンにおいて意欲的な活動を積極的また持続的に行ってきた秩序の番人諸君に敬意を表しィーッ」

「なんか上から目線だし……」

「たとえそれが笑しよう止し千せん万ばん我々の愛する自由の象徴エルデンからの逃とう亡ぼうが目的であったとしてェー
もォーッ！　我々はこのたび諸君が標ひよう榜ぼうし大得意としている義によってェーッ！　我々ＥＦＡが助太刀することをＥＦＡ総そう帥すいたるフランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトの名において宣言するものであァーるッ！　ＥＦＡッ！」

「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」

「さあＥＦＡの勇ゆう壮そう勇ゆう敢かん勇ゆう気き凜りん々りんたる勇士たちよォーッ！　どうかもう一ひと踏ふん張り、もう一働きしてくれたまえッ！　勝利はすぐそこだッ！　私も行くぞォォウッ……！」ファニー・フランク（だと思う。ほぼ確実に）は建物の屋上から飛び降りようとして、その寸前でピタッと止まった。
「──フーッ……！　なかなかにッ！　高いッ！　生半可ではないな、これはッ！　フーッ！　ハァーッ！　か、覚かく悟ごを決めねばッ！　覚悟ォホッ……!?」

　ファニー・フランク（まあ間ま違ちがいないだろう）はだいぶためらっていたみたいだが、いきなり蹴けり落とされた。

　二階建てだから、落っこちてもよほどのことがないかぎり死にはしない。そうはいっても、後ろから背中を蹴って落とすのはちょっぴり鬼おにといえば鬼だ。そんな所業に及およんだのは、旗を振ふるファニー・フランクの後ろに立っていた一人の男だった。黒くろ髪かみで口くち髭ひげを生やし、かちっとした帽ぼう子しを被かぶって、柄がら物ものの丈たけが長くてたっぷりした東方風の衣ころもを身につけ、渋しぶい輝かがやきを放つステッキを持っている。顔がやけに小さくて肩かた幅はばが狭せまいし、恰かつ好こうもちょっと変だし、なんともちぐはぐな印象の男だけれど、どこかで見たことがあるような、ないような。

「──ヌオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン……!?」

　とにかく口髭男に蹴り落とされてしまったファニー・フランクは、空中で大いに、無む駄だにあがきまくったあげく、両足でビッターンと着地してから五秒間くらいは全身を震ふるわせていた。ああ。うん。痛いね。あれは痛いよ。骨とか折れててもおかしくないし。でも、ファニー・フランクは根こん性じようを見せた。

「ム、ムハハハハァッ……！　私は平気だよ、キミィ……？　ピンピンしておるよ、フムーン。何しろ私はエルデン自由軍ッ、ＥＦＡの総ッ！　帥ッ！　なのだからねえ！　偉えらいわけだよ、強いわけだよ、頼たのもしいわけだよ、さあさあさあッ！」ファニー・フランクはまた旗を振りはじめた。「ＥＦＡッ！　ＥＦＡッ！　ＥＦＡ□ッ……！」

「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」

　とりあえず、なんか盛りあがってるみたいだし、強盗団ロバーツは掃そう討とうされつつあるし、いいか。

　番人たちの壁かべを抜ぬけてくる者も、見た範はん囲いではもういないようだ。

「……助かった……みたい……？」

「なのかな？」マリアリーズはロンドとレクイエムを鞘さやに収めながらサフィニアに向きなおった。サフィニアの杖つえの先せん端たん部に血がこびりついている。「……ふこうか？」

「あ……大だい丈じよう夫ぶ、自分で……」

「マァーリアローズッ！　サフィニア！　なんともあらへんな!?」カタリがばたばたと駆かけ戻もどってきた。ルーシーもいる。心配していなかったけれど、二人とも無事らしい。

「まあ、僕らはなんともあらへんけど……」

「よかったです！　お二人とも、なんともあらへんで！」

「……ずいぶんがんばったっぽいね、ルーシー」

「えへへ」と照れ笑いをしてみせたルーシーは、血ち塗まみれで大変なことになっている。傷を負っている様子はないから、ぜんぶ返り血だ。凄せい惨さんすぎる。

「しっかしびっくらこいたのう！　エルデン自由軍、話にはちこっと聞いとったけども──」

「……カタリさん、ご存じ……なんですか……？」

「そら知っとるがな。わしを誰だれや思とるん、サフィニア。わしやで、わし。情報と名のつくことで、わしの知らんことなんかイッコもないがな。ちょっとした全知全能やで」

「あれって、ファニー・フランクだよね？」

「ツッコめや、そこは。軽ぅーくでええからツッコんでくれや……」

「あれって、ファニー・フランクだよね？」

「さっくりスルーしてまったく同じテンションで二回同じこと訊きくてどないやねんっ。胸が痛いわっ。まあ、ファニー・フランクやけども」

「ファニー・フランクって──」ルーシーが顔を引きつらせた。「〝創世の翼ジエネシスウイング〟の……あっ。そ、そういえば、あの変な恰好……！」

「でもさ、あの人たち、〝創世の翼ジエネシスウイング〟では明らかにないよね？」

「見てのとおりやろ。ファニー・フランクが街頭で人集めしとったっちゅうのんは、わしも聞いとったんや。はかばかしくないらしいともな。まあ、そらそうやろうけども。そのはずやってんけど──」

「……違った……ようですね……」

「いったいどないな手品、使いよったんや」

「手品師って柄がらじゃなさそうな男だったけどね」

「ですけど、詐さ欺ぎ師しっぽい人ではありましたよ？　ぼくも騙だまされたし……」

「腐フーム……」

「よしよしよォーしッ！」ファニー・フランクが高笑いをした。「グッジョブグッジョォーブ輝かしきエルデン自由軍ＥＦＡのどえりゃあ勇者たちよ！　キミタチは十分に働いたッ！　立派なハタライーターたちだッ！　もういいぞ、本当によくやったッ！　私はキ

ミタチを誇ほこりに思うッ！　すんばらしいッ！　それでッ!?　我が軍師ジャン・スタンバック卿きようよ次はどうすればッ!?　ふむふむ了りよう解かいした、キミはまさしく我々の頭脳だねえ、してやったりだよキミィ、いだっ、け、蹴らないでくれたまえよ痛いじゃないか、わかったッ！　わかったからッ！　ささ、皆みなの衆、これ以上、軍師どのに叱しかられてはたまらんので、整列ッ！　セイレーツッ！　我々ＥＦＡは秩ちつ序じよの番人の後方に位置し、彼らのエルデン脱だつ出しゆつを支し援えんするッ！　秩序の番人諸君はせいぜい恩に着るよォーにッ！　ちなみにこの行動は、諸君がアサイラムのか弱き者たちを守るために動いているからこそだッ！　諸君がただのチキチキ臆チ病キ者ンならば、我々としても援助したりはしないッ！　我々はこれをエルデン的自由意思にもとづいて行うものであるッ！　我々はエルデン自由軍ッ！　誇り高きＥＦＡであーるッ……！　あそォーれ、ＥＦＡッ！」

「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」

「フランクッ！」「ファニーッ！」「フランクッ！」「ファニー・フランクッ！」

「ヌフフフフッ！　よしたまえキミタチィ、私などよりある意味、きみたちこそが真の勇者なのだからＥＦＡッ！」

「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」

「整列ッ！　セイレーツッ！　ＥＦＡッ！」

「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」

「いいぞォッ！　いい整列ッ！　ものすごい整列具合だッ！　まッ！　さッ！　にッ！　グレイトッ！　グレイテスト・ヒッツッ！　キミタチは最高だァーッ！　ＥＦＡッ……！」

「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」

「ＥＦＡっ！」とカタリが拳こぶしを振りあげて唱和した。

「……何やってるわけ」

「ををっ。つ、つい、やな。なんやこう、楽しそうやったもんやから……」

「たしかに、活気はありますよね……。まあ、ぼくもあの人のノリに乗せられちゃって、えらい目に遭あったんですけど……」

「ＥＦＡ、ねえ……」マリアローズは旗を振ふっている金ぴかのファニー・フランクを見やった。いつの間にか、その後ろに例の口くち髭ひげ男が立っている。そういえばさっき、ファニー・フランクがあの口髭男にお伺うかがいを立てて、尻しりなどを蹴けられながらも何か耳打ちされていた。ファニー・フランクは文字通りの旗振り役にすぎなくて、実際にどうするか決めているのはあの口髭男だということか。軍師、とか呼んでいた。たしか、ジャン・スタンバックって──マリアローズは目を見開いた。「……あ」

　サフィニアが眉まゆをひそめた。「……どうしたの、マリア……？」

「ジャン・スタンバック。あの人、昼飯時ランチタイムだよ。なんでファニー・フランクなんかと……？」

同時刻　マグルーの緑野

　振り返って北西に目をやっても、エルデンはもう見えない。タットの森まであと少しだ。

　見た目は老人だが、おそらく初老にもなっていない男が昼飯時ランチタイムとその関係者若じやつ干かん名を先導している。男は杖を使うように右手に持った棒で地面を突ついて歩く。男の左手は指が五本とも失われている。その理由を知る者はいない。鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術を体得していて、エルデンにくる前は山さん賊ぞくをやっていた。仲間が知っている男の経歴といったら、せいぜいその程度だ。ふだんは寡か黙もくで、酒が入ると陽気になってよく喋しやべるが、自分のことは語ろうとしない。

　ドルゲイはアジアンを殺そうとして何度か失敗し、最後には返り討うちに遭っておきながら、臆おく面めんもなく昼飯時ランチタイムへの加入を願って認められた。そもそもなぜアジアンの命を狙ね

らっていたのか。きっと腕うで前まえを見込まれて何者かに頼たのまれたのだろうが、依い頼らい人は今もって不明だ。殺し屋のレイジ兄妹きょうだいと同じような経けい緯いで、そんな連中をこだわりなく受け容いれてしまうあたりがこのクランらしいところだろう。しかも、かつて自分に害意を持っていた男にあっさり道案内を任せてしまうのが、我らが昼飯時ランチタイムの頭領マスターアジアンの長所であり、危あやういところでもある。

　内心では懸け念ねんを抱いだいている者もけっこういるはずだが、アジアンの決定に逆らうくらいなら、とっくに昼飯時ランチタイムを抜ぬけている。

　盲もう信しんしているわけではない。アジアンがそう言うのなら、まあしょうがない、何か悪い結果になったら、そのときはそのときだ。なんとかすればいい。皆そんなふうに思っている。

　ホント、どうしようもないやつらなんだから。

　ベティはドルゲイの少し後ろを歩いているアジアンの後ろ姿を見つめて、小さく、小さく、ため息をついた。

　アジアンはジョゼを肩かた車ぐるまして、ユーリィを抱だいている。亡なき友の娘むすめたちはアジアンによく懐なついていて、一度くっつくと離はなれたがらない。上のジョゼは活発で、下のユーリィはおとなしい子だが、幼いながらも飄ひよう々ひようとしているところがあって、少々のことでは動じない。顔は二人とも父親ではなく母親似だろう。

　ベティの隣となりを歩いているリリアは、儚はかなく咲さいて散ってしまいそうな花を思わせる女だったのに、いつの間にかすっかり逞たくましくなった。見た目は初めて会ったときからたいして変わっていないのに、そう見える。

　もうクラニィに救われて、守られていたころのリリアではないのだ。

　リリアと二人の娘は、そこにいるだけで周りの者を元気づけ、勇気づける。

　彼女たちの存在は大きい。

「でも、これでいいのかしらね。アジアンは」リリアが囁ささやく

ように呟つぶやいた。

「いいって、何が？」

「あなたはわかっているでしょう、ベティ」

　答えずにいることが肯こう定ていになるとわかっていても、返事をする気にはなれなかった。だって、あたしが口を出す筋合いじゃないもの。あいつが決めて、そのとおりにしてるんだから、いいんでしょう、これで。

　ベティとリリアのすぐ後ろを歩いているダリエロが鼻を鳴らした。「残ざん酷こくなこと言うんじゃねぇよ、リリア。てめぇこそわかってやがるんだろ。何だ？　あれだ、ようするに、そいつの気持ちってやつをよ。乙おと女め心ごころって言ったほうがいいか？」

　ベティは舌打ちをし、振り向きかけてやめた。「どうしても長生きしたくないみたいね」

「べつに早死にしたくはねぇが、耄もう碌ろくしてまで命ってやつにしがみつくつもりはねぇよ。ただ、ババアになったてめぇの面つらは、くたばる前に瞼まぶたの裏側に焼きつけておきてぇ気もするな」

「無理なんじゃない？　あんたの悪運がそんなにつづくとは思えないし」

「憎にくまれっ子こ世にはばかるって言葉を知らねぇのか」

「その自覚はあるのね」

「喧けん嘩かしないの」リリアはくすくす笑った。「仲がいいのを見せつけたいなら、もう十分よ」

「だっ──」「誰だれが……！」

　ベティはダリエロと顔を見あわせて、すぐにそっぽを向いた。「……変なこと言わないでくれる？　誤解を招きかねないわ」

「あら。冗じよう談だんよ？」

「わかってるわよ。冗談でもやめてって、あたしは言ってるの。気色悪いから」

「おい、ベティ、てめぇ、気色悪いとはご挨あい拶さつだな」

「じゃあ、あんたは気色悪くないの？　ああ、もしかして、あたしに気があったりして？」

「あるわけねぇだろうが！　気色悪いことぬかしてんじゃねぇ……！」

「奇き遇ぐうね。意見が一いつ致ちしたわ」

「そうだな！　てめぇみてぇなニセ乳女と同意見ってのは気にくわねぇがな！」

「ニセじゃないわよ！　中身はちゃんとあるんだから！」

「寄せ集めの烏う合ごうの衆だろうが！」

「ふむ」皆みなから少し離れて、二本の大たい剣けんをゆっくりと振ふりまわしながら歩いていたリキエルが、手を止めて仮面の顔をこちらに向けた。「その心は？」

「ハッ。いくら押さえつけてても、いったん箍たがが外れりゃあ散り散りになって雲散霧む消しようしちまうだろうが」

「うまいことを言うものだ」

「なに感心してんのよ、リキエル！」ベティは腹立ちに任せて大おお股またでずんずん進み、前を行くアジアンの腕を引っつかんで強ごう引いんに振り返らせた。「──アジアン！」

　アジアンは目をしばたたかせた。「……何だヨ、藪やぶから棒に」

　ジョゼとユーリィも、つぶらな瞳ひとみでベティを見つめている。クラニィの娘だし、かわいくないとは言わない。でも、苦手なのよ、子供って。こんな眼まな差ざしを向けられたら、嘘うそがつけないじゃない。

「あんた、このままでいいの？」

「知らなかったな。キミはボクの決断に異論があったのかい？　それなら、今からでも言ってくれ。聞くだけは聞かせてもらうヨ」

「そうじゃない」

「だったら──」

「あんたは後こう悔かいしない？　本当に？」

「悔くいるような選せん択たくはしないサ。もう二度とネ。それはキミだって理解してくれていると思っていたんだが、違ちがったのかな」

「ごまかさないでよ。あんたの心の一部はまだエルデンに残ってるんじゃないのって、あたしは言ってるの」

「ボクの心はちゃんとここにあるヨ、ベティ」

「そう。あんたは、あたしの──あたしたちの目が節穴だと思ってるわけね」

「いや……」アジアンは目を伏ふせようとして、なんとかこらえたようだ。「なんでキミがそんなことを言うのか、ボクにはよくわからないけど──」

「おい、大将」ダリエロが進みでてきて、ただでさえいびつな顔をさらにいっそうゆがめてみせた。「くだらねぇご託たくはいい。時間の無む駄だだからな。一つだけ正直に答えろ。てめぇは後ろ髪がみを引かれてやがるんだろう。エルデンにやり残したことがあるんじゃねぇのか。俺たちはそう思ってるんだよ。違うのか。違わねぇのか。どっちだ。はっきりしやがれ、塵屑ゴミクズ野や郎ろう」

　アジアンは何か言いかけて、口をつぐんだ。

　その胸に抱だかれているユーリィが小さな手でアジアンの顎あごをぺたぺたさわり、肩かた車ぐるまされているジョゼが髪を引っぱって、整いすぎている顔を斜ななめ上からのぞきこんだ。「どっちなの？」

「……それは」

「はっきりしたほうがいいよ？」

「餓が鬼きの言うとおりだぞ。──こっちにきやがれ、餓鬼ども」

「やーだ。ダリエロ嫌きらい」

「きりゃいっ」

「……てめぇら」

「嘘」ジョゼはにこっと笑い、ダリエロに向かって両手をのばした。ユーリィも姉に倣ならった。

「ふん……」ダリエロはひったくるようにしてジョゼとユーリィを両りよう腕うでに抱かかえた。

「アジアン」リリアはそっと微笑ほほえんだ。「わたしたちは大だい丈じよう夫ぶよ。行きなさい」

　ベティはわずかに唇くちびるを嚙かんだ。行ったらどう、でも、行ったほうがいい、でもなく、行きなさい。口調はやわらかでも命令だ。本当はベティかダリエロ、リキエルのうちの誰かがそう言ってやるべきだった。クラニィとローガンはもういないのだから。でも、できなかったから、リリアが言ってくれた。たぶん、クラニィの代わりに。もしくは、あたしの代わりに。

　あたしが言うべきだった。アジアンにはクラニィのような存在が必要なのだから。わかっているのに、その役割を演じることができずにいる。

「……でも」アジアンはうつむいた。

「そうやって迷いやがってる時点でな」ダリエロは地面を蹴けった。「ここにいる資格はてめぇにはねぇんだよ」

「んなことないでしょーがぁっ！」色ボケ半はん端ぱ医術士ナツコの声が飛んできて、その姉のヴィクトリアが「……そうですよ……！」と彼女にしては力いっぱい同意した。

「だいたい、ダリエロ！　お前が決めるな！」カイは明けのモーニング明星・スターを振りかざしている。今にも投げつけてきそうな勢いだ。それに「まったくですわ！」と〝高利貸しローンシヤーク〟クララがつづくと、人並み以上に濃こい髭ひげがそろそろ無ぶ精しよう髭ひげの域を超こえて大変なことになっているチェリーが

「本当にそうだよ！　そのとおりだよ！」と野太い声をあげた。本人曰いわく性別を間違えて生まれてきたらしいので、女の服を着ているのはともかく、見る者を恐きよう怖ふさせるほど見苦しいから、化け粧しようはいっそ落としてしまったほうがいい。そんなことを言ったら、外見に反してナイーブな彼女はさぞかし傷つくだろう。

「っせぇッ！」ダリエロは後ろのナツコたちを睨にらみつけ、前に向きなおってふたたび地面を蹴りつけた。「いいから、とっとと行っちまえ！　そんな気の抜ぬけた間抜け面づらァ拝まされるのは糞くそ迷めい惑わく以外の何物でもねぇし、てめぇごときがいなくたって、俺はこれっぽっちも困らねぇんだよ！　だから、さっさと行って、用をすませて──そうしたら、帰ってくりゃいいだけの話だろうが！」

　アジアンはかすかに眉まゆ根ねを寄せて、ほんの少しだけ右みぎ頬ほおを引きつらせた。「……ダリエロ」

「そういう顔つきがみっともねぇって言ってんだよ！」

「この馬ば鹿かが言ったとおり」ベティは腕組みをし、顎をしゃくってダリエロを示した。「あたしたちのことは気にしないで。一番厄やっ介かいなのはエルデンから脱だっ出しゅつすることだったんだから。あとはどうにでもなるわ」

「だけど──」

「何があったのかは知らない。べつに知りたくもないわよ。でもね、あんたは行きたいの？　行きたくないの？　どっち？」

「……ここで、ボクに言えというのか」

「そうよ。ここで言いなさい。まさか、わかってないわけじゃないでしょう？　あんたが自分の口で言えば、不満だろうがむかつこうが、送りださないやつなんて一人もいない。みんなの厚意にありがたく甘えなさいって言ってるのよ」

「フッ……」アジアンは下を向いて小さく笑った。

　なぜ笑ったりしたのか。笑いたくて笑ったわけじゃない。どうすることもできなくて、思わず笑ってしまったのだろう。

アジアンの両手がきつく握にぎりかためられている。

全員が固かた唾ずをのんで彼ら、彼女らの頭領マスターを見守っていた。

こんな状じよう況きようを作ってしまったのはベティだ。ちょっと酷こくかもしれない。でも、これくらいのことが乗り越こえられないでどうするのよ。あんたはいつも肝かん心じんなところで退ひいちゃうんだから。あんたが一歩、足を前に踏ふみだせば、みんなが背中を押してくれるんだから。それくらいのことはしなさいよ。

アジアンはゆっくりと深呼吸をして、顔を上げた。

つめたくて、それなのにあたたかくて、遠く感じられるのに手をのばせば届きそうで、すぐに消えてなくなりそうだけれど揺ゆらがない、朝の光に滲にじんで溶とけそうな、でも、輪りん郭かくがどこまでもはっきりとしている、そんな笑え顔がおは卑ひ怯きようだ。

「行くヨ。行って、キミたちがどこにいても、飛んで帰ってくる」

ベティは苦く笑しようしてみせた。こんな笑い方しかできない自分が滑こつ稽けいに思えた。「文字どおりってわけ？」

「ああ」

「どうせだったらよ」ダリエロはジョゼとユーリィを抱だいたまま、器用に肩をすくめた。「行きも飛んでったらどうだ」

「そうしよう」アジアンは少し背筋をのばして顎を引いた。「──タナトゥス」

その背から黒衣を突つき破って闇やみ色の翼つばさが現れる瞬しゆん間かんを目にすることができた者は、一生忘れられないだろう。それはたしかに不可思議で、異常で、異様な現象であるはずなのに、なぜか当然のように感じられる。この男が黒い翼を持っているという事実に違い和わ感かんを覚える人間が、いったいどれだけいるだろう。あってあたりまえで、ないほうがむしろおかしい。そう考えてしまいたくなるほど、黒ずくめのアジアンが漆しつ黒こくの翼を背負っている姿は自然だ。

「かぁーっこいー」ジョゼは目を輝かがやかせて、ユーリィは

きゃっきゃと笑った。

「……大物になるわ、この子たち」

「疑う余地があるのかよ？」ダリエロがニィッと右頬と唇の左ひだり端はしをゆがめて、すぐにペッと唾つばを吐はいた。親でもないのに親馬鹿ぶりを発揮するなんて柄がらでもない、とは思わない。ジョゼとユーリィの誕生日には、こっそり二人の枕まくら元もとに贈おくり物ものを置いて去るような男だ。贈り物にはいつもメッセージカードが添そえてある。今は空の彼方かなたにいる友人の筆ひつ跡せきに似せた右上がりの字で、ジョゼへ、またはユーリィへ、クラニィ、とだけ書かれた白いメッセージカードが。柄じゃないのに素知らぬ顔でそういうことできちゃうあたりが、ホントに気持ち悪いのよ。

「おい、ニセ乳」

「……返事をするからつけあがるのよね」

「てめぇも行け」

「はい？」

「あの野や郎ろうについて行ってやれって言ってんだよ」

「だから……は？」

「言っとくが、俺はてめぇらほどおめでたくねぇからな。俺らの糞大将には手た綱づなを締しめる役が必要だと思ってる」

「くそたいしょう！　くそたいしょう！」ジョゼは嬉うれしそうにアジアンを指さした。ユーリィにいたっては「くそ！　くそ！」とだけ繰くりかえしている。

「……ダリエロ。キミがボクをどう呼ぼうとかまわないけど、ジョゼとユーリィにおかしなことを吹ふきこむのはやめてくれないか」

「お断りだ。てめぇがいねぇ間、百通りの超最低ＳＵＣＫな呼び方をジョゼとユーリィに教えこんでやる。いやなら、せいぜい早く帰ってきやがれ」

「言われなくても、そのつもりサ」

「どうだかな。俺はてめぇを信用しねぇ。ベティ、てめぇは保険だ」

　ベティは、でも……と言いそうになって、言葉をのみこんだ。アジアンの二にの舞まいを演じるなんて冗じよう談だんじゃない。

　あたしがいなくても、昼飯時うちの連中はうまくやる。山さん賊ぞくの砦とりでを奪うばいとるくらいのことは、ダリエロ組と殺し屋のレイジ兄妹きようだいあたりがいれば、たやすくやりとげてしまうだろう。非戦せん闘とう員がいるから、守る場合は多少面めん倒どうだが、攻せめるだけなら戦闘区域の外に配置しておけばいい。

　行きたいか？　行きたくないのか？

　正直、半々、だ。行ったら行ったで、見たくないものを見せられたり、聞きたくないことを聞かされるかもしれない。

　でも、そばにいてやりたい。何かあったとき、手を貸してあげられるように。

「──わかったわ。頼たよりない頭領マスターのお守もりは任せて」

　女性陣じんから抗こう議ぎの声や恨うらみ節が飛んできたが、ベティは面つらの皮一枚で受け流して薄うす青あお色の瞳ひとみをまっすぐ見すえた。

　ねえ、知っている？

　あたしはあなたのことが好きなのよ。でも、あなたが欲しいんじゃない。手に入れたいなんて思わない。

　ただあなたが好きなの。

　アジアンは右みぎ腕うでをベティに向かって差しだした。「つかまって」

　誘さそわれるように足を前に進めると、ベティの身体からだはアジアンの右腕に搦からめとられ、抱きよせられた。

「あ……」

「じゃあ、行ってくるヨ」

　声が、すぐそばで、至近距きよ離りで、耳みみ許もとで聞こえて、思わず身をすくめてしまった。

　闇色の翼が羽ばたくと、途と端たんに上じよう昇しようが始まった。

　あたしはあなたが好きなだけなのに。

「気をつけて、なんて──キミに言うのは野や暮ぼだろうネ」

　うなずくことしかできないのが癪しやくで、自分たちを見上げているダリエロに叫さけんだ。「ありがと……！」

「阿あ呆ほうッ！」

　即そく座ざに怒ど鳴なり返されて、まったくだと思った。今のあたしは阿呆呼ばわりされてもしょうがない。

「速度を上げるヨ……！」

　だって、そんなに急ぐことないじゃない、なんて思って、腹を立てたりしている。あげくの果てに、ベティは胸のうちで呟つぶやいた。ごめんね、ダリエロ。

五時三十二分　マクスペイン・ストリート

　きらめく銀色の鎧よろい兜かぶとに身を包んだ秩ちつ序じよの番人たちが、アサイラム関係者等の避ひ難なん者を完全に取り囲んで、南門に到とう達たつしようとしている。

　強盗団ロバーツは一いつ掃そうされた。脱だつ出しゆつ市民の数も激減して、もうほとんど前進の障害にはならないし、妨さまたげにさえならなければ、秩序の番人も手て荒あらな真ま似ねをしたりはしない。横よこ倒だおしになっている馬車は邪じや魔まだが、これはいちいち撤てつ去きよするわけにもゆかないので、よけて進むしかない。

　マリアローズは歩きながら振ふり向いて、ぴょんと跳はねた。
「まだついてきてるね、あの人たち……」

「エルデン自由軍……」ルーシーは渋じゆう面めんを作っている。ちょーっと前までマリアローズより身長が低かったのに、今はカタリと同じくらいあって、かなーりむかつく。

「秩序の番人は警けい戒かいしつつ、徹てつ底ていして無視する構えみたいやな」

「せめて、頭がまともならね。少なくとも現時点では、得体が知れない連中としか認にん識しきしようがないよ」

「せやなあ。まあ、急に牙きばぁ剝むいて襲おそいかかってきたりせえへんかったら、盾たてくらいにはなってくれよるやろうけども」

「てゆうかさ、短期間──だよね？　たぶん。短い間に、あれほどいっぱい人を集められるものなのかな」

「普ふ通つうに考えたら無理やろけどな。状じよう況きようが異常やからのう。不可能とは言い切れへん。ゆうても実際、おるわけやし。あとな、あのファニー・フランクっちゅう男は、地味にそうとうな資産家らしいで」

「……そういえば、あの人、やたらとお金がかかってそうな恰かつ好こうしてますよね」

「あれはメッキなんじゃないの。さすがに。でも、へえ……そんなにお金持ちなんだ」

「……マリア……目つきが変わって……」

「え？　そお？　嘘うそ？　そんなことないと思うけど。だいたい、この期ごに及およんで、ねえ？　お金お金言ってる場合でもないし？　あー。だけど預金どうなるんだろ。手持ちはいくらもないしさ。うーん。やめ。やめっ。考えだすと鬱うつになっちゃうしね。これぱっかりは。お金のことはね。うん」

「お金・お金・言ってマス」

「気のせいじゃない？　幻げん聴ちようだよ、きっと。疲つかれてるんじゃないの、ピンパーネル。肩かたとか貸したげようか？　いらない？　そ。あ、そういえばハニーもなんかずいぶんおとなしいけど、大だい丈じよう夫ぶ？」

「うん。ちょっと痛いけど。痛み止めが切れてきたのかも」

「えっ」

「あたし、薬の効きが全ぜん般ぱん的によくなくて」

「ちょ、ちょっと、リーチェ！　ハニーが痛むって！」

「何だと⁉　こっちは今、手が離はなせないから──そうだな、ユリカさんに……」

　程ほどなくユリカがきてくれて、手早くハニーに鎮ちん痛つう剤ざいを注射した。「効きはじめるまで、しゅこし時間がかかるわよ。しょれまで我が慢まんして」

「平気。もともと耐たえられるレベルの痛みだし」

「無理はしちゃだめ。大丈夫なちゅもりでも、確かく実じちゆに消しよう耗もうしゅるものなんだから」

「そっか。そうだね。わかった。気をつける」

「ちゅらかったら、誰だれかに言うのよ。自分一人でなんとかしようなんて思わないで」

「くう」ときゅーがうなずいてみせた。

「せやでっ！　人は一人では生きられへんからなっ！　グヌッ？　わしはどないやて？　そらわしかて同じやん？　なんでわしだけ区別されなあかんねん！　わしかてな！　人間の端はしくれやねんかッ！　いやいや!?　端くれやなくてド真ん中やっちゅうねん！　これでもなあ！　バリバリ人間やねんぞ！　嘘ちゃうわ！　ホンマやて……！」

「……何も……泣くことは……ないんじゃ……」

「見苦しいデス」

「それはぼくもちょっと思いました！」

「うっさいわっ。余計に泣いてまうやろっ」

「泣くのは勝手にすればいいけど、うるさいのはどう考えても圧あつ倒とう的にきみのほうだから、黙だまってくれない？　それとも、黙らせてほしいの？」

「む……」突とつ然ぜん、トマトクンが目線を上げて匂においを嗅かぐような仕し種ぐさをした。ＺＯＯの面々は、それがあまりよくないことが起こる前兆だと知っている。緊きん張ちようが走った。

「きゅう！」最初に気づいたのはきゅーで、間を置かずにピンパーネルが前方を指さして叫さけんだ。「門ガ……！」

「門……!?　って──」

　目をこすって確認したい。見み間ま違ちがいじゃないのか。そう思いたいけれど、一度のまばたきでそんな楽観は消え失せた。

　門だ。南門が閉まりはじめている。エルデンの門は巻きあげ式と左右開きの二重構造で、今はふだん巻きあげられている第一遮しや断だん扉とびらが徐じよ々じよに下りているところだ。ふだんというか、エルデンの門は常時開け放たれている。たしか、七年に一度だったか。六巡じゆん月げつの三十番日から七巡月の一番日にかけて、四つの門が順次閉められ、すぐに開けられる。作動点検らしい

とかなんとか。そんなイベントがある。マリアローズは話に聞いたことがあるだけで、あいにく直接目にしたことはなかった。めずらしいこともあるものだ。いや、感かん慨がいに耽ふけってる場合じゃないし。だって、僕らはあの門から出ようとしてるわけで。閉まっちゃったら、出られないし。

「てゆうか──なんで閉まるんだよ……!?」

　にわかに秩ちつ序じよの番人の動きが慌あわただしくなった。
「急げ！」「駆かけ足！　駆けあーしッ！」

　どうして。何が起こっているのか。考えたって、はっきりした答えなんか出るわけがない。マリアローズはすぐそばできょろきょろしていた子供を抱かかえあげた。「急がないと……！　カタリ、ルーシー、ハニーをガードして！　ハニーは転ばないように！」

「よっしゃァ！」「はいっ！」「わかった！」

「はぐれちゃだめよ……！」ＺＯＯの中ではユリカが先頭に立った。ユリカにマリアローズ、サフィニア、ピンパーネルが従って、カタリとルーシーとハニー、そして子供を担いでいるトマトクンときゅーがつづく恰好だ。門はどんどん下りてくるし、気が急せいて全力疾しつ走そうしたくなるけれど、この人数だし、みんな条件もばらばらなので、いきなり速度を上げるのはなかなか難しい。でも、とりあえずできるだけ急ぐしかない。門が完全に閉ざされてしまえば、帝てい国こく軍も簡単にはエルデンに攻せめ入ることはできないだろう。そう思いたいところだが、わからない。魔ま導どう兵に守られているサンランドの国境を軽々と突破してのけたらしい帝国軍には、あのマチルダが荷か担たんしているという。魔術は恐おそろしい。真の魔術士が使う本物の魔術は途と方ほうもない。帝国軍にエルデンが包囲されて籠ろう城じよう戦なんてことになったら、どうなるのか。国境の魔導兵を無力化したとおぼしきマチルダの手にかかれば、エルデンの防備を担になっている魔導兵も同じように無用の長物と化すかもしれない。魔導兵が動かなくなったら、誰がエルデンを防衛するのか。この国には軍隊がない。戦わなければ殺される。そんな状況になったら、自分の身は自分で守るしかない。仮にエルデン自由軍とやらが義勇軍気どりで徹てつ底てい抗こう戦せんしたとしても、相手は数万、十万、ひょっとしたら数十万という規模の正規軍だ。相手にならない。悪わる足あ掻がきすらできないだろう。命が惜おしければ逃にげるしかない。思うように走れなくても、苛いら々いらしても、息が切れても、少しでも前へ、

前へ、前へ。

　南門はもう半分近く閉まっている。

　だが、秩序の番人の先行隊はそろそろ門の下に差しかかっているはずだ。

「──だめだ！」「敵！」「帝国軍がいる！」「すぐそこだ！」「迫せまっているぞ……！」

　弾はじけるように前のほうから悲鳴に近い声が次々と飛んできて、皆みなの足が凍こおりついたみたいに止まった。

「そんな──」マリアローズは絶句した。

「ありえへんやろ！　ナンボなんでも早すぎや……！」

「引き返せ！」と番人たちが叫びはじめた。その前にヨハン・サンライズの「後退しろ！」という声が聞こえたような気もするけれど、正直、自信がない。あとずさりをする者がいた。踵きびすを返す者もいた。そろそろと歩きだす者もいれば、いきなり駆けだす者もいた。押されて転ぶ者がいれば、助け起こす者もいて、その作業を邪じや魔まされて怒ど鳴なる者がいた。マリアローズは、まずいってまずいって、と思いながら子供を抱だいている腕うでに力をこめ、仲間たちの様子を確かく認にんした。ユリカは「落ちちゅいて！」と周りの者たちに声をかけている。カタリとルーシーは二人がかりでハニーを守っていた。ピンパーネルは大だい丈じよう夫ぶそうだ。きゅーがそれとなくピンパーネルを庇かばっている。サフィニアはトマトクンにぴったりくっついていた。というか、トマトクンがサフィニアを抱きよせているようにも見える。ベアトリーチェはちょっとずつ下がりながら、矢や継つぎ早に指示を飛ばしまくっていた。モリーはわからない。大丈夫だとは思うけど。てゆうか、ひどいよ。これはひどい。引き返すにしても、もっとうまくできなかったのか。無む性しように腹が立って仕方ないけれど、こんなときこそ冷静にならないといけない。誰だれも彼も頭に血が上っているのだ。その結果、こんなことになってしまっている。

　よく見れば、秩序の番人の後退速度はそれほど速くない。せいぜい早足より少し速いくらいだ。番人の多くはパニックに陥おちいってはいない。確実、着実に、着々と、慌てず、焦あせらずに下がりつづければいいのだ。そのうちみんな落ちつきをとりもどす。実

際、そうなりつつあるけれど、状況は落ちつくことなく変化しつづけている。カタリが叫んだ。「魔導兵や……！」

　多数の魔導兵たちが、マクスペイン・ストリートの端はしのほう━秩序の番人の外側を通って南下してゆく。歩兵型だけじゃない。騎き兵へい型の魔導兵もいる。いや、それだけじゃない。

「アレ」ピンパーネルが指さした。「魔導兵ではありまセン」

「人……!?」

　たしかに、指揮官役と見なされている騎兵型魔導兵の姿もある。でも、それに混じって、星空を写したような長衣で全身を覆おおい、メタリックブルーの仮面をつけ、馬を駆っているあいつらは絶対に魔導兵じゃない。騎兵型の魔導兵は馬もまた魔導兵だが、連中は違う。やつらの乗馬は、仮面と同じメタリックブルーの馬鎧よろいこそつけているものの、正真正しよう銘めい、生身の馬だ。

「スペース・ファングだ」トマトクンが低く唸うなるように言った。

「おおぅっ！　噂うわさには聞いとったけども、あれがスペース・ファングなんかい……！」

「な、何なんですか、カタリさん、そのスペルスハングって……!?」

「スペース・ファング！　キング・グッダーの近衛騎士団や！　シャイニンググローリーパレス内の警備を担当しとるらしいから人目にふれることはない、せやから実在もあやしまれとったんやけども━」

　スペース・ファングの騎士たちは、一様に左手だけで手た綱づなを操あやつり、右手には長大な黒々とした槍やりを持っている。数は騎士型の魔導兵よりも多いけれど、歩兵型の魔導兵よりはずっと少ない。歩兵型の魔導兵は見たところ数百で、刻一刻と増えつづけている。騎士と騎士型魔導兵をあわせても、その十分の一に満たないだろう。とはいえ、騎士と騎士型のほうが歩兵型よりも足が速い。騎士と騎士型に歩兵型が率いられている。そんなふうに見える。

「迎げい撃げきに出るのかな」マリアローズは呟つぶやきながら抱

いていた子供を地面に下ろした。もう手を引いて歩いてやれば危険はなさそうだ。

　騎士と騎士型が、そして歩兵型の魔導兵たちが、次々と秩ちつ序じよの番人や避ひ難なん者たちとすれ違い、閉じかけている南門へと向かってゆく。

「後退やめっ！」「止まれ！」「止まれっ……！」番人がそう呼ばわりはじめると、避難者たちがばらばらと足を止めた。立ち止まると全員、振ふり向くか回れ右をするかして、南のほうに目を向けた。

　南門はすでに三分の二ほど閉まっているが、まだ騎馬でも楽々と通り抜ぬけられるだろう。たまたま近くに横転している馬車があったので、マリアローズは手を引いていた子供をサフィニアに任せ、馬車の車体によじ登って門のあたりに目を凝こらした。出てゆく。騎士型をふくめた魔ま導どう兵が、続々と。スペース・ファングの騎士たちも、槍を並べて門の外へ飛びだしてゆこうとしていた。

　魔導兵たちは今この瞬しゆん間かんも南門へと向かっている。エルデン中から集まってきているのだろうか。たくさんいると思ってはいたけれど、こんなにいたのか。啞あ然ぜんとしてしまうほどの数だ。

　番人たちも、避難者たちも、荒あらい息をついていたり、咳せきをしたり、隣となりの者と囁ささやきあったり、ああ、とか、おお、とか声をあげたりするくらいで、ほとんど口を開こうとしない。

　南門は間もなく巻きあげ式の第一遮しや断だん扉とびらが完全に閉じてしまうだろう。そうなれば、左右開きの第二密閉扉が閉じて、完全に封ふう鎖さされる。これは推測だけれど、たぶん南門だけじゃない。北ほく斗と門、東門、西門も、同じように閉鎖されつつあるはずだ。

　もうエルデンからは出られない。

　失敗だ。

「エルデン自由軍ッッッッ……！」北のほうでファニー・フランクが高らかに叫さけんだ。

　無む駄だにいい声で、妙みようによく響ひびくものだから、余計にかちんとくる。

「我々はァァハッ！　エルデンをッ！　エルデンを守るぞッ！　愛するエルデンをッ！　前進、前進、大前進だッ！　さあッ、魔導兵諸君につづくのだッ！　そォーれッ、ＥＦＡッ！」

「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」

　秩序の番人後衛隊の後ろに位置していたエルデン自由軍が、魔導兵たちに従う恰かつ好こうで動きはじめた。今から行ったところで、南門に到とう着ちやくしたころにはすでに第一遮断扉が閉まりきっているだろう。そうでなくても意味があるとは思えないが、まあ勝手にすればいい。というか、エルデン自由軍なんかにかまっている場合じゃない。

　逃にげられなくなった僕たちは、いったいどうすれば……？

　秩序の番人が沈ちん黙もくしている。ヨハン・サンライズも考えあぐねているということだろう。責める気にはなれない。この事態は想定外だ。モリーの決断は十分早かったし、秩序の番人も迅じん速そくに行動した。帝てい国こく軍が脇わき目めもふらずに進軍したとして、エルデンに来らい襲しゆうするのは九巡じゆん月げつ十六番日だと見られていた。軍隊の規模からするとそれが最速で、十日以上も短縮できるはずがない。ありえない、あっていいはずのないことが、しかし、現実に起きてしまったのだ。

「可能性が、あるとしたら……」カタリはいつになく深刻な表情だ。「足の速い騎兵のみの急進速度──いわゆる突進ラツシユっちゅう行軍速度やったら、一日八十キルメーテルともゆわれとる。これやったら、カリオサークからエルデンまでの三百六十キルを五日以内で走破可能や。せやけど、歩兵と分断されてまうし、それ以上に補給の問題がある。食いモンも、水も、人間だけやない。馬の分も必要なわけやから、行けるんやったら行ったれっちゅう具合にはいかへんはずなんや。ムチャクチャやで」

「ムチャクチャなのかもしれんな」トマトクンは両りよう肩かたにのせていた子供を下ろした。

「……どういうこと……ですか……？」

「わからん」トマトクンはサフィニアをちらりと見て、眉み間けんに深い縦皺じわを刻んだ。「ただ、裏で糸を引いてるのがやつなら、ありとあらゆる犠ぎ牲せいを無視して事を運ぶ。人が何人死のうが、それが前もって予見できようが、躊ちゆう躇ちよしたりしない。敵味方関係なく、だ」

　ついに南門の第一遮断扉が重い音を立てて最後まで閉まった。間を置かず、左右開きの第二密閉扉も動きはじめた。

　スペース・ファング及および魔導兵たちはあらかた外に出たようだ。

　エルデン自由軍が南門付近に到達するには、まだ少し時間がかかるだろう。

　さっきまで重苦しく空を覆おおっていた雲が薄うすまり、散り散りになっている。上空はどうか知らないけれど、地上の風は弱い。ほとんど感じないほどだ。

　何の予兆もなかった。

「──ヨハン……！」トマトクンが怒ど号ごうを発した。「散開させろ！　散開しつつ、後退！　今すぐだ！　急げ……！」

「散開……！」ヨハン・サンライズの声が響き渡った。その直後だった。

　揺ゆれた。空気が。地面が。震ふるえた、といったほうが正しいかもしれない。何、これ。重い、低い、正体不明の振しん動どうが──近づいてくる。正体不明？　違ちがう。すぐにわかった。

　南門だ。

　そいつは、南門の上からにゅっと顔を出した。

　白はく髪はつで色白の女だった。あえて言えば。もちろん、普ふ通つうの女じゃない。あたりまえだ。何しろでかい。南門の上から顔どころか肩まで出ている。人並み外れて背が高いどころの騒さわぎじゃない。それに、女の顔。目が二つじゃない。額にもう一つある。ぜんぶで三つだ。瞳ひとみはどこまでも黒い。白目なんかない。赤い唇くちびるが変に小さくて、鼻は細く尖とがっている。髪かみは真っ白だけれど、老女の顔立ちじゃない。まだ若そうだ。で

も、何か変だ。いや、何かもくそも、ぜんぶ変なのだが、髪が蠢うごめいている。髪？　違う。髪の毛にしては一本一本が太すぎる。あれは──まるで、真っ白い腕うでみたいだ。髪の毛の先せん端たんは手みたいだ。

　よく見ると、女の肌はだは滑なめらかじゃない。細かい凹おう凸とつがある。そして、やっぱりかすかに蠢うごめいている。もしかして、あれか。女の全身があの髪の毛みたいな、白い腕のようなものが寄り集まってできていたりするのか。考えすぎだろうか。でも、そう思えてしょうがない。

「……逆神さかがみ女御子のめのみこ……！」サフィニアの声は途と中ちゆうで裏返った。

「何や、ソレ⁉　ソレっちゅうか、アレか……⁉」

「……贄にえの園そのの、住人です……！　住人というか……贄の園でも、祟たたり神として恐おそれられているという……！」

　尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。

　逆神女御子は笑えみを浮うかべながら南門の上端に両手をついて、身体からだを持ちあげた。彼女は全ぜん裸らだった。身体のそこかしこから肌や髪と同じ質感の管みたいなものが生えていて、その先端は手みたいな形をしていた。指がたぶん五本あって、にょぐにょぐ動いている。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。彼女は南門の上によじ登って立ちあがった。なんというか、股こ間かんのちょっと名状しがたい部分から腕わん状じよう管がうにょうにょ生えている光景がとても言葉では表現しづらい感じで、さりとて目をそらすこともできなかった。その名状しがたい部分から、じゃなくて、あくまでも、彼女から、だ。何しろあんなに大きい、とてもとても大きい彼女が、首都城じよう壁へきの向こう側から現れたのだ。もちろん、彼女のような贄の園の住人が、蝿はえたかり姫ひめや万まん眼がん王おうや虐ぎやく帝てい髑髏どくろよりもおそらく巨きよ大だいな存在が、何の脈みやく絡らくもなく出現するわけがない。

「召しよう喚かん魔ま術じゆつ……⁉」

「……お、お姉様……」

　避ひ難なん者たちがわっと喚かん声せいをあげた。飛び退のく者。あとずさりする者。しゃがみこむ者。走りだそうとする者。エルデン自由軍は一いつ瞬しゅんのうちに崩くずれた。尼弥娃娃。

　逆神女御子は顎あごの近くまで膝ひざを上げて首都城壁を踏ふみつけた。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。踏んだ。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。踏むたびに世界が震えた。だが、城壁はびくともしない。さすがエルデンの城壁だ。あの高さ十七メーテル、基底部幅はば二十一メーテル、上部幅十七メーテル、ラストクロームメタル製の城壁は魔導王時代の遺物なのだ。そうたやすく──あれが「たやすい」の範はん疇ちゆうに入るのかどうかは意見が分かれるところだろうが、とにかくあれだけの巨きよ体たいが思いっきり踏みつけても壊こわれない。それだけの耐たい久きゆう性を誇ほこる城壁にエルデンは守られている。だからといって安心できるわけじゃない。

　尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。

　逆神女御子はエルデン市街を見まわすように首を振ふった。嘘うそ。くる？　きちゃう？　やめてよ。それだけはやめてってば。シャレにならないって。無理だから。あんなのどうしようもないから。なすすべなくアレだから。逃にげようったってアレだし。至難の業わざで死なんのは至難みたいな。思わずダジャレが出てきちゃうくらいのアレだし！

「とりあえずに、逃に──」げようとしたら、北のほうで黒い光が爆はぜた。「げっ……!?」

「……あ……あれは……！」

「贄の園の反光アンチライトか」

　トマトクンが口にしたアンチライトという言葉は初耳だけれど、今まで何度も見たことがある。贄の園の住人を召喚したときに発生する、黒い光。この世界にはもちろん、どこを探してもそんな光はない。でも、贄の園にはあるらしい。

　マリアローズたちがいる場所からは百メーテル以上離はなれてい

るだろう。マクスペイン・ストリートのど真ん中で炸さく裂れつした黒い光の中から、それはせりあがってきた。

　一言で言えば、瘦やせすぎだ。断食に絶食を重ねて肉が落ちまくっても、あそこまで瘦せることはないだろう。それくらい瘦せている。めちゃくちゃ瘦せているだけじゃなくて、身の丈たけに比して頭や胸きよう郭かくや腰こし骨ぼねが小さすぎないか。手足がやたらと長い。手足の指も長い。長すぎる。姿勢がきわめて悪くて、猫ねこ背ぜにもほどがある。そのせいで手が地面につきそうだ。乾かん燥そうしきっているように見える褐かつ色しよくの皮ひ膚ふの上に、深しん紅く色の布か革かわ帯みたいなものを巻きつけまくっているせいで、身体的な特とく徴ちようから性別を判断することはできない。布か革帯の合間からのぞく双そう眼がんは金剛石ダイヤモンドのような輝かがやきを発している。口だけは妙みように大きい。大口を開けて、そいつは叫さけんだ。崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。

「……餓うえの忌いみ彦ひこ……！　誰だれがあんなものを……!?」サフィニアが驚おどろいているくらいだから、こっちにしてみれば仰ぎよう天てんするだけではまったく足りない。さりとて、ぶったまげる以外にできることがあるわけでもない。

「誰か・頭ノ上に……！」目のいいピンパーネルがまたわけのわからないことを言った。頭の上に？　頭って、あれの？　誰か？　てことは人……？

　餓忌彦は数々の驚きや謎なぞを乗せて駆かけだし、そうかと思うとわずか三歩の助走で跳とんだ。

　崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。

　何しろとんでもなく身体がでかいから、すごい跳ちよう躍やく力なのかどうか、そのへんはなんとも言いがたいが、大ジャンプだった。

　だって、餓忌彦はマリアローズたちの頭上を飛び越こえていったのだ。

　そのまま、南門へ。

　餓忌彦は南門の上にいる逆神女御子に飛びかかった。崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。

　餓忌彦に組みつかれて、逆神女御子は後ろのほうに倒たおれかかりそうになった。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。

　見れば、逆神女御子のほうが一回り、いや、二回りほど大きい。そのおかげなのか、逆神女御子はこらえた。持ちこたえて、両りよう腕うでで餓忌彦を引きはがそうとした。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。餓忌彦も必死だ。思いっきり口を開けて、逆神女御子の肩かたに噛かみついた。崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。

「魚ぎよほぉぅっ……！」「い、行けっ……！」「すっご……！」「やれえ……！」

　ただただ惚ほうけている者、あたふたしている者もいるけれど、カタリやルーシーをはじめとして、餓忌彦を応おう援えんしだした者もいる。いいのかな。応援とか。でも、餓忌彦が現れなければ、今ごろマリアローズたちはぺしゃんこになっていたかもしれない。餓忌彦は味方だ。そう断言することはできないとしても、逆神女御子の敵だということはまず間ま違ちがいない。

　崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。餓忌彦は逆神女御子の右みぎ肩かたの肉（？）を噛みちぎった。血みたいなものは出なかった。真っ白い傷口からは、別のものがあふれるというより飛びだした。

　腕うでだ。腕みたいな管が迸ほとばしるように出てきて、餓忌彦の首に絡からみついた。崩汚汚汚。

　餓忌彦はその腕状管を両手で引っつかんだ。その途と端たん、逆神女御子の脇わき腹ばらから、腰こしのあたりから、そして乳ち房ぶさから次々と腕状管が突つきだしてきて、餓忌彦を搦からめとった。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃。

　腕わん状じよう管はのびる。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃。どんどんのびる。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。

　餓忌彦は逆神女御子から引き離され、遠ざけられてゆく。崩汚汚。

「舐なめるなぁっ！　ババアッ……！」

　天を引き裂さくような声だった。何者だろう。男じゃない。女だ。サフィニアがすっとんきょうな声をあげた。「──トモヨ……!?」

　餓忌彦の頭の上あたりから逆神女御子の顔面めがけて──あれは何だろう。たとえて言えば、黒い稲いな妻ずま……？　そんなようなものが放たれた。暗黒の雷かみなりを食らって、逆神女御子の顔が三分の一くらい吹ふっ飛び、繊せん維い状の白いものが大量に撒まき散らされた。

「……召しよう喚かんを維い持じしつつ……魔ま術じゆつを使うなんて……！」

「てゆうか、トモヨって──」

「わたしの姉弟で子しです……！」

　そういえば、そんな人がいるという話を聞いたことがあるような、ないような、どっちにしても、マチルダの弟子だからとんでもない魔術士なのだろうが、そのトモヨの魔術もさして功を奏さなかったようだ。逆神女御子は尼弥娃娃娃娃娃娃尼弥娃娃娃娃娃娃尼弥娃娃娃娃娃娃尼弥娃娃娃娃娃娃わめきながらも、腕状管で餓忌彦を締しめつけつづけている。腕状管はもうのびないようだが、すでに餓忌彦がいくらあがいても逆神女御子には手も足も届かない。かすりもしない。

「……わたしも、援えん護ごします……！」サフィニアは魔術士衣の袖そでからきらびやかな銀ぎん鎖さをとりだした。人工触媒アーテイ魔道具フアクト。召喚魔術を使うのか。「……場所を、確保しないと……！」

「どけ……！」トマトクンが吼ほえると、空気がびりびりと振しん動どうした。「ここから離れろ！　さっさとどかんやつは、無理や

りどいてもらうぞ……！」

「早うせえっ！　魔術や！　どでかい魔術を使うんやで！　巻き添ぞえ食いたないやろっ！」「しゃあ、離れて！　いしょいで……！」「どいてくださいっ！　お願いします……！」「離れてくだサイ！」「きゅう！　くう！　きゅう……！」「離れてーっ！　離れないと撃うっちゃうかも？」「撃つなやっ！」「冗じよう談だんだってば」「てゆうか、ハニーはいいから！　無理しちゃダメだってば！　僕らも離れるよ……！」

　直径七、八メーテルといったところだろうか。だいたいそのくらいの円い空き地ができると、サフィニアは人工触媒アーテイ魔道具フアクトを地面に放って杖つえを両手で握にぎりしめ、精神集中チヤネリングに入った。でも、間に合うのか。

　逆神女御子があんぐり口を開けて舌を突きだした。違う。舌なんかじゃない。やっぱり腕状管だ。しかも、一本じゃないし。何本も。それらがよりあわさって、先っぽを尖とがらせながら、少しずつ少しずつのびている。尼弥。

　また暗黒の稲妻が閃ひらめいて、腕状管でできた槍やりを粉ふん砕さいした。すぐに新たな腕状管が逆神女御子の口内からにゅっと出てきて、槍を形づくった。

　槍が一気にのびて、餓忌彦の喉のどに突き刺さった。餓忌彦はビクンッと全身を硬こう直ちよくさせたあと、身体からだをバタバタさせた。崩汚汚汚汚汚。崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。崩汚汚汚。崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。尼弥娃娃。

「や、やられちゃった……？」マリアローズはサフィニアのほうへ視線を投げた。サフィニアはまだ呪じゆ文もんの詠えい唱しようも始めていない。南門に目を戻もどすと、逆神女御子が腕状管を駆く使しして餓忌彦を放り投げようとしていた。餓忌彦は自らの喉を貫つらぬいている槍を両手でつかみ、必死にあらがっているけれど、果たしていつまで持ちこたえることができるか。

「あかんのかい……！」カタリは顔を真っ赤にして変形斧おのを構

えた。「せやけどなあ、ただでは死なへん──でぇお……!?」

　まただ。

　黒い光が、南門に向かって左──方角でいったら東のほう、首都城じよう壁へきからそう遠くない建物と建物の合間からあふれた。

　出てくる。黒い光の中から。すごく大きくて黒っぽい、ぼろぼろの蝙蝠こうもり傘がさみたいな──でも、脚あしが生えている。細い、枯かれ木のような、それでいて妙みように力感あふれる脚が。よく見れば、そいつは腕らしきものも備えていた。二本じゃない。昆こん虫ちゆうの肢あしみたいな細長いのが、六本。傘かさのてっぺんから突きだしている球状の物体は、もしかして頭なのか。危異異。

　傘野や郎ろうは建物を蹴けり砕くだいて跳とび、首都城壁を蹴ってさらに跳んで、逆神女御子にガッツンと飛び蹴りを食らわせた。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。逆神女御子は首都城壁の向こうに吹っ飛ばされて、腕状管にとらわれている餓忌彦も引っぱられていった。

「──奇あやの歪いび蜘つち麿まろか……！」トマトクンが吐はき捨てるように言った。傘野郎の名前か。いずれにしても、贄にえの園そのの住人だということは間ま違ちがいない。そして、奇歪蜘麿は何者かに召しよう喚かんされたのだ。何者かって──誰だれに……？

　逆神女御子に追い撃ちをかけるつもりなのだろう、奇歪蜘麿は首都城壁の向こうへ飛び降りた。危異異異異異異異異異異異異異異異。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。危異異異異異異異。崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃。危異異異異異異。崩汚汚汚汚汚汚汚汚。尼弥娃娃娃娃娃娃娃。奇歪蜘麿の、逆神女御子の、餓忌彦のおぞましい、三者三様の声が混じりあい、重なりあって響ひびき渡わたっている。あっちで何が行われているのか、ここからでは見えない。でも、かなりラフでダーティーなファイトが行われているだろうことは容易に想像がつく。贄の園の住人同士のドツキ合いはいつだって過激すぎる。

　とにかく、奇歪蜘麿が乱入してきてくれたおかげで、時間ができ

た。

「噫仇為ＳＵ者ＹＯ恐ＲＥ恨ＭＩ憎ＳＩＭＩ悲ＳＩＭＩＮＩ平伏ＳＡＺＡＲＵ者ＹＯ」

　サフィニアが呪文の詠唱を開始した。

「無闇滅多矢鱈ＮＩ仇為ＳＵ者ＹＯ罪科ＷＯ背負ＷＡＺＡＲＵ者ＹＯ汝失Ｕ物ＭＯ無ＫＵ得ＲＵ物ＭＯ無ＳＩ而ＳＩＴＥ知ＲＵ事ＭＯ無ＫＵ知ＲＡＺＡＲＵ事ＭＯ無ＳＩ永年ＮＩ永劫ＮＩ仇為ＳＵ者ＹＯ汝殊ＮＩ慈悲知ＲＡＺＵ哀ＲＥＭＩ知ＲＡＺＵ罪知ＲＡＺＵ汝真ＮＩ仇為ＳＵ害悪也災厄也罪悪也」

　人工触媒アーテイ魔道具フアクトが地面に描えがく円から黒い光がわきだして、あふれた。赤とも青とも黄とも緑ともつかない色の文字やら図案やらが、次々と現れては駆かけ巡めぐり、回転して、渦うず巻まいている。それは人工触媒アーテイ魔道具フアクトが作りだす立体的な魔ま法ほう円――言ってみれば、魔法球だ。昏くらく重く深い響きを帯びているサフィニアの声がひときわ高まった。

「汝此処ＮＩ来ＴＡＲＩＴＥ思ＩＮＯ儘仇ＷＯ為ＳＥ」

　きた。

　黒い光の直中から、それは躍おどりでてきた。

　本当に元気よく、ぽんっ――と、飛びだしてきたのだ。

　蒙云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云。

　それは空中でくるくるくるくる回って、向かって左のマクスペイン・ストリートに面している建物の上に着地してぶっ潰つぶし、すぐさま跳ちよう躍やくしてびょんびょん跳はねながら南門方面へと突つき進んでゆく。呪文からして、蝿はえたかり姫ひめじゃなさそうだとは思っていたけれど、ちょっと予想外だ。何なの、あれ。黒ずんだ緑色の、丸っこい――大小のまんじゅうをくっつけて人型にしてみたんですがどうでしょう、みたいな、たとえて言えばそんな姿をしている。逆神女御子はもちろん、餓忌彦や奇歪蜘麿と比べても二回りくらい小さいだろう。大きさからすると、若干頼たよりない。ただし、やたらと機き敏びんだ。もう南門の上に達している。蒙云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云。

「悪あつ塊がい丸まる、ね……」

　収束しつつある人工触媒アーテイ魔道具フアクトの魔法球──というよりも、おそらくそのそばにいるサフィニアに歩みよってゆく者がいた。

　マリアローズは目を瞠みはった。「──ベティ……さんっ……!?」

　なんとなく、さんを付けてしまった。

〝垂れベテイ・ザ目の・ドウルーベティピングアイズ〟は表情を変えずにちらっとマリアローズを見ただけで、すぐさまサフィニアに向きなおって癖くせのある髪かみの毛をかきあげた。「さすがにまだ、召喚しながら他のことはできないってわけ？　ま、そこまでやられちゃったら、あたしの立場がないけど──よりにもよってあのお姉様が相手ってことになると、それくらいはできてくれたほうが、いくらか楽っていえば楽なのよね。実際のところ。トモヨなんかと共きよう闘とうするなんて、あたしとしては御ご免めん被こうむりたいし」

「──ケッ。ご挨あい拶さつだなぁ、ナイチチ・ベティ子」

　どこからか飛んできて、やはり魔法球の近くに降り立った。そんなふうにしか思えない現れ方をしたその女は、なんというか、かなり不ふ埒らちで、けしからぬ、とんでもない装よそおいというか、そもそも装いになってないでしょ、それ。

「ぶっ……！」カタリが魚眼を飛びださせて何かいろいろなものを噴ふきだしてしまったのも、今回ばかりは無理もない。ルーシーに至っては身を乗りだして食い入るように女を見つめているけれど、それもまあ、しょうがないといえばしょうがないだろう。ルーシーだけじゃなくて、そういう人は他ほかにも大勢いるし。僕だって思わず見ちゃうよ。そりゃあつい ガン見しちゃうって。だってさ。

　下だけだ。女はショーツしか身につけていない。や、眼鏡めがねはかけてるけど。それ以外には、服どころか下着もつけてないんだもん。

　しかも、ものすごい大きさの胸だ。そうとう重そうだ。深刻な肩かた凝こりを引き起こしそうだ。あれはあれでけっこう大変そう

だ。それを、女は惜おしげもなく、恥はじらうことなく、堂々とさらしている。

「……トモヨ」ベティにしてはめずらしい。苦虫を嚙かみつぶしたような顔だ。「せめて何か着なさいよ。この色しき情じよう狂きよう」

「着てたんだけどな。汚よごれちったんだよ。んで、さっき脱ぬいだ。まあいいだろ。サービス、サービス。くくくくくっ」

「あんた、そんなキャラだった……？」

「相変わらずてめえは考えが甘くて読みは浅えなぁ。いいか、ベティ子。人間にはな、裏と表ってのがあるんだよ」

「まさか、あんた──」ベティは顔を引きつらせた。

　それを見て、かぎりなく全ぜん裸らに近い半裸女が腹を抱かかえて笑った。「うっくくくくく……！　その顔！　いい表情だよ！　ざまぁねえな！　マジで！　あーおかしい」

「……べつに驚おどろいてないわ。裏と表どころじゃないやつも知ってるし」

「〝踊り羊ダンシングシープ〟か。やつに会ったんなら、口説かれたろ」

「え……」

「やれやれだ。てめえみたいに初う心ぶだと、あんなのにも引っかかっちまいかねねぇから笑えるな、まったくよ。一応、昔のよしみで忠告しといてやるけど、あの野や郎ろうには気をつけろ。使えそうな女の魔術士見つけるたびに口説いてやがるぞ。ちなみに、あいつがあのババアのこと嫌きらいなのは、思いっきり振ふられて殺されかけたことがあるからだ」

「……お姉様を」

「命知らずだよな。さぞかしひでえ目に遭あったんだろうさ」裸はだかの女──トモヨは、眼鏡を外してそのへんに捨て、唇くちびるの端はしを舌先でぺろりと舐なめた。「楯たて突ついて負けたら、何されるかわかったもんじゃねえ」

　ベティは顎あごを少し引いて腰こしの短たん剣けんに手をかけた。「わかってるわ」

　サフィニアもかすかにうなずいたように見えた。

　餓忌彦と奇歪蜘蘑と悪塊丸が首都城じよう壁へきを跳とび越こえ、乗り越えて、こちら側に戻もどってきた。その直後、逆神女御子もふたたび首都城壁の上に跳び乗って姿を現した。すごい。やばい。身体中から腕わん状じよう管を生やしまくっている。とてつもない数だ。しかも、それらがうにゅうにゅと蠢うごめいている。だいぶ気持ち悪い。うわ怖こわっ──とばかりに、餓忌彦は右のほうへ、奇歪蜘蘑と悪塊丸は左のほうへ逃にげようとしたが、腕状管がギュギュンッとのびてきて彼らをがっちり捕つかまえてしまった。崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。危異異異異異異異異異異異異異異異異。蒙云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云。餓忌彦も奇歪蜘蘑も悪塊丸も当然あがいた。暴れる彼らを、逆神女御子は容よう赦しやなくぐるんぐるん振りまわした。尼弥娃娃。

「わ、わ、わ……！」マリアローズにはもう、自分がうろたえているのか混乱しているのかそうでもないのか、よくわからない。とりあえず、逆神女御子が腕状管の手（？）を放し（？）たら、餓忌彦と奇歪蜘蘑と悪塊丸がそこらへんに投げ飛ばされて、このあたりにいる人間たちは、パニックに陥おちいって逃げ惑まどっている人々も、ただただ呆ぼう然ぜんと立ちつくしている者たちも、まず間ま違ちがいなく甚じん大だいな被ひ害がいを受けるだろう。そうとうな数の死者が出るはずで、その中に自分や仲間たちや友だちがふくまれる可能性も否定できないというか、かなり高いだろう。だからって、僕に何ができるんだよ？　何もできない。でも、サフィニアが踏ふみとどまって戦っている。ＺＯＯのみんなも動こうとしない。ベアトリーチェの声が聞こえる。叱しつ咤た激げき励れいする声が。腹を決めるしかない。わかってるんだけどさ。

「三対一なんだからよ……！」トモヨが叫さけぶと、金輪際ダイエットの必要はないだろう餓忌彦の痩そう身しんがさらにきゅっと締しまって、腕状管からするっと抜ぬけた。

「だから何だっていうの……！」ベティが怒ど鳴なると、奇歪蜘蘑が蝙蝠こうもり傘がさみたいな身体からだをザバァッと広げた。ど

うやら胴どう体たいの上に蝙蝠の羽のような皮ひ膜まくを羽織るように被かぶっていて、それで蝙蝠傘みたいに見えていたらしい。その皮膜めいた部分が空気の抵てい抗こうを受けて膨ふくらみ、急激に減速した。回転の軌き道どうも乱れ、おかげで奇歪蜘蹰は悪塊丸と激げき突とつした。奇歪蜘蹰は弾はじきかえされて、悪塊丸は首都城壁近くの地面に叩たたきつけられる羽目になった。危異異異異異異異異異異異異異蒙云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云。

　首都城壁上に着地した餓忌彦が、トモヨに「行けっ……！」とけしかけられて、逆神女御子に襲おそいかかった。逆神女御子はすかさず右手で自分の乳ち房ぶさから生えている腕状管を引っつかんだ。その腕状管は奇歪蜘蹰に巻きついている。奇歪蜘蹰を引きよせて盾たてにするつもりか。でも、その前に逆神女御子の体勢が崩くずれた。悪塊丸だ。悪塊丸が両足で踏んばって、自分に絡からみついている腕状管を目いっぱい引っぱった。蒙云云云。

　崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚。餓忌彦は猛もう然ぜんと逆神女御子にとりすがり、指をそろえて剣けん先さきみたいに尖とがらせた両手でその身体をズッサズサ滅めつ多た突づきにした。尼弥娃娃娃娃娃娃。尼弥娃娃娃娃。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。逆神女御子は身み悶もだえしながら、どんどん、もっともっと、あちこちから腕状管を生やし、餓忌彦を拘こう束そくしてしまおうとしているのだろうが、奇歪蜘蹰が逆神女御子にしがみついて邪じゃ魔ました。さらに、他の面々と比べて小こ柄がらながら力持ちらしい悪塊丸が、腕状管を引いて引いて引きまくった。

　落ちる。

　首都城壁の上から、逆神女御子が引きずり下ろされようとしている。

　尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃。

「…………っ…………！」サフィニアが声にならない声をもらした。

地じ響ひびき。

南門の真ん前にもつれあうような状態で落ちた逆神女御子と餓忌彦、奇歪蜘磨に、悪塊丸が躍おどりかかった。悪塊丸は深緑色のまんじゅう人形的な見た目で、他ほかのやつらと比べたらまあ、かわいいと言えなくもなかったりするのに、蒙云云云云云蒙云云云云云蒙云云云云云蒙云云云云云振ふりおろされるその拳こぶしはすこぶる凶きよう暴ぼうで凶悪だ。てゆうか、あれ、敵味方区別しないで見境なく殴なぐりまくってない？　気のせい──じゃないよね……？

悪塊丸は殴る、殴る、殴る。逆神女御子を、餓忌彦を、奇歪蜘磨を、殴りまくる。尼弥娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃娃崩汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚危異異異異異異異異異異異異異異異異。泣こうが、叫ぼうが、抵抗しようが、かまわない。殴られ、挽ひき潰つぶされ、飛び散る贅にえの園そのの住人たちの破片が、大おお粒つぶの雨みたいにそらじゅうに降りそそいで、もう大変なことになっている。よく見れば、餓忌彦と奇歪蜘磨が二人（？）がかりでなんとか逆神女御子を押さえつけ、動きを封ふうじて、悪塊丸が徹てつ底てい的に打だ撃げきを加える役を担当している模様なのだが、悪塊丸のまんじゅうめいた両の拳が逆神女御子のみならず餓忌彦と奇歪蜘磨をもめちゃくちゃにしているのは否定しようのない厳然たる事実だ。



「……ふ……ふ……ふ、ふ、ふ……ふふふふふ……ふふふふふふふ……」サフィニアは肩かたを揺ゆらして──笑っているのだろうか。いや、まさか。そんなことはないだろう。ない──と思う。ない……よね？

「やっぱおっかねえやつだよ、この娘むすめは……」トモヨが呆あ

きれたように言うと、ベティが即そく座ざにうなずいた。「ホント。性格出てるわ」

　そんな、性格出てるってことはないと思うんだけど、振ふり返っていろいろ考えてみると、そういうところが微み塵じんもないかっていうと、地味になきにしもあらずのような気もする。

　ともあれサフィニアが操あやつる悪塊丸は、トモヨの餓忌彦、ベティの奇歪蜘蘑ごと、逆神女御子をぶちのめすどころか、ぶっ潰してしまおうとしている。もちろん、逆神女御子も無抵抗主義を貫つらぬいているわけじゃない。無数の腕わん状じよう管が繭まゆみたいに餓忌彦、奇歪蜘蘑、悪塊丸を包みこもうとしているし、その先せん端たんは主に悪塊丸をガッスガス刺さしまくっている。でも、悪塊丸は止まらない。緑色の体液を撒まき散らしながら、逆神女御子をぶん殴りつづける。その拳は一発ごとに重みを、勢いを、威い力りよくを増して、たぶん逆神女御子を追いこんでいる。いったい誰だれが始めたのか。悪塊丸が拳を打ち下ろすたびに声があがる。「えい！」「それ！」「えいやあ！」「どりゃあ！」「せいやあ！」「いえい！」「だあ！」掛かけ声はバラバラだ。でも、タイミングだけはあっている。「──やあ！」「あい！」「せい！」「りゃあ！」「へやあ！」「どお！」「こいやあ！」「どっしゃあ！」「せりゃあ！」「うおい！」「はい！」「どっこい！」「さあ！」「さあ！」「さあ！」「さあ！」「さあ！」「さあ……！」

　もう単なる掛け声じゃない。人々の期待が希望が願望がこもっている。やれ。やっつけろ。やっちまえ。頼たのむ。お願いだから。悪塊丸は組みあわせた両手を高々と振りかぶった。蒙云云。

　振りおろされた悪塊丸の両手が逆神女御子の頭部を完全に粉ふん砕さいした瞬しゆん間かん、その真っ白い全身が急激に熱された牛乳みたいに爆ばく発はつして四散した。逆神女御子だけじゃない。その爆発には餓忌彦も奇歪蜘蘑も、そして悪塊丸も巻きこまれた。贄の園の住人たちは仲よく木こっ端ぱ微み塵じんになり、ごちゃ混ぜ状態で飛び散った。

「我々のッ……！」

　聞き間ま違ちがえようがない。どこにいるのかはわからないけれ

ど、ファニー・フランクの声だ。

「勝利だッ！　ＥＦＡッ……！」

「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」

「いやいやいや……」マリアローズは首を左右に振った。きみは何もしてないし。

　最終的に相あい討うちになったとはいえ、見事に逆神女御子を打ち倒たおしてみせた三人の魔ま術じゆつ士は、だが、喜びを分かちあうどころか、まだ張りつめた雰ふん囲い気きを漂ただよわせている。

「──次、ね」ベティは腰こしの短たん剣けんを抜ぬいた。

「あぁー超ちよう怖こえええ。軽くイッちまうかも」トモヨは身み震ぶるいをした。ほとんど裸はだかだから寒いのか。そういうわけでもなさそうだ。

「伏ふせて……！」サフィニアは南門のほうを見すえたまま叫さけんだ。でもおそらく、マリアローズたちに向けて言ったのだと思う。「……きます……！」

　くるって、何が……？　もしかして、あれか。

　マリアローズは目を細めた。まぶしい。光だ。南門の底あたりが光っている。純白の光だ。音はしない。何の音も。無音だ。光がゆっくりと、底部から南門を侵しん食しよくしてゆく。溶とけているのか。わからない。とにかく光は徐じよ々じよに徐々に南門を食ってゆく。それに従って当然、光は膨ふくらみ、強まって──もうとてもじゃないけれど直視できない。無理だ。これ以上、あの光をまともに見ていたら、目が潰れてしまう。でも、完全に目を離はなすこともできなくて、マリアローズは両手でひさしを作り、限界まで目を細めに細めた。風が吹ふきつけてくる。音のない風が。伏せて、というサフィニアの言葉を思いだしたのはそのときだった。さりとて腹はら這ばいになる決心もつかず、しゃがんで膝ひざをついた。その間も光は南門を侵おかしつづけていて、一瞬たりとも止まることはなかった。ただし、その速度はあくまでゆっくりだ。遅おそくても着実だった。あの光はたぶん、南門を破は壊かいしてい

る。光が引き起こしていると思われる風は、静かに、実に静かに迫せまってきて、マリアローズたちを押し流そうとする。それなのに、その光景をこうして目まの当たりにしているのにもかかわらず、実感がわかない。やはり音がしないからか。あまりにも静かすぎる。

　だけれど南門はもう半分以上、すべてを洗い流してしまいそうな白く清せい浄じような光にのみこまれている。

「……白魔術」

　知らぬ者とていない〝閃光のスパークル魔女ウイツチ〟マチルダといえば、白魔術だ。その名前は知っていても、実際、目にしたことがある者は少ないだろう。マリアローズはなくもない。サフィニアは要素魔術と召しよう喚かん魔術に加えて、白魔術やそのアレンジ版を使うことがある。ただ、あれはモノが違ちがう。おそらく、あれこそが本物の白魔術なのだろう。

　こんなことを思うなんて馬ば鹿かだ。でも、すごくきれいだ。

　あの光に魅み入いられない者がいるとしたら、その神経を疑う。

　光は南門を完全に食い尽つくそうとしている。

　まだ終わってほしくないと願っている自分に気づいて、これがマチルダの力なのかもしれないと戯たわけたことを考えた。そう考えてしまうほど圧あつ倒とう的だった。あんなことができてしまう人間が存在していいのか。何か間違っている。

　南門は光と化して音もなく消え去り、たちまちのうちに風はやんだ。

　巨きよ大だいな贄にえの園その の住人にさえ壊こわされることがなかった首都城じよう壁へきに、失われた南門の部分だけ隙すき間まができた。

　隙間の向こうには、かつて人が住みついては略りやく奪だつ、殺さつ戮りくされ、いつしか無人となったエルデンの前庭、マグルーの緑野が広がり、大陸西縦断道がのびている。

　マグルーの緑野には今、もうもうと煙けむりが立っていた。

　砂さ塵じんなのか。それとも、炎ほのおによる黒こく煙えんか。

　マリアローズは矢も盾たてもたまらなくなって、横転している馬車によじ登った。目を凝こらして見る前から動どう悸きがしていた。心臓、やばい。破は裂れつしちゃいそう。呼吸も浅く、速くなった。何だよ、あれ。騎き馬ば。それはわかる。南方で咲さくラフレシアの花を象かたどった帝てい国こく旗をはためかせて、とてつもない数の騎馬が整列している。でも、あれは──馬車？　違う。曳ひき馬が見あたらないし、煙をあげている。馬車ではなさそうだが、おそらく車だ。荷車ということはないだろうから、何らかの仕組みで動く戦車に違いない。

「秩ちつ序じよの番人……！　後備隊をのぞく全隊士、前へ……！　モリー・リップス！　急ぎ退たい避ひしてください！　後備隊はこれを援えん護ごせよ……！」ヨハン・サンライズの指示が奇き妙みような静せい寂じやくを引き裂さくと、番人たちは我に返ったように動きだした。

「ここはわしらも前ぇ出たほうがええんちゃうか……!?」

「前に出て──」マリアローズは言いかけて口をつぐんだ。前に出て、どうするんだよ。僕は今、そう言おうとした。びびってるんだ。そりゃそうでしょ。戦車はよくわからないけれど、騎馬隊だけでも手に余る。相手は軍隊なのだ。

「行くぞ！」トマトクンが大たい剣けんの柄つかに手をかけて歩きだした。

「ちょっ──」マリアローズは馬車から飛び降りた。

「ＥＦＡッ！　全軍前進ッッッ……！」ファニー・フランクがふざけたことをぬかしている。きみらみたいな烏う合ごうの衆が出ていったって、無む駄だ死にするだけだっての。たとえＥＦＡが全員、秩序の番人並みだったとしても、勝てるとは思えないけどさ。

　でも、トマトクンが行く。カタリがつづく。ピンパーネルも。ルーシーはあっという間にピンパーネルを追い抜いた。きゅーが子供たちを下ろした。ユリカは子供たちを近くの医術士に託たくして駆かけだそうとしている。ハニーもついてゆくつもりらしい。サフィニアはベティ、トモヨと一いつ緒しよに、やはりなくなった南門のほうへと向かうようだ。何だろう。

　僕は勇ゆう敢かんじゃない。かなり臆おく病びようなほうだと思う。自分がいろいろな意味で弱いということをよく知っているから、人並みかそれ以上に用心深くならざるをえない。だけど、それにしても何か変だ。こんなに怖こわいなんて。違う。怖いだけじゃない。怖いのはいつものことだ。だから、僕の足をすくませているのはたぶん、恐きよう怖ふだけじゃない。じゃあ、何が……？

「リーチェ！　気をつけて……！」

「おまえこそ……！」

「ありがと！」マリアローズは萎い縮しゆくしている足を平手で叩たたいて、仲間たちを追った。誰だれも振ふり返ってくれない。みんな前だけを見ている。だからどうしたっていうんだよ。なんでだろう。どうしてこんなに落ちつかないんだろう。変だよ。僕が変なだけかな。少なくとも、状じよう況きようはおかしい。明らかにまともじゃない。

「きゅー！　ハニーを背負ってあげて！」

「くう！」

「あたしはわりと大だい丈じよう夫ぶだけど、お願い。わ。気持ちよすぎ！」

「──マリア、しゅこし顔色が悪いわよ、平気!?」

「え、うん、てゆうかそんなこと言ってる場合じゃないし！」

「腐フっ腐っ腐っ！　よっしゃ、ルーシー、わしについてこいや！」

「はい、カタリさんっ！」

「先走るなってば、馬鹿魚……！　──あ、モリー！」

「きみも前に出るの!?　ダメよ、無理しちゃ！」

「わかってる！　モリーは下がって！」

　マリアローズの足は動いている。話すこともできている。頭だって働いているはずだ。それなのに、なんだか鈍にぶい。だいたい、

後退して、モリーたちはどこへ行けばいいのか。帝国軍はおそらく、エルデンまで数百メーテルの地点まで迫っている。連中が押しよせてきたら、まず防げない。マチルダまでいるのだから、絶対に不可能だ。やっぱり、帝国軍がくる前に逃にげるしかなかった。その試みが失敗した。おしまいだ。もう終わった。何をしても無む駄だだ。僕は絶望してるのかな。そうかもしれない。でも、そのわりにはやるべきことをやっている。意味がないかもしれないけれど、最善を尽つくそうとしている。自暴自じ棄きになっているのか。そういう感じもしない。何だろう。このちぐはぐさは。気持ち悪い。

　黄色い布を腕うでや頭に巻いているＥＦＡの連中は、さすがに一いつ致ち団結できているわけではないようで、ＥＦＡを連呼しながら南門跡あとめがけて突つっこんでゆく者もいれば、引き返す者もいる。秩序の番人は一枚岩だ。ＥＦＡの脱だつ落らく組を押しのけて、番人たちは着実に突き進んでゆく。ＺＯＯとベティ、トモヨはその隊列に加わって、隊士たちをかきわけつつ最前列を目指そうとしているらしい。らしい、って。いけない。他ひ人と事ごとじゃないんだ。マリアローズはベティをちらりと見た。ベティがここにいるということは、昼飯時ランチタイムはエルデンにいるのか。もしそうだとしたら―首を振って、ああああ、と叫さけびたくなり、危あやういところで押し殺した。ダメだ。本当にダメだ。ぜんぜん集中できていない。何に集中すればいいのかわからない。集中したってどうなるんだよ。どうにもならなくたって、何もしないわけにはいかないじゃないか。

「エルデンをォッ！　エルデンを守るぞォッ！　ＥＦＡッ……！」

「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」「ＥＦＡ！」

　ＥＦＡはもう南門跡に突とつ入にゅうしつつあるようだ。秩序の番人は少し離はなれてその後ろについている。たぶん、ＥＦＡがいつどうなっても対処できるように、あえて距きょ離りを置いているのだろう。ヨハン・サンライズは冷静だ。おそらくどこまでも冷静沈ちん着ちゃくに、自分たちを犠ぎ牲せいにしてでも、モリーたちが逃げるための時間を稼かせごうとしている。でもさ。秩序の番人のおかげでここから離れることができたとしても、エルデンの中にいるかぎり、モリーたちは袋ふくろの鼠ねずみなんじゃないの？　考えても仕方ない。そうなんだけど。今できることを精せい一いっ杯ぱいやるしかない。そのとおりなんだけどさ。

　番人たちの前進速度は早歩きと駆け足の間くらいだから、そう速くない。程ほどなく最前列が近づいてきた。秩序の番人と違ちがい、前を行くＥＦＡは足並みが乱れまくっていて、まばらだったり、変に密集していたりする。それにしても、ここに南門があったなんて。とても信じられない。地面は磨みがいたように滑なめらかだし、首都城じよう壁へきの断面も同じで、最初から何もなかったかのようだ。あとは城壁の厚さの分を走り抜ぬければ、エルデンの外へと踏ふみだすことになる。その寸前に、トマトクンがヨハン・サンライズと肩かたを並べた。ヨハンがトマトクンを一いち瞥べつして、右手をあげた。「━━総員止まれ……！」

　秩ちつ序じよの番人は一いっ斉せいに足を止めた。まだかろうじて全員がエルデンの中にいる。ＥＦＡは離り脱だつ組をのぞいて外だ。マグルーの緑野には魔ま導どう兵の残ざん骸がいやスペース・ファングの騎き士したちの死骸が散らばっていて、灰色の大陸西縦断道を駆けてゆくＥＦＡの老ろう若にやく男なん女によは、ひどく頼たよりなく滑こっ稽けいに見えた。

　実際、馬ば鹿かげている。

　彼らの行く手に視線を向けてみるといい。黒こく煙えんを上げる大きな戦車がずらりと並んでいて、戦車と戦車の合間を騎馬が隙すき間まなく埋うめている。薄うすく展開しているのかもしれないが、戦車と騎馬の列は数百メーテル、もしかしたらそれ以上にわたっているのだ。

　ＥＦＡを連呼する声が次し第だいにしぼんでゆき、彼ら、彼女らの足も鈍って、ついには止まりだした。

　最初から無む謀ぼう以外の何物でもなかったＥＦＡの進軍が完全に停止するまで、そう長い時間はかからなかった。

「━━ヌムムッ……！　ど、どうしてしまったのだ皆みなの衆ゥーッ!?　こ、ここまできてソ、ソレはア、アレだぞな、情けないとはお、お、おおォーもわんかねッ!?　わ、わ、わァーたしとしてはそのつまり何だッ、フッ、フッ、フアハハッ！　そォーれ、ＥＦＡッ……！」

　ファニー・フランクが旗を振っても、ＥＦＡの連中は黙だまってうなだれている。あとずさりしている者も、引き返そうとしている者もいた。きっと熱に浮うかされたような状態でここまできて、よ

うやく正気を取り戻もどしたのだろう。自じ業ごう自得だし、気の毒だとは思わない。ＥＦＡも僕らも、これから待ち受けている運命は似たようなものだろうし。

「秩序の番人は南門跡を死守する」ヨハン・サンライズが宣言すると、番人たちはためらうことなく「応」と答えた。──ああ。そっか。そういうことなんだ。

　ヨハンをふくめた番人たちはとっくに覚かく悟ごを決めている。身を捨てるつもりでいるのだ。でも、僕はたぶん違う。いざとなったらそうするしかないのかもしれないけれど、まだ何か他ほかに方法があるんじゃないかと思っている。

　ようするに、ここで一分でも一秒でも敵を食い止める、そのために討うち死にを遂とげて、死に花を咲さかせるってことでしょ？　そりゃあかっこいいかもしれないけどさ。終わりよければすべてよしっていう言葉もあるし、刀折れ矢尽つきるまで戦って、戦いきって果てるのは、死に方としては悪くない。僕は、僕らは、精一杯やった。これ以上は無理だった。そんなふうに自分を納得させることもできるだろう。だけど、それでいいの？　みっともなくたって、もっとあがいたほうがいいんじゃない？　ここで終わりにしないで、ちょっとでも最後を引き延ばすために全力を尽くすべきなんじゃないの？　モリーたちを助けたいのなら、この命にどこまでもしがみつかないとさ。そして、命があるかぎりしつこく、粘ねばり強く戦う。戦いつづける。それが筋なんじゃない？　玉ぎよく砕さいなんかしてる場合じゃないでしょ……？

　一歩踏みだして口を開こうとしたら、出鼻をくじかれた。

「否ノン！」

　どうやらＥＦＡから離れて一人、首都城壁の陰かげに隠かくれていたらしい。

　口くち髭ひげの男がまったく頭を上下させずにすたすた歩いてきた。

「──ジャン・スタンバック」ベティが目を瞠みはった。「あなた……」

　男はベティに目礼してヨハン・サンライズの前で立ち止まると、

口髭をつまんだ。

「秩序の番人の皆みな々みな様さまにおかれては、ただちにお退ひきになることを強く勧すすめさせていただく」

　微び妙みように変な声こわ音ねだ。無理やり低い声を出しているのかもしれない。それに、あの体形。もしかして、男じゃなくて——女……？　でも、だとしたら、なんで口髭が……？

「君はたしか——」ヨハンは昼飯時ランチタイムの名を出そうとしたのかもしれない。

　ジャン・スタンバックは頭を軽く振ふって、それを制した。「捨て石となるのは我々ＥＦＡのみで十分。貴公ら秩序の番人には犬死にするよりも遥はるかに有用な生命の使い途みちというものが必ずあるはずだ」

「君らのようなどこの馬の骨ともわからぬ者どもに、たとえ捨て石の役目であろうと任せられると思うかね」

「問答は無益どころか不利益。今ここで我らが何事もなく息をしていることすら、魔女の気まぐれにすぎない。そう考えないのだとしたら、秩序の番人の総長も評判倒だおれの頓とん馬ま抜け作と断ずる他ないな」

「総長を愚ぐ弄ろうするか……！」番人たちが騒さわぎはじめたが、ヨハンは涼すずしい顔をしている。皮肉も非難も中傷も余よ裕ゆう綽しやく々しやくで受け流す鉄面皮には定評のある男だ。ただ、このままジャン・スタンバックの申し入れを黙もく殺さつするつもりなら、マリアローズとしても黙ってはいられない。

「その人の言うとおり。ここにいたって意味ないよ」

　ヨハンが振り向いて両りよう眼めをすぼめた。な、なんでジャン・スタンバックには無表情だったのに、僕のことは睨にらむんだよ。不公平じゃない？　いいけど。そういうことなら受けて立つし。

「わかんないかな？　最後はみんなでお手々つないで景気よく派手にきれいさっぱり死んで終わりにしようとか、そんなクソくっだらない自己満足はやめたほうがいいどころか絶対やめるべきだって言ってるんだけど。え？　そんなつもりはないって？　そお？　ほ

んとにそんな気持ちはこれっぽっちもないって言いきれる？　酔よってるとまでは言わないけどさ。そういう空気的なものは感じるんだけどね。てゆうか、ここに固まってじっとしてるのって、もしかしていい的まとなんじゃない？　とりあえず、ここからは離はなれたほうがいいと思うけどね。それとも、やっぱりここで死ぬのが目的なの？　違うよね？　時間稼かせぎでしょ？　だったら、死んじゃダメだよ。生きないと。一人でも二人でも三人でも、少しでも多く生きのびて、抵てい抗こうしつづけないと。ここで戦力失ってる場合じゃないよ。落ちつきはらってるふりして、実は悲ひ壮そうな決意とか胸に秘ひめちゃったりしてさ。そんなのいらないから。そうじゃなくて僕らに今、必要なのは負けないことだよ。死ぬまで負けない。どんなふうになっても、負けない。もうどうしようもなくなって死んじゃうまでとことん生きて、息がある間はできるかぎりのことをする。ここで華はな々ばなしく全ぜん滅めつすれば、きみらはすっきりするのかもしれないけどね。さぞかしいい気分で死ねると思うよ。あとのことは考えなくていいわけだしさ。だけど、そんなの許さない！　認めない！　だったら好きにすればなんて言ってやらない！　かっこつけてないで、みじめでも見苦しくても情けなくても、最後の最後まで戦え、ばかっ……！」

　ヨハンは冷え冷えとした憎ぞう悪おが渦うず巻まいている（ようにしか見えない）目で、マリアローズをねめつけている。微び動どうだにしない表情がかえって不気味だ。気け圧おされてしまいそうになるけれど、負けるものか。

「賛成」ベティが少しだけ首を傾かたむけて軽く手をあげてみせた。「あたしは死ぬつもりなんかこれっぽっちもないけど、軍隊はともかく、マチルダを舐なめないほうがいいわよ。あの魔女がその気になれば、あなたがたなんてひとたまりもないわ」

「つっても、あのババアは比類なき鬼き畜ちくだし、楽に死なせてもらえるなんて思わねえほうがいいけどな」トモヨは相変わらずほぼ裸はだかだ。そのへんに都合よく着き替がえが転がっていたりはしないだろうから、あたりまえなんだけど。

　ヨハンはトモヨをちらりと見てすぐに目をそらし、眼鏡を押しあげるような仕し種ぐさをしそうになってやめた。「……君らの意見を考こう慮りよに入れる必要性など私は認めない」

「だったら」マリアローズはヨハンに詰つめよった。「きみが今、ここで！　すぐに！　自分で考えて決めればいいだろ！」

　一いつ瞬しゅん、ヨハンが笑えみらしきものを唇くちびるの端はしに閃ひらめかせた。

　そんなふうに見えただけかもしれない。というか、マリアローズに笑いかけたりするわけがないし、きっと目の錯さつ覚かくだ。

　ヨハンは番人たちを見まわした。「総員──」

「何かきまス……！」ピンパーネルの声は切せつ迫ぱくしていた。

　東のほうだ。帝てい国こく軍の騎き馬ばや戦車の列を横切るようにして駆かけてくる。馬か。一頭じゃない。馬の群れだ。どうして騎馬じゃなくて馬の集団がこんなところに。

「え……」ベティはまたもや目を瞠った。「Ｂ□Ｂ……？」

「先頭の馬！　人が乗っとるで！　じいさんや……！」

「あ──」

　たしかに。でも、乗っているという表現が正しいのかどうか。群れの先頭を走っている馬だ。その背に一人の男が立っている。

　男は一ひと振ふりの長大な刀を背負ってはいるものの、見るからに若くはない。頭頂部に一ひと房ふさ、それから耳と耳を繫つなぐように残っている髪かみの毛は真っ白だ。老人は顔の上半分を覆おおうゴーグルをかけて、白と黒の小こ袖そでのはだけさせた襟えりに右みぎ腕うでを突つっこみ、左手は袂たもとの中に収めている。

　ジャン・スタンバックが呟つぶやいた。「……バーニング・バラッド」

「なんやて!?　バーニング・バラッドっちゅうたら──」

「総そう帥すい！」ジャン・スタンバックは半魚人になんか目もくれずに駆けだした。「大至急、反転前進！　早くしなさい、この愚ぐ図ず……！」

「ム、ムオウッ……!?　軍師どのがそうおっしゃるのならばッ！　よしＥＦＡ、ただちに反転前進ッ！　それ逃にげろッ……！」ファニー・フランクが旗を振りながら回れ右をすると、ＥＦＡはなだれを打って撤てつ退たいを開始した──と言いたいところだけれど、走

りだした途と端たんに足をもつれさせて転ぶ者もいれば、なぜか這はって進もうとしている者までいる。しかも、馬の群れは速い。何かに追い立てられているかのように全力疾しつ走そうしている。

　ジャン・スタンバックが叫さけんだ。「伏ふせて……！」

　老人が馬の背を蹴けって跳とびあがった。

「ふ、伏せッ──」ファニー・フランクは旗を捨てて地面に身を投げだした。

　老人は着地するなり、背に負っている大刀ではなく、襟から右腕を抜ぬいた。違う。ただ抜いたのではない。抜き放った。

　重く弾はじける音が二連続で響ひびいて、マリアローズは目を疑った。だって、こんなのおかしい。老人は右腕を振った。それだけだ。とてつもない早はや業わざではあったが、あくまで右腕を襟から抜いて振るっただけなのだ。それなのに、こんなことが起こるなんておかしい。

　立っていた者は、だいたい腰ごしくらいの高さで両断されていた。しゃがんで首をぶった切られたり、頭部を真っ二つにされた者もいる。とにかく、ファニー・フランクの周りにいた百人くらいは、ちゃんと伏せることができた者をのぞいて皆みな、被ひ害がいを受けていた。ファニー・フランクのように難を逃のがれた例外はごく少数だった。

　あの老人がやったのだ。

　B□B□□バーニング・バラッドだっていうのか。あの老人が。

　西を目指して駆け去ってゆこうとした馬の群れは、一頭残らずばたばたと倒たおれて間もなく動かなくなった。

「ふむ……」老人はふたたび襟に右腕を突っこんで首を左右に曲げた。「どうやら間に合おうたようじゃの。重ちよう畳じよう、重畳」

「……あんた」ベティが顔を引きつらせて老人を指さした。「いったい何なの⁉　どういうつもりなのよ！　行方ゆくえをくらませたと思ったら、こんなときに姿を現して！　おまけにあんたがあのバーニング・バラッドだなんて──薄うす々うすは気づいてたけ

ど！」

「すまんの、ベティ。うぬらとはときに語らい、ときに酒を酌くみ交かわした仲じゃし、恨うらみがあるわけでもないが、我わが輩はいには果たさねば死ねぬ宿願があってな」老人はからからと笑って地面を蹴った。「ほれ。雑ざ魚こどもは早う去いね。そこにおられては邪じや魔まじゃ」

　老人はファニー・フランクたちには顔を向けもしなかったが、一応、ＥＦＡの生き残りに言ったらしい。

「フッ!?　ウオッ!?　ホアァッ……!?」ファニー・フランクはガバッと起きあがり前後左右を見て、へなへなとしゃがみこんだかと思うとまた立ちあがった。「──き、き、きききききき貴様ァッ！　よ、よくもよくもよくもッ！　私の同志をッ！　仲間たちをッ！　友をッ！　やァーってくれやがりましたな、ご老公ッ……!?　許さん、許さん、許さんぞォゥッ！　私は貴様をッ！　決して許したりはッ！　しないッ！　そうッ！　何があろうともッ……!?」

「ほお」老人が右腕を襟から出した瞬しゆん間かん、ファニー・フランクは二メーテルくらい跳び下がって仲間の遺体に躓つまずいたが、なんとか持ちこたえた。老人はただ右手で顎あごを撫なでただけだった。「我輩を許さんのであれば、如い何かにするつもりじゃ」

「そ、それはむろんッ！」ファニー・フランクは剣けんを抜いた。「……せ、成敗ッ！　皆の仇あだはこの私が討うつッ！　討ってみせるッ！　それが私のプレシャス・スタイルッ……！」

　どんなスタイルか知らないけれど、いまだかつて見たことがないようなへっぴり腰だし、残像で三人に見えるくらい全身が震ふるえまくっている。

「総帥！」ジャン・スタンバックが叱しかりつけた。「お退きください！」

「だ、だ、だがしかし軍師どのッ！　正直言って私には意地などないが──」

「ないの……？」思わず小声でツッコんでしまった。いけない。そんな場合じゃない。

「どどどど同志がななななな仲間がとととと友たちがこここここのような目にあああ遭あわされてだね、ださだだ黙だまってなどいィーられないッ！　ししし心情的にそれはむむむ無理な相談というものだァッ……!?」

「いいから退けと言っている！　無む駄だ死にするくらいなら、息のある仲間を一人でも背負って戻もどってきなさい！」

「ムムヌッ！　それは道理だ軍師どのッ……！」ファニー・フランクは剣を鞘さやに収めて、一人の負傷者を背負い、もう一人を助け起こして肩かたを貸した。「──いよしッ！　歩ける者は私についてくるのだッ！　それではあらためて反転前進ッ！　明日の勝利のためにッ……！」

「切り替かえ早っ……」

　老人もやや呆あつ気けにとられているのかもしれない。ファニー・フランクがジャン・スタンバックの手を借りてＥＦＡの生存者を退たい却きやくさせている間、老人は顎をつまんだり指先で掻かいたりしながら突っ立っていた。もっとも、生き残りは多くない。作業はすぐに終わった。

「さて──」老人は空を仰あおぐように顔を上げた。「舞ぶ台たいは整うた。我輩はこれより持てる技と力のすべてを駆く使しして、殺さつ戮りくを行う」

「ほぉーう……」カタリの半魚顔から半魚眼が思いっきり飛びだした。「なんやてえっ!?」

「我輩一人で幾いく人殺やれるかの。まあ、万は軽くいけよう。我輩を止めたくば、刀を抜かせぬことじゃな。つまり──」老人は右みぎ肩かたから突きだしている大刀の柄つかに右手をかけた。「時すでに遅おそしということじゃ。師よ」

　トマトクンが鼻をひくつかせてぐっと膝ひざを曲げ、体勢を低くした。「……この匂においは」

「我輩を制しうるのは、師よ、あなただけですぞ」老人は薄うす笑わらいを浮うかべて大刀を抜ぬいた。

　その刀身が陽光をぎらりと照りかえした途と端たん、マリアローズは自分の身体からだがいきなり何倍も重くなったように感じた。

やたらと重くてしょうがないのに、中はがらんどうでどこにも力が入らない。立っているだけでやっとだ。うまく息ができない。とくに吸いこむのがつらい。何なんだよ、これ。僕だけじゃないみたいだし。程度の差こそあれ、誰だれも彼も何かを感じて、何らかの影えい響きようを受けているようだ。

「バーニング・バラッド」ヨハンが唸うなるように言った。「あれが剣聖の弟で子しか」

「始めるかの」老人は一・五メーテルほどもありそうな大刀の切っ先を地面すれすれまで下げた。左手はまだ袂たもとの中だ。「我が愛刀、鬼おに波は濤とうに斬きられ果つるは望みがたき栄えい誉よじゃぞ、雑兵ども。せめて一いつ時ときその間ま際ぎわ、心ゆくまで酔よい痴しれるがいい」

　たとえ剣聖の弟子だろうと、雑兵扱あつかいしたら後こう悔かいするに違ちがいない一いつ騎き当とう千せんの猛も者さたちがここには何人もいる。老人はそのことを知らないのだ。年寄りの冷や水だ。身の程ほど知らずだ。笑ってやりたいけれど、笑えない。身動きがとれない。声も出せない。何もかもが押し潰つぶされたようにゆがんで見える。

　老人が左足を一歩、前に進めた。

「りりぃ」

　声を聞いて、マリアローズはトマトクンの顔を見上げた。あれ？　何だよ。動く。僕の身体、ちゃんと動くじゃないか。てゆうかトマト、今、何て……？

　りりぃ──って言った？

　大勢が息をのんだ。

　マリアローズは老人のほうに視線を向けなおした。

　彼女はおそらく、首都城じよう壁へきの上から飛び降りたのだろう。

　赤い。

　鮮あざやかな、赤。

　紅色だ。

　わずかな隙すきもなく紅の装そう甲こうに身を包んだ彼女は、人に似た姿をしている。身体つきは女性のそれだ。ただ、腕うでや脚あしは長く、あくまでしなやかで、熟練の匠たくみが精せい魂こんをこめて作りあげた弓を思わせる。頭がやけに小さく見えるのは、上背があるせいだろうか。彼女は大おお柄がらなトマトクンよりも背が高い。

　異様と言えば異様な姿なのかもしれないが、それよりも美しいと感じさせる。おかしな言い方かもしれない、でも、彼女には無む駄だな部分が一つもないのだ。まったく飾かざり気のない、実用一いつ辺ぺん倒とうの長大な刀とう剣けんのごとく、彼女という存在は徹てつ底てい的に鍛きたえ抜かれ、どこまでも鋭するどく研とぎ澄すまされている。ちょうど老人が手にしている大刀のように。

　彼女は武器だ。

　武器そのものだ。

「おお」老人はゴーグルをしていてもわかるくらい顔をくしゃくしゃにした。「師よ。お待ち申しあげておりましたぞ」

　彼女──りりぃは、深く膝を沈しずみこませて着地した。音らしい音はしなかった。そんなわけがない。普ふ通つうの人間なら確実に死んでしまう。ものすごい衝しよう撃げきのはずだ。それを吸収したのか。どうやって？　そんな疑問を抱いだくことさえ馬ば鹿か馬ば鹿かしい。彼女は伝説なのだ。

　剣聖ヴァン・ヴラドＸＬ。

　モータルレッド。

　りりぃは膝をのばして老人に顔を向けた。「おまえを弟子にした覚えはない」

「相も変わらずつれない御お方かたじゃ」老人は左手でゴーグルをずらし、指で何かをぬぐうような仕し種ぐさをした。「しかし、我わが輩はいにとっては、あなたこそがただ一人の師でありました」

「おまえはあたしから何を学んだというんだ」

「すべてを」

「時を無駄にしたな」

「そのように思うたことは一度たりともありませなんだ。なぜなら我輩は、あなたに出会うことができたのです」

「悔くいはないか」

「些いささかも」

「老いたその身で何ができる」

「師よ」老人は大刀を両手持ちして左右の肘ひじを肩かたの高さまで上げ、刀身を十五度から二十度ほど右に倒たおした。「我輩の全身全ぜん霊れいをもって、あなたを斬らせていただく」

同時刻　トレイン公国ワンダーテレサ

　トレイン公国領のほぼ西せい端たん、南に国境を接するベルドリッド王国の領土にも近いハーノックの原野を進む者は、ふと顔を上げると場ば違ちがいに感じるほどの威い容ようを目にして驚おどろくことになるだろう。

　起き伏ふくに富み、気候も厳しい、また、国境地帯でもあるため、一部しか開かい墾こんされていないハーノックの原野に、その城じよう塞さい都市は浮うき島しまのごとくそびえ立っている。

　ワンダーテレサ。

　常時七万人の軍民が、小高い丘おかの上に建設されたこの都市とその近辺で暮らしている。

　堅けん固ごな防ぼう壁へきに囲まれたワンダーテレサは、国境警備の要かなめであるだけでなく、非常時には公王家の離り宮きゅうとしても機能し、最大三十五万人を収容して少なくとも半年の籠ろう城じように耐たえうる備えがなされているという。

現在は、ラフレシア第三帝てい国こく軍のサンランド無統治王国侵しん攻こうという事態に対処するべく、兵員と支し援えん要員約十二万人がワンダーテレサに集結している。公国は軍事同盟を結んでいるベルドリッド王国と連れん携けいしつつ、あわよくばサンランドの領土を切りとろうと企たくらんでいるのだ。

「よい街だわ」

彼女はワンダーテレサの中心、ハウラー宮の白い尖せん塔とうの頂いただきで風を浴びていた。

雲一つない晴天だ。

そよいでいた風が不意に強まり、彼女の顔を覆おおっていた紫むらさき色いろのベールが吹ふき飛ばされた。

「ワンダーテレサ」彼女は絹糸のような光こう沢たくのある髪かみの毛を右手の指で梳すいた。「公国史上唯ゆい一いつの女公王にして、ベラード将軍との叶かなわぬ恋こいを胸に秘めたまま、戦場に斃たおれた〝嘆きのウエイリングテレサ〟の名を冠かんされしこの街が崩くずれ去ってゆくさまを想像すると、胸が躍おどります。今からそれを見られるだなんて、すてき」

物心がつくころにはもう、破は壊かいに魅み了りようされていた。

幼い彼女は手当たり次し第だいに物を持ちあげて地面に落とし、砕くだけ散る場面を眺ながめてうっとりしていた。壊こわれない物があると、なぜ壊れないのか考えた。もっと高い場所から落とせばいいのだろうか。彼女は背せ伸のびをした。椅い子すや机を踏ふみ台にした。やがて手を使わなくても物を持ちあげられることに気づいた。持ちあげるだけではない。そのうち自在に動かすことができるようになった。彼女はその力を使って様々な物の形を損そこなわせることに熱中した。すぐに動かぬ物だけでは飽あき足たらなくなった。動く物を壊したくなった。彼女はいろいろな方法で虫を壊した。鼠ねずみを、野の兎うさぎを壊した。羊を壊し、牧羊犬を壊し、牛馬を壊した。父と母を壊した。彼女は気づいた。動く物、生き物であろうと、壊してしまえば動かぬ物と変わらない。破壊それ自体に区別はない。違ちがいは彼女を刺し激げきするか否いなか。それだけだ。規模は大きいほうがいい。複雑な構造物が破壊されて単純化されてゆく眺めはいつでも興味深い。ありふれた破壊はつま

らない。ありきたりではない破壊がいい。

「あたくしはこの世界が壊れるところを見たいのです」

　彼女は左手をゆっくりと握にぎり、開いた。笑えみがこぼれた。

　マチルダが撒まいたあの種はもう花開いている。完全に咲さききったら、どれほどの破壊をなすことができるだろう。

「楽しみだわ」

　彼女は胸の前で両の掌てのひらをあわせた。

　この世界は斯かくあるものではない。斯くあれと願うことで、世界は如い何か様ようにも変容しうる。それは、だが、あくまで可能性にすぎない。かぎりなく無に近い可能性を極大化させるためには、何らかの力が要いる。魔ま術じゆつとはそのための力だ。

　彼女の全身から揺ゆらめく青あお紫むらさき色の光が立ちのぼりはじめた。

　超越者オーバリストと呼ばれる先天的な異能者が行う奇き跡せきを起源とする魔術は、原始魔術、上古の精せい霊れい魔術や霊れい媒ばい術、召しよう喚かん魔術から、古代魔導王時代の実証主義魔術に至るまで、世界の成り立ちを探さぐりながら道を開いてきた。魔術士たちはこの世界で起こる様々な現象の原理を突つき止めようとした。その過程で、目に見えるこの世界が多層構造であることを発見し、下層エレメンタルプレーンの要素精霊たちを使し役えきする技術が劇的に発達した。この世界以外にもたくさんの異界が存在することは古くから知られていたし、それら異なる世界からその住人を呼びよせる業わざは、きわめて高等な魔術として多くの魔術士たちを惹ひきつけてきた。魔術士たちの探たん索さくはこの世界だけではなく異界にも及および、種々の発見が魔術を発展させ、知識を広げ、深めた。魔術士たちは遠くの光を目指して歩んできたのだが、そこには道などなかった。魔術は道を開いてきた。魔術が進むことで道ができた。

　世界は斯くあるものではなく、如何様にも変容しうるのだ。

　ああ、世界よ、斯くあれ。

　魔術はそれを叶えるだろう。

　この世界を打ち壊すことさえできる。

　ワンダーテレサには、マチルダの弟子の中でもまずまず使える魔術士たちが三十七人、潜せん伏ぷくしている。

　彼女ほどの魔術士であっても、現時点ではまだ、独力でこの規模の破壊をなすことはできない。複雑で大おお掛がかりな術式をたった一人で準備、実行するのは現実的に不可能であるという理由は表層的だ。それは本質的な問題ではない。彼女がこの古代呪式を単独で成し遂とげるためには、証明しなければならない。かつて彼女が小石を砕くことから始めて、拳こぶし大の石、その倍ほどの石、もっと大きな石という具合に壊し、自分にはそれが可能なのだと確信していったように、一つずつ古代呪式を試ためしてゆくのだ。何も定められた術式に則のつとる必要はない。手を加えてもいいし、新たに生みだしてもいい。しかし、先人が編みだして成功させた術式に従うことで、確信は強化される。無から有を生むのは至し極ごく困難だ。もっとも、不可能ではない。この世界は斯くあるものではないのだから。原理、法則、術式は魔術士を助ける。同時に束そく縛ばくする。精神集中。秘薬。触しよく媒ばい。呪じゆ文もん。仕種。これらは魔術士が世界を変容させるための道具立てとなりうるが、それが必要不可欠だと錯さつ覚かくさせてしまう。錯覚どころか、大半の魔術士は深く、固く、信じている。それは一種の信しん仰こうだ。マチルダや彼女のような魔術士ですら、その信仰にとらわれている。

　自由になりたい。

　そこに本当の魔術がある。

　壊してしまいたいのだ。

　彼女を縛しばりつけている、この世界を。

「〝古こ代だい壊かい王おうの呪のろい〟」

　温度のない青紫色の炎ほのおが乱らん舞ぶする。

　彼女の身体からだが浮うきあがる。

　目をつぶると、果てが見えないほど大きな扉とびらが現れた。どこもかしこも錆さびついている。古びた扉だ。鍵かぎ穴あながある。古代呪式を作動させる際に用いられることになっている大おお

仰ぎような秘具などいらない。あの鍵穴に鍵を差しこむだけでいい。その鍵はどこに？　ここにある。彼女は鍵穴めがけて合がつ掌しようしたまま両手を突きだした。

「━━起動aboot.」

　手て応ごたえがあった。彼女は目を開けた。光だ。

　ワンダーテレサの各所に光の柱が立った。間もなく振しん動どうしはじめた。全体だ。防ぼう壁へきに囲まれている小高い丘おかの全域が小刻みに震ふるえている。光の柱が回転しながらのびてゆき、弾はじけて、それぞれが何本にも分かれた。無数の細い光の線が互たがいに交わり、網あみ目め状になってワンダーテレサの上空を覆おおい尽つくすまで、さしたる時間はかからなかった。城じよう塞さい都市は依い然ぜんとして打ち震えている。揺れは次第に大きく、強く、激しくなってゆく。

　彼女は恐きよう怖ふにおののいているかのようなワンダーテレサを眼下に見下ろしている。

　市内の東南にあるウォーレン塔とうが突とつ然ぜん、乾かわききった砂の城みたいに崩ほう壊かいした。その瓦が礫れきが周辺の建物を押し潰つぶしている最中に、東側の防壁が地じ滑すべりでも起こしたように倒たおれはじめた。南の表門とハウラー宮の中間あたりに位置しているロイド正方広場を見ると、逃にげ惑まどう人間たちでごった返している。彼らには、だが、逃げ場などない。表門が脆もろくも崩くずれ落ちて、北の裏門も同じ運命をたどろうとしている。西側の防壁も堰せきを切ったように決けつ壊かいした。民家はもちろん、頑がん丈じようなはずの兵舎も次々と倒とう壊かいしている。ハウラー宮はまだ持ちこたえているが、そう長くは保もたないだろう。魔術士三十七人とおよそ七万人の定住軍民、そして約十二万人の兵員をのみこんで、ワンダーテレサは滅ほろびようとしている。

　彼女は目を細め、両りよう腕うでで自らの身体を抱だきしめて、そっと息をついた。

「きれい」

五時四十八分　サンランド無統治王国首都エルデン南門跡

　いったい何なんですかあれ。わっけわかんないんですけど。理解の範はん疇ちゆう超こえまくってくれちゃいやがってるんですけど。や、そりゃあね。サフィニアの魔ま術じゆつとかね。サフィニアだけじゃないけどさ。すごいと思うよ。何度見てもぶったまげるよ。でもさ。やっぱり魔術だしね。手品に毛が生えてるか生えてないか程度の魔術しか使えない魔術士のほうが圧あつ倒とう的に多いけど、一流の魔術士はもうぜんぜんモノが違ちがうわけだから。これこそ魔術って感じで。もちろん驚おどろきはするけど、納なつ得とく感はあるんだよね。ああ、魔術だからね、みたいな。

　でも、あれは違う。

「一刀多段燕つばめ返し」老人は鬼おに波は濤とうとかいうらしい長い長い刀を斜ななめ下から振ふりあげて、マリアローズにはよく見えなかったけれど、たぶん手首を返したのだと思う。「一段」

　たったそれだけの動作で、どうしてそんなことが起こってしまうのか。ドドンッと二連続で轟ごう音おんが響ひびいて──地面だ。三十メーテル四方ほどの地面がごっそり削けずられ、大量の土ど砂しやが巻きあげられた。その真まっ只ただ中なかにいたりりぃはどうなったのか。わからない。土砂のせいで見えない。老人はさらに手首を返した。「二段」

　すると、どうしたことだろう。ドカーンと巻きあげられた土砂が、今度は土砂降りの雨みたいにズドーンと降りそそいだ。みたいというか、これこそが正真正しよう銘めいの土砂降りだ。そうかと思ったら、老人はまた手首を返した。「三段」

　今回はさすがに予想できた。降った土砂がまた巻きあげられる。案の定、そうなった。もっとも、一回目よりすごい。もっと広こう範はん囲いにわたって地面が削られている。それでも老人はまだ満足できないらしい。「四段。五段。六段」手首を返してズドーン、返してドカーン、返してズドーン、もう一度おまけにドカーンと返した。「──七段」

　もう地面には大きな穴があいてしまっている。その穴のぶんだけ、土やら石やら何やらが空中に撒まき散らされているのだ。り

りぃは……？　彼女の姿は依然として見えないが、老人がすっと下がった。くるのか。

　きた。

　りりぃは降りしきる土砂を突つっ切きり、鞭むちのようにしなう右みぎ脚あしで老人を蹴け飛とばそうとした。

　老人は後退しながら、大刀でこれを迎むかえ撃うつ。

　たぶん名刀なのだろう鬼波濤が折れるか、りりぃの脚がぶった斬ぎられるか。

　そのどちらでもなかった。なんでそうなるのかさっぱり見当もつかないけれど、互いに押しあって二人とも撥はね飛ばされる形になった。

「一刀──」老人はザザッと踏ふんばってすぐ、前のめりになってりりぃに突っこんだ。「斬ざん九く無む碍げ」

　あれは大刀を振っているのか。よくわからないが、数十、数百、数千の閃ひらめく光の線が老人を包んでいる。あの線の一つ一つが刀の軌き跡せきなのか。だとしたら、やばいんじゃないの。でも、りりぃは退ひかない。また脚だ。ぴんとのばした左脚一本で身体を支えたまま、右脚をヒュンヒュンギュンギュン振りまわした。キックで刀を防ぼう御ぎよするなんて、普ふ通つうの人間はちょっと思いつかない。できっこないし。まあ、りりぃはあからさまに普通の人間じゃなさそうだけどさ。だからあんな真ま似ねもできちゃうってこと……？

　老人の大刀も、りりぃの右脚も、馬ば鹿か馬ば鹿かしいほど速すぎて目で追うことはできない。でも、ガッツンガッツンぶつかりあっているみたいだ。見えなくても、そんな気配はうかがえる。互ご角かく、なのか。そうは言えないだろう。りりぃは脚しか使っていない。

　不意に老人が低い姿勢になって、弓につがえた矢を引き絞しぼるような構えをとった。「一刀螺ら旋せん突づき」

「──む！　いかん……！」トマトクンが駆かけだして大たい剣けんを抜ぬいた。



　老人がねじりながら刀を突きだすと、りりぃは防ごうとせずに跳とんだ。

　何かが迫せまってくる。マリアローズがそう感じたときには、たぶんすでに到とう達たつしていた。

「ぬううおおおおおおおおおおおおおおぉぉぉ……！」

　破は裂れつするような、木こっ端ぱ微み塵じんに砕くだけるようなおぞましい音がして、マリアローズだけじゃない、近くにいる者たちは皆みな、瞬しゆん間かん的な強風に煽あおられ、慌あわてて屈かがもうとしたり「わっ」と声をあげたりした。琥こ珀はく色の剣けん身しん波打つ大剣を振りおろして、トマトクンはいったい何を斬ったのか。わからないけれど、とにかく老人が何かを放った。りりぃはそれを跳びあがってかわした。老人とりりぃを結ぶ直線の延長線上には南門跡があって、そこにはマリアローズらＺＯＯや番人たちがいた。あのままだと、りりぃの代わりにマリアローズたちがやられるところだった。トマトクンがとっさに守ってくれなければ、少なからず被ひ害がいが出ていただろう。間かん一いつ髪ぱつだったのだ。やばかった。

　トマトクンは一つ息をついて、ズタズタになった自分の外がい套とうに目をやった。「……あのじいさん、なかなかやるな」

「てゆうか、なかなかどころじゃ……」マリアローズは二の句が継つげなかった。あの二人から目を離はなせなくて、喋しやべる余よ裕ゆうがない。みんな同じだ。やかましいカタリでさえ、たまに意味不明な半魚声をもらす程度で、あとは口をつぐんで息を殺している。

　りりぃは着地するなり滑すべるような足どりで老人に詰つめよった。

「一刀」突とつ如じよ、老人の姿が掻かき消えて、置き忘れられたように声だけが響いた。「疾しつ風ぷう迅じん雷らい」

　いや、消えたわけじゃない。移動したのだ。りりぃが大きく右に跳んだ。老人はそこにいた。まるでりりぃを待ち構えていたかのように大刀を振るったが、りりぃの右脚に弾はじかれた。次の瞬間、マリアローズはまた老人を見失った。どこ？　左だ。というか、りりぃがそっちへ行って、老人はそこにいる。老人が斬撃を繰くりだす。それをりりぃが蹴けりかえす。老人がいなくなる。りりぃが見つける。そんなことが何度もつづいた。つまり、老人がものすごい速さで動いて、先手をとろうとしているのだが、りりぃに読まれていて、できない。そういうことか。

　そして、また老人が消えた。りりぃには、でも、見えているの

だ。優ゆう雅がと形容してもいいような身のこなしでりりぃが方向転てん換かんして、突き進んだ先に老人がいる。同じパターンだ。老人が大刀を振りだして、りりぃがそれを右脚で弾きかえす。いや──、

　脚じゃない。

　りりぃは老人の大刀を左手で払はらってさらに踏みこみ、右の拳こぶしを繰りだした。

　老人は意表を突かれたのか。よけることも防ぐこともできず、土手っ腹に食くらって十メーテルほどもぶっ飛ばされた。

　それでいて平然と、何事もなかったかのように起きあがった。
「──ふむ……」

「口ほどにもないな」りりぃはゆったりと老人に歩みよってゆく。

「せっかくお越こしいただいたのです」老人は両りよう腕うでを広げた。「師よ、誓ちかってご期待に添そうてみせますぞ」

「期待などしていない」

「いやいや。されば、わざわざお出いでにはなりますまい」老人の身体からだが急に一回り大きくなった。気のせいだろうか。違ちがう。実際、首や肩かた、腕うでの筋肉が盛りあがっている。それも、異様な盛りあがり方で、正直、気持ち悪いレベルだ。「──二刀無む双そう」

　でも、二刀って。刀は一本、鬼おに波は濤とうだけなのに。疑問はすぐに解けた。

　老人はりりぃに飛びかかって、右手の鬼波濤を振ふりおろした。りりぃはこれを右脚で蹴り払った。次の瞬間、老人の左手が唸うなりをあげた。素す手でだ。何も持っていない。あの間合いでは届くはずがないのに、りりぃは横っ跳びして回かい避ひした。老人の攻こう勢せいはつづく。右手の鬼波濤で、それから左ひだり腕うでで、攻せめたてる。りりぃは老人の鬼波濤と左腕を区別していない。そう見える。ということは、老人の左腕は刀同然に機能しているのだろう。事実、りりぃは何度も老人の左腕を、正確に言えば左腕から放たれた何かを、右脚やら右腕やらで弾いた。そのたびに硬かたい物同士が激げき突とつするような音がした。老人は一刀しか

持っていないのに、二刀流を実現してしまっているのだ。

「まだまだ！」老人の声が溌はつ剌らつとしている。身体つきが変わったこともあいまって、若返ったかのようだ。老人は玩具おもちゃの独コ楽マみたいにぐるぐる回転しながらりりぃに襲おそいかかった。「二刀大車輪……！」

　大車輪。たしかに、横向きにした車輪に見えないこともない。りりぃは車輪と化した老人から逃にげる。車輪がりりぃを追う。とてつもない速度で回転しているので、老人の顔がいくつにも見える。目が回らないのか。老人は大笑いしている。「むははははははははは……！」

「くだらない曲芸だ」りりぃは紅の身体を沈しずめて、老人の足を払いにいった。老人は、だが、ひょいと跳んで、それまで縦だった回転の軸じくを横にした。「くあはあああああああ……！」

「━っ……！」りりぃは地面に身を投げだして老人大車輪をかわした。でも、老人は止まらない。ガッツガツザッスザス地面を削けずりまくりながら、本物の車輪みたいに転がって猛もう然ぜんとりりぃに向かってゆく。りりぃは立ちあがった。逃げないのか。その右手から、禍まが々まがしく反りかえった長い長い刃はが音もなくのびた。「くだらないと言っている」

　もし老人が回転をやめて飛び退かなければ、そうするのが一いつ瞬しゅんでも遅おくれていたら、確実に両断されていただろう。

　りりぃがその刃を振るうと、そこに何もないはずの空間までもが断たち斬きられた。驚きよう嘆たんすべき驚きよう異い的なあの刃は、きっと大地も、天も、時までも斬り裂さいてしまうに違いない。

「ついに」老人はゴーグルを脱ぬぎ捨てた。「師よ、とうとう抜かれましたな、〝緋ノ魂滅〟」

「愚ぐにもつかない見世物につきあわされて、腹が立っただけだ」

「アルティメットブレイド・〝ギャラクシー〟・ダブルオーセブンティーエイト・メタルデス。願わくは両刀でお相手していただけませんかの」

「必要ない」

「この我わが輩はいに甲か斐い性しようがないとおおせられるか」

　老人の両眼はゴーグルを外したときから閉じられたままだ。もしかして、ずっと目をつぶっていたのか。何のために？

　老人はゆっくりと目を開けた。

　瞼まぶたの合間から虹にじ色いろの輝かがやきがもれだして、あふれた。

　瞳ひとみ──ではない。

　少なくとも、人間のそれでは。

　硝子ガラス玉に油ゆ膜まくが張っていて、虹色に光っている。そんなふうに見える物体が、人間の眼がん窩かに収まっているはずがない。

　りりぃもこれにはいくらか驚おどろいたようだ。「……その眼め。何をした」

「異界にて堕おちた神をひとり、殺しました」老人はニヤリと笑った。「腕うで試だめしのつもりであったのですがの。ただ仕留めて仕し舞まいというのもつまらぬし、ちょうど彼奴きやつめに両の目をえぐられておったので、眼球を頂ちよう戴だいしたのです」

「おまえの眼には何が見える」

「美しき師の艶あで姿すがたが」

「どうやら何も見えていないようだな」

「師よ、あなたはわかっておられぬのじゃ」老人は鬼波濤を両手持ちして正眼に構えた。「ああなたほど強く気高く美しい者は、この世におらぬというのに。──真一刀暴れ熊ぐま」

「戯ざれ言ごとを」りりぃが先に動いた。めずらしく声が乱れた。「ぬかすな……！」

「否否否ァァァァ……！」老人は進まない、退ひかない。守勢に回るのか。「ありませぬぞ、決して！　戯れ言などでは……！」

　りりぃが緋ノ魂滅を斜なななめに振りおろした先に、しかし、老人はいなかった。よけたという感じはしなかった。まるでりりぃが見当違ちがいの場所を斬ろうとしたかのようだった。しかも、そんなことが一度ではなく二度も、三度も、何回も繰くりかえされた。

「見える！　見えますぞ、師よ！　あなたの太た刀ち筋すじが見える！　はっきりとォォォ……！」

「その目のおかげか……！」

「然さ様よう！」

「ただ見えているだけじゃない、先読みしているな！」

「さすがは我が師！　ご明察のとおり！　ゆえにッ……！」

　老人は大上段から鬼波濤を振りおろした。大おお振ぶりだ。あんなもの、当たるわけがない。でも、もし老人が本当に神の眼で先を見通すことができるのだとしたら、どうだろう。話は別かもしれない。りりぃがどう対応するのか。よけるのか。どっちへ身体を逃がすのか。見えていれば、そっちへ打ちこめばいい。

　りりぃが緋ノ魂滅で鬼おに波は濤とうを受け止めると、爆ばく音おんが轟とどろき渡わたって地面が陥かん没ぼつした。老人とりりぃはすり鉢ばち状の穴の底に落ちこむ恰かつ好こうになった。

「──我輩には見えるのです、師よォォォォ。もともとあなたを見て我輩は剣けんを覚えた。この身に染みつかせたあなたの何もかもが、今の我輩には手にとるようにわかる。あなたが我輩の中にいるようにさえ感じられる。これこそが愛だ。そうは思われぬか、師よォォォォォォ」

「思わないな」りりぃは緋ノ魂滅を撥はねあげて老人を押しのけた。「気色が悪い」

「相変わらずつめてえなあ、剣聖……！」老人はゲヘラゲヘラ笑いながらりりぃに打ちかかった。しかし、ずいぶん野や卑ひな笑い方だ。てゆうか、いきなり口調が変わったような。どうしちゃったのいったい。「──なんでわかってくれねえんだよ、この気持ち！　俺の真心！　恋こい心ごころ！　あんたのことが好きで好きでたまらねえって言ってんじゃねえか、口を酸すっぱくして、もう百年近くもよォォッ……！」

「迷めい惑わくだ！」りりぃは嵩かさにかかって攻せめてくる老人の鬼波濤をかろうじて緋ノ魂滅で打ちかえしている。「何度言ったらわかる！　あたしにつきまとうな……！」

「あんたこそ、何回言ったらわかるんだよ！　イ・ヤ・だ・ね……！　俺にとってはあんたがすべてなんだよ！　剣聖、俺にはあんたしかいねえ！　俺の人生はとっくにあんたに捧ささげちまってるんだよ……！」

「おまえの人生などいらない！　返してやるから消えろ！」

「じゃあ、さくっと殺やっちまってくれよ！　あんたに殺されるなら本望だよ！　わかってんだろう、それが俺の望みだってことは……！」

「知るかっ！」

「いいや、あんたは知ってるはずだ！　それなのに、なんで俺を殺さねえ!?　どうして息の根を止めてくれねえんだ!?　いいさ、答えてくれなくたって！　お見通しなんだよ……！」

「……もしかして」マリアローズはこわばっている顔面を手で揉もんだ。「バーニング・バラッドって、りりぃのストーカー……？」

「あんたはァァッ！」老人はもう老人に見えない。禿はげていて、残っている髪かみも真っ白だし、顔は皺しわだらけだけれど、あんなに元気で、マッチョで、声に張りがあって、刀一本であの剣聖を追いこんでしまうような老人がいてたまるか。「──俺を試してるんだ！　あんたは俺を鍛きたえてくれてる！　見込みがあると思ってくれてるんだろ!?　強くなれ、もっと強くなれ！　もっと激しく熱く強く……！　あんたの声が聞こえるんだよ、耳を澄すまさなくたって俺には聞こえるんだよ……！」

「幻げん聴ちようだ！」

「またまたまたァァッ！　わかってるよ、あんたはいつもそうだ！　口が裂さけても本音なんか言わねえんだよ！　心の声！　心の声だよ！　それを俺は聞いてるんだよ！　聞こえるんだよ、俺には！　聞こえるからわかるんだよ！　あんたの願いを、あんたの欲望を、俺が叶かなえて満たしてやるよ、あんたを楽しませてやるよ、そのためなら何だってするよ、限界だって超こえてみせるよ、

愛だよ、こんなの愛以外の何物でもねえよ、そうだろ……!?」

　鬼波濤が、まさしく波は濤とうのようにりりぃをのみこんでしまおうとしている。

　りりぃはひざまずいて頭上で両りよう腕うでを交差させた。「──愛など知らない……！」

　止めた──のか。

　りりぃの左手だけではなくて、右手からも、禍まが々まがしく反りかえった刃はがのびている。

　その両刀が鬼波濤を食い止めたのだ。

「小こ僧ぞう」りりぃはぞっとする声で宣告した。「そんなに死にたいのなら、殺してやる」

「望むところだ……！」バーニング・バラッドは後方宙返りを決めて両腕を広げた。またあの二刀流をやるつもりなのか。「──四し刀とう大だい魔ま王おう」

　違ちがう。バーニング・バラッドは両りよう腕うでを上下にゆらゆらと動かして、──これは幻まぼろしか。白昼夢なのか。その腕がだんだんと四本に見えてきた。何度確かめても、鬼波濤を持っている右腕が二本、無手の左腕が二本ある。そんな馬ば鹿かな。

「この手であんたをぶっ殺して、俺だけのものにしてやるよ、剣聖……！」

「やってみろ」

「お言葉に甘えて……！」バーニング・バラッドはりりぃに躍おどりかかって、二振りの鬼波濤と二本の左腕を繰りだした。「──愛！　愛！　愛！　愛！　愛！　愛！　愛！　愛！　愛！　愛ッ！　愛ッ！　愛ッ！　愛ッ！　愛ッ！　愛ッ！　愛ッ！　愛ッ！　アーイッ……！」

　りりぃはかわしているのか、弾はじいているのか、受け流しているのか、反はん撃げきしているのか。わからない。マリアローズには見えない。二人は激しく動きまわっている。その程度のことしか。土つち埃ぼこりがあがっている。尋じん常じようではない量

だ。ものすごい勢いだ。まるで旋せん風ぷうだ。いくつもの旋風がぶつかりあいながら大きくなったり小さくなったり消えたり生じたりしている。二人はその中にいる。それは間違いない。声が聞こえる。愛を叫さけぶバーニング・バラッドの声が。

　砂すな粒つぶや小石混じりの風が吹ふきつけてくる。強い風だ。目を開けていられない。それどころか、立っているのがつらい。雨こそ降っていないけれど、嵐あらしの真まっ只ただ中なかにいるかのようだ。雷かみなりみたいな音まで聞こえる。あれは二人が打ちあっている音か。

「もう……！」

　勝手にしてほしい。だけどさ、できれば遠くでやってくれない？　迷惑だし。おっかないし。誰だれもいないところで、二人きりで、思うぞんぶん、決着がつくまでやればよくない？　二人に声が届くのなら、そうお願いしたいところだけれど、どう考えても無理っぽい。天災みたいなものだよね。どうしようもないよ。過ぎ去るまで耐たえるしかない。顔にいろんなものがバッツバツ当たって痛かったりもするけど、とりあえず我が慢まんするしか。

　やまない雨はない。

　唐とう突とつに晴天が訪れた。

「うぅぅ、いっつつつつ……」マリアローズは何度もまばたきをして、目に入った塵ごみを涙なみだで洗い流した。

　バーニング・バラッドとりりぃは十五メーテルほどの距きょ離りをあけて対たい峙じしている。

　依い然ぜんとして、四刀と両刀だ。切りとられた時間の中に閉じこめられているかのように、二人は微び動どうだにしない。ただ、バーニング・バラッドが着ていた白と黒の小こ袖そでは原形をとどめておらず、ぼろぼろの腰こし巻まきと化している。それだけじゃない。不気味なほど隆りゅう起きして筋張っているバーニング・バラッドの身体からだは傷だらけだ。神から奪うばったという虹にじ色いろの眼は、だが、むしろ輝かがやきを増している。

「師よ、我わが輩はいは確信しましたぞ。長年の研けん鑽さん鍊れん磨まは無む駄だではなかった！　我輩が手を伸のばせば届く場所

に、あなたはいる……！」

「勘かん違ちがいだ」

「否いなァァァァァァァァァァァアアアアア」バーニング・バラッドは満面に凄せい然ぜんたる笑みをたたえた。その直後だった。あわせて四本だった腕が倍の八本になった。「──八や刀とう超ちよう魔ま神じん」

「もう一度言う。勘違いだ」気のせいだろうか。りりぃの声音は今までよりやわらかかった。ひょっとすると、紅の装そう甲こうの奥で、彼女の顔は微笑ほほえんでいるかもしれない。「だが、よくもそこまで積みあげた。それ以上、進むことはできないとしても、おまえはよくやったほうだ。だから、最後に見せてやる」

「何を見せていただけるのやら……！」バーニング・バラッドは駆かけだした。

　りりぃも無言で疾しつ走そうした。速い。

　これまでとは違う。りりぃの全身から、おそらく装甲の隙すき間まから、星ほし屑くずのようにきらめく無数の粒りゆう子しが流れだしている。

　二人がすれ違うと、バーニング・バラッドの腕が半分の四本になっていた。

　斬きり飛ばされた左腕が地面に落ちて、転がった。

　バーニング・バラッドが振ふり返るよりも早く、りりぃは彼の右腕を鬼おに波は濤とうごと細切れにしていた。

「おお……」バーニング・バラッドは右みぎ肩かたを、そして左肩を見た。「見えておっても反応できぬとは。手も足も──出ぬ……！」

　そんなことを言いながら、りりぃを蹴け飛とばそうとするあたりは、やはり並なみ大たい抵ていではない。

　相手が悪かったのだ。あまりにも悪すぎた。そういうことなのだろう。

　りりぃはバーニング・バラッドの右みぎ脚あしをたやすくぶった斬って、それから、━両手の緋ノ魂滅を引っこめてしまった。「力とは何か。おまえはわかっていない」

「……ただひたすら、師よ、あなたのために力を、力だけを求めてここに至った、それが我輩の生しよう涯がいであったのですぞ……？」

「それでも、間違いは間違いだ」りりぃは二メーテルを超こえる身体を素す早ばやく、器用に、折り畳たたむようにしてバーニング・バラッドの懐ふところに入りこみ、その腹部に右手を突つきつけた。正確に言えば、さっきまでそれは右手だった。

　りりぃの右腕は、その先せん端たん部、つまり右手の部分から裂さけるように割れ、剝むけるようにめくれて、中から銀色の筒つつのようなものが顔を出していた。

　あの筒の奥に何かあるのか。発光している。少し青みがかった光だ。甲かん高だかい音がする。

「おまえが思うより、力は遥はるかに無む慈じ悲ひだ」

「し━」バーニング・バラッドは何を言おうとしたのか。聞きとれなかった。言葉になる前に、甲高い音が耐えがたいほどまで高まって、光が広がった。太陽さえ焦こがしそうな光の束がバーニング・バラッドを貫つらぬき、どこまでも、どこまでものびて、いつしか消えた。土手っ腹に大穴があいたどころの騒さわぎではない。バーニング・バラッドの身体は胴どう体たいの大半が消失して、鎖さ骨こつから上と、右脚のない下半身だけが残り、二人の戦いで荒あらされまくった大地にそれぞれ倒たおれ伏ふして、もう動かなかった。

　りりぃの右みぎ腕うでが白はく煙えんをあげている。

　剣けん聖せいの弟で子しを自じ称しようする男は、本人の望みどおり師と仰あおぐ剣聖によって命を絶たれた。

「あれは知らんな」とトマトクンが呟つぶやいた。

　何のことか尋たずねたい気もするけれど、もっと他に考えないといけないことがあるような気もする。てゆうか、何がどうしてこうなったんだっけ。

「ジュジ」りりぃは弟子から目を離はなし、南に向きなおった。
「きさま、何を企たくらんでいる」

弩級戦車ドレツドタンク〝アーノルディ〟甲板上

「──そんな、企んでるなんて、人聞きの悪い」

　弩級戦車ドレツドタンク〝アーノルディ〟の甲かん板ぱんには彼しかいない。皇こう帝ていも大だい元げん帥すいも車橋ブリツジにいる。

　無人の甲板には灰色の猫ねこが一匹ぴきいるだけだ。

　猫は皇帝の玉座に腰こしを下ろして、尻尾しつぽをぴんと立てている。

「姉さんは知っているはずでしょう。ぼくの願いを。ぼくは変わっていない。あのころから何も。変わったのは姉さん、あなたですよ。それにしても──」猫は髭ひげを震ふるわせた。「なかなかいい死にっぷりでしたよ、バーニング・バラッド。あんなふうに派手に殺してもらえて、さぞかし満足でしょうね。まあ、姉さんは甘いから。そこは変わらないんだな。ぼくにはつめたいのに。たった一人の弟なんだから、もっとやさしくしてくれてもいいと思うんだけどな」

南門跡

　──そっか。

　りりぃはルイ・カタルシス──ジュジのお姉さんで、そのジュジが帝てい国こく軍の動きに絡からんでいるみたいで、バーニング・バラッドは帝国軍に荷か担たんしてたってことだろうし、りりぃがそれをやっつけたってことはつまり、弟の前に姉が立ちはだかったってこと……？

　南に展開している帝国軍のほうから地じ響ひびきのような音が聞こえてきた。戦車から立ちのぼる黒こく煙えんの量が半はん端ぱじゃない。

　騎き馬ばたちが帝国旗を高々と振りあげて、鬨ときの声こえをあげた。

　隊列の中央に位置している、遠目にもひときわ大きな、大きすぎる、巨きよ大だいな軍ぐん艦かんのような、小山のごとき戦車が掲かかげているきらびやかな旗には、翼つばさと蛇へびとラフレシアを意い匠しよう化した紋もん章しようが描えがかれている。

　あれは皇帝旗だ。

「き、き、き、きよるでえ！　きてまいよるでえ……！」

「サフィニア！　ベティ子！」トモヨが鋭するどく叫さけんだ。「絶対ババアが仕し掛かけてくるぞ！　壁かべを作る！　合体魔術アマルガム、やれるな……!?」

「……はい……！」「──あたしがリードを！　あんたたち二人とも大おお雑ざつ把ぱだから！」

「誰だれが大雑把だ、ああ!?　てめえ、トモヨ様のテクニシャンっぷりを知らねえのかよ！　身体からだに教えこんでやったっていいんだぞ!?」

「御ご免めん被こうむるわ！　始めるわよ……！」

　魔術士三人組は何かやるつもりらしい。マチルダが攻こう撃げきしてくることを予測して、防ごうとしているのか。それなら安心、もう大だい丈じよう夫ぶ──というわけにはゆかないだろう。あの戦車は馬に曳ひかれているわけでもないのに動くのか、走るのか。よしんば戦車が動かなくても、騎馬は押しよせてくるはずだ。ざっと見た感じ、多すぎて正直よくわからないけれど、数百という単位じゃない。数千でもおそらくない。一万とか二万とか。それ以上かもしれない。あんなのどうやって止めるんだよ。でも、万は軽くいけるとかほざいていたバーニング・バラッドを、結局は軽々と打ち負かしてしまったりりぃがこっち側についてくれるのなら──、

「って、へっ……!?」

　りりぃが片かた膝ひざをついている。なんで？　どうして？

「むう！」トマトクンが走りだした。サフィニアが「あっ……」と手をのばそうとしてベティに叱しかられた。「──サフィニア！」
「……ご、ごめんなさいっ……！」

　てゆうか、僕、なんとなくトマトを追いかけちゃってるけど、いいの？　トマトはりりぃに駆かけよろうとしてるし、てことは敵に近づくことになるんだけど、危なくない？　そうはいっても、ここまできたら引っこみがつかない。行くしかない。トマトクンはりりぃを助け起こそうとして、でも、差しだした手は振ふり払はらわれた。

「何の真ま似ねだ。余計なことをするな」

「余計だったか。そいつはすまなかったな」

「……素す直なおに謝るんじゃない。調子が狂くるう」

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

「や、あのね、そんなのんびり話してるようなアレじゃないっていうか──どうしたの？」

　りりぃはマリアローズのほうにちらりと顔面を向けた。右腕の筒つつ部分からはまだおびただしい量の白煙が噴ふきだしつづけている。「マリアローズ。久しぶりだな」

「え、あ──と、その、うん。久しぶり。てゆうかそれはまあ、いいんだけど……」

「どうやら出力の調整をしくじったようだ」

「しゅつりょく……？」

「簡単に言うと、あたしはしばらくの間、思うように動けない」

「それってまずいよね!?　けっこうやばくない!?　かなりやばいってば……！」

「うむ。運ぶか」

「あたしにさわったら殺す」

「動けないんじゃあ、殺せんだろう」

「あとで殺す」

「わかった。そうしろ。とりあえず運ぶぞ」トマトクンはりりぃを抱だきあげた。りりぃは無む抵てい抗こうで、ちょっと意外だった。「……ずいぶん重いな、お前」

「文句があるなら下ろせ！」

「まあ、なんとかなるか。戻もどるぞ、マリア」

「人の話を聞け！」

　頭のてっぺんから足の先まで隙すき間まなく紅の装そう甲こうに覆おおわれているりりぃが駄だ々だをこねている様子は、なんだかおもしろくて、ちょっぴりかわいい。こんな状じよう況きようでなければそんなふうに思えるかもしれないけれど、今はとても無理だ。重いとか言っていたわりに、トマトは速いし。全力疾しつ走そうしないとついてゆけない。

「は、早はよう……！」カタリが手招きしている。「いしょいで！」ユリカも叫んでいる。ルーシーも何か言っている。ピンパーネルも、きゅーもいる。ハニーも。魔術士三人組はＺＯＯのみんなよりも前に出ている。南門跡あとから十メーテルほども離はなれているだろうか。ベティが中央、サフィニアが右、トモヨが左に位置して、三人はもう呪じゆ文もんを詠えい唱しようしはじめているようだ。秩ちつ序じよの番人はまだ後退していない。南門跡の脇わきのほうにいるファニー・フランクやジャン・スタンバックらＥＦＡはどうするつもりなのだろう。他人の心配をしている余よ裕ゆうはない。

　りりぃを抱かかえたトマトクンが、つづいてマリアローズが、ベティとサフィニアの間を通り抜ぬけた。サフィニア、怒おこってないかな。魔術に集中していて、さすがにそれどころではないか。

「一斉唱ユニゾン」ベティが合図すると、三人が声をそろえてまったく同じ呪文を詠唱した。

　elks-vanak-psyks-nerik-anq-niblhem-anq-darmatik-belktl-

ibrahelm-orca-sevralm-anq-biltlm-velhemna-maha-krashhelm-elktl-lelmt-un-san-ble

　マリアローズは足を止めて振り返った。振り向かずにはいられなかった。魔術士三人組のすぐ前だ。地面から、何かこう、透とう明めいの、かといって硝子ガラスとは違ちがう、そこまでかちっとしていない、ゼリーみたいな、でも、ぷるぷるしているわけではなくて、少なくともある程度の強度はありそうな──壁かべ、そう、幅はば五十メーテルくらいはありそうな壁がせりあがってくる。みるみるうちに、その高さは五メーテル、十メーテル、最終的には二十メーテルほどにも達した。壁はまっすぐじゃない、湾わん曲きよくしていて、その両りよう端たんはエルデンの首都城じよう壁へきに接している。

「う、わ……」とマリアローズが間の抜けた声をもらすや否いなや、迫せまりくる帝てい国こく軍の上空で何かが白く光った。

　一つ、二つ──三つ。

　光の点は大きくなってゆく。急速に。近づいてきているのだ。衝しよう突とつした。壁だ。ぶつかってバアアァッと拡散した。壁が揺ゆらいだ。でも、大だい丈じよう夫ぶだ。壁は健在だ。今のところは。まだくる。光。今度は四つ。直ちよく撃げきした瞬しゆん間かん、水面に石を落としたときのように透明な壁がへこんだ。穴があくまではいかなかった。なんとか衝しよう撃げきを受け止めることができたらしい。

「こっからだぞ！　ベティ子、サフィニア、気合い入れろ……！」

「わかってるわよ、あんたに言われなくたって……！」「──……っ……！」

　次は光が五つ。壁全体が大きく震ふるえて、トモヨが、ベティが、サフィニアが、危あやうく尻しり餅もちをつきそうになった。三人は持てる力をすべて注ぎこんで壁を維い持じしようとしているのだ。壁がなければ、あの光はエルデンの首都城壁に──というかたぶん、南門跡に、マリアローズたちに襲おそいかかっている。あんなものを食らったら、きっとひとたまりもない。みんな焼き尽つくされてしまう。そんな光がまたくる。六つ。さらに増えた。耐たえられるのか。だめだ。光が壁にぶつかって、六つのへこみができて、そのうちの一つが──壁を貫かん通つうする。

「逃にげっ──」と誰だれかが叫さけんだ。

　さいわい、と言うべきというか、そう言うしかないだろう。壁を貫つらぬいた光は、南門跡の東、首都城壁にぶちあたって、直径三メーテルほどのきれいな穴をぶちあけた。透明の壁はもう修復しつつあるけれど、大おお雑ざつ把ぱに見積もって、光が六つきたら一つは防ぎきれずに通してしまう。そう考えたほうがよさそうだ。じゃあ、七つきたら……？

　光のことにかまけてもいられない。帝国軍が前進を開始した。万単位の騎き馬ばが、少し遅おくれて数百かそれ以上の戦車が押しよせてくる。

「秩序の番人！　総員、後退せよ……！」ついにヨハン・サンライズが命令を下した。

　番人たちはただちに退きはじめたが、トマトクンはりりぃを抱えたまま動かない。

「わ、わ、わしらはどないするん……!?」

「まだだ」トマトクンは顎あごをしゃくってサフィニアを示した。「あいつを置いて、俺たちだけ逃げるわけにはいかんからな」

「そ、そうですよねーっ!?」ルーシーは顔中に汗あせをかいている。やせ我が慢まんをしているのだ。

「さっすがトマトクン、わしらの園長マスター、我が意を得たりやっ！」カタリは真っ赤な魚顔で拳こぶしを振ふりあげた。「ぐ、ぐゎんばれッ、サフィニア！　がんばってくれんと、わしら死ぬッ！」

「大丈夫よ」ユリカは力強くうなずいた。「わたしたちはただ、仲間を信じればいい。いちゅだって、しょうしてきたじゃない」

「はイ」

「くう」

「だめでも、死んじゃうだけだもんね。ま、それならそれで」

「……あっさりしてるよね。ハニー、きみってわりと」

「んー。けっこうやばい目に遭あってきてるし？　覚かく悟ごはできてるのかも。それに──」ハニーは笑った。火傷やけど隠かくしのマスクがちっとも痛々しく見えない。すてきな笑え顔がおだった。「一人じゃないし。みんないるから、いいかなって」

「わ、私もッ！」ファニー・フランクが腰こしから剣けんを抜いて振りあげた。「退かんぞォッ！　エルデンのためにッ！　命いのち懸がけで戦ってくれている者たちがいるのだッ！　それであるのにこの私がッ！　エルデン自由軍総そう帥すいたる私が退くわけにはいかんのだッ！　一歩たりともッ！　どうだね、軍師どのッ！　私は間ま違ちがっていなかろうッ……!?」

「好きにするがいい」ジャン・スタンバックはつれない返事をして、口くち髭ひげをいじりながら静観の構えだ。まったく動どう揺ようしていないように見える。いい度胸だ。

　この向こう見ずな勇気や、僕たちの信しん頼らいを、思いを、はっきりと、ちゃんとした力に変えて、サフィニアを後押しできればいいんだけど。現実には見守ることしかできないから、もどかしい。恐おそろしくもある。これっぽっちも怖こわくないと言ったら嘘うそになる。何もできないのはつらい。光がくる。くそ。そうきたか。七つじゃない。八つも。マチルダ。マチルダめ。なんてことするんだよ。超最低ＳＵＣＫ。超最低ＳＵＣＫ。超最低ＳＵＣＫ。こうやって愚ぐにもつかない恨うらみ言ごと未満の悪態を頭の中で並べることしかできないのは、本当にきつい。

　目をつぶってしまいそうになって、必死に我慢した。

　光が透明の壁を揺るがし、八つのへこみを作って、そのうちの二つが貫通した。さっきは五つまで、今度は六つまで防いだ。サフィニアたちは最善を尽くした。それでも破られた。壁を突とつ破ぱした光は、しかし、二つとも南門跡からそれて、首都城壁に穴を穿うがっただけだった。そうか。サフィニアたちは南門跡の前にいる。たぶん、彼女たちの前面が一番、防ぼう御ぎょ力が高くなっているのだろう。もしそのとおりだとしたら、下手に動かないほうがいい。サフィニアたちの後ろにいれば安全だ──とは、やっぱり言いきれないか。

　そんなに甘くない。

　何しろ、相手は閃せん光こうの魔ま女じょだ。

「━上だ……！」トマトクンが吼ほえた。

「はあっ……!?」振り仰あおぐと、真上ではないけれど、ほとんど真上に近い場所に黒い点が浮うかんでいた。小さいからよく見えない。でも、人だ。飛んでいる。魔女か。

　光だ。降ってくる。十本、いや、二十本近くの光の槍やりが。
「冗じよう談だんじゃ……！」ベティが両手を振りあげると、透とう明めいの壁の上じよう端たんがこっちに向かってせり出してきた。とっさに覆おおいを作って光の槍を防ぐつもりか。そんなことができるのか。間に合うのか。ぎりぎり間に合った。

　二十本近くの光の槍が壁に突つき刺さささる。揺れる。波打つようにへこむ。ああ。だめだ。即そく席せきだから強度が足りなかったのか。突き破られる。光の槍が。何本だろう。約半分が壁かべに阻はばまれて、残りの半分くらいか。十本ほどの光の槍が降りそそいでくる。

「よけろ……！」とトマトクンが叫んだような気がする。もちろん、言われなくたってそうするしかない。

　よく見てかわす。そんなの無理だ。なんとなく左はやばそうだから、右方向に身を投げだした。至近距きよ離りでザシュッというような聞いたことのない音がして、あ、死んだかも、と一いつ瞬しゅん思った。死んだと思えるわけだから、生きている。心臓がどくどくだくだくいっていた。顔を上げてあたりを見まわすと、そこらじゅうに直径一メーテルほどの穴がたくさんあいている。奇き跡せきなのか。それとも、全員がうまくやったのか。誰だれにも当たらなかったようだ。

「よかった……」

　胸を撫なでおろすのは、でも、まだ早い。早いとか遅おそいとか、そういう問題でもないのかもしれない。少なくとも、当分の間は安心できるような時間は訪おとずれそうにない。

　透明の壁は即そく座ざに穴をふさいで、もはや壁というよりも丸ド屋ー根ムみたいな様相を呈ていしている。これなら上からの攻こう撃げきもある程度は防御できるだろう。あくまで、ある程度だ。防ぎきることはおそらくできない。それじゃあ意味がない、なんて泣き言を言ったりしない。また光の槍が降りしきるような事態に

なったら、よければいいんでしょ？　いいよ？　よけるよ？　余よ裕ゆうでよけちゃうし。そんな強がりもあえなく打ち砕くだかれてしまった。

　魔女が、マチルダが、降下してくる。

　サフィニアの髪かみの毛とそっくりだ。彼女は銀色の髪をなびかせて、白いドレスを華きや奢しやな身体からだにまとっている。あれが、閃光の魔女。

「……子供じゃないか」

　どう見たって十歳かそこらだ。

　でも、間違いない。あれは──あれがマチルダだ。まあ、空を飛んでしまっている時点でおかしいし、そうでなくても異様な存在感を放っている。百億の星を宿しているかのようなあの瞳ひとみの輝かがやきだけで、常人ではないと納得せざるをえない。

　マチルダは透明の壁に手をふれた。

「わたくしの愛らしい妹たちソロレル。こんなちっぽけな玩具おもちゃでこのわたくしが喜ぶと思っているのだとしたら、とても残念だわ」

　や、──残念なのはこっちだから。本当に、とても、とっても、ものすごく、泣きたいほどに残念きわまりない。

「jus-ui-moul'e-vallar.」

　透明の壁が溶とけてゆく。儚はかなく、夢のように、幻まぼろしのように、さらさらと崩くずれ、消えてゆく。

「──解除ハルト……！」ベティが尖とがった声をあげると、崩ほう壊かい中の壁が一瞬で雲うん散さん霧む消しようした。トモヨが、そしてサフィニアが、ベティが、マチルダを見上げて、きっと魔ま術じゅつで迎げい撃げきしようとしたのだと思う。三人が遅かったわけではないはずだ。そうではなくて、マチルダが速すぎた。

「Ａｍｉｄ澪」

　マチルダを中心とする半径四、五メーテルの空間に、無色透明の

小さな玉が出現した。何個あるのか。数えきれない。ものすごい数だ。

「勾マガ玉タマ……！」トモヨが叫さけんだ。勾玉。あの無色透明の玉のことか。三人はほとんど動かなかった。動けなかったのだろう。動いたって無む駄だだ。勾玉が三人に襲おそいかかる。あれだけの数だ。よけられっこない。いくつもの勾玉が三人の身体をかすめた。貫つらぬいた。三人はあっという間に血まみれになった。
「──くっ……！」「ふぅっ……！」「っ……！」

「サフィニア……！」マリアローズはサフィニアに駆かけよりたかった。それなのに、足に力が入らない。──マチルダ。

「まだまだね。時間が足らなかったのかしら。でも、時がきてしまったから、こればかりはしょうがないのだわ。わたくしが種をまいてさしあげたお花さんたち。どうせならわたくしの手で摘つみとってあげる」

　力の差がありすぎる。格が違ちがう。圧あつ倒とう的だ。勝てるわけがない。それ以前の問題だ。ベティ、トモヨ、サフィニア。彼女たちのような傑けつ出しゅつした魔術士が子供扱あつかいされている。魔術士でもないマリアローズは挑いどむことすらできない。わめいても、涙なみだながらに頼たのんでも、相手にしてさえくれないだろう。

「el-pastra.」

　マチルダの頭上で光が渦うず巻まきはじめた。第二の太陽と見まごうばかりのまばゆさだ。

「きゅう……!?」突とつ然ぜん、きゅーが素すっ頓とん狂きような声をあげた。

　マリアローズは目を瞠みはった。「なっ──」

　あれは何だ。風なのか。でも、目に見える。あの風は青白く輝いている。風というよりも、青白い光の粒りゅう子しの集合体だ。どこからきたのか。わからないけれど、マチルダはそれにのまれて押し流された。「──モーグ……!?」

「あいつは……」とトマトクンが呟つぶやいた。

　第二の太陽はすでに消失している。マチルダは上じよう昇しようし、加速して光の粒子から逃のがれようとしたが、そこに横合いから新たな光の粒子の集合体が躍おどりかかった。あの光の粒子はマチルダを傷つけはしないようだ。でも、それこそ風みたいに圧力を加えている。その勢いは決して弱くない。マチルダですら容易にはあらがえないのだ。二筋の光の集合体が、交こう錯さくしながらマチルダを翻ほん弄ろうしている。

「きゅう！　くう！　きゅう……！」きゅーはだいぶ興奮しているみたいだ。毛が逆立って、ぼんやりと発光している。

「モーグ……！」マチルダが叫んだ。「いったい何のつもりなのかしら……!?　このわたくしの邪じや魔まをして、ただですむとお思い……!?」

（おぬしこそ何のつもりなのだ、マチルダ）

「……え？」マリアローズは耳を押さえた。「これ……何？
声？　でも、なんか、頭の中で響ひびいて──」

（その巨きよ大だいすぎる力で、戯たわぶれに世を乱すのがおぬしの魔道か）

「わたくしが何を考え何をしようとわたくしの自由なのだわ！　そもそも、肉体を捨てた亡ぼう霊れい同然のあなたに、魔道を語る資格があるとでも……!?」

（いまだ肉体にしがみつき見せかけの若さに執しゆう着ちやくしておるおぬしに、我が魔道の深遠が理解しうるとは端はなから思うておらぬ）

「見せかけではなく、わたくしは実際、若いのよ……！」

（お師様、無駄です）

　別の声が聞こえてきた。といっても、やはり耳ではなくて、この声は頭の内側に直接届いている。

（魔術士が百人いれば魔道は百通り。進めば進むほど互たがいの魔道は交わるどころか遠ざかるばかり。彼女のごとき存在とお師様がわかりあうことなどできようはずがありません）

（しかしエヴァンジェリン、我が娘むすめよ、おまえと我とは同じ魔道を歩んでおるではないか）

（わたしはお師様に最後までお供いたします。わたしとお師様は特別なのです）

（おお、エヴァンジェリン）

（お師様）

「──わたくしを差し置いて、何をのろけているのかしら!?　気色悪いったら……！」

　マチルダが急降下して光の集合体から抜ぬけだした。二筋の光の集合体はすかさずマチルダを追いかけようとした。

「vas-ra.」

　マチルダの両手から真っ白い強きよう烈れつな光が放たれると、青白い光の集合体は反転してたちまちのうちに別の形をとった。まるで空に硝子ガラスの粉か何かで描えがかれた絵のようだ。車輪付きの椅い子すに座っている痩やせた女に、杖つえを持った長衣姿の老人が寄り添そっている。

「きゅう……！」

（キューベルアドラス）

　女がこっちに顔を向けた。左目に眼帯をつけているのか。てゆうか──、

「へ？　知りあい……？」

「くう。きゅう。くう！」

「うむ」トマトクンは軽くうなずいた。「あいつらはきゅーの友だちだ」

「友だち……」

「〝超賢者メガセイジ〟モーグ……」ベティが呻うめくように言った。身体からだのあちこちから出血している。顔色も悪い。そうと

うつらそうだ。

「……あれが……」サフィニアもベティに負けず劣おとらず満まん身しん創そう痍いだけれど、食い入るようにモーグたちを凝ぎよう視ししている。痛みよりも好こう奇き心しんのほうが勝っているのかもしれない。

「くそったれ！」トモヨは地べたに座りこんで、あぐらをかいている。「まったく別次元じゃねえか、化物どもめ……！」

（いずれにせよ）

　老人──超賢者モーグが杖の先をマチルダに突つきつけた。

（我と我が娘の友を傷つけることも悲しませることも、断じて許さぬぞ、マチルダ）

「そんな低てい俗ぞくきわまりない理由で……！」

　マチルダはまた魔術を使おうとしている。なぜ途と中ちゆうでやめたのか。

「じゃあ、さ」

　男はいつからそこにいたのだろう。忽こつ然ぜんとマチルダの背後に現れたとしか思えない。

　水玉模様のスカーフを首に巻いていて、上はぴったり、下はゆったりした服を着ている。綿わた菓が子しみたいにふわふわした金きん髪ぱつからのぞいている雄お羊ひつじのそれのような角が、その名の由来に違いない。

「きみの理由を教えてよ、マチルダ」

　男は背後からマチルダに斬きりつけようとした。素手じゃない。魔術士のくせに、それも男はかなり有名な魔術士のはずなのに、二本の分厚い両りよう刃ばの剣けん身しんが長い柄えを挟はさみこんでいるという、ちょっと変わった形状の武器を持っている。マチルダは、でも、すんでのところで気配を察したのか何なのか、とにかく男に気づいて、振ふり向くなり上じよう昇しようした。

「──〝踊り羊ダンシングシープ〟……！　いったい何なのかしら、

あなたまで……！」

「だって、放っておいたら、きみはベティを殺しちゃうだろう？」

「ベティはわたくしのものよ！　どうしようとわたくしの勝手なのだわ！　だいたい、なぜここであの子の名前が出てくるのかしら！」

「クルオは今、ベティのことが気に入ってるんだよ」

「聞き捨てならないわね、へなちょこ羊！　あなたみたいな年中盛さかりがついている卑ひ猥わいなスケコマシにあの子を渡わたしてたまるものですか！」

「だから、クルオもベティも殺すっていうんだろう？」

「あたりまえでしょう！」

「きみのそういうところが、クルオは大だいっ嫌きらいなんだよ。クルオはもちろん、きみなんかにやられたりしないけどさ。きみがそうやって有望な女の子を次から次へと殺していったら、そのうちクルオの遊び相手がいなくなっちゃうじゃないか」

「この世にはわたくしが！　ただわたくしだけがいればいいのよ！　それで世界は成立するのだわ……！」

（おお。知ってはおったが、相も変わらずなんと身勝手な。マチルダ、この世界はおぬしだけのものではない、我と我が娘のものでもあるのだぞ）

（お師様、やはりこの女は滅ほろぼすべきです。わたしたちのためにも）

「……なんか、あの人たち、めちゃくちゃなこと言ってるんですけど……てゆうか、もう人とか思いたくないっていうか思えないんですけど……」

「せ、せやけど好都合やでえっ……！」カタリが南のほうを指さした。「──ちゅうか、マチルダがあの御ご仁じんらにかかずらっとる間に、ええかげんわしらも逃にげな……！」

「サしやフィニア！　動ける……⁉」

「え……あ……」振り返った拍ひよう子しにトマトクンが目に入ったのだろう。サフィニアはすぐにうつむいてしまった。「……はい。まあ、なんとか……」

　かわいそうだけど、動けないりりぃを下ろせとも言えないし、それどころじゃないし。

　何しろ帝てい国こく軍が、その先せん鋒ぽうである騎き馬ばの部隊が、もう百メーテルかそこらまで迫せまっている。

「よ、よ、よ、よォォォォォし、みみみみ皆みなの衆ッ！　ここは一つ戦略的後退だッ……！」

　でも、なんでファニー・フランクに号令かけられなきゃならないんだよ。文句を言う余よ裕ゆうなんかない。トマトクンと目があった。トマトクンは「いったん退くぞ！」と叫さけんで、みんなが逃げるまではその場にとどまる構えだ。「行くわよ！」ベティがトモヨを助け起こそうとした。トモヨはベティの手を振り払はらって立ちあがった。「生意気なんだよ、処女が……！」サフィニアは下を向いて駆かけてくる。「うゎうゎうゎ……！」ルーシーは目を白黒させているけれど、サフィニアを待つつもりらしい。カタリとユリカはさすがにルーシーほど慌あわててはいない。かといって、落ちついているわけでもなさそうだ。当然だ。今まで危機的な状じよう況きようはいろいろあったけれど、万単位の敵を向こうに回したことはない。すごい音だ。地面が震ふるえている。腹まで響ひびく。「──きゅーは先に行って！　ピンプも……！」「きゅう！」「はイ！」ハニーを背負ったきゅーとピンパーネルが南門跡あとへ向かった。ファニー・フランクたちの姿はもうない。サフィニアがきた。ベティとトモヨも。「──行こう、トマト！」

　馬ば蹄ていやら戦車やらの音にかき消されて、トマトクンの返事はほとんど聞こえなかった。人間の領域をとっくに超こえまくっている魔ま術じゆつ士たちは上空でやりあっているのか。わからない。確かく認にんするゆとりはない。南門跡はもうすぐだ。「振り向いたらあかん！」そんなカタリの声が聞こえた。そのとおりかもしれない。振り向いたらたぶん、動けなくなってしまう。でも、振り向きたくて仕方ない。この目で見ないと、はっきりしたことはわからない。わからないのは怖こわい。南門跡に達した。もう我が慢まんできない。マリアローズは振り向いた。「──近っ……」

　ああダメかも。本当に近い。十五メーテルとかその程度だ。足が

止まりかけた。荒あら波なみみたいな騎馬の群れに見入ってしまいそうになった。トマトクンが何か怒ど鳴なった。そうだ。走らないと。轢ひかれる。死ぬ。死んでたまるか。大だい丈じよう夫ぶ──ではないと思うけれど、相手も首都城じよう壁へきに突っこむつもりはないだろうし、南門跡を通って市内に突とつ入にゆうするとなったら、それなりにちゃんと列を作らないといけない。そのために、騎馬は速度をゆるめている。そうでなかったら、とっくに追いつかれているはずだ。逃げきれる──のかな。ともあれ、まずは走ることだ。ありったけの力で駆けることだ。口から「いいいいいいいいいぃぃぃぃぃぃぃ」というような声が勝手にもれた。間もなく南門跡を抜ぬける。

　抜けた。

「俺がここで食い止める……！」トマトクンの声だ。

　足を止めずに振り返ると、トマトクンは左ひだり腕うででりりぃを抱かかえたまま、右手で大たい剣けんを抜いていた。こっちに背を向けている。最先頭の騎馬は目と鼻の先に迫っていた。敵は楔くさび形がたの隊列でエルデンになだれこもうとしている。「あたしも少しは動ける！」とりりぃが叫んだ。トマトクンはかまわず大剣を振るおうとした。「──む……⁉」

「鳴り響け断だん末まつ魔まの叫び……！」

　ああ──、

「デスクライッ！　ソォォォォォォォォォォ────────────ドッ……！」

　馬ば鹿かだ。馬鹿がきた。上から。首都城壁の上にでもいたのか。タイミングを計っていたのか。本当に馬鹿だ。どうしようもなく救いがたい馬鹿は、地上の獲え物ものを狙ねらう猛もう禽きんみたいに急降下してきて、その右手とほとんど同化している断末デスクラ魔イの剣・ソードを、幾いく重えもの円を描えがくように振りまわした。剣とはいうものの、その毒々しい深紅色クリムゾンの剣身は常態で二メーテル以上、無数の節に分かれていて、自在に折れ曲がり伸しん縮しゆくする。〝死霊女王スペクトラクイーン〟レディ・麟りん霊れいが生みだしたという殺さつ戮りくのための秘宝が描く円の一つ一つは、血と肉と臓物に彩いろどられた赤黒い花弁だ。虐殺人形カーネイジドールは花弁を重ねあわせて戦場におぞま

しい花を咲さかせた。そんなふうに言葉を飾かざりたくなるほど、あの馬鹿のやり口は堂に入っていて鮮あざやかだった。でも、結果は悲ひ惨さんと言うしかない。相手が敵でなければ同情してやりたくなる。エルデンに足を踏ふみ入れた騎馬は次々と撫なで斬ぎりにされた。人も馬も旗もその他の装備も関係ない。すべてだ。馬鹿は何もかもを区別なく、容よう赦しゃなく輪切りにした。血肉の花を咲かせつづけた。それでいて、黒衣をまとい、何のつもりか黒い仮面をつけている馬鹿は一いつ滴てきの返り血も浴びていない。馬鹿だからかもしれない。きっとそうだ。

「フッ……」

　血肉の花はむなしく散って地べたに堆たい積せきする人馬の残ざん骸がいとなった。

　その直ただ中なかに漆しつ黒こくの徒あだ花ばなが一輪だけ咲いている。

「ここから先は通さないヨ。このボクが──謎なぞの救世主〝黒い薔薇ダークローズ〟がいるかぎりはネ」

　騎馬の侵しん入にゆうが止まっていた。謎の救世主とやらは途と方ほうもない馬鹿だけれど、相手はわざわざ死ぬために突つっこんでくるほど馬鹿ではないということだろう。

　トマトクンは振ふりおろす先を失った大剣を見て、それから馬鹿に目をやった。「アジアン、お前……」

　馬鹿は振り向かなかった。「それはいったい誰だれのことかな？」

「誰って」

「聞こえなかったのかい？　ボクは黒い薔薇ダークローズ。エルデンの危機を救うべく現れた、正体不明の救世主なのサ」

「まあ、それならそれでもいいが」

「……なんだか、ごめんなさい」謝らずにいられないベティの気持ちも、なんとなくわからなくもない。

「ということはァァ……？」ファニー・フランクが進みでてきて、

目を見開いた。てゆうか、まだいたんだ。「チミはあれかね？　憚はばかりながら私もエルデンの救世主を自負しているわけだから、この私の同志ということになるわけだねェェ……？」

「マリア」馬鹿は馬鹿を無視して、こっちに半分だけ顔を向けた。「ボクは元気だヨ」

　あのとき、さよならのつもりで、僕は言ったんだ。

　べつに、めずらしい別れの挨あい拶さつじゃないと思う。

　──元気でね。

　むしろ、ありふれている。

　マリアローズは下を向いて唇くちびるを嚙かんだ。「……見ればわかるよ。それくらい」

「元気だヨ。ボクは、キミがいてくれるかぎりネ。心配は無用サ」

「心配なんて、してないし。するわけないし──」

「だけどネ」

「へこたれへんなあ……」とカタリが呆あきれたように呟つぶやいた。

　ほんとだよ。

　なんでめげないんだよ。どうしてあきらめてくれないんだよ。もう限界なんだよ。認めちゃいそうなんだよ。ぎりぎりなんだよ。認めたくない。もっと苦しくなるから。もっともっと怖こわくなるから。今の時点で恵めぐまれすぎてるしさ。仲間がいて、友だちがいて。十分怖いんだよ。怖すぎるくらい。なくしたときのことを、つい考えてしまう。考えなくてもいいように、そんなことが起こらないように、結局のところは祈いのることくらいしかできなくてさ。何があるかなんて、わからないから。帝てい国こく軍が攻せめてくるなんて、想像もしなかったし。失うくらいなら、死んでしまいたい。先に消えてしまいたい。あまりにも、恐おそろしすぎて。

　離はなれたくない。

　そんなことを思ってしまう前に、ありふれた言葉でさよならできるうちに、互たがいの距きょ離りを広げてしまいたかった。

　だって、そうしないと、手て遅おくれになってしまう。

「いくらボクが元気でも、マリア、キミが暗く沈しずんでいたり、不安で胸がふさがれていたりしたら、何の意味もないの──」

　前まえ触ぶれはなかった。少なくとも、マリアローズには感じられなかった。

　光。

　真っ白い光の雨が、時ならぬ夕立みたいに降ってきた。

「サ……!?」馬鹿が振り返った。

　首都城じよう壁へきだ。白い光の雨が首都城壁を突き崩くずすというより溶とかしてゆく。マチルダか。いる。ちょうど首都城壁の真上あたりだ。マチルダは上じよう昇しようしながら光の雨を降らせている。

「──マリア……！」馬鹿が飛ぶように駆かけてきて、かっさらった。

「わっ……」

　マリアローズの身体からだを。

「みんな下がれ……！」トマトクンも怒ど鳴なりながら首都城壁から遠ざかろうとしている。

　マチルダのせいで、首都城壁はもう歯が欠けた櫛くしみたいな有様だ。やばい。ようするにこれは、南門跡あと以外にも侵入口がたくさんできつつあるということだ。光の雨がやんだら、あそこから帝国軍が続々とエルデンに入りこんでくるだろう。

「キミはボクが守る……！」

　ぎゅっと、力強く抱だきしめられた。

　でも、そういうことじゃないんだよ。僕だけ守ってもらったって

困る。困るっていうか、それじゃダメなんだよ。

　光の雨が降りやんだ。

　首都城壁は隙すき間まだらけの無残な姿をさらしている。ここからでは見えないけれど、その隙間からどんどん騎き馬ばがあふれだしてくるさまが目に浮うかぶようだ。

　南門跡からも騎馬が飛びだしてきた。りりぃを抱だいたトマトクンは程ほどなく追いつかれてしまうだろう。

　ファニー・フランクがすぐそこに転がっている。こけたのか。カタリとユリカは十五メーテルくらい先で足を止め、こっちを向いていた。ルーシーが二人の近くで前を見たり後ろを見たりしている。ハニーを背負っているきゅーとピンパーネルは、ジャン・スタンバック以下ＥＦＡ若じやつ干かん名と一いつ緒しよに、三人よりも十メーテル以上先行しているみたいだ。ベティ、トモヨ、サフィニアの魔ま術じゆつ士三人組は、カタリたちときゅーたちの間にいる。彼女たちは後ろをちらちら見ながら走っていたのに、突とつ然ぜん、立ち止まって振ふり仰あおいだ。

「え……？」マリアローズは魔術士たちの視線の先を目で追った。

　空だ。

　サフィニアが叫さけんだ。「ユリカ……！」

　何かが──飛んでくる。

　というよりも、落下してきた。

「魚おぅぅぅぅッ……!?」「きゃっ……！」

　カタリとユリカは肩かたを並べていた。その二人を引き裂さこうとでもするかのように、それは白い光をまとって落ちてきた。カタリだってただの半魚人ではないし、ユリカにいたっては最強伝説の持ち主だ。それでもよけられなかった。

　マチルダ。

　少女のふりをした銀ぎん髪ぱつの魔ま女じよは、瞳ひとみの中に百億の星を踊おどらせて微笑ほほえんだ。

　カタリもユリカものけぞってうずくまった。

　まるで魔女に平ひれ伏ふすように。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」「……っ……あ……ぅ……！」

　カタリは右みぎ肩かたを、ユリカは左肩を押さえて。血が噴ふきだしている。腕うでが。ああ、カタリは右腕で、ユリカは左腕だ。ちぎれて、どさりと地面に落ちた。

「マチルダ……！」

　また何かが落ちてきた。踊り羊だ。踊り羊は妙みような形の武器を魔女めがけて振ふりおろした。空振りか。

　魔女は後方に飛んで、サフィニアに肉にく薄はくしようとした。その前に、青白い輝かがやきの流れが立ちはだかった。モーグとその弟子だ。

「しつこいのだわ……！」

　急きゆう上じよう昇しようした魔女を、モーグとその弟子が、踊り羊が追いかける。



「放して……！」マリアローズはアジアンの腕を振りほどいて、突つき放した。「ユリカ！　カタリ……！」

「うわあ！」ルーシーはしゃがんでカタリとユリカの背中に手をかけた。「あああ……！」

「お姉様……！」サフィニアの全身から青い光が炎ほのおのように噴きあがった。「どうして！　なぜです……！」

「お友だちが大勢できたのね、サフィニア……！」マチルダは空中で踊り羊の武器から身をかわし、モーグとその弟で子しの突とつ進しんをよけながらころころと笑った。「気に入らないわ！　あなたはわたくしのものなのよ！　あなたはわたくしの思ったとおりに動けばいいの！　わたくし以外のすべては邪じや魔まなの、目め障ざわりなの、ぜんぶ壊こわしてあげる……！」

「そんなこと……！」

　あのときと同じだ。

　リルコを退けたときと。

　いや、あのときよりもすごい。

　青い。

　それも、深い、とても深いのに、どこまでもつめたい青だ。

　光とは呼べない。燃えさかっている。炎だ。

　サフィニアは青い炎の中にいる。

「させません……！　たとえお姉様でも……！　それだけは、決して……！」

弩級戦車ドレツドタンク〝アーノルディ〟甲板上

「──そろそろかな」

　弩級戦車ドレツドタンク〝アーノルディ〟の甲かん板ぱんに設えられた玉座の上で、灰色の猫ねこが耳を動かし、鼻をひくつかせた。

「いや、まだかな……？　どっちにしても、ここからは避ひ難なんしておいたほうがいいでしょうね。うん。そうしよう」

暗黒大陸紺碧王国シア・ルカナム王都クワーロ

バクーという名の大陸がある。

外の者たちはバクーを暗黒大陸と、バクーの住人もまた暗黒大陸アルーンダルモーと呼ぶが、意味合いはだいぶ違ちがう。外の者たちは奇き異いの念と若干の恐おそれ、そして蔑さげすみをこめてバクーを暗黒の地と称しようしている。肌はだも目も髪かみも黒い人々が暮らすバクーでは、しかし、黒は美や深遠の象しよう徴ちようだ。暗黒大陸は美称以外の何物でもない。

それゆえに、バクーで大いなる力を振るった王国や、支配権の拡大を目指す野心的な国家は、たいてい黒をその名に冠かんするか、国旗に黒を配していた。

現在、大陸の南半分を版図に収めている紺碧王国シア・ルカナムは、この伝統から逸いつ脱だつしている。デナン王家は生きつ粋すいのバクー人ですらない。始祖エルフィー・デナンはラフレシア第三帝てい国こく出身の船乗りを父に、混血のバクー人を母に持つ。王家はその血筋を隠かくさず、バクー人以外も積極的に要職にとりたてて、わずか三代でここまで勢力を伸しん張ちようさせた。

紺碧王国シア・ルカナムが目下、最大の関心を持って最大限の力を傾けい注ちゆうしているのは、暗黒大陸ではなく隣となりのグラー大陸だ。

その過半が乾かわききった赤い大地に覆おおわれているグラー大陸では、いまだに部族単位で狩しゆ猟りよう、採集を生業なりわいとして生活している者が少なくない。α大陸や暗黒大陸の住人には未開の地と見なされている蛮ばん地ちに、だが、膨ぼう大だいな資源が眠ねむっていることを、何人もの探検家、冒ぼう険けん者が突き止めていた。

過去、紺碧王国シア・ルカナム以外にもグラー大陸の侵しん略りやくを試みた国はあったが、いずれもいくつかの部族を壊かい滅めつさせただけで、支配権を確立するには至らなかった。グラーに棲すむ鬼おにに阻はばまれたのだ。鬼といっても鬼人オーガではな

い。人の姿をした鬼シグだ。彼らは生粋の戦士で、血を流さずに生まれ育った土地を明あけ渡わたすことは決してない。その抵てい抗こうは熾し烈れつで、復ふく讐しゆうは苛か烈れつだ。かつてグラーのとある部族を滅ほろぼした黒鳥王国エルマ・ルカナムは、のちに王族三十七人がたった一人の鬼シグに惨ざん殺さつされ、王位継けい承しよう権を持つ者が皆かい無むとなって、王国は分ぶん裂れつ、消しよう滅めつした。グラーを手中に収めるためには、鬼シグを討うたなければならない。

そこで、紺碧王国シア・ルカナムはモルフォ党と手を組んだ。

レヴィー・デナン王が自ら発案し、大号令をかけて、グラー大陸に侵しん攻こう軍を上陸させたのは十一年前のことだ。それから半年と経たたないうちに、鬼シグの激げき烈れつな抗こう戦せんによって侵攻作戦は完全に行き詰づまった。そんな折だった。宰さい相しようウェガ・ムウラの秘書官パーセットを介かいし、モルフォ党が接せつ触しよくしてきた。

王としては、自ら主導した作戦の全面的な失敗を認めるわけにはゆかず、目立つ戦果が一つでも欲しかった。金で動く戦争屋の申し出は渡りに船だったが、果たして信用できる相手なのか。王はひそかに党首キプリス・モルフォと会談し、評判どおり金に見あうだけの働きはする連中だろうと判断した。契けい約やくが結ばれ、独立特とく殊しゆ任務部隊として、モルフォ党には条件付きで独自の作戦行動が認められた。安くはない取引だったし、半ば苦肉の策ではあったが、状じよう況きようは好転した。以後の五年間で、侵攻軍は大陸東南端たんのルシェに橋きよう頭とう堡ほを築き、港を開いて、入植まで果たしたのだ。

この時点で初期の目標は達成されていた。あとは着実に歩を進めてゆけばいい。レヴィー王は始祖である祖父エルフィーや父マルードほど性急ではなかった。三代目の自分は王国発展の基き礎そ固めをあらためて行うべきだ。ことによると、グラー大陸征せい服ふくは百年がかりの大事業となる。五十の坂を越こえた自分がなすべきは、その下準備であろうと王は考えていた。

侵攻軍が勝ちつづけなければ、獲かく得とくした土地を維い持じするだけで満足していたかもしれない。戦費の問題もある。どこかの段階でモルフォ党との契約を解消するという選せん択たく肢しもあったはずだ。侵攻作戦はうまくいきすぎた。結局のところ、モルフォ党のおかげだった。

　銃じゆう器き、焼しよう夷い弾だん、炸さく裂れつ弾だん、自走式戦車。モルフォ党の独立特殊任務部隊は、いつしかこうした奇き怪かいで驚きよう異い的な恐るべき新兵器を用いて、赤い大地に殺さつ戮りくを振ふりまくようになった。部族の心身強健な男が密みつ儀ぎを受けてなるという鬼シグたちはしぶとく反はん抗こうしつづけたが、女や子供、老人はなすすべなく無残な屍しかばねをさらした。鬼シグも一人、また一人と死んでいった。侵攻軍はルシェ入植開始からわずか五年で、グラー大陸の三分の一を制圧した。

　紺碧王国シア・ルカナムは戦勝に次ぐ戦勝に沸わき、王は愉ゆ快かいだった。同時に不安に駆かられてもいた。

　モルフォ党はあくまで侵攻軍の意向に従い、その一部として行動していた。規律を乱すことも、自らを利するような動きを見せることもなかった。しかし、当初はわずか五百名、次し第だいに増員されて二千名、たったそれだけの兵員しか有しない独立特殊任務部隊が、常時十万の規模を維持しているグラー侵攻軍正規部隊全体を凌りよう駕がする戦力を誇ほこっている。そう見なさざるをえない。

　味方であるうちはいいが、彼らはあくまで戦争屋だ。金次第では敵に回るかもしれない。王は彼らの離り反はんを恐れた。さりとて、彼らを失いたくもなかった。彼らの戦力はあまりにも貴重すぎた。本音を言えば、彼らが欲しかった。彼らの兵器を強ごう奪だつしたかったが、そのためには大きな犠ぎ牲せいを覚かく悟ごしなければならない。踏ふん切ぎりがつかなかった。

　決断をためらっているうちに、モルフォ党側が一方的に契約の破は棄きを申し入れてきた。

　独自作戦中だった独立特殊任務部隊は行方ゆくえをくらまし、追つい跡せき部隊がネブ海岸で発見した自走式戦車の部品は無用の長物だった。王は機会を逸いつした。それだけではなかったのか。

　レヴィー王はエルフィー城の最上層に位置する王居室の露ろ台だいから身を乗りだし、王都クワーロに見入っていた。

　常緑の木々と美しく彩さい色しきされた石と鉄くろがねの都が燃えている。あちこちで絶え間なく鳴り響ひびいているこの不ふ穏おんな音は何だ。王はモルフォ党の新兵器を観覧したときのことを思いだした。銃器。そう。これは銃声だ。もっと大きな音は炸裂弾だろう。

エルフィー城の南にそびえ立つロマノ城じよう塞さいが攻せめたてられている。もともとはクワーロを防衛するために築造されたのだが、先代マルード王の御み代よからは謀む反ほん人や重要な捕ほ虜りよ、攻め滅ぼした国の支配者一族や重臣らの牢ろう獄ごくとなり、紺碧王国シア・ルカナムの威い勢せいを示す象しよう徴ちようとして機能していた。それゆえにロマノ監かん獄ごくとも呼ばれているあの城塞の地下には、グラー大陸から連行した大勢の鬼シグたちも囚とらわれているのだ。

「何ということだ」王はあとずさって口を手で覆おおった。「何という……」

王の居室には王太后と王おう妃ひ、二人の王子と三人の王女が避ひ難なんして身を寄せあい、衛兵たちがひしめいて守りを固めているが、敵はもう城内にまで侵しん入にゆうしている。

「モルフォ党が掌てのひらを返して仇あだをなそうとしているというのか……？」王は今一度、露台の手すりをつかんで目を凝こらした。「……いや。あの旗印はヤナン家のものだ。あれはルアラーナ王国。──なんと！　あの異形の者どもは、グラーの鬼シグではないか！　馬ば鹿かな……」

紺碧王国シア・ルカナムは始祖エルフィー以来、都市国家をふくめて十一の国を征服、または併へい呑どんしてきた。地下に潜もぐって反乱を企くわだてようとする者は跡あとを絶たない。表面的に懐かい柔じゆうされていながら、恨うらみを抱いだいている者も多かろう。そうした不満分子や亡国の残党どもが結けつ託たくして、クワーロを陥おとしいれようとしているとでもいうのか。

いずれにしても、モルフォ党が関かん与よしていることは間ま違ちがいない。少なくとも、武器を供きよう与よして連中を後押ししている。

「陛下、お下がりください……！」衛兵の一人が叫さけんだ。

王は露台の手すりから手を離はなして振り向こうとした。その直前に銃声を聞いた。下からだ。いかん。狙ねらい撃うちにされる。そう思ったときにはすでに、王の視界は半分以上ふさがれていた。王は呻うめきながら身を低くしようとした。見えない右目のあたりをさわろうとしたが、腕うでがうまく上がらなかった。しゃがむだけのつもりでいたのに、王は露台に崩くずれ落ちて倒たおれ伏ふし

た。王妃の声がした。やけに暗い。何も見えぬ。声だけが聞こえる。もしや、余は死ぬのか。

エーメン大君国モスカ高原

「おっ。まだ生き残りがおったぞ。とどめを刺さしてやれ、烏ウ大ダイ男ナン」

　姫ひめが肩かたの上から命じると、身みの丈たけ二メーテル三十七サンチの巨きよ体たいが軽々と跳とびあがり、崩れた天幕の陰かげに倒れていた雑兵を狙いあやまたず踏み潰つぶした。

「……のぉう。ぺっちゃんこになってしまったではないか、烏ウ大ダイ男ナン。これでは自じ動どう骸むくろの材料にもできん。きさま、どうしてくれる」

　烏ウ大ダイ男ナンは答えない。無む命みよう衛え士じはいくら出来がよくても頭の中身は幼児みたいなものだ。絶対に逆らわず、何でも言うことを聞くから利用価値があるのであって、そうでなければまったく使い物にならない。

「今度、ちょっぴり賢かしこめのを作ってみようかの。でも、話し相手はいらんな。わらわは間ま抜ぬけと喋しやべるのが嫌きらいだから。基本的にわらわ以外は全員、間抜けだからの。それにしても—」

　姫はモスカ高原を見み渡わたした。柵さくで囲われ、櫓やぐらが置かれて、天幕や小屋が整然と建ち並んでいたエーメン大君国軍の野営地は、見る影かげもなく荒あれ果てている。兵士の姿はない。動いているのは無む命みよう衛え士じか、少し前までエーメン大君国の兵だった自じ動どう骸むくろだけだ。

「いい眺ながめだの」阿麼李姫はにんまりしたが、すぐに渋じゆう面めんを作った。「—でも、これではもう殺す相手がおらんではないか。つまらん」

トレイン公国ワンダーテレサ

　彼女は瓦が礫れきを蹴けって飛びあがった。その拍ひよう子しに崩れた残ざん骸がいを見つめながら、彼女は高度を上げてゆく。寸前まで彼女が立っていた場所には、トレイン公国西国境防衛の要かなめである城塞都市ワンダーテレサの中心、ハウラー宮があった。目をつぶると、四角い本丸の四よ隅すみと中央から高さの異なる純白の尖せん塔とうが五本、天に向かって突つきだしている美しい外観が浮うかぶ。それが刻々と崩ほう壊かいしてゆくさまが。

　幻まぼろしのようなものだ。目を開ければ、破は壊かいはすでに終わっている。潰ついえてしまえば、あとは朽くちてゆくだけの物でしかない。

　彼女の目め尻じりにひとしずくの涙なみだが浮かんで、宙に消えた。

「脆もろくて、儚はかない。──あたくしは寂さびしいのかしら」

　胸の奥が締しめつけられる。見下ろすワンダーテレサはもう掌に収まりそうだ。彼女の玩具おもちやは壊こわれてしまった。

　壊れぬものを欲ほつした日々もあった。

　手に入らなかったから、それが果たして何だったのか、彼女にもわからない。

「でも、あなたを愛していたのよ」

　憎にくらしい、男。

　いっそ引き裂さいてしまいたいと願ったこともある。だが、可能だとしても、それはできない。きつく止められている。どうやらあの男は必要らしい。

「やっと──」彼女は西の彼方かなたに目をやった。「もうすぐ終わるのね」

　そして、始まるのだ。

Ｍ．Ｔ．Ｄ．深奥ザ・デプス・聖堂オブ・デプス

　その部屋は地下深い聖堂の奥に抱かれている卵だ。

　部屋の主であるレインドゥラス・ヴィシュクラトー以外、立ち入ることはできない。なぜなら、聖堂とその部屋とを結ぶ通路が存在しないからだ。隔かく離りされているが、ヴィシュクラトーだけは出入りできる。彼女には通り抜ぬける道など不要だ。正確に言えば、彼女は常にここにいる。ここにいながらにして、ここから出ることもできる。

　胎蔵巣オーヴアル。

　薄うす緑みどり色に淡あわく光る卵形の空間の底には底知れぬ井い戸どのような縦穴が掘ほられていて、その上に黒い球体が浮いている。球体の全面にちりばめられている無数の光点は絶えず動いていて、片時も静止することがない。

　ヴィシュクラトーは球体に掌てのひらをふれさせて、光点の移動と明めい滅めつを眺めていた。

　いや、明滅しているのではない。光点は球体の表面を上下左右に動いているだけではなく、球体の中心方向へ沈しずんだり、浮かんだりもしている。そのせいで光の強さが変化し、明滅しているように見えるのだ。そして、ヴィシュクラトーが手をあてている箇か所しよとその付近では、明るさを強める光点よりも、弱まってゆく──もはやほとんど消えようとしている光点のほうが遥はるかに多い。

　多すぎるほどに。

「ああ、──魂たましいが落ちてゆきます。落ちて、落ちてゆきます」

　レインドゥラス・ヴィシュクラトーは人なのか、竜りゆうなのか。答えはある。彼女は人でもなく、竜でもない。

　一糸まとわぬヴィシュクラトーの肌はだは乳白色にきらめいているが、よくよく見れば真しん珠じゆのごとき鱗うろこに覆おおわれ

ている。さながら竜のように。肌とほぼ同じ色で光こう沢たくがある毛もう髪はつも、長毛竜の被ひ毛もうに近い。その身体からだつきは人に似ていながら、人間にはない尻尾しっぽが彼女には備わっている。彼女のように直立二足歩行する竜は皆かい無むだ。その瞳ひとみには黒目も白目もなく、ただひたすら色とりどりのきらめきを宿している。

人でもなく、竜でもない。あえて言えば、人竜だ。もともと人竜だったわけではない。亜あ竜りゅうどもが地上を闊かつ歩ぽしていた時代、ヴィシュクラトーは人だった。人は亜竜の獲え物もので、彼女は亜竜を狩かる者たちの一人だった。生き抜くために亜竜を殺し、効率よく殺すために亜竜を研究した。その生態。肉体の構造。弱点。亜竜どもはどこからやってくるのか。彼女は人として初めて天空に十一個の太陽石が輝かがやく竜界ドラガンドに足を踏ふみ入れ、亜竜をふくめた竜たちを深く知ることになり、やがて竜界の秘密に接した。

竜界には神がいる。竜たちが神しん竜りゅうとして恐おそれ、崇あがめる神が。

神竜は観念的な存在ではない。実在する。年を経た竜は神竜となって竜界を形づくり、支えるのだ。神竜は竜界の大地そのもので、もし飛びたてば空を覆うほど巨きょ大だいだが、身じろぎもしない。食べることも飲むこともせず、呼吸だけを行い、半ば精神的な存在として、彼らはある役割を果たしている。

マグニデア。

神竜たちが精神の住すみ処かとし、厳重に管理している世界があることを、彼女は突き止めた。

その強固で広大な肉体によって形成されている竜界は、いわばマグニデアを守るための殻からなのだ。

神竜はマグニデアの管理者となるべく生みだされた。—上位の管理者たちによって。

マグニデアとは何か。

魔ま術じゅつ士たちは、その実態を知らずに、無意識層共有集積領域と呼んでいる。

　彼女は球体に乳白色の指を突つき入れた。感かん触しよくはない。球体は立体的に映しだされているだけだ。マグニデアグローブ。竜の、竜界の秘密を知り、人竜となった彼女は、神竜たちのように精神体サイキユラとしてマグニデアに入りこむことができる。一部の魔術士もマグニデアに侵しん入にゆうしているが、彼らは大海の浅あさ瀬せを遊泳しているようなものだ。神竜や彼女は深海まで潜もぐることができる。そうして彼女はマグニデアの全ぜん貌ぼうを把は握あくし、その状じよう況きようをリアルタイムでモニターするこのマグニデアグローブを作りあげた。

　マグニデアは、魂━アニマという名の情報体が泳ぐ海であり、その最深部にはアニマ中央処理施し設せつともいうべきグランコアがある。アニマは生命体の精密な設計図だ。それをもとに全生命体は生成される。世界は無限ではない。有限のリソースをやりくりして維い持じしている。アニマを構成している情報粒子フオルマンに余よ剰じようはほとんどない。生々流る転てんはリソース管理のためのシステムだ。生命体が死んで、その根本であるアニマが利用されなくなると、マグニデアの奥へと沈み、グランコアで再処理されて、再利用される。神竜の精神体サイキユラはマグニデアの管理者としてこれを制せい御ぎよしているのだ。

　マグニデアは無辺だ。人間たちが異界と呼んでいるありとあらゆる世界の生命体のアニマが、グランコアで作られては壊こわされ、また作られて、マグニデアを満たしている。だが、人間ほど大きな情報体を持つ、すなわち、多くの情報粒子フオルマンで構成されている生命体は他にない。人間のアニマは、個体としても総体としても最大を誇ほこっている。

　なぜなら、人間は特別だからだ。

　当然といえば当然だろう。すべてはもともと、人間のために用意されたのだから。

　ゆがめられてしまったのだ。

　本来あってはならないことなのに、個体ごとの情報体の大きさは人間に及およばなくても、種全体の情報粒子フオルマン量では人間と比ひ肩けんする者たちがいる。

　彼らは自らをヒト、あるいはニンゲンと称しようし、人間世界に匹ひつ敵てきする規模の異界で繁はん栄えいをきわめている。

その名は、地へ獄ル。

神々に反旗を翻ひるがえして争った反逆神によって創世されたとされる世界だ。

反逆神とはいえ、現在も帝てい王おうとして地獄に君臨しているその者は、上位の管理者である神だ。おそらくはその権限と権能によって、地獄は保護されている。果たして、それだけなのか。

あらゆる世界はマグニデアという海に浮うかぶ大陸や島のようなものだから、その意味で繋つながっていると言えるが、もっと直接的に接してもいる。世界と世界が接せつ触しよくしている地点には異界の扉とびらが口を開けていて、行き来できるのだ。

人間世界と地獄もまた、例外ではない。扉は複数存在していて、もっとも大きなものはα大陸北西部、恐怖とエルデ混沌エイの巷ニオンの大穴メガボロスにあった。サンランド無統治王国首都エルデンの直下、アンダーグラウンドＤ１と呼ばれる場所に、それは現在もある。人間世界と地獄の最辺境オーバー地帯フロンテイアは直結しているのだ。

なぜこのような成り立ちを見せるに至ったのか。すべてが人間のために用意されたのだとしたら、異界など必要ない。たぶん異界は錯誤エラーによって生じたのだろう。現時点では確かく認にんするすべはないが、ヴィシュクラトーはそう推測している。しかし、地獄はどうだろう。

マグニデアグローブによる観測の結果、人間世界の情報粒子フオルマン量は他の異界の情報粒子フオルマンを吸収する形で次第に増加しているが、地獄の情報粒子フオルマン量も同じように累るい増ぞうしている。さらに、人間世界の情報粒子フオルマン量が一時的に低下すると、地獄の情報粒子フオルマン量がそのぶんを奪うばって増えるという現象も確認している。

地獄は人間世界の鏡像のようだ。そう振ふる舞まいながら、地獄は人間世界をとって食う機会をうかがっているようにも見える。まるで地獄自体に意思があるかのようだ。

ヴィシュクラトーはマグニデアグローブの奥深くに手をのばして、グランコアを指先でなぞった。途と端たんに輝く大量の文字と数字が浮きあがって表示された。表示はめまぐるしく変化しつづけ

ている。

　今この瞬しゅん間かんも、膨ぼう大だいな数の光点がグランコアめがけて沈しずんでゆこうとしている。マグニデアグローブでは視認できないが、神しん竜りゆうの精神体サイキユラがそれらの光点──アニマを一定の速度で沈ちん下かさせ、解体しながら、グランコアへと導いているのだ。その作業にも、それからグランコアの処理能力にも限界がある。その限度を超こえた場合、どうなるのか。何が起こるのか。

　ヴィシュクラトーはすでに一度、それを経験している。当時はその原因も仕組みも不明だった。あれは偶ぐう発はつ的な事件だった。終息してから調査を開始した。マグニデアグローブもその過程で生まれた副産物だ。アニマを直接操作する試みから、蘇そ生せい式が可能になりもした。人竜にとってもそう短くはない時間をかけて、とうとう解明した。

　魂限界アニマオーバー突破フロー。

　この緊きん急きゆう措そ置ちが発動すると、再処理が必要なアニマは一挙に沈下して、待機層に一時貯蔵され、活動可能な神竜の精神体サイキユラがグランコアに集結する。マグニデア全体が安定するまで、神竜の精神体サイキユラはアニマの再処理に傾けい注ちゆうするのだ。その間、アニマは──人間的な表現を用いれば、死者の魂は、まっしぐらに沈んでいってグランコア周辺の待機層に落ちてしまう。

　魂限界アニマオーバー突破フローが引き起こされれば、ゆっくりと沈降してゆくアニマをすくいあげて、これをもとに肉体を再生成する蘇生式は、むろん不可能となる。

　そんなことよりも、死者の魂──再処理待ちのアニマ、大量の情報粒子フオルマンが待機層に蓄たくわえられていることのほうが重要だ。

　地獄は人間世界を食らおうとしている。

「時は──」レインドゥラス・ヴィシュクラトーは乳白色の唇くちびるをかすかにゆるめた。光点の沈下速度が速まっている。「時は今まさに満ちようとしていますよ、悪ヒ魔トの子よ」

　　　　　サンランド無統治王国首都エルデンＤ１閉へい鎖さ魔ま宮きゆう

　紫むらさきと青と赤に彩いろどられた夜でもなく昼でもない空に、五つの月が浮かんでいる。月はそれぞれ桃もも色いろ、朱しゆ色いろ、黄色、橙だいだい色いろ、青緑色だ。赤あか紫むらさき色いろの海が白い砂すな浜はまに迫せまっていて、波打ち際ぎわで崩くずれかけている砂の防ぼう波は堤ていを、赤と白の日ひ傘がさを持った男が腰こしを屈かがめてせっせと補修している。

　男は白と赤と黒のジャケットを着て腕うでまくりをし、フリルをあしらったブラウスの胸をはだけて、細身のズボンは膝ひざのあたりまでたくしあげられている。長い白金の髪かみの毛が落ちかかって、男の顔を隠かくしていた。男は波音に乗せて鼻歌を唄うたっている。その手が止まった。

「──ああ……そうか」男は腰をのばし、砂まみれの手で髪をかきあげた。「ついにその時がきたのだね。時が満ちてしまったのだ」

　五つの月がない腹を抱かかえて笑いだした。

　不安定な空が焼きすぎたチーズケーキのように硬かたくなって裂さけようとしている。

　若い葡萄ぶどう酒のような海は静かだ。

　千の名と千の姿を持つ男は日傘を放ほうって砂浜に腰を下ろし、目を細めた。

「一つの時代が終わろうとしているね。終わる時代があり、始まる時代があるのならば、私は愛いとしい花はな嫁よめをさらいに行こう。りりぃ。誰だれよりも、何よりもかわいらしいあなたに、私はこの世に一つしかない指輪を贈おくろう」

　　　　　再びサンランド無統治王国首都エルデン南門跡前

「──そんなことはさせないですって……？　だったら、あなたはいったいどうするというのかしら、サフィニア……！」

　青白い輝かがやきの流れとなって押しよせてくるモーグとその弟子に追いまわされても、縦じゆう横おう無む尽じんに天翔かける踊り羊ダンシングシープに襲おそわれても先回りされても、マチルダは息を乱すことすらない。それどころか、この状じよう況きようを心底から楽しんでいる。そんなふうにしか見えない。

「お姉様を……止めます……！　わたしが……！」

　サフィニアのそばにいたベティが、トモヨが吹ふき飛ばされた。青い炎ほのおが渦うず巻まいて天を衝つき、巨鳥と化してつめたく燃える両りよう翼よくを羽ばたかせた。

　蒼そう炎えんの巨鳥が魔ま女じよめがけて飛んでゆく。

　魔女に追いすがろうとしていた踊り羊が、巨鳥から逃のがれて叫さけんだ。「──詠唱放棄アリアレナンス……⁉」

　モーグとその弟子も距きよ離りをとって人の姿をとりもどした。（お師様……）（マチルダの弟子か。なんという……）

「それでいいのよ、サフィニア……！」マチルダは笑いながら速度を上げた。「もっと、もっと、もっと解き放ちなさい！　一億人に一人……！　この世界を滅ほろぼしかねないあなたの凶きよう運うんさえも、わたくしのものなのだわ……！」

　蒼炎の巨鳥は空を凍いてつかせるように焦こがしながら魔女を尾び行こうするが、届かない。マチルダはさながら純白の光線だ。速い。速すぎる。でも、何だろう。何か変だ。何が変なのか。

　マチルダは南門跡あとに突つっこもうとしている。そっちには帝てい国こく軍の騎き馬ばがうじゃうじゃいるのに。マチルダはかまわず騎馬の上すれすれを飛んで南門跡を通り抜ぬけた。蒼炎の巨鳥があとにつづいて、大勢の騎馬たちがなすすべなく薙なぎ倒たおされた。

　間もなく首都城じよう壁へきの向こうでマチルダが急きゆう上じよう昇しようすると、蒼炎の巨鳥も翔かけ上あがった。

「vou-de-vaal,」

　マチルダが下に向けた掌てのひらから真っ白い光があふれて、蒼炎の巨鳥を吹っ飛ばした。

「adras-moreal-toi-hades,」

　その光が──消え失うせずに輝きを、勢いを強めながら広がってゆく。

「ras-ende-enigma-parabress.」

　さながら白い八つ首のでかすぎる蛇へびのようだ。

　マチルダは光の八つ首蛇に抱いだかれて、傲ごう然ぜんと肩かたをそびやかし、薄うすい胸を張ってみせた。

「サフィニア！　わたくしを止められるものなら止めてごらんなさい……！　できなければ、あなたはわたくし以外のすべてを失うのよ……！」

「…………っ………………！」

　サフィニアは声にならない叫び声をあげた。見開かれた両りよう眼めや口から雷らい光こうのようなものが噴ふきだしている。サフィニアはマチルダを止めるつもりらしい。でも、僕はサフィニアを止めないと。そんな気がしてしょうがないけれど、サフィニアがマチルダをどうにかしてくれないと、たぶんマリアローズたちの命は蠟ろう燭そくの火よりも簡単に吹き消されてしまう。だけど、やっぱり変だ。マチルダは脅きよう迫はくしているだけじゃない。明らかにサフィニアを挑ちよう発はつしている。いったい何のために？　わからない。わかるはずがない。

　サフィニアの全身から蒼炎が噴ふん出しゆつして、上空で五つか六つの頭を持つ羽を生やした四つ足の獣けもの──しいて言えば多頭翼よく獣じゆうとでも表現するしかない、おぞましい姿を形づくった。

　蒼炎の多頭翼獣が駆かけだすと、光の八つ首蛇はなぜか後退した。逃にげるのか。そのわりには急速な後退じゃない。ゆったりと退きながら、受け止めるように蒼炎の多頭翼獣を迎むかえ撃うとうとしているのか。

　蒼炎の多頭翼獣が猛もう然ぜんと光の八つ首蛇に躍おどりかかった。

　五つとも六つともつかない頭部が白くまばゆい胴どう体たいに猛然と食らいつくと、八本の首がのたうつようにして蒼炎の多頭翼獣に絡からみついた。

　光の八つ首蛇が押されている。蒼炎の多頭翼獣が優勢だ。

　蒼炎の多頭翼獣が光の八つ首蛇を突き落とそうとしている。

　首都城壁の向こうだ。

　そこには帝国軍がいる。

「いい子ね、サフィニア……！」

　マチルダが打ちあげられたように垂直上昇して、光の八つ首蛇から離はなれた。

　蒼炎の多頭翼獣と光の八つ首蛇が組みあったまま墜つい落らくすると、白い光と青い炎が入り交じって巻きあがり、またたく間に南の空を染めた。次の瞬しゆん間かん、爆ばく炎えんがあがって、立てつづけに爆音が轟とどろいた。ものすごい黒こく煙えんだ。首都城壁の向こうが燃えている。マリアローズはへたりこんでしまいそうになった。踏ふんばったときに気づいた。

「え……」

　地面だ。

　細かく震ふるえている。

　今も続発している爆発のせいか。振しん動どうは強まりつつある。

「まさか……」トマトクンが呻うめくように言った。ひどく顔色が悪い。やつれているようにさえ見える。「りりぃ、お前は何か知らないのか」

　紅の兜かぶとが中央から左右に割れて、憂うれいを帯びた美しい女の顔があらわになった。「……わからない。だが、これは──」

「う、わっ……」マリアローズは膝ひざを曲げて腰こしを落とした。やばい。すごい揺ゆれだ。

「マリア！」

　アジアンが差しのべてきた腕うでを、つい、とっさにつかんでしまった。すぐに後こう悔かいしたけれど、今は離す気になれない。調子に乗ったのか、アジアンはマリアローズを抱だきよせた。それはさすがにちょっと。そう思いはしても、身体からだに力が入らない。

「な、何が……」

地獄の最辺境オーバー地帯フロンテイア

「いやあ、こいつはすごい……」エリオットは帽ぼう子しの鍔つばを押しあげてため息をついた。

　たまたま最辺境オーバー地帯フロンテイアにいてよかった、ということになるのだろうか。少し前から准男爵ツエペリアたちの動きが一気に活発化して、想定ハイポ侵攻路スルートがにぎわいはじめた。これは何かあると思い、大急ぎで最辺境オーバー地帯フロンテイアの果てにある想定前線ハイポスラインに駆けつけたのだが、どうやら間にあったようだ。

　エリオットはサーカーンスと呼ばれている青黒い岩山の山やま肌はだにへばりついて、想定前線ハイポスラインの前にひしめく数十万、あるいはそれ以上の悪魔ニンゲンたちを眺ながめている。

　彼らの前には幅はば三メーテル、高さ三メーテルほどの細い通路状の空間、通つう称しよう〝瓶の口ボトルネツク〟がのびているだけで、他ほかには何もない。大地も、空さえも、ここで途と切ぎれている。最辺境オーバー地帯フロンテイアは文字どおり地獄の最果てだ。地獄という世界はここで終わっている。立ちはだかる無の断だん崖がい絶ぜつ壁ぺき、想定前線ハイポスラインの先へとつづく瓶の口ボトルネツクを進めば、人の住む世界へと達することができるのだ。

想定ハイポ侵攻路スルートとは、地じ獄ごく帝てい王おうの子、悪魔大公グランヴエリオンアーマンの所領にあるアラフェルス突撃要塞ラツシユフオートから瓶の口ボトルネツクへと至る一本の道だ。聞いたところによると、アラフェルス突撃要塞ラツシユフオートは自走する機能を有していて、有事の際には想定ハイポ侵攻路スルートを爆走して大軍を前線まで輸送し、そのまま戦せん闘とう拠きよ点てんになるのだという。それでは、有事とは何を指すのか。最辺境オーバー地帯フロンテイアには地獄帝王に服従していない蛮族ババリンたちがひしめいている。彼らの一いつ斉せい蜂ほう起きが想定されている有事なのか。

そうではあるまい。

エリオットは目を凝こらした。「おお……」

瓶の口ボトルネツクめがけて想定ハイポ侵攻路スルートを進軍してくる悪モ魔ノたちの中に、ひときわ大きな姿がある。周りの悪モ魔ノたちとは比べものにならない。あれは身みの丈たけ十五メーテルを超こえる巨きよ人じん──いや、巨きよ悪ジ魔ンドアンガルだろう。一人や二人ではない。数十か、数百か。各駐屯地キヤンプでドアンガル使いによって拘こう束そくされ、調教されていたドアンガルたちが、この地に集結しようとしているのだ。

「しかし、どうやって……？」

有事とは何か。エリオットは長年にわたる地獄巡めぐりの経験やえられた知識をもとにある仮説を立てている。だが、瓶の口ボトルネツクは三メーテル×三メーテルだ。十五メーテル超ちようのドアンガルはしゃがもうと腹はら這ばいになろうと入りこむことはできない。そもそも、瓶の口ボトルネツクという名のとおり、この通路はあまりにも狭せますぎる。ドアンガルはさておき、これだけの悪モ魔ノたちが通り抜ぬけるだけでも気が遠くなるほどの時間がかかるだろう。

エリオットは想定前線ハイポスラインと悪ヒ魔トゞビゞトが呼んでいる無の断崖絶壁に目をやった。無は暗くら闇やみとして知覚される。やはりこれか。想定前線ハイポスラインに何かが起こる。もしくは、何かを起こす。それによって、有事は引き起こされるのではないか。

「……あれか？」エリオットは瓶の口ボトルネツクの前に視線を向

けた。

　悪魔ニンゲンたちの最前列に大きな荷車がある。やけに古びていて、一いつ切さい飾かざり気がない。粗そ末まつといってもいい木製の荷車だ。その荷台の上に黒い物体が載のせられている。

　あれは何だろう。巨きょ大だいな鳥とり籠かごのような形をしている。黒い布か何かをかけてあるのか。

　鎧よろい兜かぶとに身を包んでいる一人の悪魔ニンゲンが覆おおいを剝はがした。中身はやはり大型の鳥籠だった。いや、檻おりと言うべきか。何者かが囚とらわれている。エリオットは息をのんだ。「──なんと」

　痩やせているというよりも華きゃ奢しゃで、男とも女ともつかない身体つきだ。白い。絵の具を塗ぬりたくったように白い肌はだだ。髪かみの毛はやや黄ばんでいるが、沐もく浴よくして汚よごれを落とせば淡あわく輝かがやきだすだろう。肌にしても、エリオットが以前、出くわしたときはもっと透とう明めい感かんがあった。

　悪魔ではない。

　人でもない。

　神しん霊れいジャニス・イデルと悪魔大公グランヴエリオンアーマンの息むす子こだというが、性別というものがあるのかどうか。あれは贄にえの園そのだった。エリオットは渦うず巻まく黒砂さ漠ばくの縦断を企くわだてて、その半ばで餓うえ、渇かわき、疲ひ労ろう、そして負傷が原因で一歩も動けなくなった。そこに通りかかった。

　半神半魔の〝見捨てフオーられ子セイカン〟ヨヴィ・イデルは裸ら形ぎようだった。エリオットのそばにしゃがみ、色のない瞳ひとみで顔をのぞきこんできた。エリオットは思わずその部分を確認してしまった。ヨヴィ・イデルの下腹部には幼虫のような陰いん茎けいと小さな陰いん嚢のうがぶらさがっていたが、陰いん唇しんも備わっていた。ヨヴィ・イデルはかすかな笑えみを浮うかべて言った。「しねばいいのに」

　母である神霊にも父たるアーマンにも捨てられたのだとか、神からも悪魔からも逃にげているのだとか、諸説あるが、いずれにして

もヨヴィ・イデルはさまよう者であるはずだった。ヨヴィ・イデルほど自由自在に三千世界をうろついているのは、光輝神ルキフアエルソオルくらいのものだろう。旅を心から愛する者たちにとって、ヨヴィ・イデルはある種の道標だ。人生は旅であり、旅の中に己おのれの人生があるとエリオットは考えている。だから、ヨヴィ・イデルとの出会いは大切な思い出だ。なぜあのヨヴィ・イデルが。捕ほ縛ばくされたのか。なぜ。何のために。

　もうすぐ判明しそうだ。

　悪魔ニンゲンたちが荷車を押しはじめた。長身で、七本の剣けんを背に負い、編んだ長い髪の毛を振ふり乱しながら指示を出している青い肌の悪モ魔ノには見覚えがある。剣舞のメンチド・大公爵ハイヴエリオンタイダル・クライシズ。地獄に六十六人いる公爵、その中でも大公爵と称しようされる七人のうちの一人だ。

　荷車が瓶の口ボトルネツクに進入しようとしている。もう入った。タイダルが合図をして、悪魔ニンゲンたちが荷車を押すのをやめた。タイダルが背中から剣を二本抜き、進みでて、いったい何をしようというのか。悪魔ニンゲンたちは一様に口をつぐんでいる。静かだ。なぜそんなことを。

　タイダルの剣が檻の中にいるヨヴィ・イデルを刺さし貫つらぬいた。Ａ□ＡＨＨＨＨＨとヨヴィ・イデルが身をよじって悲鳴をあげた。タイダルはヨヴィ・イデルに刺さっている二本の剣をそのままにして、新たに二本の剣を抜いた。そして突つき刺した。Ａ□ＡＨＨＨＨＨＨＨＨ。さらに二本。Ａ□ＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ。最後の一本はヨヴィ・イデルの後頭部に叩たたきこまれて両眼の間から突きだした。Ａ□ＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ。エリオットは顔をしかめた。何という声だろう。臓ぞう腑ふが激しく揺ゆさぶられ、引っかきまわされている。そんなふうに感じられる。ＡＨＡＨＨＡＨＨＨＡＨＨＨＨＡＨＨＨＨＨＨ　Ｈ　ＨＡＨＨＨＨＨ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　ＨＨＨＨＨＨＨＨＨ。

　ヨヴィ・イデルは色いろ鮮あざやかな青い血を撒まき散らしながら叫さけんでいる。エリオットは頭を振った。目が回っている。どうしてだ。おかしい。無の断だん崖がい絶ぜつ壁ぺきが蠢うごめいている。まるで鳥とり肌はだが立っているかのようだ。暗闇の表面が粟あわ立だっている。ＡＨＨＨ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　Ｈ　ＡＨＨ　ＨＨＨＨＨ　ＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ　Ｈ　Ｈ　ＨＨＨ　Ｈ　ＨＨＨ

Ｈ　ＡＨＨＨＨＨＨＨＨ　ＨＨＨＨＨＨ　ＡＨＨＨ　ＡＨＨ　ＡＨＨＨＨＨＨＨＨ　Ｈ　Ｈ　ＨＨＨ　ＨＨＨ　ＨＨＨＨ。

「あ、あれは──」エリオットは目を瞠みはった。「ヨヴィ・イデルの力……なのか……？」

　瓶の口ボトルネツクが少しずつ、徐じよ々じよに、広がってゆく。

　タイダルが腕うでを振りあげてみせると、悪魔ニンゲンたちが一いつ斉せいに歓かん声せいをあげた。これか。

　これが有事なのか。

サンランド無統治王国首都エルデン南門跡前

「ど、ど、ど、どうすれば……」マリアローズは思わずアジアンの顔を見てしまった。

　アジアンは一いつ瞬しゆんだけマリアローズと目を見あわせて、すぐさま四囲に視線を巡めぐらせた。「魔ま術じゆつ、なのか……でも、マチルダの仕し業わざじゃなさそうだしネ」

（なんたることだ）

　モーグの声が頭の中で響ひびいた。

（エルデンが揺動しておる。この街全体が）

　超ちよう賢けん者じやは弟で子しと一いつ緒しよに空を飛んでいるから、かなり遠くまで見み渡わたすことができるはずだ。

「え──じゃあ、え……？　エルデンがやばいってこと……？」

「ベティ！」アジアンが後ろを向いて叫んだ。「とりあえずいったん外に出る！」

「外って──」ベティが何か言おうとした。その瞬しゆん間かんだった。

　恐ろしく巨大なものが地の底から突きあげてきた。

　そうとでも思うしかない衝しよう撃げきだった。

　おそらくエルデンの中にいる者全員が、二十サンチかそこらは跳とびあがる羽目になったはずだ。アジアンでさえ「おっ……！」というような声をもらして体勢を崩くずしかけたくらいだから、転てん倒とうした者も少なくないだろう。

　見れば、マクスペイン・ストリートの西側に建ち並んでいる雑多な建物の一部が崩ほう壊かいしていた。舗ほ装そうされた道もあちこちに亀き裂れつが入っている。

「マリア、しっかりつかまって……！」アジアンはマリアローズを横よこ抱だきにして駆かけだした。

「や、でも、待っ──モリーとかリーチェとかアサイラムの人たちが……！」

「まずは退路を確保してからだヨ！　そうしないと、彼らを連れてきたはいいけど行き場がないなんてことになりかねない！」

「それは……！」たしかにそうかもしれないけど。正論で切り返されるなんて。よりにもよって、こいつに。マリアローズはアジアンの腕から逃のがれようとして果たせず、それでも必死に身体からだをのびあがらせて肩かた越ごしに後ろを見た。「カタリ！　ユリカ……！」

　ピンパーネルがユリカを抱きあげて走りだしていた。左足があの状態なのに、人一人運んで走れるなんて。ルーシーはユリカの左腕とカタリの右腕を持ったまま、カタリを助け起こそうとしている。カタリは断って立ちあがり、根性で突っ走るつもりらしい。ルーシーと、それからハニーを背負っているきゅーが、カタリを庇かばうようにその後ろについた。ベティとトモヨにうながされて、サフィニアもこっちへ向かってこようとしている。ファニー・フランクたちは知らない。どうでもいい。

　前を向くと、トマトクンがこっちを見ていた。目を見開いて、歯を食いしばっているのに、顎あごが落ちて口が開いている。愕がく然ぜんとしているのか。「──りりぃ、歩け」「……だから、そうするとさっきも言っただろうが！」

トマトクンはりりぃを下ろして身を翻ひるがえした。「行くぞ……！」

まるで尻尾しつぽを巻いて逃げようとしているみたいだ。トマトクンの後ろ姿からそんな印象を受けたことにマリアローズは動どう揺ようした。なぜだか何もかも間ま違ちがっているような気がしてしょうがない。離はなして。離してよ、アジアン。頼たのむから、離して。声にならない。身体も動かない。

震しん動どうはつづいている。荷物みたいに運ばれていても、揺れが伝わってくる。

りりぃはまだ本調子ではないようだ。長すぎる手足を持てあましているかのようで、走り方がぎこちない。

アジアンはすぐにりりぃを抜ぬき去った。追い越こした直後、素す顔がおのりりぃと目があった。表情は読みとれなかった。

南門跡あとは騎き馬ばの屍しかばねにほとんど埋うめつくされていた。トマトクンは累るい々るいたる死し屍しを容よう赦しやなく踏ふみ越えてゆく。アジアンはほとんど彼らを踏まずに飛ぶように駆けた。南門跡の向こうは火と煙けむりの海だ。あれで帝てい国こく軍が全ぜん滅めつしたとは思えないが、生き残りは後退したのだろう。生きて動いている者の姿はない。倒たおれて黒くろ焦こげになっている騎馬や、炎えん上じようしている戦車ばかりだ。煙けむい。マリアローズは咳せきこんだ。煙いなんてものじゃない。目も痛い。

「外は大だい丈じよう夫ぶだ……！」アジアンが叫んだ。

この有様で大丈夫もくそもへったくれもないようなものだけれど、アジアンが言いたいのはそういうことではないだろう。地面だ。震動していない。振ふり返ると、首都城じよう壁へきは震ふるえていた。地じ響ひびきに混じって、裂さけるような、剝はがれるような、こじ開けられようとしているかのような音も聞こえる。りりぃが南門跡から出てきた。ピンパーネルも。ユリカは大丈夫なのか。カタリは空元気を出す程度の元気はあるみたいだ。ルーシーが、きゅーがきた。ハニーはきゅーの背中でぐったりしている。やっぱりつらいのか。トモヨ、ベティ、サフィニアにつづいて、ファニー・フランクとジャン・スタンバック以下、ＥＦＡの連中が転がり落ちてきた。段差があったわけじゃない。段差ができたの

だ。

「え………………」

　首都城壁がいきなり高くなった。城壁だけじゃない。エルデン自体がせりあがった。五十サンチくらいだろうか。それが一回目だった。二回目はすぐにきた。次はゆっくりだった。とてつもない音を立てながら、じわじわと一メーテルくらい持ちあがった。

「えええええええええええええええええええ
えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……!?」

　マリアローズだけじゃない。みんなエルデンに目を奪うばわれている。首都城壁は地面の下までつづいていた。さっきまで地表だった位置から下には土が付着している。間もなく三回目が始まった。首都城壁はただでさえ高いのに、もっと背せ伸のびをするつもりなのか。もうかつての地表面は地上から三メーテルほどの高みに達している。止まらない。それどころか、速度が増している。そろそろ四メーテルだ。どうなっちゃってるんだよ、これ。

　もう何メーテルとかよくわからない。ついに首都城壁がその全ぜん貌ぼうを現した。底だ。首都城壁の底が見えた。それでもエルデンは上じよう昇しようしつづけている。低い、ただ、かなり大きな、唸うなり声みたいなこの音は何だろう。土やら石やらもっと巨きよ大だいな何かの破は片へんやらが絶え間なく落下している。エルデンからだ。土ど砂しやと一緒に地下の構造物が壊こわれながら剝はく落らくしているのか。嘘うそみたいだ。この目ではっきりと見ているのに、どうしても信じられない。マリアローズは円い首都を見上げていた。

「エルデンが、浮ういてる」

the arrival of Calamitage 〝さよならはいわない〟

「大丈夫だ！　何があっても、わたしが守る！　大丈夫だから……！」ベアトリーチェはしゃがみこんでいる子供たちの背中をさすったり肩かたを抱いたりしながら叫さけんでいた。大丈夫。本当に大丈夫なのか。ベアトリーチェにもよくわからない。身体を張って、自分が子供たちを、患かん者じゃたちを、職員たちを守る。その覚かく悟ごだけは揺ゆらがない。でも、覚悟だけでは。状じょう況きょうがつかめない。震動は収まったようだが、揺れのようなものは感じる。気持ち悪い。身体が下の方向に押しつけられている。そんな感覚がある。気のせいだろうか。空が流れている。いや、気のせいなんかじゃない。雲だ。雲の位置が刻一刻と変わっている。もしかして、飛んでいるのか。飛んで……？　そんなわけがない。だって、ここはエルデンだ。ベアトリーチェたちはエルデンの中にいる。飛ぶなんて、そんな。でも、遠くに見える南門跡の向こうの景色が。火も煙も見えない。空だ。白っぽい空しかない。母様……！

　ベアトリーチェはモリー・リップスの姿を探そうとして、こらえた。わたしが動揺してどうする。子供たちはもっと不安なんだ。わたしはしっかりしないといけない。どうであれ、何が起こっているのだとしても、わたしがやるべきことは変わらないんだ。マリアローズ。お前はエルデンの外に出たのか。無事なのか。無事だと信じたい。信じるんだ。今日まで何度となく危ない目に遭あいながらも切り抜けてきたんだから。マリアローズには頼たのもしい仲間がついているんだから。わたしはわたしの守るべきものを。

「な、何だ、あれは……!?」誰だれかが叫んだ。後退を手伝ってくれている秩ちつ序じょの番人後備隊の隊士だ。どこかを指さしている。上空──北のほうだ。鳥……？　エルデンにも、もちろん鳥はいるが、あれは大きい。大きすぎる。数もすごい。飛んでくる。こっちのほうへ。

　あっという間だった。鳥たちはもうすぐそばまで迫せまっている。違ちがう。腕うでの代わりに翼つばさを生やしていて、全身が羽毛で覆おおわれている人間。そんな姿をしている。鳥じゃない。

「鳥人ジャドーだと……!?」ジャッター医士の野太い声が聞こえた。ジャドー。見たことはないが、ベアトリーチェも名前くらいは知っている。鳥人ジャドーといったら、アンダーグラウンドＤ11フリアウ逆密林に棲せい息そくしている異界生物フリークスだ。

ジャッター医士は侵入者クラッカーたちとアンダーグラウンドに潜っていた時期もあるらしい。それで詳しいのだろう。でも、なぜジャドーが、異界生物フリークスが、こんなところに。おかしい。

　アンダーグラウンドの異界生物フリークスたちは地上に出てこられないはずだ。古代九く頭ず竜りゅうの呪のろい。本当にそんなものがあるのか。疑いたくもなるが、実際、異界生物フリークスがエルデンを闊かつ歩ぽするような事態にはなっていない。ただ、何年か前に一度、蜥蜴とかげ人たちがアンダーグラウンドから出てきて暴れまわる事件が起こり、古代九頭竜の呪いが破られたという噂うわさが流れて大おお騒さわぎになったものの、結局、すぐもとどおりになった。



　これはあの事件の再来なのだろうか。

「隊士の皆みなさんは迎げい撃げきの用意を……！」ベアトリーチェは声を張りあげてモトロール刀を抜いてから、ジャドーたちが襲おそいかかってくる可能性を考えた。そうだ。あいつらは仕し掛かけてくる。そのつもりでいたほうがいい。そうしないといけな

い。「──武器を持っている者はただちに準備しろ！　持っていない者は逃にげるんだ！　早く……！」

　ジャドーたちが急降下してくる。南門跡あとから退いてきた総長以下親衛隊や各直属隊、突とつ撃げき隊、遊撃隊、守護隊、警けい邏ら隊、無名隊で構成される本隊の合流はまだか。もう少しかかりそうだ。間に合うか。無理だ。それまでしのぐしかない。どうやって。

　直上から落下してきた。そうとしか思えなかった。ベアトリーチェはとっさに刀を振ふりあげた。ジャドーが地面に激げき突とつした。斬きったか。手て応ごたえはあった。またくる。斬れ。叩っ斬れ。こいつらは足の爪つめで獲え物ものを引き裂さく。あるいは、つかんで持ちあげるつもりだろう。それくらいは見ればわかる。わかってしまえば対処は簡単だ。問題は数が多いことだ。

　ベアトリーチェは右へ左へ跳とんで刀を振るい、次々と落ちてくるジャドーたちを斬り伏ふせながら歯は噛がみした。声がもれる。腸はらわたがちぎれそうだ。ジャドーがまだ小さな子供の頭を鷲わしづかみにした。ああ、ロニー。あの子はまだ七歳だ。ロニーは悲鳴をあげることもできなかった。ジャドーが飛びあがった瞬しゅん間かん、もう首の骨が折れていたからだ。馬車の事故で失った両りよう腕うでを再生するために入院していたサイデルさんは、ジャドーの爪で顔面をめちゃくちゃにされて一いつ瞬しゅんで事切れた。やさしくていつも前向きなサイデルさんは、名の知れた鍵けん盤ばん楽器の演奏家だった。腕が治ったら、アサイラムで独奏会を開いてくれると約束してくれていたのに。髪かみの毛がきれいなエリスの身体からだが宙を舞まっている。ジャドーたちが空中でエリスを投げ渡わたしあっているのだ。やめてくれ。わたしが丁てい寧ねいに髪を梳とかしてあげると、ひどく喜んでくれたエリス。まだ九つだった。エリスがばらばらになってしまう。もうなっている。なんてことを。なんてことだ。どうして、こんな。

「上に雌めすがいる……！」ジャッター医士が怒ど鳴なった。思ったより近くにいた。ジャッター医士は血まみれだった。怪け我がをしているのか。メス？　何のことだろう。わけがわからない。でも、たしかにいる。あのジャドーたちは違う。翼のような腕が、今までのジャドーは一対つい、二本だったのに、あいつらは多い。二対か三対の腕を持っている。メス。雌か。ということは、腕が一対のジャドーは雄おすなのか。ふるうううううるうううううふるうう。るううううふるううりるふううううるうう。ふるうううううるううりる

ううう。るうううふるうう。これは雌の声だろうか。歌。歌のように聞こえる。不ふ吉きつな歌だ。雄たちが雌たちの周りを飛び交かっている。何をやっているのだろう。体当たり……？　雄が雌にぶつかっていって──雌はそれでも歌っている。どうやら雌は二対目、三対目の腕の先、つまり手に、剣けんのようなものを持っているようだ。雄たちはその剣に刺さし貫つらぬかれている。ベアトリーチェは躍おどりかかってくる雄たちをぶった斬りながら、雌たちから目を離はなすことができない。雌たちが降下してくる。歌いながら。

「──べ、ベアトリーチェ……！　く、くるぞ、戦獣ブルートだ……！」ひどく苦しそうな声だった。思わずジャッター医士のほうを見ると、膝ひざをついて肩で息をしていた。頭と背中に深ふか傷でを負っている。「ジャッター医士……！」「わ、私のことはいい、戦獣ブルートを……！」「はい……！」返事をして、地面に降りたとうとしているジャドーの雌たちめがけて走りながら、頭の片かた隅すみで、ジャッター医士はだめかもしれない、というようなことを考えていた。だって、出血の量が尋じん常じようではなかったし、頭ず蓋がい骨こつが割れていた。そんなことはない、ジャッター医士は強い人だ、頑がん丈じようだ、タフだ。でも、わたしが、わたしがやらないと。雌たちは着地するなり、またたく間に巨きよ大だい化した。どこが鳥人だ。身の丈たけ二・五メーテルほどもありそうな、鳥どころか、あれではほとんど熊くまだ。しかも、前ぜん肢しが四本、もしくは六本もある。ＡＧＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＳＨＵＵＵＵ！　ＡＧＯＯＳＨＵＵＵＵ！　ＡＧＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＳＨＵＵＵＵ！　雌ジャドーだったころの名残なごりは頭部に生えている飾かざり羽根くらいしかない。戦獣ブルート。見るからにあれは手て強ごわい。数も十や二十ではきかない。ベアトリーチェは意識を自分の体内に入りこませて、一気に拡張させた。視みえる。ここと、ここ。それから、ここ。ここも。それらの部分を針で刺すようなイメージで刺し激げきすると、ベアトリーチェのすべてが加速した。

　跳んで、一頭の戦獣ブルートの懐ふところに飛びこみ、顎あご下に刀を突つき入れた。「──一つ……！」喉のど笛ぶえを掻かき斬りつつ引き抜ぬいて戦獣ブルートの脇わきを駆かけ抜け、二頭目の左腕二本をぶった斬って足あし払ばらいをかけた。そうして転ばせた戦獣ブルートの頭をすかさず叩たたき割ってやった。「二つ……！」ベアトリーチェは二頭目を踏ふみ台だいにして跳ちよう躍やくし、三頭目の肩かたを蹴けりながらその素っ首を叩き斬っ

て、その向こうにいた四頭目の口の中に刀を深々と埋うめこんだ。「三つ、四つ……！」

　四頭目から飛び離れると、四頭の戦獣ブルートに取り囲まれていた。

　文字どおり四方から襲いかかってくる戦獣ブルートたちの動作は、滑こつ稽けいに感じるほど鈍にぶい。違う。ベアトリーチェが速いのだ。もっとだ。もっと速く動ける。疾とく斬れ。矢や継つぎ早に斬れ。絶え間なく、とにかく斬れ。「──五つ、六つ……！　七つ、八つ……！」

　まだ斬れる。いくらでも斬れる。この刀が折れても斬ってやる。

　でも、ああ、だけれど、この身は一つだ。

　後備隊の隊士たちは必死に戦ってくれている。我が身を盾たてにして子供を、患かん者じやを、職員を、その他の避ひ難なん者を守ろうとしているが、はっきり言って分が悪い。悪すぎる。本隊はまだなのか。南のほうに視線を向けると、子供たちを背に庇かばって戦獣ブルートと対たい峙じしているモリー・リップスの姿が目に入った。「──無茶です、母様……！」

　ベアトリーチェは駆けだそうとした。しまった。

　自分の周りにも敵がいる。そのことを一瞬、忘れていた。後ろから戦獣ブルートが飛びかかってくる。一頭じゃない。複数だ。ベアトリーチェは地面に身を投げだして、戦獣ブルートの一いち撃げきをかわした。これで終わりじゃない。まだくる。起きあがって横っ跳びしようとした。母様。母様を助けないといけないのに。

「Ｄｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕ□Ｒａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　何だ。

　落ちてきた。回転しながら。高速でスピンしながら、そいつは空を斜ななめに斬り裂くように落ちてきて、戦獣ブルートにぶっ刺さり、刺さってもぐるぐる回って、その硬かたい被ひ毛もうを、分厚い肉を、鉄のような骨を抉えぐり、めちゃくちゃにかき混ぜて、ぐちゃぐちゃに引きちぎり、そこらじゅうに撒まき散らした。あげくに地面に突き刺さって、ようやく回転が止まったかと思ったら、長

い脚あしを暴風みたいに振りまわして、二頭の戦獣ブルートをいっぺんに薙なぎ倒たおしてしまった。

「早く行けェいッ！　ここは俺が引き受けたァァァァァッ……！」

「─おまえは……」

　その男は背が高かった。体格は異様だ。肩かた幅はばがやけに広くて、不自然なほど腰こしが細い。白い肌はだの質感は陶とう器きか、あるいは色ア素ル欠ビ乏ノの爬は虫ちゆう類るいを思わせる。長くまっすぐな黒くろ髪かみも、なんだか作り物のようだ。その禍まが々まがしい容よう貌ぼうは人のそれではない。鬼おに火びを宿した双そう眼がんから邪じや悪あくな性質を想像しない者はきわめて少ないだろう。

　それでいて、以前とはどこかが違ちがう。何か雰ふん囲い気きのようなものが。

「どうしたんだい……!?」男は組みついてこようとした戦獣ブルートの左眼球に右の手刀をぶちこんで蹴け倒たおし、ベアトリーチェに肉にく薄はくしようとしていた別の戦獣ブルートに肘ひじ打ちを食らわせて怯ひるませてから、脳天に踵かかとを打ちおろしてぶっ倒した。「─あなたには守りたい人がいるんだろう!?　だったら守ればいい……！　俺はあなたを守り、助けるよ！　俺がそれを選んだのさ……！」

「─わかった！」ベアトリーチェはまっしぐらに突き進んで、今まさにモリー・リップスを殴なぐり殺そうとしていた戦獣ブルートの右みぎ腕うでを両断した。「でも、なんで裸はだかなんだ……！」

「リーチェ……！」「母様は下がっていてください……！」ベアトリーチェは刀を一いつ閃せん、二閃させて戦獣ブルートを斬きり倒した。「九つ……！」

　敵はまだいる。まだまだいる。でも、母様には指一本ふれさせない。母様の代わりに、一人でも多くの人を救う。わたしは救護剣けん士しだ。「十……！　十一！　十二、十三……！」

　いつの間にか男がそばにいる。男はベアトリーチェの背後に、右に、左に位置どって、敵を寄せつけない。おかげでベアトリーチェは正面だけに集中できる。「十四！　十五！　十六、十七、十八、

十九──二十……！」

「ＳＩＸだ！　ＳＩＸがいるぞ……！」合流した本隊のほうからそんな声が次々とあがった。ベアトリーチェは戦獣ブルートを斬り伏ふせながら叫さけんだ。「二十一……！　騒さわぐな！　見てわからないのか、この男は味方だ……！」

「──今は異界生物フリークスに狙ねらいをしぼれ……！」「Ｋｕ￣Ｈａ！　気をつかってもらってすまないねえ、ヨハァァン……！」「黙だまれ！　あとで縛しばりあげてくれる！　覚えておけ！」「じゃあ、それまでは暴れさせてもらうよ……！　Ａａａ￣ＴａＴａＴａＴａＴａＴａａａ……！」

「二十二！　二十三……！　二十四、二十五、二十六……！」息があがっている。手が痺しびれている。鼻から、耳から、目から出血している。一秒前より確実に遅おそい。鈍くなっている。身体からだが重い。それでも、まだやれる。「──二十七……！」

「Ｈａ￣Ｈａ！　倒れたら、俺が支えてやるよ！」「──余計なお世話だ、二十八……！」

　男は気づいている。ベアトリーチェが限界に近づいていることに。それでも止めようとしない。たとえば──マリアローズなら、絶対にもうよせと言うだろう。無理をしてはいけないと。その気持ちは嬉うれしい。だが、やめるわけにはゆかない。ここで止まるわけには。一歩も動けなくなるまで、突き進むしかないのだ。この男にはそれがわかるのか。ベアトリーチェはそっと微笑ほほえんだ。「──悪くないな！　二十九……！」

「何か言ったかい……⁉」「何も……！」「そうかい、しかし、きりがないねえ……！」

　まったくだ。ジャドーは続々と飛び群がってくる。いったいどれだけいるのか。数百か。千か。本隊の到とう着ちやくでこちらの戦力が大おお幅はばに増強され、非戦せん闘とう員の退たい避ひも進められつつあるので、被ひ害がいは少なくなってきているが、あと一押しが足りない。

「オオオオオラララアアァァァァァァァァァァ……！　龍りゅう州しゅう連合見参ッッッ！　助すけ太だ刀ちしてやっから喧けん嘩かふっかけてくンじゃねェーぞコラアアアアアア

アァァァァァァァァァァッ……！」

　その一押しがきてくれた──のか。

　北のほうからだ。龍州連合。援えん軍ぐんだと思っていいのか。上空のジャドーたちに弩いしゆみの一いつ斉せい射しや撃げきを浴びせ、急降下してくる雄おすたちを叩たたき落としているので、そう考えてよさそうだ。数はどうだろう。少なくとも二、三百人はいる。もっとか。

　一人、こっちへ向かって駆かけてくる。小こ柄がらな男だが、速い。並なみ大たい抵ていじゃない。矢のように戦列を突つっ切きってきた、あれは──、

「□□Ｋｕ……！」ＳＩＸは両腕を交差させて小柄な男の飛び蹴げりを受け止めた。

　小柄な男は後方宙返りして着地し、右の拳こぶしで己おのれの左手をバシバシ叩いた。「──やいてめェ、シィィィィィィィィィィックスッ！　ニォォーンの変態野や郎ろうがァ！　ンでンなトコにいンだよォしかもマッパでよォ、バトッちまうかアアァァァァーン……!?」

「飛燕フエイヤン！　ずいぶんとまあ久しぶりだねえ！　だが、あいにく今は忙いそがしいんだよ……！」

「どォーもそうらしィーなァ！　つゥーかおいッ！　てめェ、ベアトリィーだったよな、たしか！　ユリィのコト知らねェーか!?」

「ユリカさん……？　彼女はおそらく、外に──」

「外ォォ……!?　マジかよッ！　くっそ、まァーでもユリィだし大だい丈じよう夫ぶだと思うっつゥーか心配だけどしょォーがねェーしまずはアレだ、ココどォーにかしねェーとなヨシッ！」飛燕はキャハハハ笑って空を睨にらみつけた。「──あいつら残らずぶっ殺してッ！　話はソレからだ、やるぞやっちまうぞベアトリィー、シィィィークスッ！　つゥーかこの飛燕サマがサックリ皆みな殺ごろしにしてこんがり焼き鳥にしちゃるから覚かく悟ごしろよボケどもがァッ……！」

　突とつ如じよとしてあたりに霧きりが立ちこめて、極きよく端たんに視界が悪くなった。ほとんど何も見えない。カタリが叫んだ。「Ｄ14……！　き、霧の虚きよ洞どうミストホロウの霧やないか……!?」

「下ろして……！」マリアローズはアジアンの腕を振ふりほどいて地面に足をついた。「Ｄ14って──たしかに、Ｄ14の出入口は第七区にあるから、わりと近いけど……」

「ム……！」アジアンはマリアローズの腕をつかんで引っぱった。「下がって、マリア！　霧の中に何かいるヨ……！」

「古代九く頭ず竜りゆうの呪のろいがとけたんだわ！」ベティの声だ。

「それか……！」この声はトモヨだろう。「あの古代呪じゆ式しきは、九頭竜レガシオス・大骨格ノ・インを触しよく媒ばいとして作用してるって言われてた！　ただ、大骨格はエルデンの土台でもある！　エルデンが浮うきあがっちまったら、呪式は効力を失うはずだ……！」

「てことは──」マリアローズは目を凝こらした。何も見えない。「アンダーグラウンドにいた異界生物フリークスが地上に出てきちゃうってこと……!?」

「うほおおおおおおおおおおう……！」この無む駄だにいい声はファニー・フランクか。「のわ、のわ、のわァァーッ……!?　なななな何かが私の足をッ！　は、放せ、放したまえ、誰だれだ、放せというに、この、このッ！　た、助けてくれ……！　私を助けてッ……！」

「贄にえの園そのの住人だ……！」と言ったのはジャン・スタンバックか。「──下がれ！　どんどんくる……！　さあ、総そう帥すい、つかまりなさい……！」「──お、おうッ……！」

　Ｄ14には贄の園の住人たちがうろついていた。マリアローズは唾つばをのみこんだ。「やっぱりミストホロウの霧……」

「あ、あの、さ、さ、さ、下がらないとやばくないですか!?　よく見えないし、敵がいっぱいきちゃったら──」「ルーシーの言うとお

りだよ、トマト！」「ああ――」

　トマトクンが指示を出す前に、またファニー・フランクが悲鳴をあげた。「ひ、ひえええええいおおおうッ……！　なななじじじ地面がァァァハッ……!?　おお落ち、しし沈ッ……!?」

「走れ……！」トマトクンが吼ほえた。「霧が晴れるまで走るんだ……！　近くにいるやつから離はなれるな！　急げ……！」

「マリア……！」

　手をつながれた。

　はぐれたら、困るし。今はしょうがない。

　霧の中を駆けた。足場が悪くて、何度も転びそうになり、そのたびにアジアンに支えられてしまった。

　みんな大丈夫かな。燃えている戦車のそばを通るとき、少し視界がよくなって人ひと影かげが見える。足音も聞こえる。でも、後ろから迫せまってくるこの音は何だろう。どうやら地面を伝わって響ひびいてくるようだ。さっき地面がどうとかファニー・フランクが言っていた。帝てい国こく軍が攻せめてきて、なぜかエルデンが浮ふ上じようして、古代九頭竜の呪いがとけて、それ以外にも何か起こっているのか。勘かん弁べんしてほしい。もう十分じゃないか。

　行く手の霧はだいぶ薄うすれている。前方に砂すな煙けむりが見えた。帝国軍だ。退いている。

　霧が一気に晴れた。

　振り返ると、エルデンは遥はるか上空に浮かんでいた。空飛ぶ円えん盤ばんといった風ふ情ぜいだ。なんだか玩具おもちゃみたいで現実感がない。でも、あれは間ま違ちがいなくエルデンで、これが現実だ。

「モリー……リーチェ……」

「ああああああ、くそッ……！」カタリは地べたに倒たおれこんで大の字になった。だいぶ息が苦しそうだし、ひどい顔をしている。「あ、あそこに、あ、アーニャちゃんが、お、おるっちゅうんかい……！　ど、どないなっとんねん……！」

「あ、あの、この腕うで……」ルーシーは抱かかえているユリカの左腕とカタリの右腕に目を落としてから、マリアローズのほうを見た。「ど、どうすれば……」

「敵がくるぞ……！」りりぃがそう叫さけぶなり、両手から禍まが々まがしく反りかえった長い刃はをのばして身構えた。

「敵って──」マリアローズは棒立ちになっている自分に気づいて愕がく然ぜんとした。

「明確に味方と認にん識しきできるもの以外はすべて敵だと思え……！」

「敵……」マリアローズはアジアンを突つき放して、カタリに駆かけよった。「──カタリ、起きて！　戦えないなら、逃にげるか隠かくれるかしないと……！」

「わ、わしは大丈夫や！　戦やれるがな！　あたりまえじゃボケェッ……！」

「ピンプ！」トマトクンはすでに大たい剣けんを抜ぬいている。「ユリカはどうだ……!?」

「はイ──」「……わたしも平気よ。ピンパーネル、下ろして。自分の止し血けちゆはしたから、カタリの応急処置だけでもしておかないと──」

　ピンパーネルはカタリのところまでユリカを運んできてくれた。

　ユリカがカタリのそばにしゃがんで手当てを始めると、ルーシーが蠅はえみたいにそばをうろうろしだした。「あ、あの……それで、その、この腕は……」

「うるさい！」マリアローズはつい声を荒あららげてしまった。「ちょっと持ってて！　それどころじゃないって、わかるだろ！」

「ご、ごめんなさいっ！　あ、あの、じゃあ、大事にしまっておくので……」

　ルーシーは背負い袋ぶくろに血まみれの腕二本を詰つめこもうと悪あく戦せん苦く闘とうしている。たしかに腕はあったほうがいいけどさ。なんかずれてるよね、この子って。だからといって、苛い

ら々いらしてもしょうがない。わかってるんだけど、わかってるつもりなんだけど──これって、焦あせり？　てゆうか僕、ルーシー以上に何もしてなくない？　してないよ。できてない。こんなのじゃダメだよ。ぜんぜんダメじゃないか。何かしないと。せめて自分にできることはしないと。

「あたしも、下りる！」ハニーがきゅーの背中から飛び離れた。「──銃じゆうを撃うつくらいは、あたしにもできるから。きゅーは戦って……！」

「くう……！」きゅーは全身の毛を逆立て、金色に輝かがやかせて、霧きりに向きなおった。

　ベティとトモヨ、サフィニアが霧の中から出てきた。ファニー・フランクとジャン・スタンバック、他五人くらいのＥＦＡもなんとか無事らしい。あくまで、なんとかだ。彼らはまるで狼おおかみに追われている羊のようにこけつまろびつ駆けてきた。

「俺とアジアン、りりぃ以外は前に出るな……！」トマトクンが大剣を担かつぐように構えて走りだした。りりぃは無言でトマトクンにつづいたけれど、アジアンは動かない。「──キミの指図を受ける筋合いはないヨ！　ボクはマリアとベティを守る……！」

「あ、あたしのことは放ほっときなさいよ！　自分の面めん倒どうくらい、自分で見られるんだから！　あんたとは違ちがうのよ……！」

「そういうわけにはいかない！　キミを無事に連れて帰らないと、ダリエロに何をされるかわかったものじゃないからネ！」

「なんでダリエロの名前がここで出てくるわけ……!?」

「──きやがったぞ、怨Ｓｙ款冥Ｇｒｕｍ愛死雷……！」トモヨが前に突きだした右手から暗黒の雷が放たれ、雷らい鳴めいが轟とどろいた。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」サフィニアとベティも間かん髪はつを容いれず爆ばく雷らい索さくの呪じゆ文もんを唱えて、幾いく条じようもの稲いな妻ずまを霧めがけて叩たたきこんだ。

　霧の向こうから耳みみ障ざわりな悲鳴が聞こえてきた。三人の魔

ま術じゆつはいくらかの敵を仕留めるか足止めするかしたはずだ。でも、焼け石に水かもしれない。風が強くなりつつある。霧が吹ふき飛ばされてゆく。敵だ。くる。敵だらけだ。やたらと長い、無理やり引きのばされたような腕が身体からだに絡からみついている全ぜん裸らで禿はげ頭あたまの男がいる。仰あお向むけになり、両手両足を地面について歩いている女は、尻しりから口まで一本の長槍やりに貫つらぬかれている。腕と脚あしが釘くぎで胴どう体たいに打ちつけられていて、転がってくる男がいる。首と足の代わりに腕が生えている女もいる。乳飲み子の集合体みたいなやつもいる。どいつもこいつも亞亞亞亞亞亞汚汚汚汚汚汚亞亞亞亞亞亞汚汚汚汚汚汚呻うめいたり唸うなったりしている。見間違えようがない。贄にえの園そのの住人だ。数百か、千か、それ以上か。とにかくたくさんだ。いっぱいいる。彼ら彼女らは、でも、雑兵みたいなものだ。雑兵どもの後ろから、もっとやばそうなやつらが押しよせてくる。網あみみたいなものに無数の生首を詰めて、それを引きずっている多頭の巨きよ人じんは、黒い涙なみだを流しながら業負負負負負業負負負負負叫んでいる。眼がん窩かが空っぽな代わりに、数十の眼球を耳や首に飾かざりつけている身の丈たけ五メーテルはありそうなあの女は、合がつ掌しようしているのではなくて、両手が縫ぬいあわされているのだ。口から細い腕や脚をあふれさせている男は、やけに頭がでかい。身長おそらく四、五メーテル、そのうち頭部が半分以上を占しめるのだから、あまりにも大きすぎる。自分の首をねじって、ぐるぐる回転させながら違非非非笑っている女はどうかしているのだろう。みんな等しくいかれている。というか、見ているだけでこっちまでいかれてしまいそうだ。

（これはこれは……）（お師様、キューベルアドラスとその友に助すけ太だ刀ちしなければ）（そうするとしよう）「クルオも手伝ってあげるよ、ベティ……！」

　超ちよう賢けん者じやモーグとその弟で子しエヴァンジェリンが、そして踊り羊ダンシングシープが飛んできて、贄の園の住人たちに襲おそいかかった。トマトクンも突っこんでいって縦じゆう横おう無む尽じんに大剣を振ふりまわし、りりぃは疾しつ走そうしながら斬きって斬って斬りまくる。住人たちの波が一いつ瞬しゆん、押しとどめられた。だが、一瞬にすぎない。波は結局、止まらなかった。寄せてくる。数が違いすぎるし、住人たちは決して密集していない。薄うすく広く展開して突き進んでくる。これでは防ぎようがない。

「アジアン！　ユリカとカタリをお願い……！」「えっ、いやでも、ボクは──」「この僕が頼たのんでるんだけど!?」答えはなかった。知るもんか。「──ルーシー、ピンプ、きゅー！　行くよ！　ハニーはユリカとカタリから離はなれないで！」「はイ」「ふぇっ──えと、は、ははは、はひっ……！」「くう！」「わかった……！」

　マリアローズはルーシーとピンパーネル、きゅーを引き連れて、サフィニア、ベティ、トモヨの前に出た。「……大きい、魔術を……！」「そうね、合体魔術アマルガムで！」「──そういうのはトモヨ様に決めさせろ！　おい、てめえら、準備の間、しっかり守れよ……！」

　うなずいて、剣を抜きながら、何かしないと、自分にできることをしないと、なんとかしないと──そんなことを繰くりかえし念じていた。何かしないといけないから、こうして動いた。でも、正直、何かできそうな気はまったくしない。青白い流れとなって飛び交かっているモーグとその弟子や、あちこちに現れては消えながら妙みような形の武器を振るったり蹴けり技わざを繰りだしたりしている踊り羊はもちろん、手当たり次し第だいに贄の園の住人たちをぶった斬りまくっているトマトクンとりりぃまで遠く見える。僕はここに立っているだけで、本当にただいるだけで、この状じよう況きようにまるで関かん与よしていない。関与できない。マリアローズは首を振った。「──ピンプ、きゅー、前衛で！　僕とルーシーはバックアップ！　サフィニアたちをカバーすることに専念するから、出すぎないで……！」

　こんなわかりきった指示に何の意味があるだろう。きゅーとピンパーネルが弾はじかれたように突とつ進しんして、近づいてこようとしていた住人たちを蹴っ飛ばし、斬り刻んだ。ここらへんにはまだ雑兵どもしかいない。しばらくは支えられる。だけど、時間の問題だ。あのでかい連中が殺さつ到とうしてきたら、トマトクンたちでも抑おさえきれるかどうか。考えてもしょうがない。考えてどうにかなるような問題でもないんだから。それより自分にできることを。だから、何なんだよ。僕にできることって。

　霧はもうほとんど晴れようとしている。遠くで地面から噴ふきあがっているが、すぐ風に飛ばされて拡散してしまう。

「ま、マリアさん……」ルーシーの声は震ふるえていた。「ど、どうなって……」

「僕に訊きかないで」マリアローズは奥歯を噛かみしめた。「……わかるわけないだろ」

　霧きりのせいで見えなかったけれど、エルデンがあった場所には巨きよ大だいな穴が口を開けていたはずだ。そこには異界の扉とびらが集中的に存在していて、異界生物フリークスたちが押しあいへしあいしながら棲せい息そくしていた。エルデンはその上に物理的な蓋ふたとして築かれたのだ。蓋をされた巨大な穴は、ついさっきまでアンダーグラウンドと呼ばれていた。もうその名はふさわしくないだろう。九百年の時を経て、大穴メガボロスは真の姿を現した。真の姿。これが本当にそうなのか。

「広がってる……」

　地面がどうとかファニー・フランクが言っていた。あれはこういうことだったのだ。

　明らかに、現在の大穴メガボロスはエルデンより大きい。そうでなければ、穴の縁へりがこんなに近いわけがない。というか、徐じょ々じょにではあるものの、穴の縁は今も接近してきている。縁の付近は坂のように傾けい斜しやしているようだ。大穴メガボロスは、地面をのみこむようにして拡大している。そういうことなのか。

　その拡張しつつある穴から、贄の園の住人たちが這はいあがってくる。当然、やつらだけじゃない。ずっと東に目を向けると、灰色で人型の異界生物フリークスどもが群れをなしている。あれはＤ７地中砦とりでアヴァシーの亜人ボーグたちに違ちがいない。西の空には雲うん霞かのように何か小さい生き物の集団が渦うず巻まいている。小さいといっても、距きょ離りが距離なので、実際はそれなりの大きさだろう。きっとあれはＤ８怪虫の坩る堝つぼガンズゲイルの怪虫ガウンドどもだ。

「無理だよ、こんなの……」

　声に出して言うつもりなかった。口が滑すべった。

「何、言って……！」ルーシーが噛みついてきた。「何を言ってるんですか！　無理じゃないですよ！　というか、こういうときって、無理だとか思っちゃいけないでしょう！　そんなの、マリアさんらしくないですよ……！」

　思わず謝ってしまいそうになって、謝罪の言葉は、でも、かろうじてのみこんだ。まったくだよ。僕らしくないかどうかはわからないけどさ。無理だろうと何だろうと、やるしかないわけだし。こういうときはもう、開きなおる以外ないわけで。ただ、やるって何を……？

「あっ…………」「──え？」

　マリアローズにもできることはある。ないわけじゃない。何もしていない、できずにいるから、見ることはできる。所しよ詮せん、その程度のことしかできない。

　ずっと北のほうだ。ずっとといっても北の果てじゃない。大穴メガボロスの──中央あたりだろうか。鳥か。けっこうな数だ。わっと飛びたって、こっちへ向かってくる。鳥といえば、エルデンの北、第十一区の下は鳥人ジャドーたちが棲すむＤ11フリアウ逆密林だった。中央あたりというのは見み間ま違ちがいで、もっと北のほうかもしれない。何にしても、正面の敵とやりあっているときに、空からも攻せめられたらそうとう厄やつ介かいだ。かといって、自分では対処しようがない。マリアローズは振り向いた。サフィニアたちはよほど大きな魔ま術じゆつを使うつもりなのか。まだ詠えい唱しようも始まっていない。声をかけていいものなのかどうか。カタリの応急処置が終わったらしい。アジアンが、ちゃんとカタリとユリカ、それからハニーを従えて駆かけてくる。

　──アジアンにやらせる？　個人的な関係は抜ぬきにしても、アジアンがもしＺＯＯなら、仲間なら、すぐにそう指示したかもしれない。アジアンを戦力として考えることに慣れていれば、それしか手がなさそうなら、きっといろいろな事情も何もかもすっ飛ばして、居い丈たけ高だかに命令していたはずだ。でも、迷ってしまった。

　きみは羽とかだって出せるんだからさ、飛んでって、あいつらやっつけてきてよ。──そんなふうには言えなかった。言えるわけがない。まごまごしているうちに、鳥人ジャドーたちはその姿がおぼろげながらに見えるくらいの距離まで近づいていた。違う。

　ジャドーじゃない。潰つぶれて平べったくなった蛇へびに大きな羽が生えているような、あいつらはそんな生き物だ。鳥でもないだろう。だったら何だ。蛇鳥、とか？　わからない。見たことがない。ただ、けっこう大きそうだ。いや、だいぶ大きい。しかも蛇鳥の、ぜんぶではないがその一部の背に、何かが乗っている。人みた

いな。けど、人間━じゃないよね。じゃあ、何なんだよ。異界生物フリークスなんだろうけど。マリアローズは蛇鳥どもを指さして叫さけんだ。「━なんか、新手が……！」

「空しよらから……!?」「魚ぎよほぉうっ……!?」「何あれ」「あれは━ダメだ……！」アジアンは目をつりあげてぐっと姿勢を低くした。「━タナトゥス……！」

　翼つばさだ。闇やみ色の翼がその背に現れて羽ばたいた。アジアンはこっちを見もしない。空だけを見つめている。「あれは、キミたちではどうにもならない相手だヨ……！　ボクに任せて、キミたちは逃にげてくれ……！」

「な、なんでわかるん!?　知っとんのかい!?」

「知らないが、勘かんだ……！」アジアンは飛びあがった。「━マリア！　みんなを……！」

「後退して……！」マリアローズはとっさに声を張りあげて、あとずさりしながら右手を振ふりまわした。「早く！　下がって……！」

　トマトは。きゅーは。ピンパーネル。りりぃは。前に行きすぎている。すぐには呼び戻もどせそうにない。呼び戻すべきなのかどうかもわからない。アジアンはもう蛇鳥どもに接せつ触しよくしようとしている。右みぎ腕うでがのびて、広がった。アルカーディア、だっけ。アジアンの右腕は無数の黒い管と化して、蛇鳥どもに襲おそいかかった。それよりもたぶん、一いつ瞬しゆん、早かったのだ。

　何ものかが一羽の蛇鳥から飛び降りた。そいつはアルカーディアをかいくぐるようにして、真っ逆さまに落ちてきた。アジアンもやつに気づいているようだ。即そく座ざにアルカーディアを引っこめて方向転てん換かんしようとした。でも、やつは速い。もうすぐそこに迫せまっている。

　そこというか、ほとんどここだ。

「ふ、伏ふせ━」

　伏せてどうする。考える間もなく、マリアローズは地面に向かって跳とんでいた。

　大地が破は裂れつしたような大きな音がして、土つち煙けむりがあがった。

　男、なのか。筋骨たくましい立派な体格だ。背が高い。二メーテルくらいはある。暗い色の胸当てと脚きやつ甲こうをつけていて、背に七本もの剣けんを背負っている。黒くて長い髪かみの毛は編んであり、太い紐ひもでできたかつらでも被かぶっているみたいだ。口くち髭ひげと顎あご髭ひげは短く整えられている。精せい悍かんな顔つきだ。鷹たかのような目をしている。その瞳ひとみは赤い。赤々と輝かがやいている。人間に似ているが、絶対に違う。

　男は青い肌はだをしている。

「おはよう、下等な虫けらども」

「──え……共通語──」

「まずは軽く自己紹しよう介かいといこうか」男は背中から両手で剣を一本ずつ抜いた。「──我こそは剣舞のメンチド・大公爵ハイヴエリオンタイダル・クライシズ。〝地獄のヘルズ・惨殺マーダー芸術家アルテイスト〟とは俺のことだ」

　タイダル・クライシズ？　ハイヴェリオン？　ヘルズ──ヘルって、地へ獄ル？　てことは、もしかして悪あく魔ま……？　タイダル・クライシズを名乗る悪魔は両腕をまっすぐ横にのばし、オレンジ色の舌を出して、天を振り仰あおいだ。「Ｈａａｎｎｎｎｎｇｇｇ……！」

「わっ……！」マリアローズは突とつ風ぷうを食らって紙かみ屑くずみたいに転がった。悪魔を中心として突とつ然ぜん、巻き起こった。強きよう烈れつな風だった。つい目をつぶってしまった。慌あわてて開けた。悪魔は変へん貌ぼうしていた。胸が膨ふくれて、首から肩かたまでが不気味なほど隆りゆう起きし、両腕が螺ら旋せん状にねじれている。

「──危険な敵！　キサマだ……！」アジアンが急角度で降下してきて、黒い管の群れを悪魔めがけて解き放った。その直後だった。悪魔が眼球だけ動かしてアジアンを見るなり、両腕をねじりながら──いや、腕のねじれを戻しながら振りあげた。さっきの突風よりすごかった。竜たつ巻まきだ。身体からだが浮うく。持ちあげられる。

それだけじゃない。何かが身体中をビシビシ叩たたいている。数百本の細い鞭むちで打ちすえられているかのようだ。痛い。痛い。痛い痛い痛い。ひょっとして、斬きられているのか。やばい。千切りにされてしまう。アジアンはどうなったのか。確かく認にんできない。そんな余よ裕ゆうはない。マリアローズはなんとか地面にへばりついた。やがてビシビシこなくなったので、おそるおそる顔を上げると、目と鼻の先に悪魔が立っていた。

　見下ろされている。無表情だ。見ているようで見ていない。ああ、僕は虫けらなんだ。

　悪魔は剣を振りおろそうとした。

「弔Ｈａｎ侮礼Ｎａｎ蝶様舞」トモヨか。飛んだ。黒い風に運ばれて裸はだかのトモヨが。合体魔術アマルガムを中断したのか。そのときにはサフィニアが詠えい唱しようを開始していた。「ＮｉＬＩＬＮumＭｏＬＳｅＬＺｅＬ我申子浄化閻魔也」そして、ベティも。「威鶩虞Ｇａｘｉｓ滅崇Ｄｅｕｘ嵐怒」

　雷らい獅し子しだ。まごうことなき正真正しよう銘めいの雷かみなりが悪魔を直ちよく撃げきした。サフィニアが詠唱を終えようとしている。「ＤａｇｅｌｉｓＦｏｎｄＶｏｎｄ真藍蓮往還涅槃王ＳｅｖｅｎＮｅｖｅｎＸ＋Ｘ喪―慧―手―翅―痲―衛」

　炎霊Ｎｉｇの特とく徴ちよう的な藍あい色いろの炎ほのおが悪魔を包んだ。炎えん上じようしている悪魔の頭上にトモヨが。悪魔に両の掌てのひらを向けている。魔術を放った。「懺Ｑｕ憐侮Ｒａｎｔ愚者斯死晒」

　黒い煙けむりのようなものが悪魔を取り巻いた。ごくごく細かい黒色の粒りゆう子しが、小さな羽虫みたいに悪魔にたかって、一瞬のうちに藍色の炎を鎮ちん火かさせてしまった。悪魔は真っ黒いかたまりになった。落下しながらトモヨが叫さけんだ。「腐くさり落ちやがれ、悪魔野や郎ろう……！」

　喝かつ采さいをあげるより早く、悪魔が剣を一振りして黒い粒子を振り払はらった。

「魔術か」悪魔は首を曲げて、オレンジ色の舌で黒っぽい唇くちびるを舐なめた。「痒かゆいな」

　無傷だ。ベティの雷獅子とサフィニアの藍色炎上、それにトモヨの謎なぞめいた魔術をまともに三連続で食らって、何事もなかったように立っている。鎧よろいも無事だ。髪の毛さえも。なんで。いったいどうなっているのか。

「キサマの相手は……！」アジアンが翔かけてきて、悪魔の横っ面を蹴け飛とばそうとした。「このボクだ……！」

　外れた。よけられたのか。悪魔がいない。消えた。違う。上だ。アジアンの上。瞬しゅん間かん移動でもしたっていうのか。悪魔は両手の剣を振りおろした。あれはかわせない。アジアンは黒い翼つばさで身を庇かばった。「──ッッ……！」

　幾いく十、幾百の漆しっ黒こくの羽根が舞って、アジアンは地面に叩き落とされた。すぐさま翼を引っこめて起きあがったアジアンに、悪魔の剣が攻せめよせる。アジアンは飛びのきながら左手を前に差し向けた。「ジャシュギシュ……！」

　アジアンの左ひだり腕うでが膨れあがって黒い鱗うろこに覆おおわれ、腕とは呼べないものへと為なり変わった。さながら巨きょ大だいな蛇へびだ。悪魔の剣もジャシュギシュの鱗を斬り裂さくことはできなかった。そうと知ると、悪魔はすぐに後退して、二本の剣を地面に突つき刺さした。「──虫けらの分際で骨があるやつもいるらしい。せっかくだ。見せてやろう。これが俺の魔術だ」

　悪魔も魔術を使うのか。それとも、言葉の綾あやなのか。悪魔のくせに。剣だ。

　二本の剣から、そいつらは生まれた。そんなふうに見えた。でかい。

　体高三メーテル、体長は六メーテルほどもあるだろう。一頭は、四つ足の白い獣けものだ。頭が大きい。猫ねこに似ているが、目がない。牙きばが長すぎる。もう一頭の身体つきは犬に近い。近くて遠い。全身に紫むらさき色いろの棘とげが生えているし、太い尻尾しっぽが五本もある。

「ま、魔ま剣けんや……！」カタリの声はうわずっていた。

「ガシュテ・ニェグストリ、ヴェラドギア」獣たちをけしかけるように、悪魔が何か言った。少なくとも共通語ではない。悪魔の言語

か。二頭の獣が咆ほう吼こうした。

「させるか……！」アジアンは左腕のジャシュギシュに棘犬を、それから右腕を黒い管にして目なし猫を襲おそわせた。ジャシュギシュの強きよう靭じんな顎あごは棘犬をとらえたが、食い破ることまではできなかった。目なし猫は黒い管に身体中を貫つらぬかれて暴れている。

アジアンはちらりとマリアローズのほうを見た。目配せというほどの合図はなかった。それどころではなかったのだ。

悪魔がまた背中から二本の剣を抜ぬいて、アジアンに躍おどりかかった。アジアンは下がるしかなかった。おかげで、棘犬と目なし犬が自由になってしまった。

アジアンは何を言いたかったのか。なんとなくわかった。

僕がここにいたら、邪じや魔まになるだけだ。僕だけじゃない。みんな足手まといだ。他の人たちを守りながら、得体の知れない、底知れない敵と渡わたりあう余裕は、アジアンにもない。だから逃にげろとアジアンは伝えようとした。

「みんな、ここから離はなれて……！」

マリアローズに言われるまでもなく、ベティはサフィニアを支えて駆かけだしていた。マチルダとの戦いでだいぶ力を使ったはずだし、サフィニアはもう限界を超こえているのだ。トモヨもベティに手を貸そうとしている。カタリとユリカも踵きびすを返した。ハニーは二人の背中を守るつもりらしい。トマトクンたちはまだこない。あの大きな贄にえの園そのの住人が迫せまってきていて、その相手をしているようだ。置いていっていいのか。おこがましい。マリアローズに心配されるほど、トマトクンもピンパーネルもきゅーもりりぃも落ちぶれていないだろう。モーグだのその弟で子しだの踊り羊だのに至っては遠すぎる存在で、気にかけるのも馬ば鹿からしい。てゆうか、あれだよ。蛇鳥。降りてくる。背に何ものかを乗せた蛇鳥も中にはいそうだ。まさか、あの悪あく魔まみたいなやつがぞろぞろ現れたりしないよね……？　悪い想像はたくさんだ。これ以上、悪いことが起こるなんて冗じよう談だんじゃない。マリアローズは走りだそうとした。足が止まった。ルーシーだ。アジアンと悪魔、獣たちのとっくみあいに見入ってでもいるのか。動きだす気配がない。

「ルーシー、早く……！」

「先に行ってください、マリアさん！　ぼくがしんがりをやります……！」ルーシーはマリアローズの背中を押した。「さあ、行って……！」

「や、でも──」

「大だい丈じよう夫ぶです！　さっきは情けないとこ見せちゃいましたけど、ぼくはもう、マリアさんより強いですから……！」

　かちんときたりはしなかった。そのとおりだからだ。「だけど、そういう問題じゃ──」

「行けって言ってるんですよ！　ほら、もう敵がきてるじゃないか……！」ルーシーは背負い袋ぶくろを捨ててモトロール刀を構えた。「──ぼくはもっと強くならないと！　だめなんですよ、強くならないと……！　強くなって、ぼくはみんなの役に立ちたいんだ！　みんなを守れるようになって、ぼくは、ぼくに勝たないと……！」

　ルーシーの背負い袋。カタリとユリカの腕うでが入っている。せめて持たないと。それくらいはしないと。マリアローズはルーシーの背負い袋を拾いあげた。

「Ｋｅ□Ｙａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈ……！」ルーシーが雄お叫たけびをあげて、突っこんできた蛇鳥を一刀両断した。蛇鳥はまだくる。二匹ひき目。「Ｒｙａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈ……！」ルーシーはそいつの頭を踏ふんづけて跳とび、蝙蝠こうもりを思わせる羽を斬きり裂いた。三匹目には頭に角が生えている人型の、たぶん悪魔が乗っていた。悪魔は三みつ叉またの槍やりを持っている。ルーシーはかまわず突とつ進しんしていって、槍をかわして悪魔を蹴けり落とし、蛇鳥を斬り殺した。「Ｋｕ□Ｈａ！　ぼく強い、強い……！」四匹目は叩たたき落とされるように斬られた。ルーシーは五匹目を斬りながら、六匹目の羽を引っつかんで、力ずくで地面に引きずり落とした。「──そうだ強いんだよぼくは！　みんなのおかげで強くなった！　こんなに強くなったんだから、大事な人たちを守ることだってできる！　できるんだ！　ぼくはお父さんみたいには──」

「ルーシー……ッッッ！」

「あ──」

　目なし猫だ。とっさの反応だろう。ルーシーは左腕を前に出した。一咬かみだった。目なし猫はたやすくルーシーの左腕を咬みちぎった。ルーシーは刀を目なし猫の額に突つき刺さした。目なし猫は止まらなかった。ルーシーを押し倒たおした。「お母さ──」

　目なし猫はルーシーの頭にかぶりついた。

　食いちぎって、放り投げた。

　こっちに飛んできて、マリアローズの足あし許もとに落ちた。

　ルーシーの赤い眼めはもう何も映していない。

　最後まで目をつぶらなかったんだ。

　腰こしが抜けそうになった。

　しゃがみこんでしまったら、きっと足腰が立たなくなる。

「に、逃げないと」

　マリアローズは走ろうとした。走っているつもりだ。僕の足は動いている。地面を蹴っている。でも、その感覚がない。身体からだの重さを感じない。全身が麻ま痺ひしているみたいだ。それでも、僕は逃げるんだ。前に進むんだ。とにかく今は進むしかないんだ。

　進むことができたとしても、その先に何があるのだろう。

　ここから逃げて、僕はどうするんだろう。

　そして、時は流れる。

『薔ば薇らのマリア16．さよならはいわない』了

あとがき

　僕はかつてこの河原に秘密基地を作った。

　無料のパークゴルフ場になっている今の様子から想像することは難しいけれど、この河原には当時、小学生だった僕には密林としか思えないほど背の高い草木が生おい茂しげっていた。川の水位が低いときは歩いて中なか州すに渡わたることもできた。でも、それは大きな冒ぼう険けんだったから、臆おく病びよう者は中州にたどりつくことができなくて、皆みなに馬ば鹿かにされた。僕は学校の二階の窓や家の屋根から飛び降りたり、流れの速い川を泳いで渡ったり、高い木に登ったりすることを好む向こう見ずだったので、中州くらいわけもなかった。ちなみに、現在の僕はといえば、高所恐きよう怖ふ症しようだし、虫が苦手で、昔よく採りにいったクワガタムシすらさわることができない、大変な小心者だ。いったい、いつから高いところや虫を恐おそれるようになったのか、僕にはわからない。見当もつかないけれど、僕は変わってしまった。変わったのは僕だけじゃない。河原も変わったのだ。僕が秘密基地を作った密林は、護岸工事を施ほどこされて整地され、芝生しばふを植えられてパークゴルフ場になり、そこでは熟年プレーヤーたちが連日汗あせを流している。

　かつて僕が探検ごっこをした起き伏ふくに富んだ原っぱは、閑かん静せいな住宅地になっている。僕が今、住んでいるところは、かつて畑だった。海の色はあのころよりも美しくなったように思う。

　街を歩いていると、小学生のころ、同じクラスだった誰だれ々だれが、たしかこのへんに住んでいた、というようなことが頭をよぎる。僕は彼の家を探してみる。変わらずそこにあって、表札を確かめると、間ま違ちがいない、彼の家だということがわかる。改築されている場合もある。あまりに大規模な改築だと、それと気づかないこともある。この小道に入って、ここから曲がって、この先にあるはずだと思って行った先に、見慣れない建物があったり、空き地になっていたりすることもある。

　考えていた以上に、僕は昔のことをよく覚えている。

　そして、覚えているぶん、たくさんのものが変わってしまったことを思い知らされる。

　不変のものなどありはしないと、幼いころから思っていた。本当に、ごくごく幼いころから、すべては変わりゆき、いつかは失われるものだと、僕は痛いほどに、この胸が本当に痛むほどに、感じていた。永遠なんて存在しないと、僕はもちろん思っているし、その反面、永遠というものに強く惹ひかれつづけている。

　これまで、何冊かの小説を書いてきたけれど、僕は結局、同じことを繰くり返し書いているだけだし、この先もそれは変わらないだろう。

　僕は変わりゆくもの、失われるもの、失うことを書きつづけることでしか、永遠に挑いどむことはできない。

　ご存じの方もいらっしゃるかもしれないけれど、僕は『純潔ブルースプリング』で今はない角川学園小説大賞の特別賞をいただいておきながら、『薔薇のマリア』が初めての著作になった。端たん的てきに言うと、『純潔ブルースプリング』は、おもしろいもののライトノベルではない、と判断された。それで、スニーカー文庫はライトノベルのレーベルなので、まずはライトノベルを書いてほしいという要よう請せいに従って『薔薇のマリア』の企き画かくを提出し、了りよう承しようをえて、書きはじめた。正直、僕はアクションシーンが苦手だったし、ファンタジーより現代物のほうが書きやすい。それに、受賞作がライトノベルではないと言われたので、とにかくライトノベルを書かなければいけないと僕なりに気負っていた。僕にとって『薔薇のマリア』は最初からとても難しい小説だった。今もそれは変わらないけれど、ライトノベルというものがよくわかっていなかった僕が『薔薇のマリア』にこめた主題は、僕自身の主題とほぼ完全に重なっている。

　ある大陸にサンランド無統治王国というちょっと変わった国があって、その首都エルデンの地下には巨きよ大だいなダンジョンが広がっている。主な舞ぶ台たいであるエルデンには当然、いろいろな者たちが住んでいて、彼らの日常や、ときおり、あるいは頻ひん繁ぱんに巻き起こる事件が『薔薇のマリア』という物語だった。

　でも、すべては変わりゆく。

　物語も変化する。僕にとっては、必ず変わらなければならない。

だから、『薔薇のマリア』も変わりゆく。変わりゆくものとして書きはじめて、大きな変化が起こるところまで、ようやくたどりつくことができた。そして、物語はいつか終わる。

でも、失われるかどうか、すぐに失われてしまうかどうかは、これからの変化と着地点にかかっているだろう。

本巻の原げん稿こうを書いている間に、東日本大だい震しん災さいがあった。僕はそれでも自分には小説を書くことしかできない、書くんだと思っていたし、そうしたかったけれど、正直、一時期は完全に手が止まっていた。被ひ災さいしたわけでもない自分が、こんなことでどうするのか。僕は僕にできることをするしかないじゃないか。頭ではわかっていても、心が動いてくれなくて、結果的に前巻との間がだいぶ空いてしまい、読者の皆みな様さまには本当に申し訳なく思っている。でも、もう無理かもしれないと思ったりもしたけれど、なんとか書きあげることができた。次もきっと書けるはずだ。終わりまで行けるはずだ。

被災地や避ひ難なん先でご苦労されている方々には、どう声をかけたらいいかわからない。亡くなられた方には僕の言葉なんか届きはしないだろうし、お身内やご友人、知人を亡くされた方を慰なぐさめたくても、そばにいるわけでもない僕にできることはほとんどない。

僕はこれからも、ただ小説を書こうと思う。

ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆様へ、あえて変わらぬ感謝と愛をこめて。

またお会いしましょう。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

16．さよならはいわない

十じゅう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　16．さよならはいわない』平成23年8月1日初版発行